——千葉県市原市——

下鈴野遺跡

1987

財団法人　市原市文化財センター

序　　文

市原市は、首都圏に位置し、京葉工業地帯の中核都市として成長してまいりましたが、帝京技術科学大学を、工業都市市原を担う拠点として位置付け、専門的な教育を高め、地域社会の向上と発展に寄与するため、積極的な誘致活動を行ってまいりました。また同時に、本市の文化・自然は、先人の残した貴重な遺産であり、将来にわたって伝えていかなければならないものであります。現在、市内各地で埋蔵文化財の調査が行われておりますが、これらを積極的に保存し、開発との調和を図ることが、行政に課せられた責務であります。

今回、ここに報告する下鈴野遺跡は、帝京技術科学大学の設置に伴い、記録保存を目的として発掘調査が実施されたものであります。

下鈴野遺跡では、縄文時代から弥生時代、古墳時代、そして奈良・平安時代と、人間の足跡をみることができます。時には狩猟の場として、また、ある時は農村として、墓地として、連綿と続く人間の生活の一端を知ることができます。本報告書は、その成果をまとめたものであり、研究者のみならず、広く市民の埋蔵文化財に対する理解に活用できれば幸いに存じます。

終わりに、今回の発掘調査および、本書の刊行に際し、御指導、御協力を頂きました、千葉県教育庁文化課、市原市企画部企画調整課、市原市教育委員会文化課ならび関係諸機関、また、酷暑のなかで調査に協力された皆様方に、心から謝意を表わします。

昭和62年３月26日

財団法人　市原市文化財センター
理事長　　星　野　一　郎

例　　言

1　本書は、千葉県市原市潤井戸字上清水谷1684番地他所在の、下鈴野（しもすずの）遺跡の調査報告書である。

2　調査は、(仮称)帝京技術科学大学建設に伴い、市原市企画部企画調整課の委託により、実施されたものである。

3　発掘調査、整理作業は、以下のとおり行った。

確認調査　昭和60年２月25日～昭和60年３月20日　担当　浅利幸一

本調査　昭和60年４月10日～昭和60年９月30日　担当　石田広美　田中清美　大村　直

整理作業　昭和61年４月１日～昭和61年10月13日　担当　大村　直

4　調査対象面積は、86,700㎡であり、うち32,200㎡について、本調査を実施した。本調査範囲は、千葉県教育庁文化課の指導により設定された。

5　本書の執筆、作成は、大村直が担当した。

6　本書の作成過程で、陣内康光、黒沢浩（明治大学大学院）、軽部達也（明治大学学生）各氏の協力を得た。

7　石器石質については、柴田徹氏（東京都立上野高校教諭）、貝類については、金子浩昌氏（早稲田大学講師）の御教示を得た。

組　　織

発　掘（昭和59年度）

役　員

理事長　星野一郎(教育委員会教育長)
副理事長　横濱辰夫(教育委員会教育指導部長)
常務理事　井原　茂(専任)
理　事　滝口　宏(早稲田大学名誉教授)
理　事　寺村光晴(和洋女子大学教授)
理　事　海上信久(姉崎神社宮司)
理　事　櫻井徹郎(市企画部長)
理　事　松崎良一(市総務部長)
理　事　中島英夫(市都市部長)
理　事　松下　隆(市総務部財政課長)
監　事　白鳥一夫(市会計課長)
監　事　山口　節(教育委員会総務課長)

職　員

庶務課
課　長　小茶文夫
主　事　浅利幸一
主　事　補　相野光江
事務員（嘱託）　秋田晴美
事務員（嘱託）　塚本和江

調査課
課　長　郷田良一

主任調査研究員　山口直樹
調査研究員　宮本敬一
調査研究員　米田耕之助
（兼）調査研究員　浅利幸一
調査研究員　近藤　敏
調査研究員　高橋康男
調査研究員　田所　真
調査研究員（嘱託）　鈴木英啓
事務員（嘱託）　高浦貞子

発　掘（昭和60年度）

役　員

理事長　星野一郎（教育委員会教育長）
副理事長　横濱辰夫（教育委員会教育指導部長）
常務理事　内藤　隆（専任）
理　事　滝口　宏（早稲田大学名誉教授）
理　事　寺村光晴（和洋女子大学教授）
理　事　海上信久（姉崎神社宮司）
理　事　松崎良一（市企画部長）
理　事　斎藤栄亮（市総務部長）
理　事　中島英夫（市都市部長）
理　事　松下　隆（市総務部財政課長）
監　事　白鳥一夫（市会計課長）
監　事　松本辰之助（教育委員会総務課長）

職　員

庶務課

課長　田丸萬富
主事補　大鐘光江
事務員（嘱託）　秋田晴美
事務員（嘱託）　藤沢ひとみ
事務員（嘱託）　石渡あゆみ

調査課

課長　清藤一順
主幹　石田広美
主幹　山口直樹
主任調査研究員　宮本敬一
調査研究員　米田耕之助
調査研究員　田中清美
調査研究員　近藤　敏
調査研究員　高橋康男
調査研究員　田所　真
調査研究員　浅利幸一
調査研究員　大村　直
調査研究員　木對和紀
調査研究員（嘱託）　鈴木英啓
調査研究員（嘱託）　半田堅三
調査研究員（嘱託）　田中新史
事務員（嘱託）　高浦貞子

整　理（昭和61年度）

役　員

理事長　星野一郎（教育委員会教育長）
副理事長　横濱辰夫（教育委員会教育指導部長）
常務理事　岩見一民（専任）
理　事　滝口　宏（早稲田大学名誉教授）
理　事　寺村光晴（和洋女子大学教授）
理　事　海上信久（姉崎神社宮司）
理　事　松崎良一（市企画部長）
理　事　斎藤栄亮（市総務部長）
理　事　地引希壱（市都市部長）
理　事　松下　隆（市財政部長）

監　事　斎藤崇雄(教育委員会総務課長)　　監　事　白鳥一夫(市会計課長)

職　員

庶務課

課長	田丸萬富
主事補	大鐘光江
事務員(嘱託)	秋田晴美
事務員(嘱託)	石渡あゆみ

調査課

課長	清藤一順
主幹	石田広美
主幹	山口直樹
主任調査研究員	宮本敬一
主任調査研究員	米田耕之助
調査研究員	田中清美
調査研究員	浅利幸一
調査研究員	大村直
調査研究員	近藤敏
調査研究員	高橋康男
調査研究員	田所真
調査研究員	木對和紀
調査研究員(嘱託)	田中新史
調査研究員(嘱託)	半田堅三
調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
事務員(嘱託)	高浦貞子
事務員(嘱託)	長谷川いづみ

凡　　例

1　遺構、遺物の挿図の縮尺については、住居跡、方形周溝等は1/80、土壙は1/50、土器は1/4、土器拓影・石器は1/3、鉄器は1/2を基準としたが、その性格、形状において異なる。各図に表示した。

2　方位は、座標北である。

3　遺構断面図にある水糸線上の数字は、海抜高度を示す。

4　挿図遺物番号は、表、写真図版と共通する。

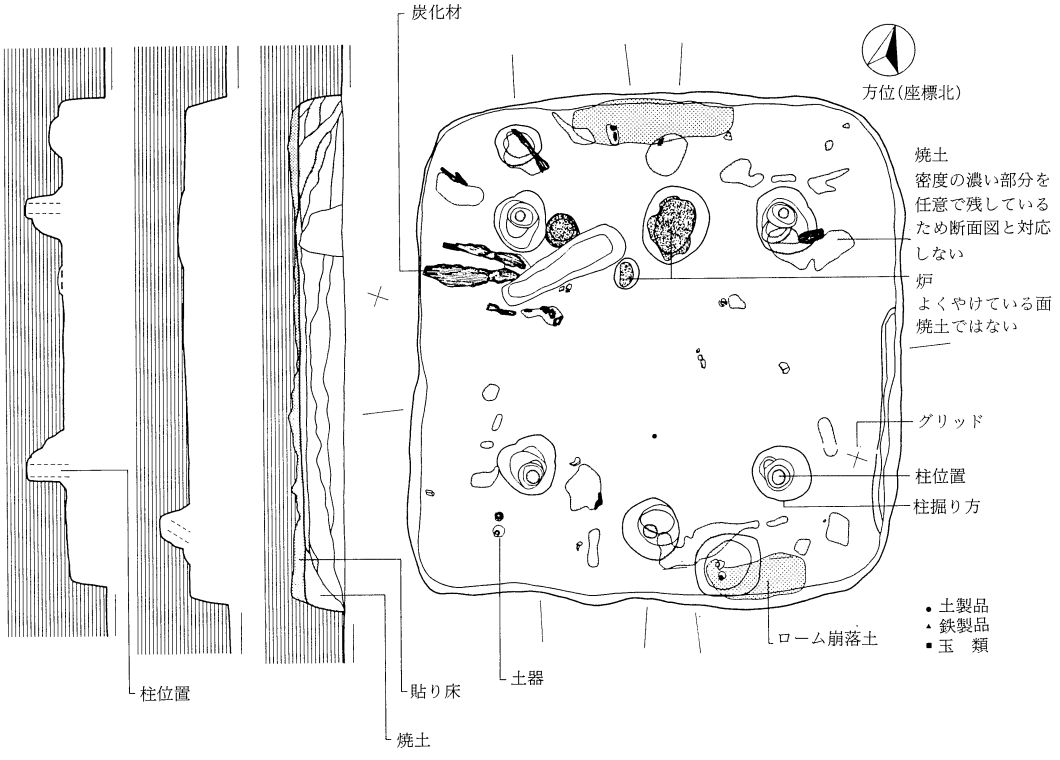
5　挿図遺物番号のうち、○を付したものは、床面上から出土したものである。

6　遺構面積は、ウチダデジタルプラニメーター KP-90 を使用し、実測図より測定した。

7　土器赤彩範囲は、スクリントーンにより表示した。

8　遺物観察表の記述内容については、別にP157に示した。

9　遺構図凡例



本 文 目 次

I　調査の経緯と概要

1　調査にいたる経緯……1

2　調査の概要……1

3　調査の結果……4

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と環境……7

2　弥生時代から古墳時代中期の遺跡群……7

III　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡……14

(2)　小竪穴……24

(3)　焼土土壙・集石土壙……27

(4)　土壙……28

2　弥生・古墳時代の遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡……53

(2)　土壙……109

(3)　古墳……111

3　奈良・平安時代およびそれ以降の遺構と遺物

(1)　方形周溝……130

(2)　溝・土塁状遺構……152

IV　考　察

1　鴨居上ノ台式と五領式について……181

2　下鈴野ムラの変遷……190

V　おわりに……203

挿 図 目 次

第 1 図　グリッドの設定 …… 1
第 2 図　地形と本調査範囲 …… 2
第 3 図　調査区と確認・本調査範囲 …… 3
第 4 図　発掘区と遺構 …… 5 ・ 6
第 5 図　遺跡の位置 …… 8
第 6 図　周辺の遺跡 ……10
第 7 図　縄文時代の遺構 ……15・16
第 8 図　17号住居跡出土遺物(1) ……14
第 9 図　17号住居跡 ……17
第 10 図　17号住居跡出土遺物(2) ……17
第 11 図　17号住居跡出土遺物(3) ……18
第 12 図　36号住居跡 ……19
第 13 図　縄文時代早期土器拓影 ……19
第 14 図　37号住居跡 ……20
第 15 図　37号住居跡出土遺物 ……21
第 16 図　縄文時代石器(1) ……22
第 17 図　縄文時代石器(2) ……23
第 18 図　01号小竪穴 ……24
第 19 図　01号小竪穴出土遺物 ……24
第 20 図　02号小竪穴、出土遺物(1) ……25
第 21 図　02号小竪穴出土遺物(2) ……26
第 22 図　03号小竪穴 ……26
第 23 図　01号焼土土壙 ……27
第 24 図　01・02号集石土壙 ……28
第 25 図　落し穴の分布 ……29・30
第 26 図　落し穴分類模式図 ……31
第 27 図　01号土壙 ……32
第 28 図　02・03・04号土壙 ……33
第 29 図　05・06・07号土壙 ……34
第 30 図　08・09・10号土壙 ……35
第 31 図　11・12・13号土壙 ……36
第 32 図　14・15号土壙 ……37
第 33 図　16・17号土壙 ……39
第 34 図　18・19・20号土壙 ……40
第 35 図　21・22号土壙 ……41
第 36 図　23・24号土壙 ……42
第 37 図　25・26・27・28号土壙 ……44
第 38 図　29・30号土壙 ……45
第 39 図　31・32・33号土壙 ……47
第 40 図　34・35・36号土壙 ……48
第 41 図　37・38・39号土壙 ……49
第 42 図　弥生・古墳時代の遺構 ……51・52
第 43 図　01号住居跡 ……53
第 44 図　02号住居跡 ……54
第 45 図　02号住居跡出土遺物 ……54
第 46 図　03号住居跡(1) ……55
第 47 図　03号住居跡(2) ……56
第 48 図　03号住居跡出土遺物(1) ……57
第 49 図　03号住居跡出土遺物(2) ……58
第 50 図　04号住居跡 ……59
第 51 図　04号住居跡出土遺物 ……60
第 52 図　05号住居跡 ……61
第 53 図　05号住居跡出土遺物 ……61
第 54 図　06号住居跡 ……62
第 55 図　06号住居跡出土遺物 ……63
第 56 図　07号住居跡 ……64
第 57 図　08号住居跡(1) ……65
第 58 図　08号住居跡(2)、出土遺物 ……66
第 59 図　09号住居跡 ……67
第 60 図　09号住居跡出土遺物(1) ……67
第 61 図　09号住居跡出土遺物(2) ……68
第 62 図　10号住居跡(1) ……69

第63図　10号住居跡(2)……70
第64図　10号住居跡出土遺物(1)……71
第65図　10号住居跡出土遺物(2)……72
第66図　11号住居跡、出土遺物……73
第67図　12号住居跡……74
第68図　12号住居跡出土遺物……75
第69図　13号住居跡……75
第70図　13号住居跡出土遺物……76
第71図　14号住居跡……76
第72図　15号住居跡……77・78
第73図　15号住居跡出土遺物……79
第74図　16号住居跡、出土遺物(1)……81
第75図　16号住居跡出土遺物(2)……82
第76図　18号住居跡……83
第77図　18号住居跡出土遺物……84
第78図　19号住居跡……85
第79図　19号住居跡出土遺物……86
第80図　20号住居跡、出土遺物……87
第81図　21号住居跡……88
第82図　21号住居跡出土遺物……89
第83図　22号住居跡……90
第84図　22号住居跡出土遺物……91
第85図　23号住居跡、出土遺物……92
第86図　24号住居跡……93
第87図　24号住居跡出土遺物……94
第88図　25号住居跡……95
第89図　25号住居跡出土遺物……96
第90図　26号住居跡、出土遺物……97
第91図　27号住居跡、出土遺物……98
第92図　28号住居跡……99
第93図　29号住居跡出土遺物(1)……99
第94図　29号住居跡……100
第95図　29号住居跡出土遺物(2)……101
第96図　30号住居跡……102
第97図　30号住居跡出土遺物……103
第98図　31号住居跡、出土遺物……104
第99図　32号住居跡……105
第100図　32号住居跡出土遺物……105
第101図　33号住居跡、出土遺物……106
第102図　34号住居跡、出土遺物……107
第103図　35号住居跡、出土遺物……108
第104図　40号土壙、出土遺物……109
第105図　41・42・43号土壙……110
第106図　01号墳(1)……111
第107図　01号墳(2)……112
第108図　01号墳(3)……113・114
第109図　01号墳(4)……115
第110図　01号墳1・2号主体……116
第111図　1号主体出土遺物……117
第112図　1号主体出土滑石製臼玉計測値分布図……118
第113図　01号墳周溝出土遺物……119
第114図　02号墳……121・122
第115図　02号墳出土遺物……123
第116図　03号墳(1)……124
第117図　03号墳(2)……125
第118図　04号墳……125
第119図　04号墳出土遺物……126
第120図　05号墳……127
第121図　05号墳出土遺物(1)……128
第122図　05号墳出土遺物(2)……129
第123図　奈良・平安時代およびそれ以降の遺構……131・132
第124図　01号方形周溝(1)……133
第125図　01号方形周溝(2)……134
第126図　02号方形周溝……135

第127図　03号方形周溝……136
第128図　04号方形周溝……137
第129図　05号方形周溝(1)……138
第130図　05号方形周溝(2)……139
第131図　06号方形周溝(1)……140
第132図　06号方形周溝(2)……141
第133図　06号方形周溝(3) ……143・144
第134図　07号方形周溝……145
第135図　08号方形周溝……146
第136図　09号方形周溝(1)……147
第137図　09号方形周溝(2)……148
第138図　01・02号溝(1) ……149・150
第139図　01・02号溝(2)……151
第140図　01号溝出土遺物……153
第141図　03・04・05・06号溝……154
第142図　03・04号溝……155
第143図　03・04号溝出土遺物……155
第144図　ハケ使用頻度……184
第145図　器種・食卓用土器の組成変化……186
第146図　食卓用土器の変遷……187
第147図　土器容量の変化……188
第148図　甕形土器煤付着範囲……189
第149図　竪穴住居跡の分類(1)……191
第150図　竪穴住居跡の分類(2)……192
第151図　住居内土器出土位置……194
第152図　下鈴野遺跡Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅱ期……195
第153図　下鈴野遺跡Ⅲ期……196

表　目　次

第１表　各遺跡の消長……11
第２表　貝類等遺骸総出土数……27
第３表　石器計測観察表(1)……50
第４表　土器計測観察表 ……157
第５表　石器計測観察表(2) ……178
第６表　鉄器計測観察表 ……179
第７表　土製品計測観察表 ……179
第８表　玉類計測観察表 ……180
第９表　弥生時代～古墳時代竪穴住居跡 …201

図　版　目　次

図版１　航空写真　全景
図版２　航空写真　全景　方形周溝群
図版３　航空写真　住居跡群　方形周溝群
図版４　航空写真　古墳群
図版５　17・36・37号住居跡
図版６　小竪穴・焼土土壙・集石土壙
図版７　01・02・03・04号土壙
図版８　05・06・07・08号土壙
図版９　09・10・11・12号土壙
図版10　13・14・16・17号土壙
図版11　19・20・21・22号土壙
図版12　23・24・25・26号土壙
図版13　27・28・29・30号土壙
図版14　31・32・33・34号土壙
図版15　36・37・38・39号土壙
図版16　01・02・03号住居跡

図版17　03・04・05号住居跡
図版18　06・07・08号住居跡
図版19　09・10号住居跡
図版20　11・12・13号住居跡
図版21　14・15号住居跡
図版22　16号住居跡
図版23　18・19・20号住居跡
図版24　21・22号住居跡
図版25　23・24・25号住居跡
図版26　25・26・27号住居跡
図版27　28・29・30号住居跡
図版28　31・32号住居跡
図版29　33・34・35号住居跡
図版30　40・41・42・43号土壙
図版31　古墳群・01号墳
図版32　01号墳
図版33　02・03号墳
図版34　04・05号墳
図版35　01・02号方形周溝
図版36　03・04・05号方形周溝
図版37　06号方形周溝
図版38　06号方形周溝
図版39　07・08・09号方形周溝
図版40　01・02号溝
図版41　01・02号溝　04号溝
図版42　17号住居跡出土遺物
図版43　37号住居跡出土遺物　縄文時代早期土器
図版44　01・02号小竪穴出土遺物
図版45　縄文時代石器
図版46　縄文時代石器
図版47　03号住居跡出土遺物
図版48　03号住居跡出土遺物
図版49　04・05・06・08・09号住居跡出土遺物
図版50　09・10号住居跡出土遺物
図版51　10・11号住居跡出土遺物
図版52　12・13・15・16号住居跡出土遺物
図版53　16号住居跡出土遺物
図版54　16・18・19・21号住居跡出土遺物
図版55　20・21・22号住居跡出土遺物
図版56　23・24・25号住居跡出土遺物
図版57　25・26・29号住居跡出土遺物
図版58　29・30・32号住居跡出土遺物
図版59　33・34・35号住居跡、40号土壙出土遺物
図版60　01・02号墳出土遺物
図版61　02・04号墳、01・03号溝出土遺物
図版62　粘土紐　胴部押捺文　櫛描文
図版63　鉄器　玉類
図版64　玉類　土製品
図版65　土製品　古墳時代石器

Ⅰ　調査の経緯と概要

1　調査にいたる経緯

今回の発掘調査は、（仮称）帝京技術科学大学の建設に先行して実施されたものである。

千葉県教育庁文化課と市原市教育委員会は、大学建設に伴い、計画範囲内の埋蔵文化財所在確認のため現地踏査を行った結果、古墳及び縄文土器、土師器の散布が認められた。この結果に基づく関係諸機関の協議により、全域記録保存の措置をとることになり、当センターが発掘調査を実施することとなった。

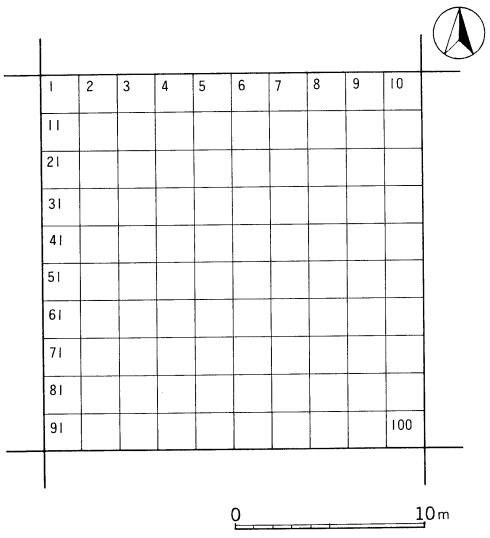
確認調査は、財団法人市原市文化財センターへの委託事業として、調査対象地区86,700㎡を昭和61年２月25日より実施した。確認調査の結果、千葉県教育庁文化課の指導により、32,200㎡が本調査の対象となり、昭和61年４月10日より開始した。

2　調査の概要

調査範囲は、造成計画地内台地上平坦部に限定されている。

調査区は、公共座標を使用し、20m×20mの方眼網を設定、これを大グリッドとした。確認調査では、さらに10m方眼に分割し、これを基点に２m×４mのグリッドを設定した。グリッドは、状況に応じ拡張し、調査対象範囲の10％にあたる8,670㎡について発掘調査を実施した（第３図）。確認調査では、円墳１基、方墳１基、竪穴住居跡23軒、溝13条以上、土壙８基が確認された。(註1)ただし、このうち西斜面の溝については、本調査範囲外におかれた。

本調査（第２・３図）における発掘区は、大グリッドを基準とし、その呼称は、西から東へA・B・C、北から南へ１・２・３を付した（第３図）。さらにこの大グリッドを２m単位の小グリッドに分割し、北西隅から01・02・03と順に付し、南東の隅を100とした（第１図）。グリッドの呼称は、大グリッドを組み合わせ、「A1901」のようにした。これは、挿図各遺構図に記し、その位置を示してある。また、遺構外遺物については、このグリッドを基準としたが、点数がきわめて限られていたため、大グリッドを４分割し、a・b・c・dの呼称で取り上げたものも多い。

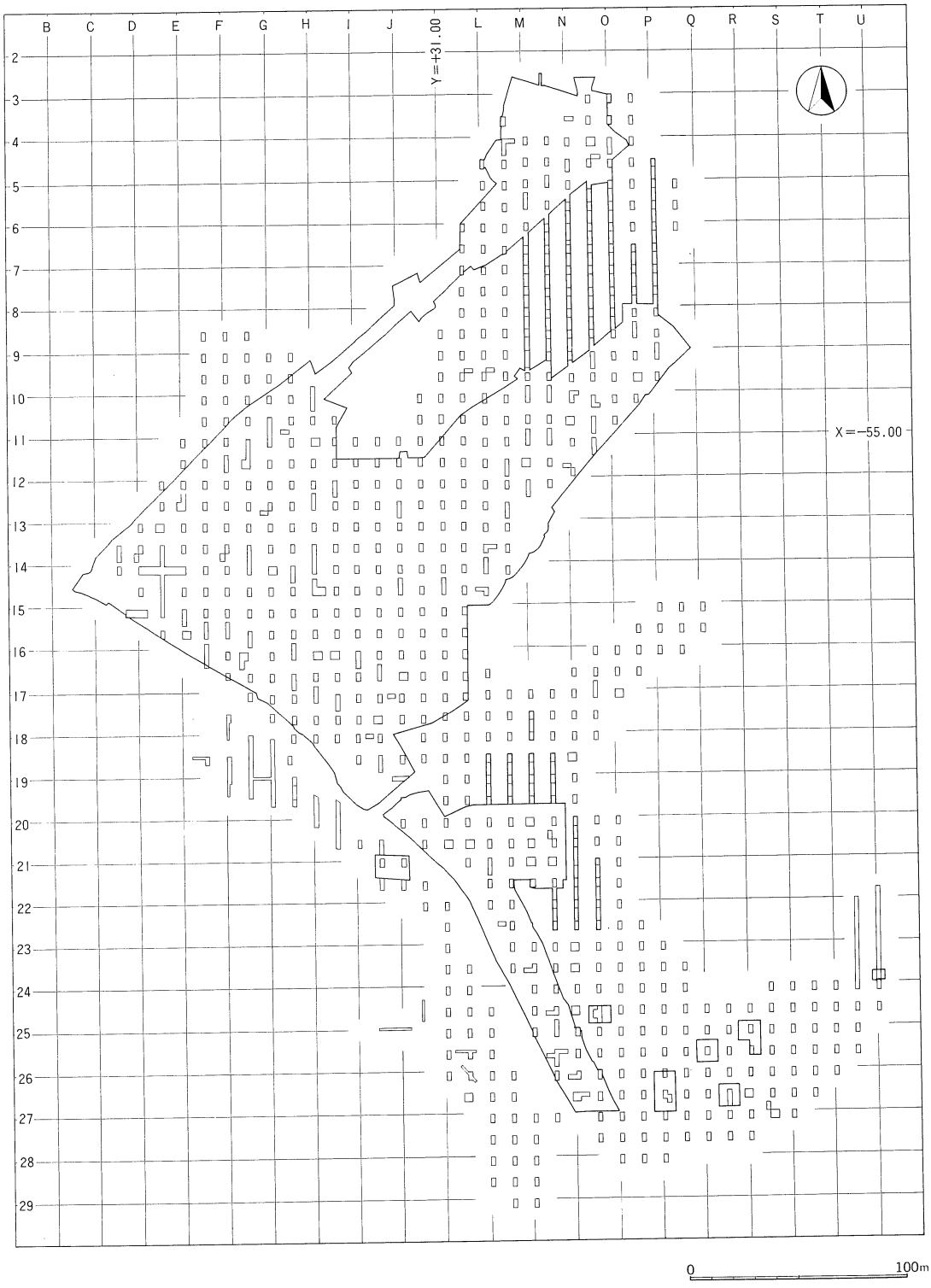


第１図　グリッドの設定（1/400）

遺跡は、雑木林を含む荒地であり、確認面（ローム面）までの層厚は40～80cm程度であ



第2図　地形と本調査範囲（1/5000）



第3図　調査区と確認・本調査範囲（1/3000）

った。表土層の除去は、古墳周辺部を除き、バックホウを使用した。

調査は、竪穴住居跡、古墳、方形周溝、溝等、弥生時代終末期以降の遺構を実施したのち、所謂落し穴など、下層遺構を調査し、昭和61年９月30日に完了した。

3　調査の結果

今回の発掘調査により、縄文時代については、竪穴住居跡３軒、小竪穴３基、集石土壙２基、焼土を伴う土壙１基、土壙（落し穴状遺構）43基、弥生時代終末期～古墳時代は竪穴住居跡34軒、古墳５基、土壙４基、奈良・平安時代は方形周溝９基、溝２条、他に時期不明の溝17条、土塁状遺構１条が検出された。ただし、このうち道路跡と推定される、対象地西側斜面の溝13条については、本調査を実施していない。

縄文時代については、住居跡２軒、小竪穴、焼土を伴う土壙が中期加曽利Ｅ式期の所産であり、他の住居跡１軒は、早期と考えられる。落し穴については、時期は確定できない。弥生時代終末期～古墳時代住居跡34軒は、鴨居上ノ台式期～五領式期であり、時期的に限定される。古墳５基は、和泉式期を中心とし、集落に連続する。方形周溝については、遺物が出土していないものの、奈良・平安期の所産であろう。調査区北側、東西に台地を横断する溝については、平安時代に比定される。

確認調査の結果と比較した場合、とくに所謂落し穴が、予想外に検出された。さらに本調査範囲外へ広がる可能性は否定できない。その検出が調査終盤であったため、期間等対応することができなかった。本調査範囲は、確認調査の結果を基準とするが、とくに土壙、溝のあつかいについては、さらに検討を要する。

なお、本遺跡の調査結果については、一部すでに発表してあるが[(註2)]、いずれも整理作業前、整理途中のものであり、本報告をもって補正・訂正としたい。

註１　浅利幸一　1985「下鈴野遺跡」『市原市文化財センター年報　昭和59年度』

註２　市原市文化財センター　1986「潤井戸下鈴野遺跡」『昭和60年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』千葉県文化財法人連絡協議会

大村直　1986「潤井戸下鈴野遺跡」『第１回市原市文化財センター遺跡発表会要旨―昭和60年度―』㈶市原市文化財センター

大村直　1986「下鈴野遺跡」『市原市文化財センター年報　昭和60年度』



第4図　発掘区と遺構（1/2000）

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と環境

本遺跡は、千葉県市原市潤井戸字上清水谷1684番地他に所在する。

本遺跡の位置する村田川流域では、北岸千葉市域で、現在千葉東南部ニュータウン、千原台ニュータウンなど、大規模な土地区画整理事業が実施され、激しい都市化の波にさらされている。市原市域においても、辰巳台、菊間、若宮地区など、はやくから宅地開発が行われている。臨海工業地帯をひかえ、また地域的な役割から、今後とも開発行為は増加するであろう。

この村田川は、別名境川とも称され、古くは上総と下総を区分し、また市原市・千葉市の市域を分ける一つの境界でもある。全長21km程度であり、多くの樹枝状支谷を形成する。

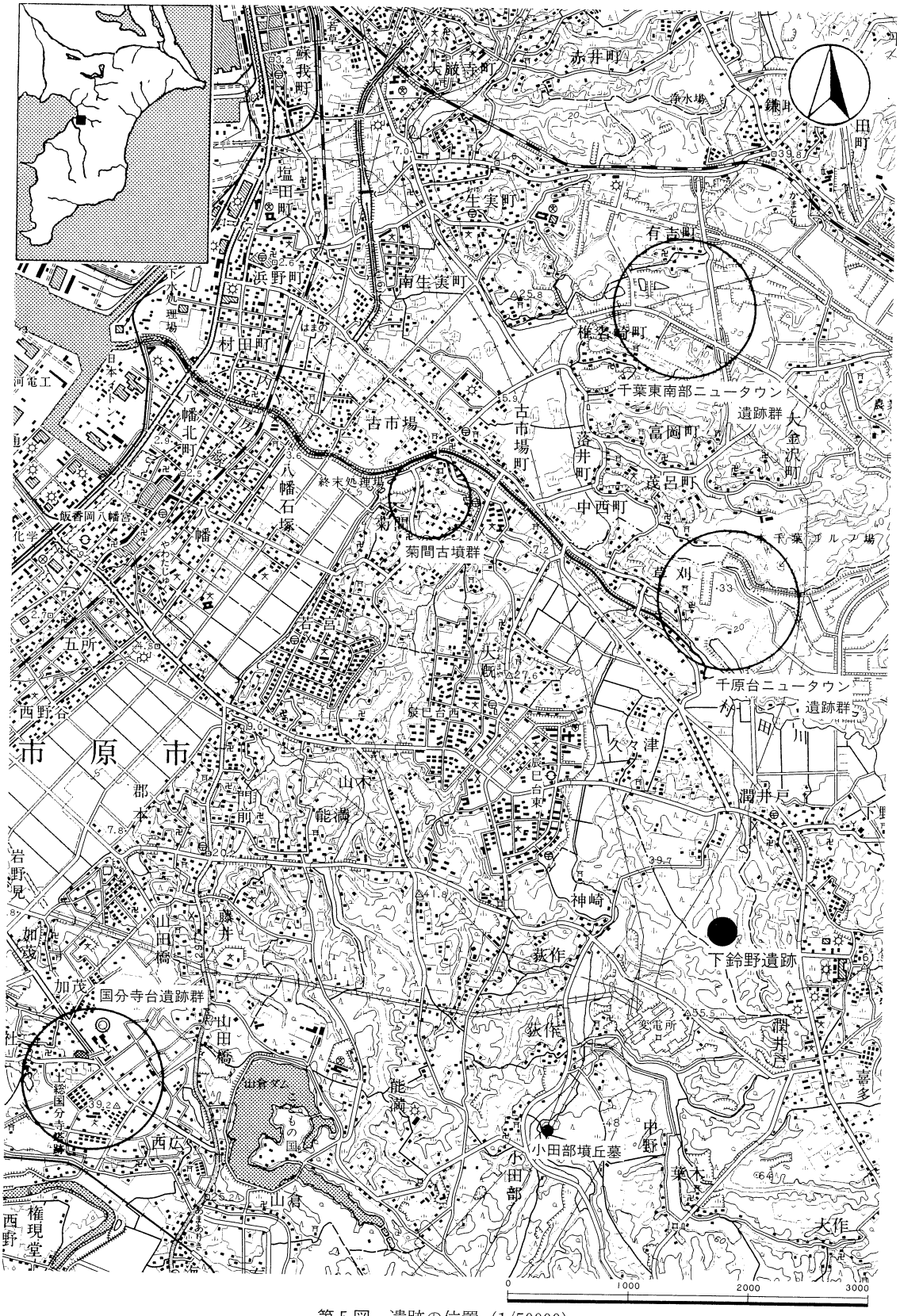
本遺跡の立地する台地は、東側が、村田川左岸中流域から細く南下する支谷に面し、西側が、村田川支流の神崎川中流域に接する小支谷に面している。調査対象地は、さらに小支谷により分割されており、平坦面は、かならずしも広くはない。標高は51～54mであり、西側は比高約30mの急崖によって画されている。東側の谷は、底面で幅約50mであり、現在水田化されているものの、生産基盤としては面的に限定されている。

2　弥生時代から古墳時代中期の遺跡群

村田川流域では、姫宮古墳、東関山古墳などの菊間古墳群が、古くから著名である。本遺跡周辺では、東側対岸に、長者塚古墳群、三夜塚古墳、その上流には、杉山古墳群、山王後古墳群(註1)があり、これらは前方後円墳を含む場合が多い。これに対して、神崎川側は、天王台古墳群など、円墳を主体とする(註2)。このうち中閏ヶ広１号墳について、帝京技術大学建設に関連して発掘調査が実施されている(註3)。これらは、後期を主体とすると考えられるものの、明確ではなく、ここで問題とすることはできない。

村田川左岸地域は、集落跡を含め、比較的調査は少なく、相互の関連性を明らかにすることは困難である。ただし、前述したように、右岸地域では、大規模な発掘調査が広範囲に実施されており、当該期における拠点的な集落と考えられる草刈遺跡などを軸に、遺跡群の動態を問題とすることは可能であろう。ただし、前期古墳の分布をみても、村田川水系地域を一括することは困難であり、下鈴野遺跡がこれに包括されるものであるかどうかは明らかではない。

宮ノ台式期については、遺跡数は限定されている。草刈遺跡Ｆ区、菊間遺跡、菊間手永遺跡、大厩遺跡、西山遺跡など、環濠を伴う場合が多い。このうち草刈遺跡Ｆ区では、範囲をかえ、２時期の環濠がある。また、相互に隣接する菊間遺跡、菊間手永遺跡、また国分寺台地区における根田代遺跡(註4)、台遺跡Ｃ地点(註5)を含め、時期的な対応関係を検証する必要があろう。以前指摘したように(註6)、横浜市港北地区では、大塚遺跡、宮原遺跡、朝光寺原遺跡、折本西原遺跡など、環濠に２



第５図　遺跡の位置（1/50000）

時期以上が認められており、一集落内で、集落の拠点化と関連し、環濠の機能は時期的に限定されるものと考えられる。

久ヶ原式期については、全体に遺跡数が増加する傾向にある。ただし、これを人口圧における分村においてのみ説明することはできない。全体としては拡散化傾向にある。大厩遺跡、菊間遺跡、菊間手永遺跡なども宮ノ台式期に比して小規模化する。草刈遺跡については、その全体は明らかではないが、A・B区は、2単位の集落に分割されている。

鴨居上ノ台式期については、その編年関係が安定しておらず、五領式期に包括され発表される場合が多く、未報告例については検証することができない。有吉遺跡、南二重堀遺跡、大厩遺跡、下鈴野遺跡などについては、1単位の小住居跡群によって構成されている。

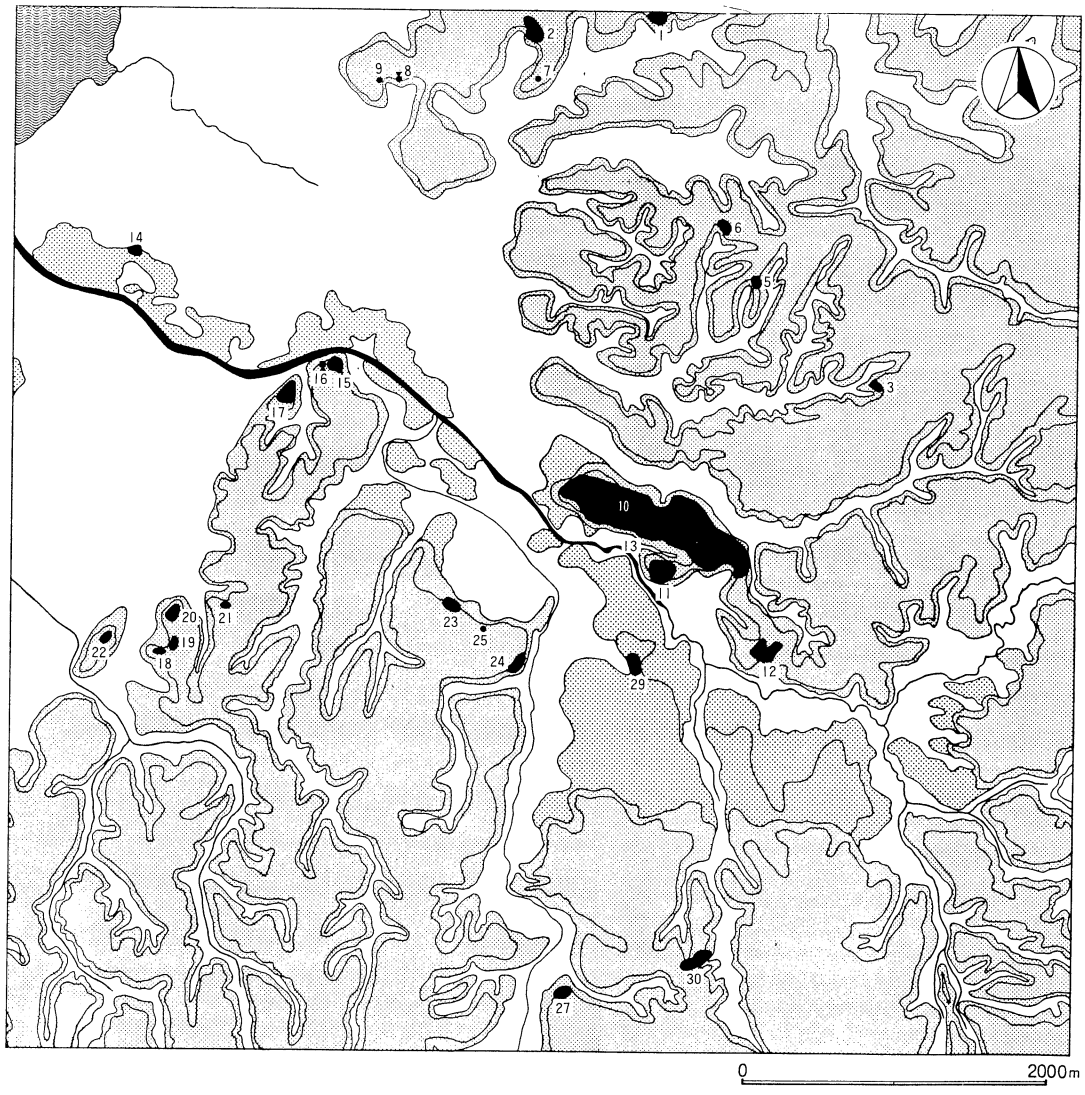
この、1～数単位の小住居跡群によって構成される小規模な集落の存在形態は、和泉式期に継続する構成であり、この段階の農耕の経営規模に規定されたものである。また、鴨居上ノ台式期に成立し、五領1式期に拡大して、五領2式期に移動する下鈴野遺跡、五領2式期を欠き、五領1式期、和泉式期に比定される西山遺跡、鴨居上ノ台式期以降継続するものの、五領1式期に客体化する南二重堀遺跡など、その消長は一定せず、これを、拠点的集落を軸とした、特定期における離合集散において説明することは困難であろう。非継続的な、活発な移動が想定されるのである。ただし、今回対象とした遺跡群において、相互の補完関係を検討することはできず、今後さらに地域を限定し、資料を蓄積していく必要がある。現状では、下鈴野遺跡は、隣接する祭り野遺跡と時期的に接続する。ただし、その関係は明らかではない。いずれにせよ、集落が長期継続化するのは、当該地域においても鬼高式期以降であろう。

ただし、草刈遺跡、及びこれに隣接する草刈六之台遺跡、川焼台遺跡など、この地域では、宮ノ台式期以降多数の住居跡が検出されている。また、小形銅鐸2点、珠文鏡(註7)5点など、集落跡としては卓越した出土遺物もある。たしかに発掘面積も広大であり、草刈遺跡にしても、各時期これを一遺跡としてはとらえることはできない。ただし、周辺の遺跡群を問題とする上で、看過することはできない。

この地域の墳墓としては、まず鴨居上ノ台式期に比定される小田部墳丘墓がある。径23mの「円墳」として報告されているが、現存しており、その墳形については再調査が必要であろう。

前期古墳としては、親皇塚古墳、大厩浅間様古墳、大覚寺山古墳などがある。ただし、これらは、小田部墳丘墓とは時期的に連続しない。このうち、大覚寺山古墳については、上赤塚1号墳、七廻塚古墳と、系列的な関係が認められるが、現状では、古墳群の構成から「地域」を問題とすることはできない。

方形周溝墓については、関東地方では、五領1式期において規模格差が明確化し、従来の列構成が解体する。とくに、五領2式期において単独化する傾向があり、草刈遺跡A・B区、大厩遺跡群などは、当該期の所産である。また、この段階では、集落と分離される傾向があり、国分寺

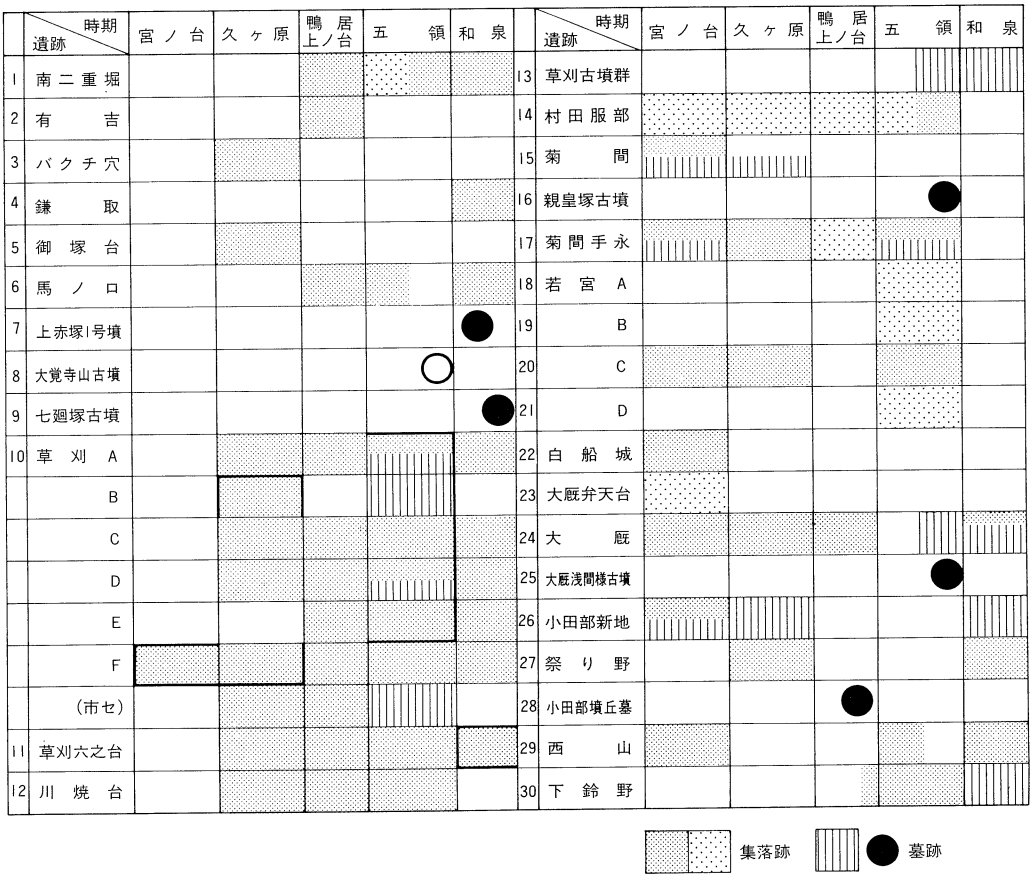


第６図　周辺の遺跡(宮ノ台式期～和泉式期)(1/50000)

台地区における諏訪台古墳群(註8)などは、その延長上に位置づけられるものであろう。方形周溝墓は五領１式期以降の過程で、被葬者が限定されていくものと考えられるが、低墳丘前方後方墳（前方後方形周溝墓）などを含めた階層性を、地域を限定して明らかにする必要がある。

現在、市原市域では、山林等土地利用の悪条件もあり、遺跡の分布状態が全体として把握されてはいない。したがって、第１表における遺跡群は、発掘調査を実施し、報告された遺跡に限定している。

その遺跡の価値は、地域から取り出して考えることはできない。また開発行為に対応していく上でも、基礎資料を集積していく必要があろう。



第1表　各遺跡の消長（宮ノ台式期～和泉式期）

註1　1975年度、市原市調査。田中清美氏の御教示による。

註2　鈴木英啓　1986『潤井戸西山遺跡』(財)市原市文化財センター
この地区の古墳群については、同書にくわしい。

註3　近藤敏　1986「中閏ヶ広遺跡」『市原市文化財センター年報　昭和60年度』

註4　浅利幸一　1983「根田遺跡」『上総国分寺台遺跡発掘調査概報』市原市教育委員会

註5　谷島一馬　1979「御林跡遺跡の調査」『上総国分寺台調査概報』市原市教育委員会

註6　大村直　1983「弥生時代におけるムラとその基本的経営」『史館』第15号　史館同人

註7　(財)市原市文化財センター　1987『第2回市原市文化財センター遺跡発表会要旨―昭和61年度―』

註8　浅利幸一　1986「諏訪台古墳群」註3
浅利幸一　1987「諏訪台古墳群」註7
田所真　1987「諏訪台48号墳の調査について」註7

第1表遺跡文献

1　古内茂・伊藤智樹　1983『千葉東南部ニュータウン12—南二重堀遺跡—』㈶千葉県文化財センター

2　種田斉吾・阪田正一　1975『千葉東南部ニュータウン3—有吉遺跡（第1次）—』㈶千葉県文化財センター

種田斉吾　1978『千葉県東南部ニュータウン5—有吉遺跡（第2次）—』㈶千葉県文化財センター

古内茂・栗田則久・大野康男　1983『千葉東南部ニュータウン14—バクチ穴遺跡・有吉遺跡（第3次）・有吉南遺跡—』㈶千葉県文化財センター

3　古内茂・栗田則久・大野康男　1983　(2)

4　㈶千葉県文化財センター　1983「鎌取遺跡」『千葉県文化財センター年報　No.9』

5　㈶千葉県文化財センター　1983「御塚台遺跡」　(4)

6　古内茂・大野康男　1984『千葉県東南部ニュータウン15—馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡—』㈶千葉県文化財センター

7　田坂浩・栗田則久　1982『千葉東南部ニュータウン13—上赤塚1号墳・狐塚古墳群—』㈶千葉県文化財センター

8　武田宗久　1976『千葉市史　史料編1』千葉市

9　武田宗久　1976　(8)

10　三森俊彦・小久貫隆史ほか　1983『千原台ニュータウンII　草刈遺跡A区（第1次調査）　鶴牧古墳群・人形塚』㈶千葉県文化財センター

古内茂・高田博ほか　1986『千原台ニュータウンIII　草刈遺跡（B区）』㈶千葉県文化財センター

㈶千葉県文化財センター　1982「草刈遺跡（C区）」「草刈遺跡（D区）」『千葉県文化財センター年報　No.8』

㈶千葉県文化財センター　1983「草刈遺跡（C区）」「草刈遺跡（D区）」(4)

㈶千葉県文化財センター　1984「草刈遺跡（F区）」「草刈遺跡（D区）第三次」「草刈遺跡（E区）」『千葉県文化財センター年報　No.10』

高橋康男　1985『草刈遺跡』㈶市原市文化財センター

11　㈶千葉県文化財センター　1980「草刈六之台遺跡」『千葉県文化財センター年報　No.6』

㈶千葉県文化財センター　1981「草刈六之台遺跡（第2次）」『千葉県文化財センター年報　No.7』

㈶千葉県文化財センター　1982「草刈六之台遺跡（第3次）」　(10)

12　㈶千葉県文化財センター　1983「草刈古墳群」「川焼台遺跡」(4)

㈶千葉県文化財センター　1984「川焼台遺跡」(10)

榊原弘二・山口典子　1984「市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸について」『研究連絡誌』第7・8合併号　㈶千葉県文化財センター

相京邦彦・白井久美子・金子進　1986「川焼台遺跡出土の2号銅鐸について」『研究連絡誌』第15・

16号　㈶千葉県文化財センター

13　㈶千葉県文化財センター　1981「草刈古墳群」(11)

㈶千葉県文化財センター　1982「草刈古墳群」(10)

㈶千葉県文化財センター　1983「草刈古墳群」(4)

㈶千葉県文化財センター　1984「草刈遺跡（Ｆ区）」(10)

14　金丸誠　1985『千葉市村田服部遺跡』㈶千葉県文化財センター

15　斎木勝　1974『市原市菊間遺跡』千葉県都市部・㈶千葉県都市公社

斎木勝・深沢克友　1978「房総における弥生文化の摂取とその波及について」『研究紀要３』㈶千葉県文化財センター

16　斎木勝　1974　(15)

17　近藤敏　1985　「菊間手永貝塚」『市原市文化財センター年報　昭和57・58年度』

18　市毛勲・滝山昌彦　1967「若宮遺跡（Ｃ地区）」『市原市周辺地域の調査』市原市文化財調査報告書第３冊　土師書院

22　1986年度、市原市文化財センター調査

23　鈴木英啓　1986　註２

24　三森俊彦・阪田正一　1974『市原市大厩遺跡』千葉県都市部・㈶千葉県都市公社

25　浅利幸一　1985「(大厩) 浅間様古墳」『市原市文化財センター年報　昭和59年度』

26　山口直樹　1985「小田部新地遺跡」(17)

27　1977年度、市原市調査。田中清美氏の御教示による。

28　杉山晋作・安藤鴻基・沼沢豊・田中新史　1972『古墳時代研究Ⅰ―千葉県市原市小田部古墳の調査―』古墳時代研究会

29　鈴木英啓　1986　註２

Ⅲ 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

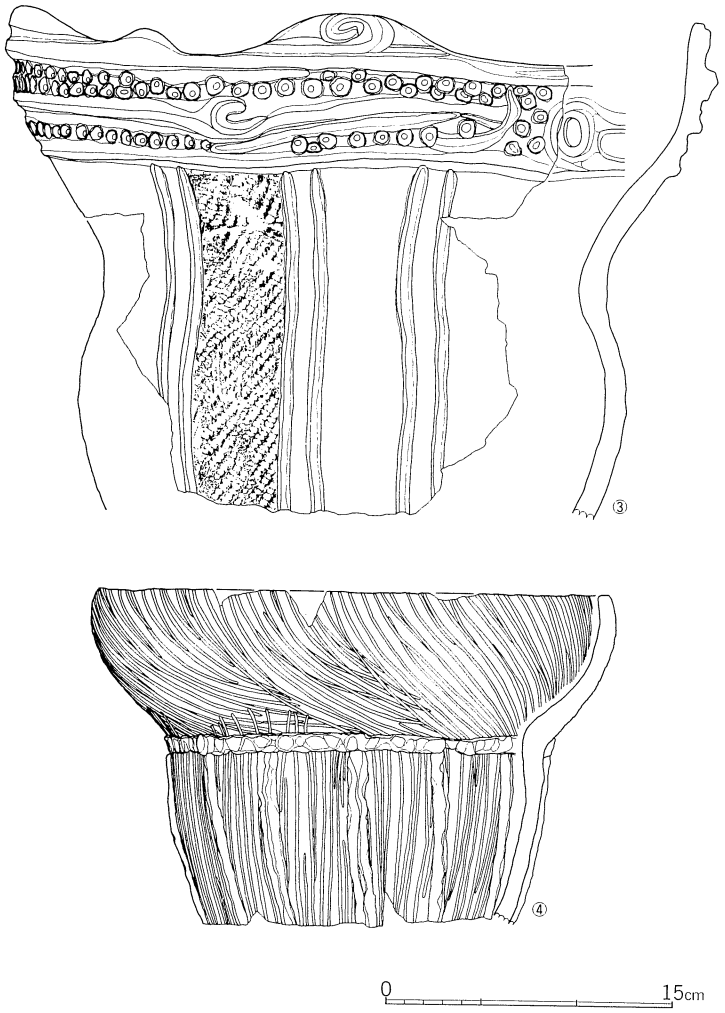
縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡3軒、小竪穴3基、集石土壙2基、焼土を伴う土壙1基、土壙（落し穴状遺構）43基である（第7図）。

遺構の分布は、全体として散慢であり、また遺構外遺物は、加曽利E式土器が住居跡周辺部に認められる他、分布範囲が確認できるものはなかった。ただし、確認面直上、表土層は、重機を使用し除去している。

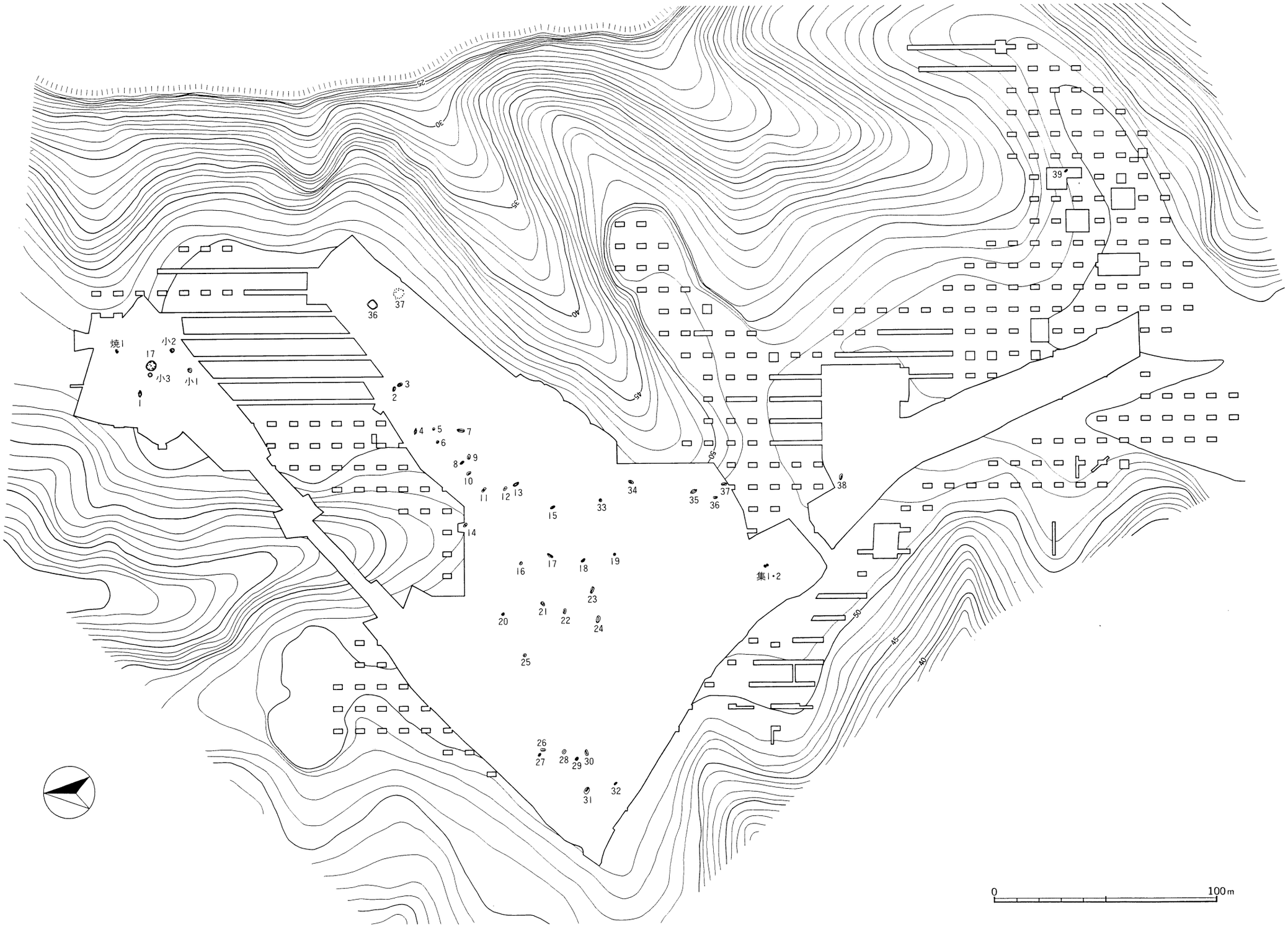
(1) 竪穴住居跡

17号住居跡（第8・9・10・11・16・17図）

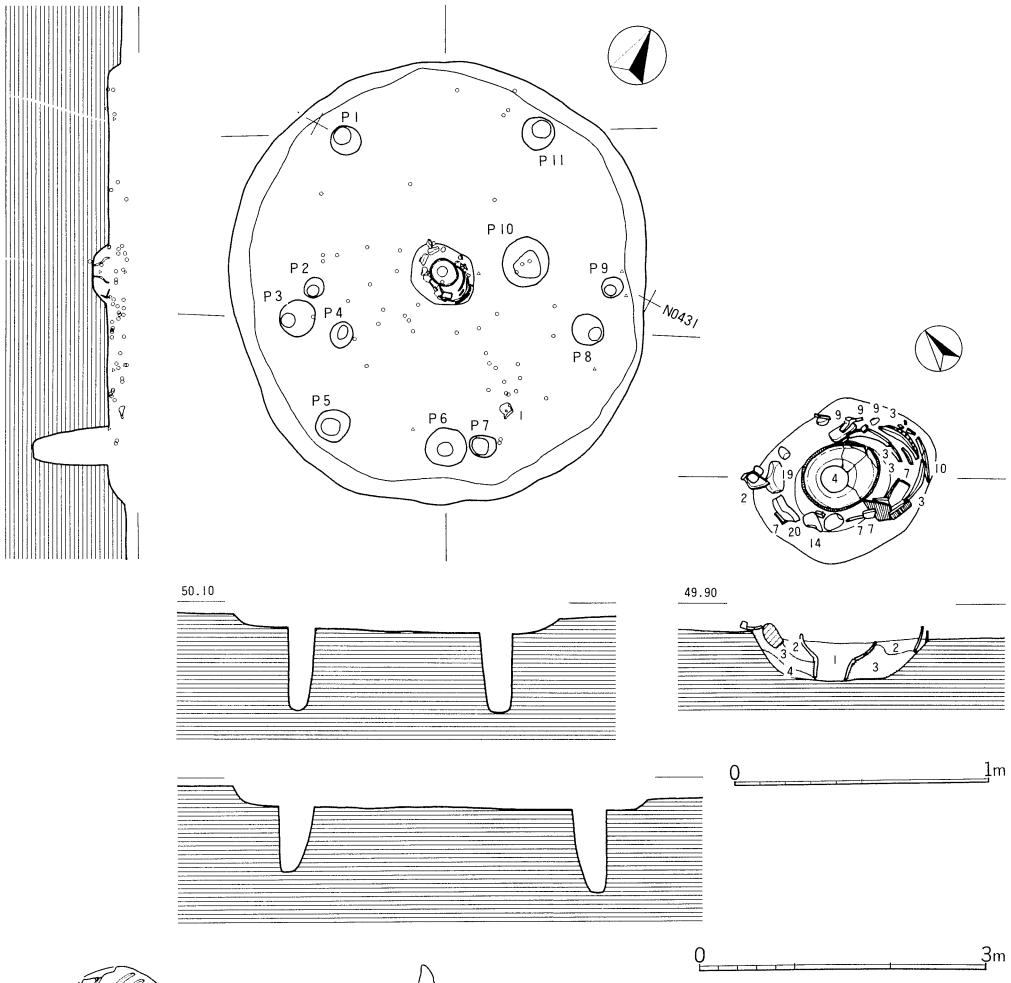
遺　構　古墳群に隣接して検出された。住居竪穴の平面形態はほぼ円形を呈し、南北(長軸)4.73m、東西（短軸4.41mを測る。掘り込み面（確認面）の面積は16.51m²、床面の面積は14.05m²である。壁高は、確認面より18cm程度を測る。床面は、貼り床ではなく、炉周辺部を含め、全体にやや軟弱であった。周溝は確認されなかった。柱穴は、11本検出された。その深さは、P1が85cm、P2が22cm、P3が68cm、P4が19cm、P5が54cm、P6が84cm、P7が33cm、P8が75cm、P9が18cm、P10が31cm、P11が84cmであり、このうちP1・P3・P6・P8・P11が主柱穴である。炉は、ほぼ中央に位置し、埋甕炉である。胴部下半を欠く第8図―4を中心に埋設し、さらに土器片、石皿



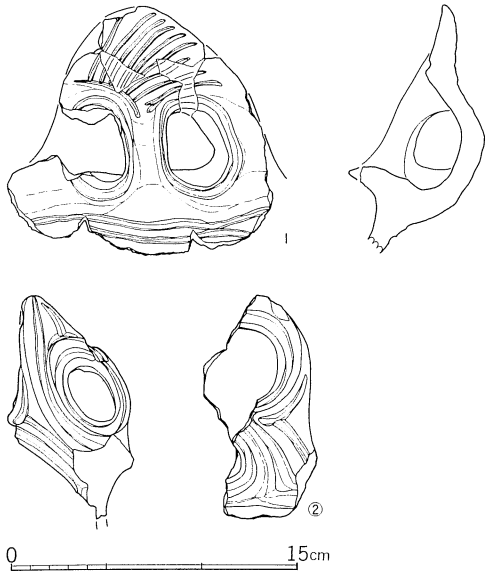
第8図　17号住居跡出土遺物(1)（1/4）



第7図　縄文時代の遺構（1/2000）



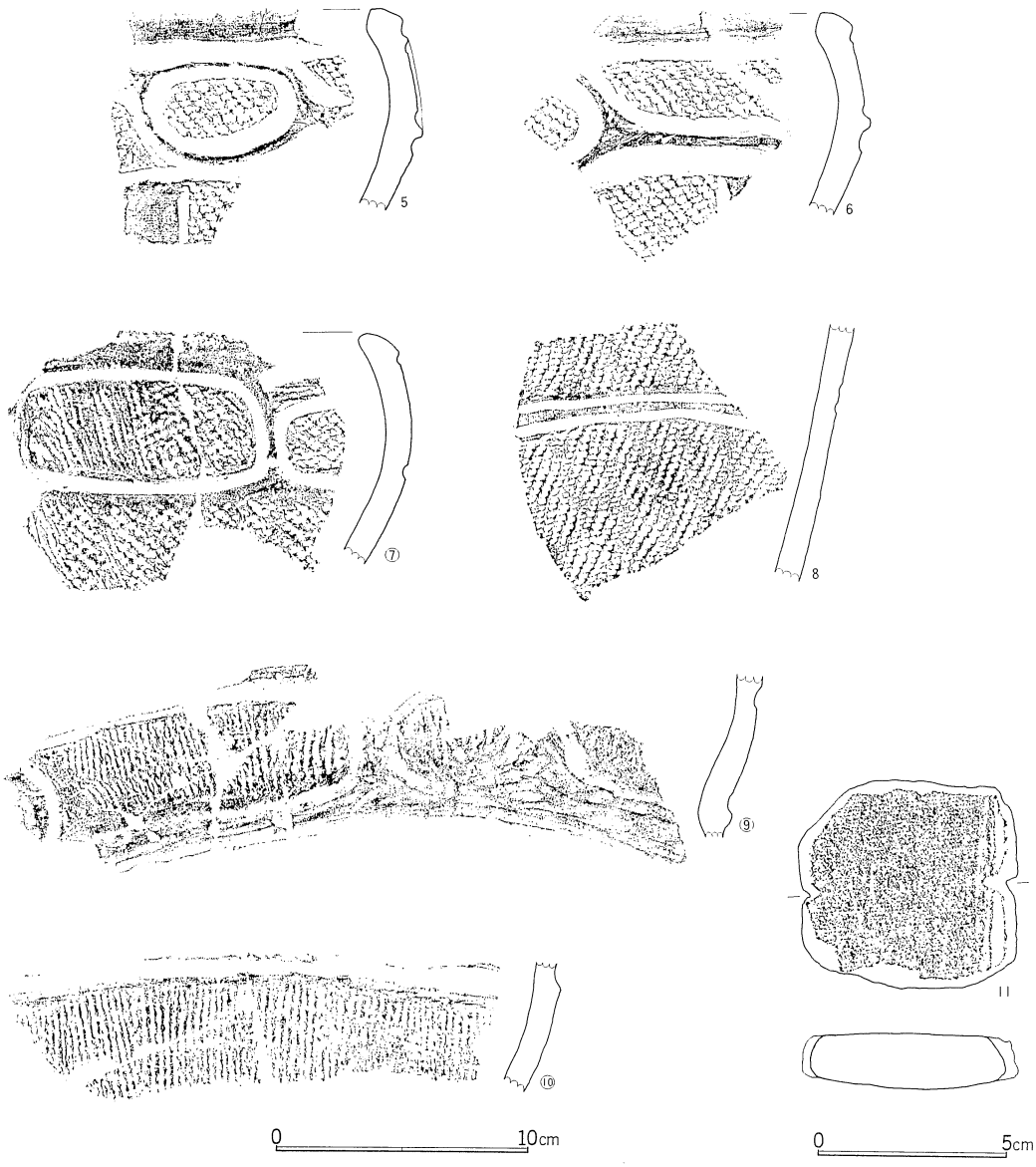
第9図　17号住居跡（1/80、1/30）



第10図　17号住居跡出土遺物(2)（1/4）

等を転用して区画している。炉の掘り込みは、長径99cm、短径78cmであり、最も深い部分で、床面より26cmを測る。その堆積は、1・2・4層が明黒褐色土層、3層が焼土層である。1層、炉体土器内部は、焼土粒が希薄で、しまりがなく全体に粒状であった。

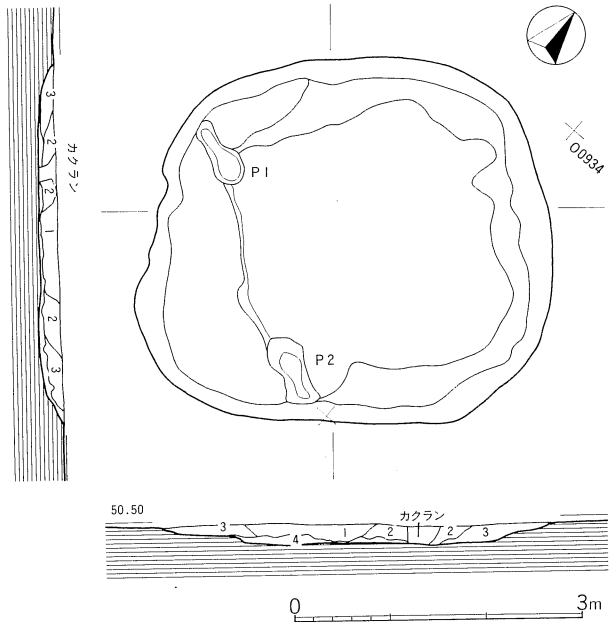
遺　物　出土遺物は、全体に少なく、覆土から出土したものは、ほとんど接合しなかった。第8図－3・4、第10図－2、第11図－7・9・10は、炉使用土器である。第10図－1、第11図－5・6・8は、覆土中からの出土である。覆土資料を含め、



第11図　17号住居跡出土遺物(3)（1/3、1/2）

時期的にほぼ限定されているが、第10図の2例の把手については、これに先行する内容をもつ。すくなくとも2については、混入とは考えられない。

1・2は、把手であり、沈線が施される。1は、発掘時は、ほぼ把手全体が確認されたが、遺存状態が不良であった。3は、口縁部½周、胴部上半¼周が現存している。口縁部は、大小4単位の波状口縁となり、沈線による渦巻文が配される。口縁部文様帯は、隆帯と沈線により渦巻文、円形文を表出し、棒状工具による押捺文により充塡される。胴部は、2本の沈線が懸垂し、区画する。縄文は、原体RLを縦方向に施文している。4は、胴部下半を欠損する。地文は、平行沈



第12図　36号住居跡（1/80）

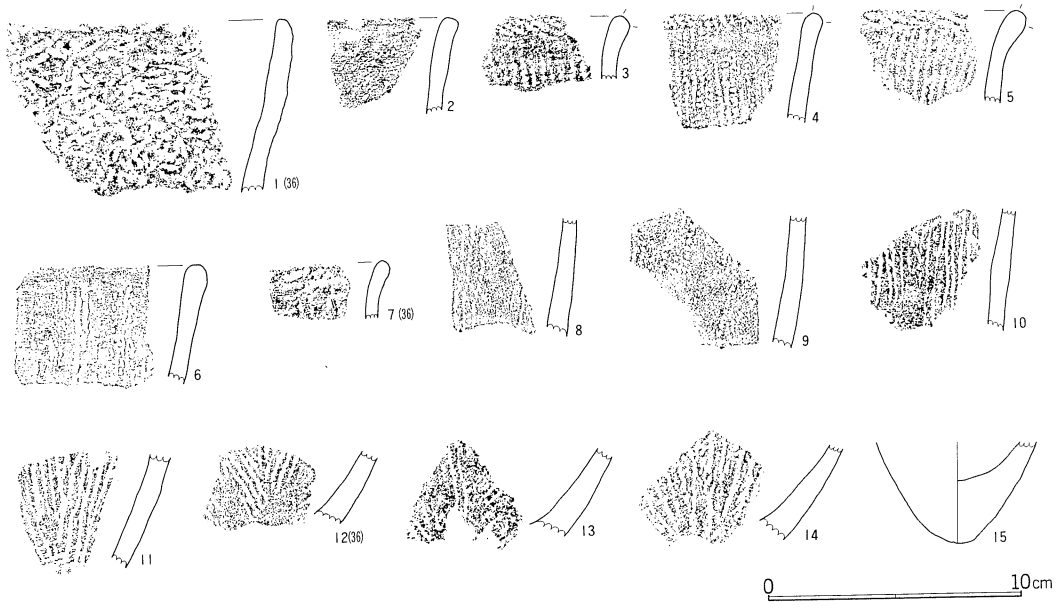
線による条線である。口縁端部には刻目が施される。頸部及び胴部には、押捺が加えられた隆帯が付加される。5・6は、同一個体と考えられる。

第11図—11は、土器片錘である。ヒモ掛けの切目が両端に認められる。表裏ともミガキが施され、一端に沈線が確認できる。重量は、48.4ｇを測る。

石器は、第16図—12・13、第17図—14・15・17・19・20が出土している（第3表）。12・13が石斧、14が敲打器、15・17が磨石、19・20が石皿である。このうち、14・19・20が炉囲いに使用されていた。他は、いずれも覆土からの出土である。

36号住居跡（第12・13・17図）

遺　構　方形周溝群に隣接して検出された。竪穴平面形態は、隅丸方形であるが、やや不定形である。規模は、長径4.39m、短径3.84m、掘り込み面の面積14.32㎡、底面の面積11.56㎡である。ただし、その範囲・形態は、かならずしも明確ではなかった。壁は、全体にゆるやかに立ち上がる。底面南側は一段高く、最低面との比高は6～9㎝を測る。Ｐ１・Ｐ２は、柱穴状ではなく、



第13図　縄文時代早期土器拓影（1/3）

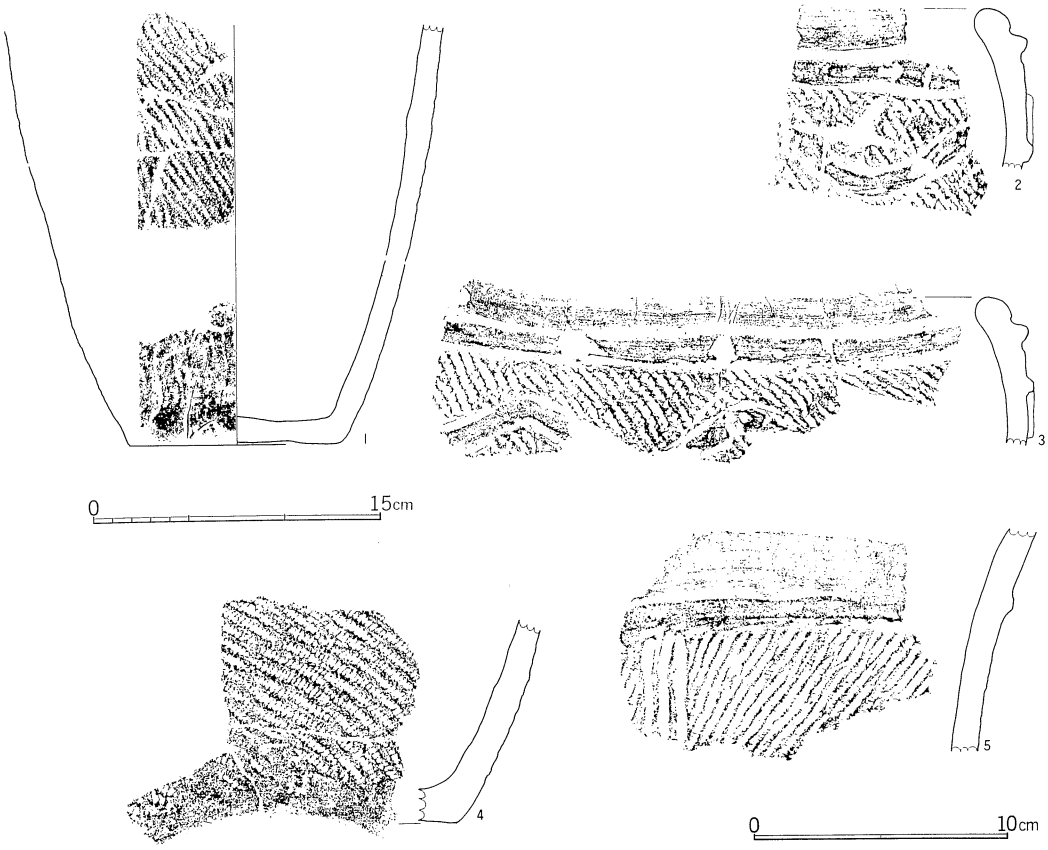
各6cm、10cmを測る。堆積状態は、1・2・4層が明黒褐色土層であり、1層は、ロームをしみ状に混合する。4層は、大小ロームブロックを全体に混合する。3層は、暗黄褐色土層である。炉は検出されず、底面も全体に軟弱で、住居としての痕跡は希薄であった。

遺　物　若干の遺物が検出された。小破片であったが、いずれも撚糸文系土器であった。第13図は、本遺跡より出土した当該期の土器であるが、このうち1・7・12が竪穴覆土中より出土したものであり、他は、本遺構に伴うものではない。ただし、全体量も少なく、分布範囲は確認できなかった。1・2は、原体、施文法が不明確である。また、1は、口縁部が肥厚せず、全体が内弯する。3・4・5は、縄文が口縁部と胴部に分割、施文されたものである。6～14は、撚糸文が施されたものである。全体に条間隔が広い。6～10は、器面が入念に研磨されている。15は、器面の状態が悪く、施文等不明である。

本遺構に伴う石器（第3表）は、第17図—16・18であり、16は、床面より検出された。16は磨石であり、18は、石皿状で、表裏に磨面が認められた。



第14図　37号住居跡（1/80）

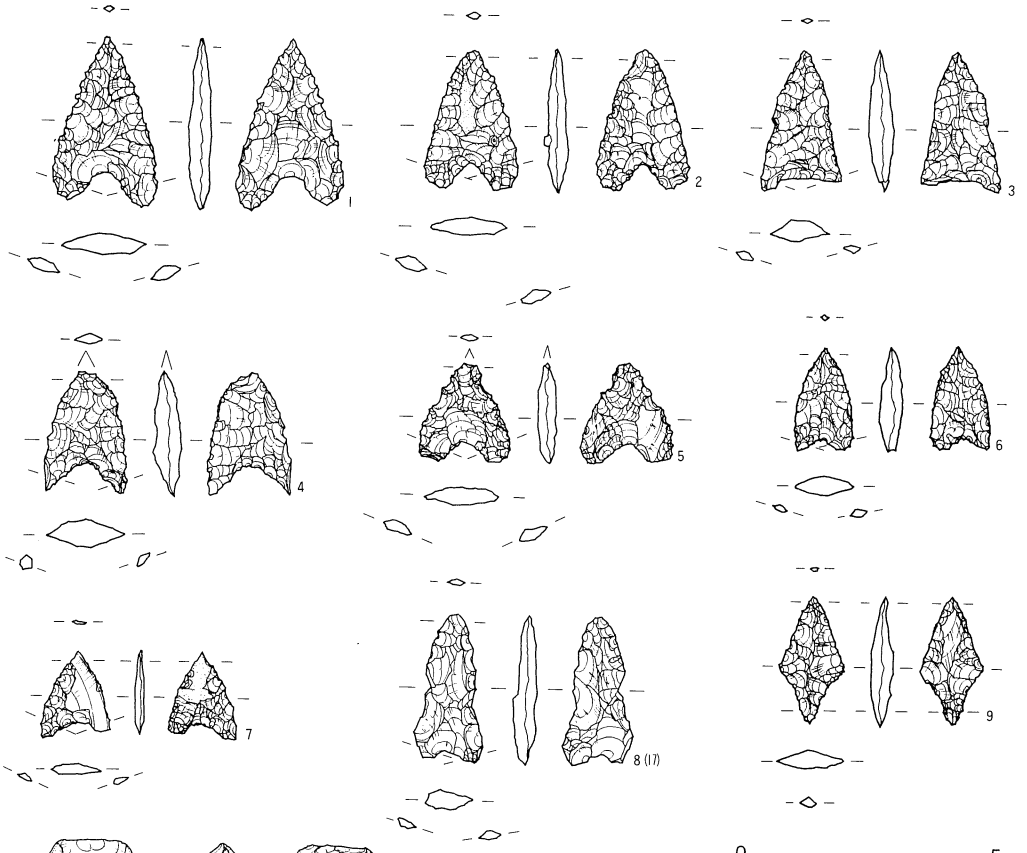


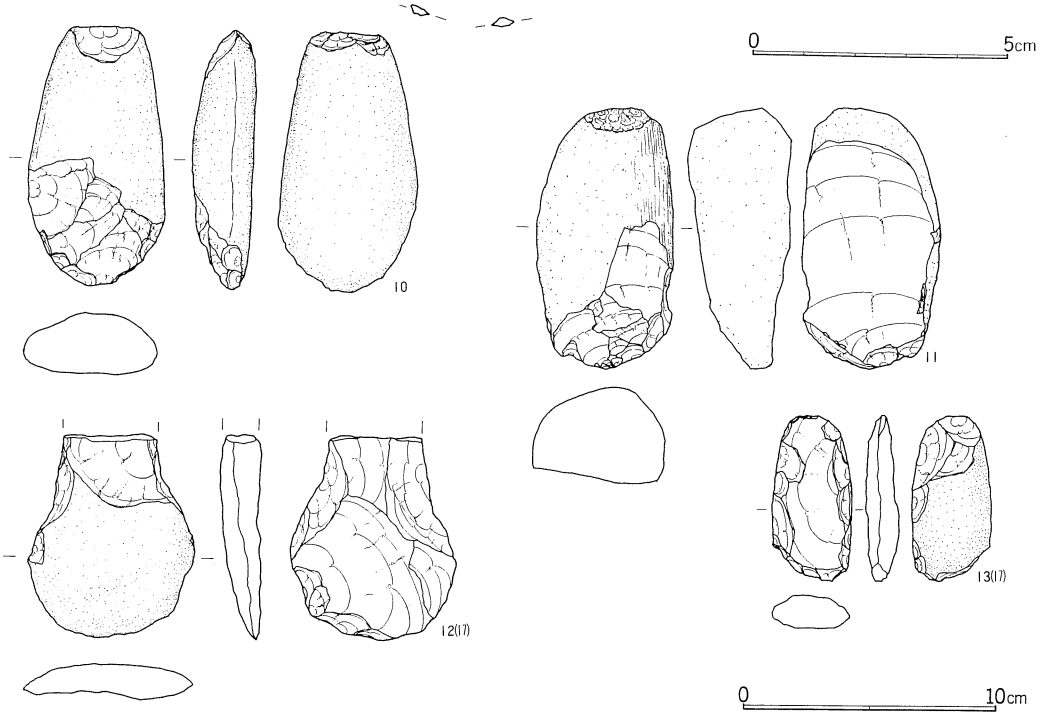
第15図　37号住居跡出土遺物（1/4、1/3）

37号住居跡（第14・15図）

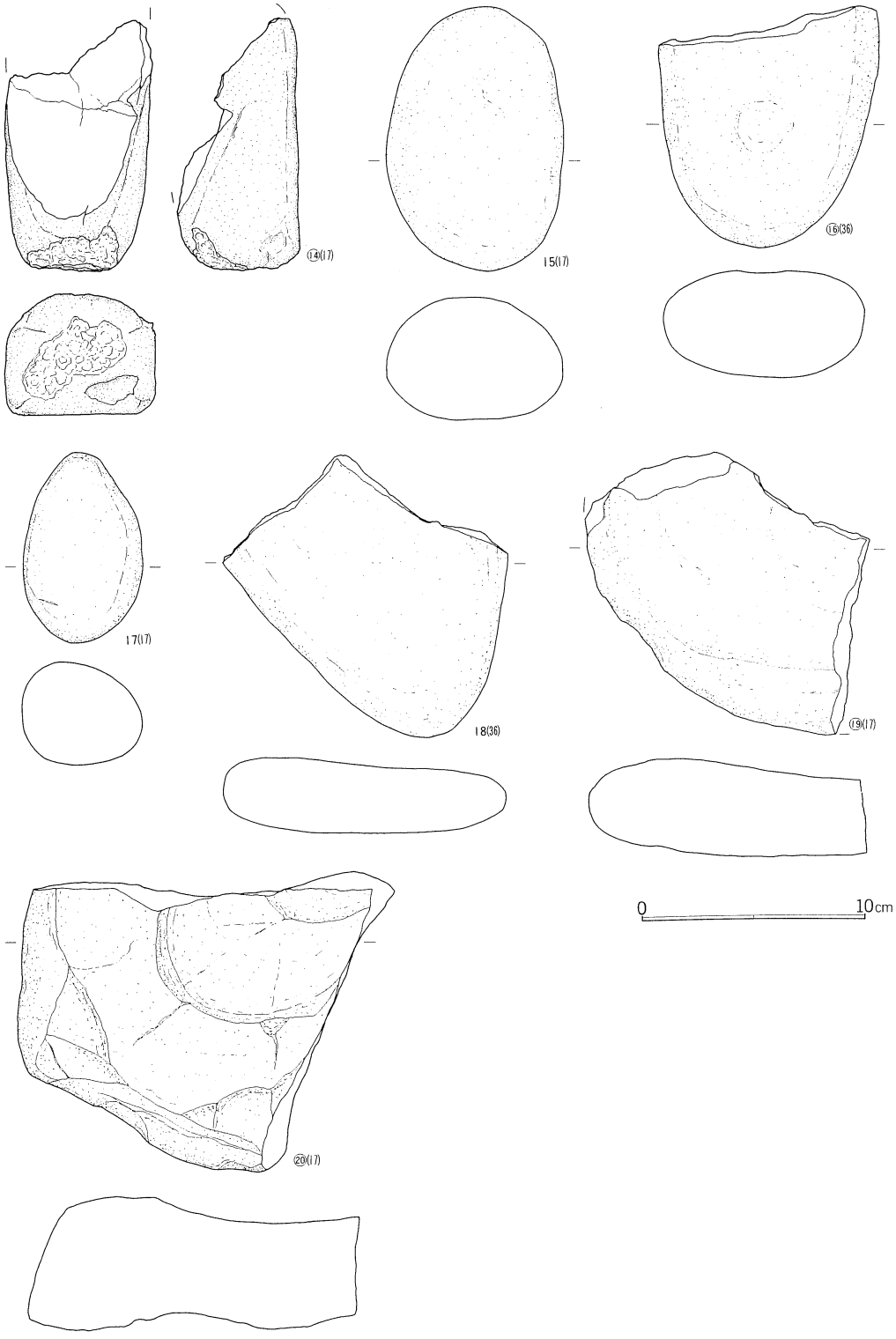
遺　構　この地点は、やや斜面部にあたることもあり、表土層も浅く、その竪穴範囲は明確に確認できる状態ではなかった。床面・炉跡等も検出できなかった。第14図、焼土範囲は、表土下部のものであり、確実に本遺構に伴うものとはいえない。ピットの深さは、Ｐ１が13cm、Ｐ２が19cm、Ｐ３が19cm、Ｐ４が９cm、Ｐ５が19cm、Ｐ６が12cm、Ｐ７が９cm、Ｐ８が10cm、Ｐ９が15cm、Ｐ10が18cm、Ｐ11が25cm、Ｐ12が６cm、Ｐ13が18cm、Ｐ14が13cm、Ｐ15が12cm、Ｐ16が12cm、Ｐ17が13cm、Ｐ18が９cm、Ｐ19が８cm、Ｐ20が20cmである。このうちＰ15には埋設土器が伴う。柱穴は、壁にそって配置されたものと考えられ、これを基準にするならば、竪穴規模は径4.5m程度と考えられる。

遺　物　埋設土器である第15図－１を除き、他は、表土下部、確認面において出土したものである。１は、小破片になり出土した。縄文は、原体RLを縦方向に回転施文したものである。沈線による区画は認められない。２・３は同一個体であると考えられ、口縁部文様帯には、隆帯による波状文を表出している。

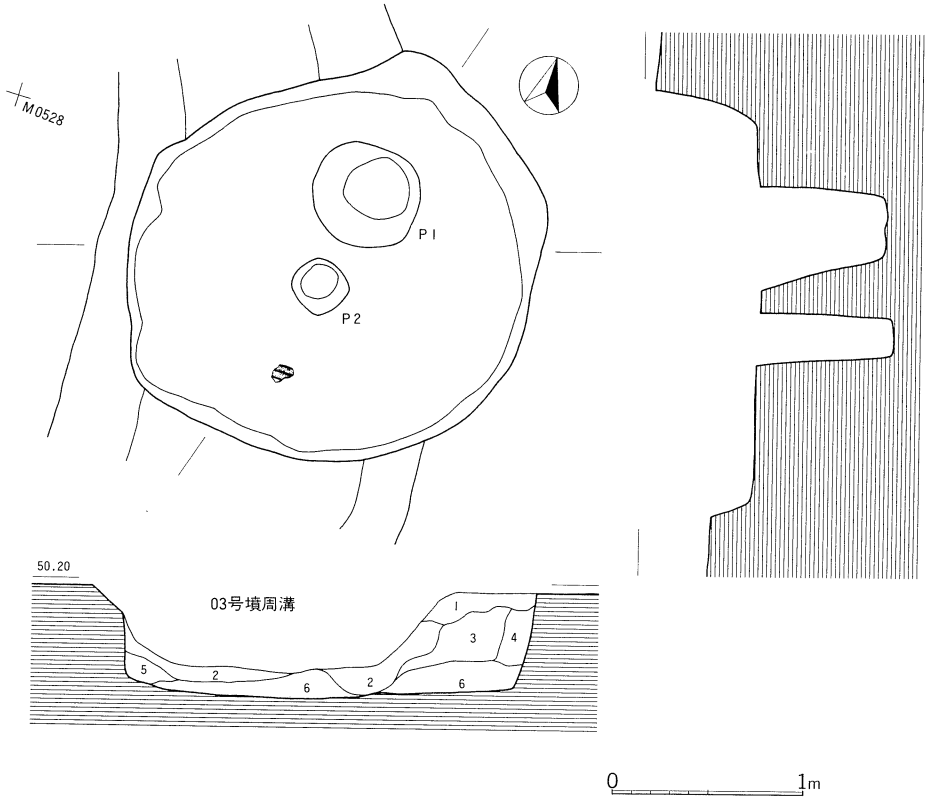




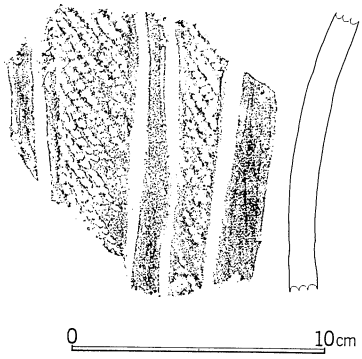
第16図　縄文時代石器(1)（2/3、1/3）



第17図　縄文時代石器(2)（1/3）



第18図　01号小竪穴（1/40）



第19図　01号小竪穴出土遺物（1/3）

(2) 小竪穴

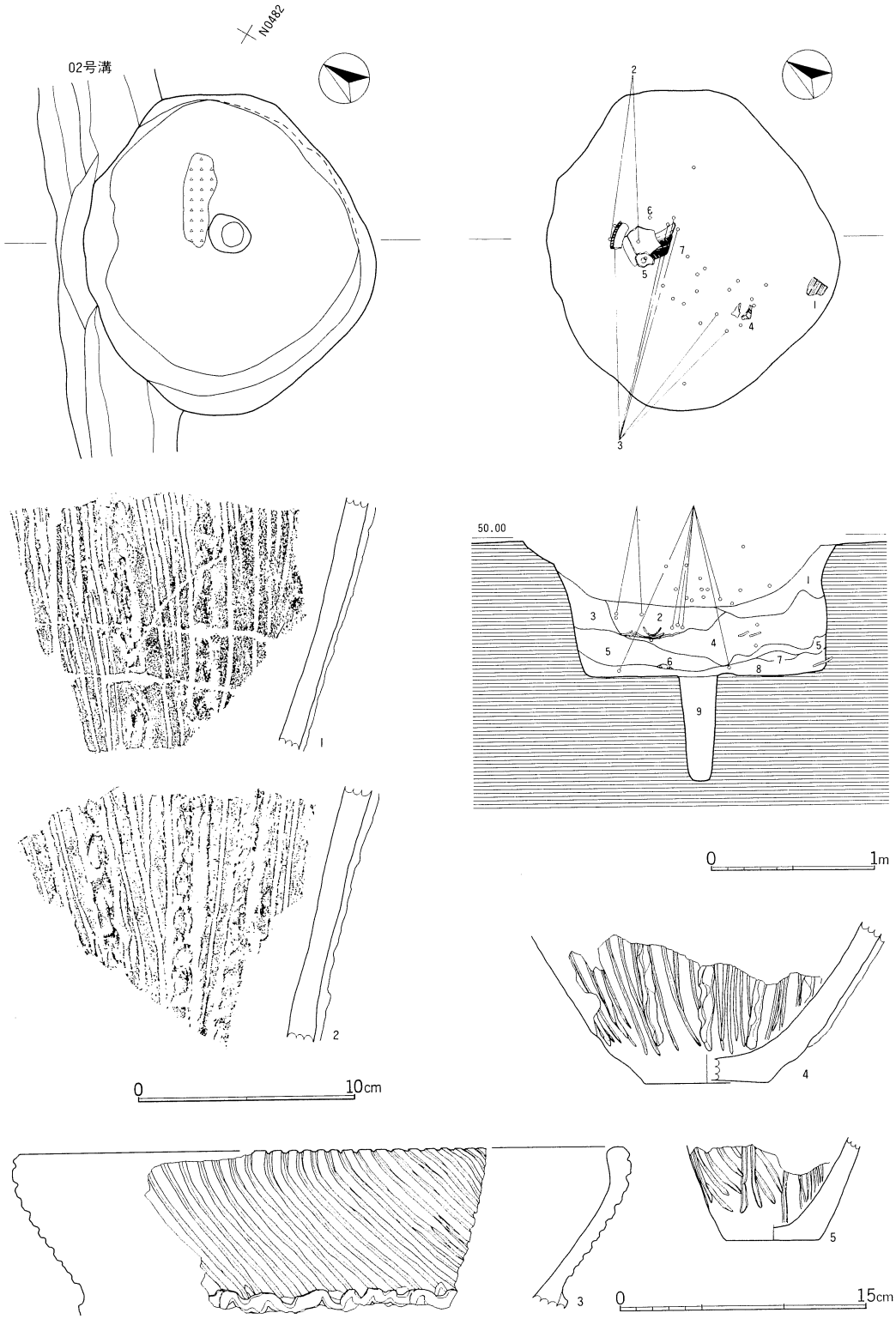
01号小竪穴（第18・19図）

遺　構　03号墳周溝調査時に検出された。竪穴平面形態は、ほぼ円形を呈し、長径2.25m、短径1.98mを測る。深さは、確認面より54cmである。底面は平坦であり、柱穴状のピットが２本検出された。底面よりの深さは、Ｐ１が67cm、Ｐ２が73cmである。堆積土層は、１・３・５層が黒褐色土層、２層が明黒褐色土層、４層が黄褐色土層、６層が暗黄褐色土層である。５・６層は全体に粒状であった。

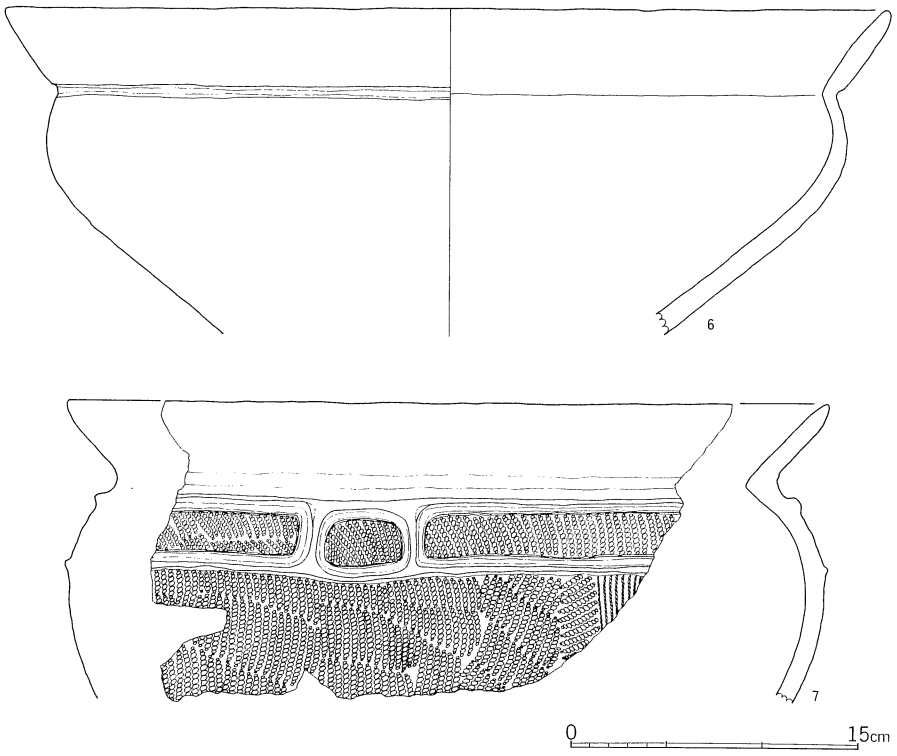
遺　物　１点出土している。出土層位は２層である。

02号小竪穴（第20・21図）

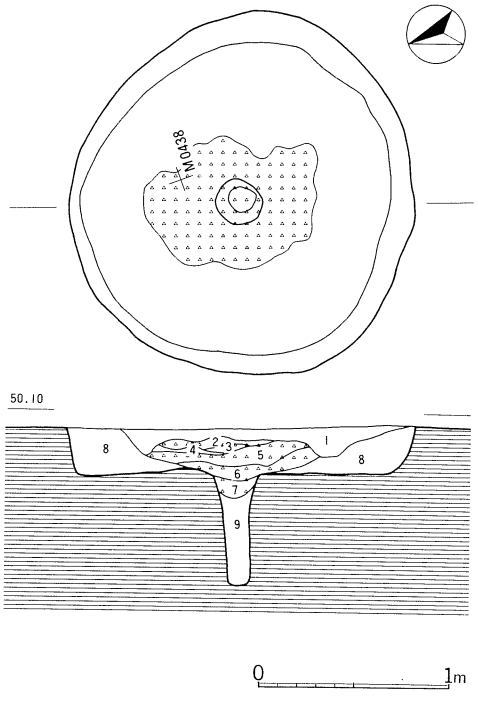
遺　構　02号溝と重複する。竪穴平面形態は、ほぼ円形を呈し、径1.98～1.70mを測る。壁は、ほぼ直線的に立ち上がるが、部分的に内向する。深さは確認面より85cmを測る。底面中央には柱穴状のピットがあり、底面よりの深さは75cmである。土層の堆積は、1・５層が黒褐色土層、２・



第20図　02号小竪穴(1/40)、出土遺物(1)(1/3、1/4)



第21図　02号小竪穴出土遺物(2)（1/4）



第22図　03号小竪穴（1/40）

4・9層が明黒褐色土層であり、9層は、ローム粒を全体に含みボソボソである。3・7・8層は暗黄褐色土層であり、ローム崩落土である。6層は、混貝土層である（第2表）。

遺　物　とくに覆土上層部より出土した。第18図—3など、覆土の上下において接合している個体がある。1・2・3・4は、同一形式であり、平行沈線による条線を地文とし、押捺を加えた隆帯を付加する。5は、沈線文により構成される。6・7は浅鉢形土器である。7は、口縁部は無文とし、体部上半に隆帯によって文様帯を区画する。

03号小竪穴（第22図）

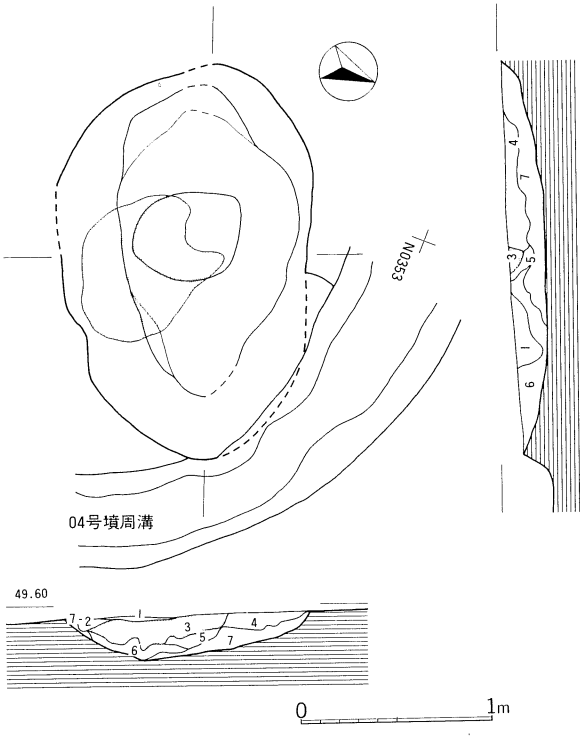
遺　構　17号住居跡に隣接する。竪穴平面形態はほぼ円形を呈し、最大径で1.92mを測る。壁は、確認面より28cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、周縁部がやや深くなる。柱穴状のピットは、底面より深

遺構	02号小竪穴				03号小竪穴			
貝種	点数	%	重量(g)	%	点数	%	重量(g)	%
キサゴ	964	97.18	320	87.67	81002	96.43	27125	77.63
ハマグリ	17	1.71	26	7.12	2485	2.96	6829	19.54
アサリ	1	0.10	2	0.55	152	0.18	652	1.87
ウミニナ	5	0.50	2	0.55	156	0.19	85	0.24
アラムシロ	5	0.50	15	4.11	99	0.12	33	0.09
ヤマトシジミ					3	0.00	11	0.03
バカガイ					4	0.00	4	0.01
オオノガイ					4	0.00	3	0.01
シオフキ					79	0.09	141	0.40
オキシジミ					10	0.01	42	0.12
カキ					2	0.00	8	0.02
ツメタガイ					1	0.00	4	0.01
アカニシ					1	0.00	4	0.01
合計	992	99.99	365	100	83998	99.98	34941	99.98

第2表　貝類等遺骸総出土数

さ59cmを測る。土層は、1層が明黒褐色土層、8層がロームブロックを多量に含む暗黄褐色土層、9層がボソボソの明黒褐色土層、2・7層が混貝土層、3・4・5・6層が純貝層である(第2表)。貝は、竪穴中央部に限定されている。

遺　物　1点も出土していない。



第23図　01号焼土土壙(1/40)

(2)　焼土土壙・集石土壙

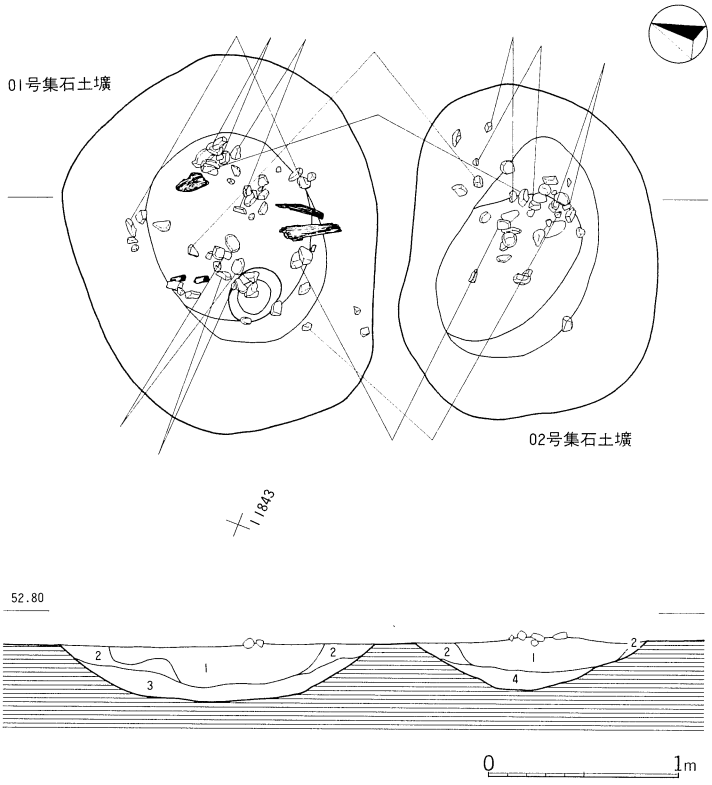
01号焼土土壙(第23図)

遺　構　04号墳と重複する。長径2.08m、短径1.34mの楕円形を呈す。深さは22cmである。堆積土層は、1層が黒褐色土層、2・4・5層が暗黄褐色土層であり、5層は焼土粒を含む。3層が純焼土層、6・7層が黄褐色土層である。炉跡とも考えられるが、面として焼けている部分は認められない。

遺　物　小破片が焼土内より1点出土している。無文部であるが、胎土などから中期の所産と考えられる。

01・02号集石土壙(第24図)

遺　構　01号集石土壙は、長径2.02m、短径1.61m、深さ29cmを測る。02号集石土壙は、長径1.77m、短径1.45m、深さ26cmである。01号集石土壙は、底面西側が5cm程度深くなるが、全体として鍋底状を呈す。土壙内の堆積状態は、1層が焼土粒、炭化粒を含む黒褐色土層、2・3層が暗黄褐色土層、4層が明



第24図　01・02号集石土壙（1/40）

黒褐色土層である。2・3・4層も、若干の焼土粒、炭化粒を含む。礫は、いずれも1層上面にあり、01号集石土壙では、比較的大形の炭化物を含む。礫の密度は散漫であり、いずれも小形である。そのほとんどが焼けており、タール状の付着物が認められるものも若干ある。また、2次的な破損例がみられ、2基間で接合するものもある。

遺　物　遺物は出土していない。石器を転用したと考えられる礫も認められなかった。

(3)　土　　壙

いわゆる落し穴と称されるものを一括する。これは、その形態において分類することができる。

A_a 類　平面形態がほぼ長方形を呈するもの（08・11・12・21・26・34号土壙）。

A_b 類　底面に柱穴状のピットをもつもの（02・29・32号土壙）。

B　類　平面形態がほぼ楕円形を呈すもの（01・05・06・09・14・16・19・20・25・27・28・36号土壙）。

C　類　平面形態がほぼ円形を呈すもの（33号土壙）。

D_{a1}類　底面が幅狭の溝状を呈し、深さがほぼ一定のもの（07・17・30・31・35号土壙）。

D_{a2}類　底面が幅狭の溝状を呈し、中央部が深くなるもの（13号土壙）。

D_{b1}類　底面がやや幅広の溝状を呈し、深さがほぼ一定のもの（10・37・38号土壙）。

D_{b3}類　底面がやや幅広の溝状を呈し、両端部が袋状になるもの（04号土壙）。

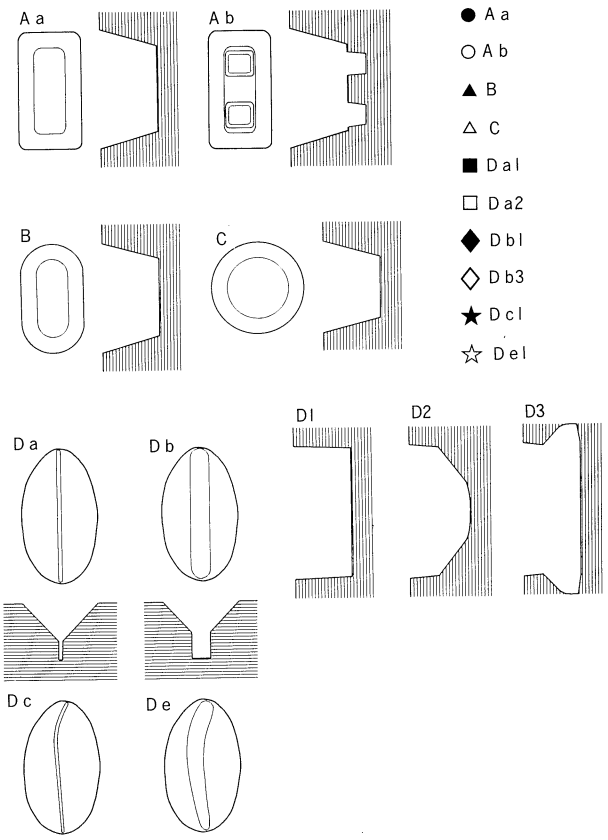
D_{c1}類　底面が幅狭の溝状を呈し、屈曲するもの（15・18・23号土壙）。

D_{e1}類　底面がやや幅広の溝状を呈し、屈曲するもの（03・22・24号土壙）。

分類は、さらに細分することも可能であるが、ここで問題とすることはできない。なお、本遺跡では、下部施設として、小ピットを明確にすることはできなかった。また遺物は出土せずその時期は明確ではない。



第25図　落し穴の分布（1/2000）



第26図　落し穴分類模式図

01号土壙（第27図）

遺　構　01号墳周溝と重複する。長径2.26m、短径1.97m、深さ3.45mを測る。主軸方位はN—88°—Eである。平面は楕円形を呈す。土壙は長軸方向に袋状を呈す。ただし各部に崩落がみられ、本来の断面形は明確ではない。底面はゆるやかに傾斜し、最深部は柱穴状になる。南壁部のピットは、本遺構に伴うものではない。堆積した土層は、3・4・8層が黒褐色土層、2・5・7層が明黒褐色土層、6層が暗黄褐色土層、9層が黄褐色土層であり、1層は、01号墳周溝覆土である。2～9層はしまりがある。以下A層は黄褐色土層、C層は黒褐色土層、B層はその混土層であり、互層に堆積している。A・B・C層は、しまりがなく、粒子が粗く、ボソボソである。

02号土壙（第28図上）

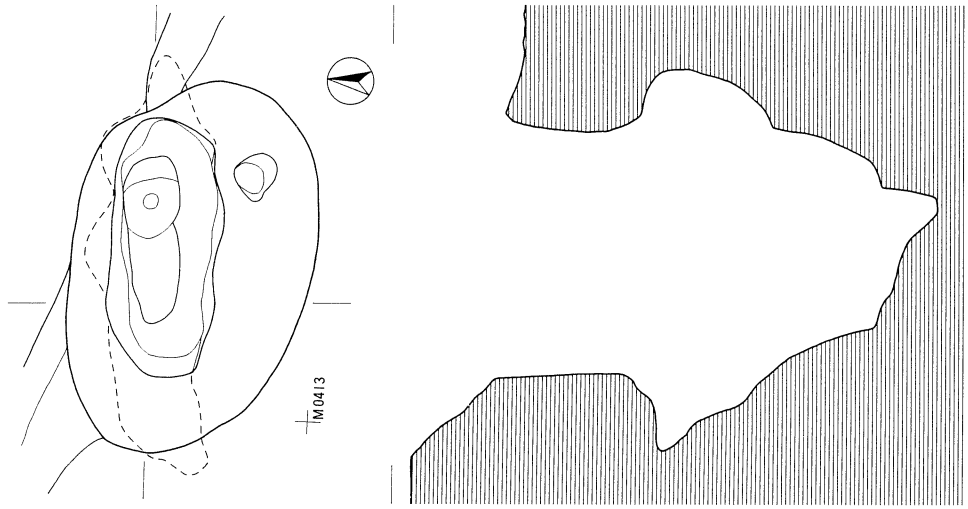
遺　構　長径1.64m、短径1.28m、深さ2.09mを測る。主軸方位はN—76°—Wである。確認面における平面は楕円形を呈す。両側の落ち込みは攪乱部であり、本遺構に伴うものではない。底面はほぼ平坦で、溝状を呈す。

03号土壙（第28図中）

遺　構　長軸2.42m、短軸1.22m、深さ68cmを測る。主軸方位はN—29°—Wである。平面は楕円に近い長方形を呈す。底面には方形の柱穴状のピットがみられる。その覆土は、しまりの強い有機質の黒褐色土層であり、これを掘り方とする小ピットは確認できなかった。ピットの深さは、底面より北側で33cm、南側が38cmを測る。

04号土壙（第28図下）

遺　構　長径2.09m、短径1.30m、深さ1.94mを測る。主軸方位はN—60°—Wである。確認面における平面は不定形な楕円を呈す。内部は、長軸方向に袋状に突出し、2.26mを測る。底面はこれよりゆるやかに傾斜する。土層は、1・6・10層が黒褐色土層、2・4・8・11層が明黒褐色土層、3・7・9・13層が暗黄褐色土層、5層が黄褐色土層、12層が暗灰褐色土層である。2



第27図　01号土壙（1/50）

～4層はしまりが強いのに対して、その以下の各層は、しまりがなく、ボソボソであった。

05号土壙（第29図左）

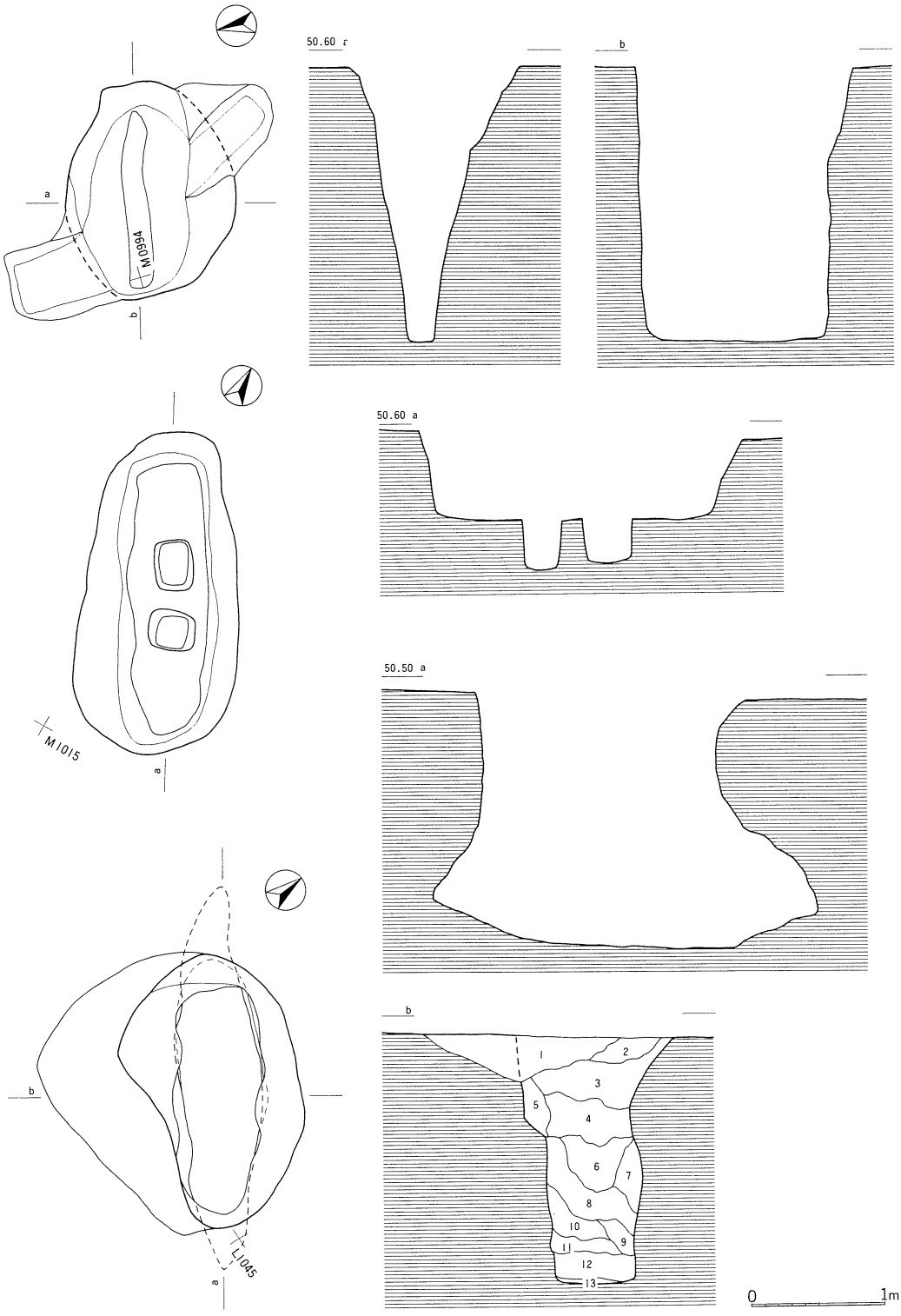
遺　構　長径1.17m、短径81cm、深さ1.86mを測る。主軸方位は、ほぼN—85°—Wである。平面は、確認面、底面とも楕円形を呈す。土層は、2・5層が黒褐色土層、1・3・4・9層が明黒褐色土層、10層が暗黄褐色土層、6・7・8層がローム崩落による黄褐色土層である。とくに7層は、板状に剝落したロームがみられる。

06号土壙（第29図中）

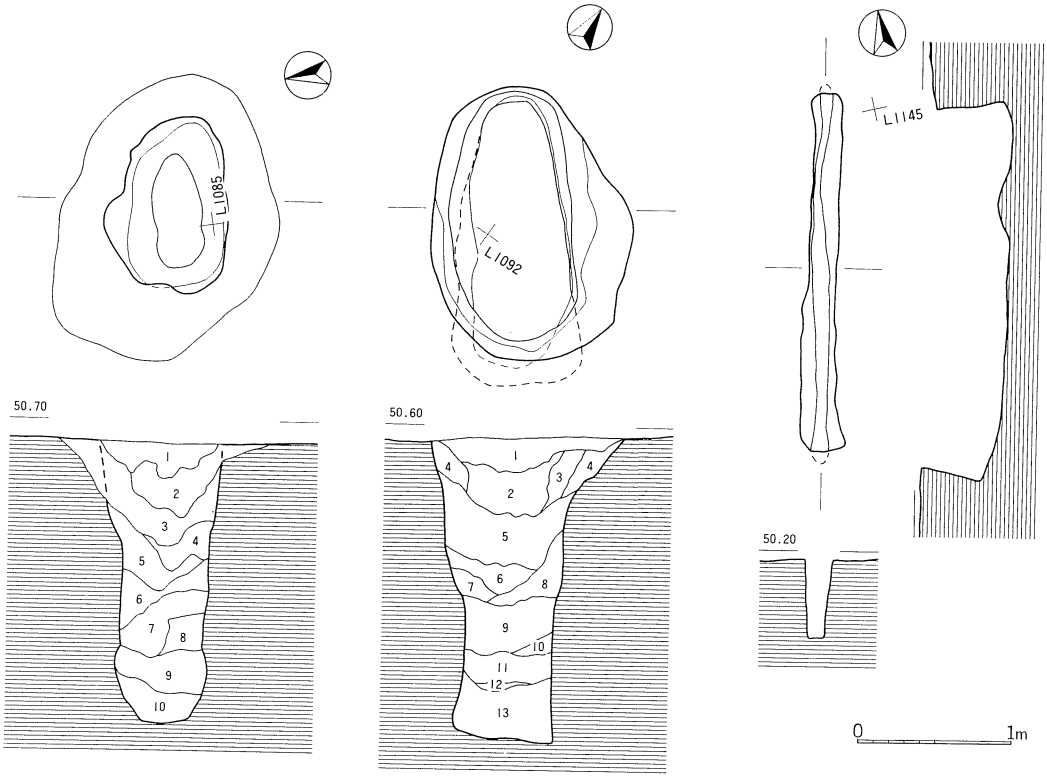
遺　構　長径1.81m、短径1.06m、深さ2.02mを測る。主軸方位はN—41°—Wである。平面は、やや隅のある楕円形を呈す。内部南壁は袋状になる。土層は、2・6層が黒褐色土層、1・5・7・9・12層が明黒褐色土層、3・4・8・10・13層が暗黄褐色土層、11層が黄褐色土層である。1～7層はしまりが強いのに対して、これ以下の各層は、しまりがなく、粒子が全体に粗く、ボソボソであった。

07号土壙（第29図右）

遺　構　18号住居跡の掘り方面調査時に検出された。溝状の底面のみであり、長軸2.36m、幅21cm、深さ住居跡掘り方面より56cmを測る。主軸方位はN—13°—Eである。底面はほぼ平坦であり、両端部はやや内向する。



第28図　02・03・04号土壙（1/50）



第29図　05・06・07号土壙（1/50）

08号土壙（第30図上）

遺　構　長軸2.08m、短軸1.05m、深さ1.01mを測る。主軸方位はN—38°—Wである。平面は、確認面、底面ともほぼ隅丸の長方形を呈す。底面は平坦であるが、南側へやや傾斜する。

09号土壙（第30図中）

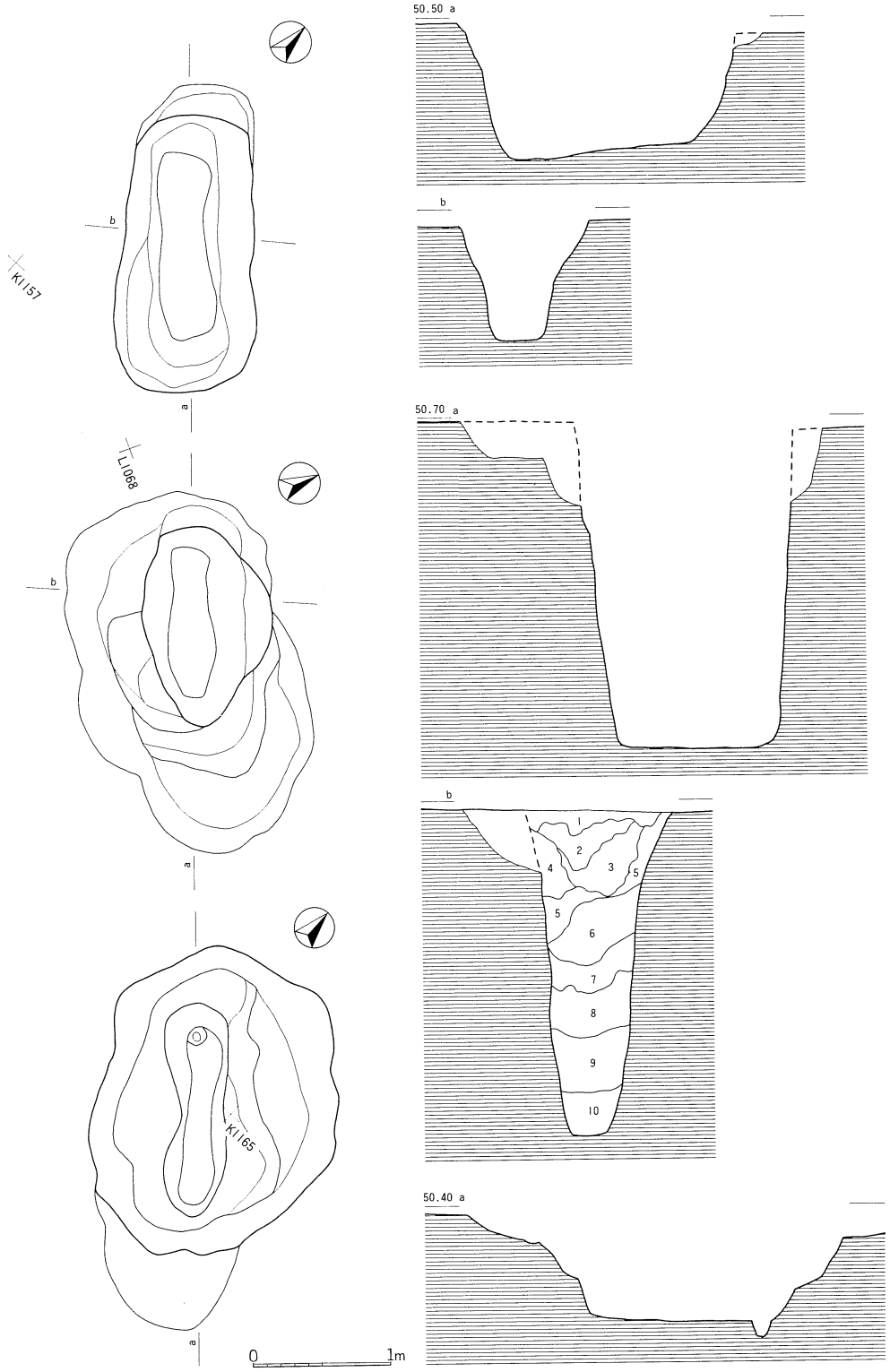
遺　構　長径1.48m、短径96cm、深さ2.45mを測る。主軸方位はN—70°—Wである。平面は、楕円形を呈す。堆積土層は、3・6層が黒褐色土層、1・2・8・10層が明黒褐色土層、5・7・9層が暗黄褐色土層であり、全体にしまりが強い。

10号土壙（第30図下）

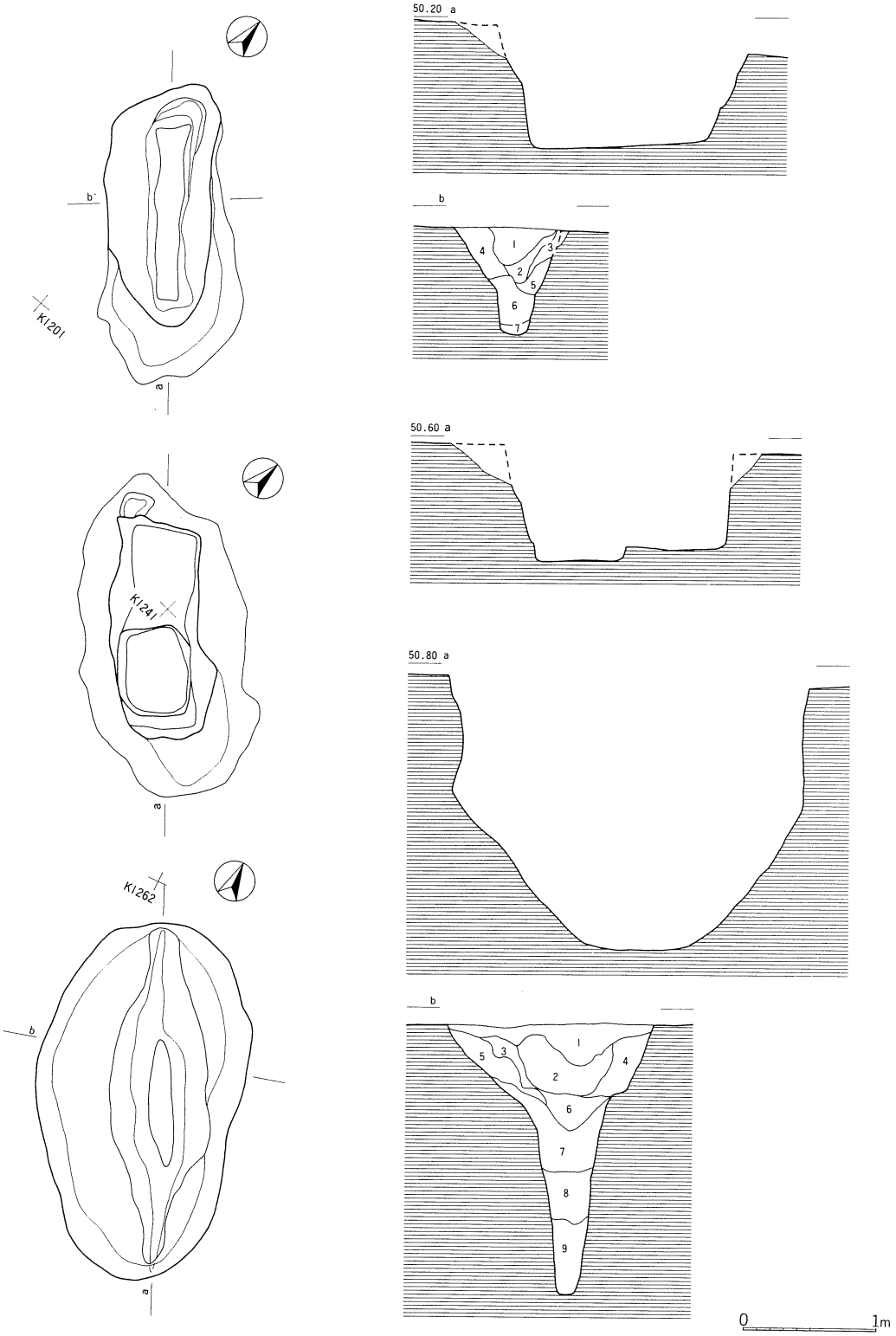
遺　構　長径2.30m、短径1.81m、深さ80cmを測る。主軸方位はN—41°—Wである。平面は、確認面で楕円形を呈す。底面は溝状となり、北端部に小ピットをもつ。ただし深さは浅く、底面より11cmである。

11号土壙（第31図上）

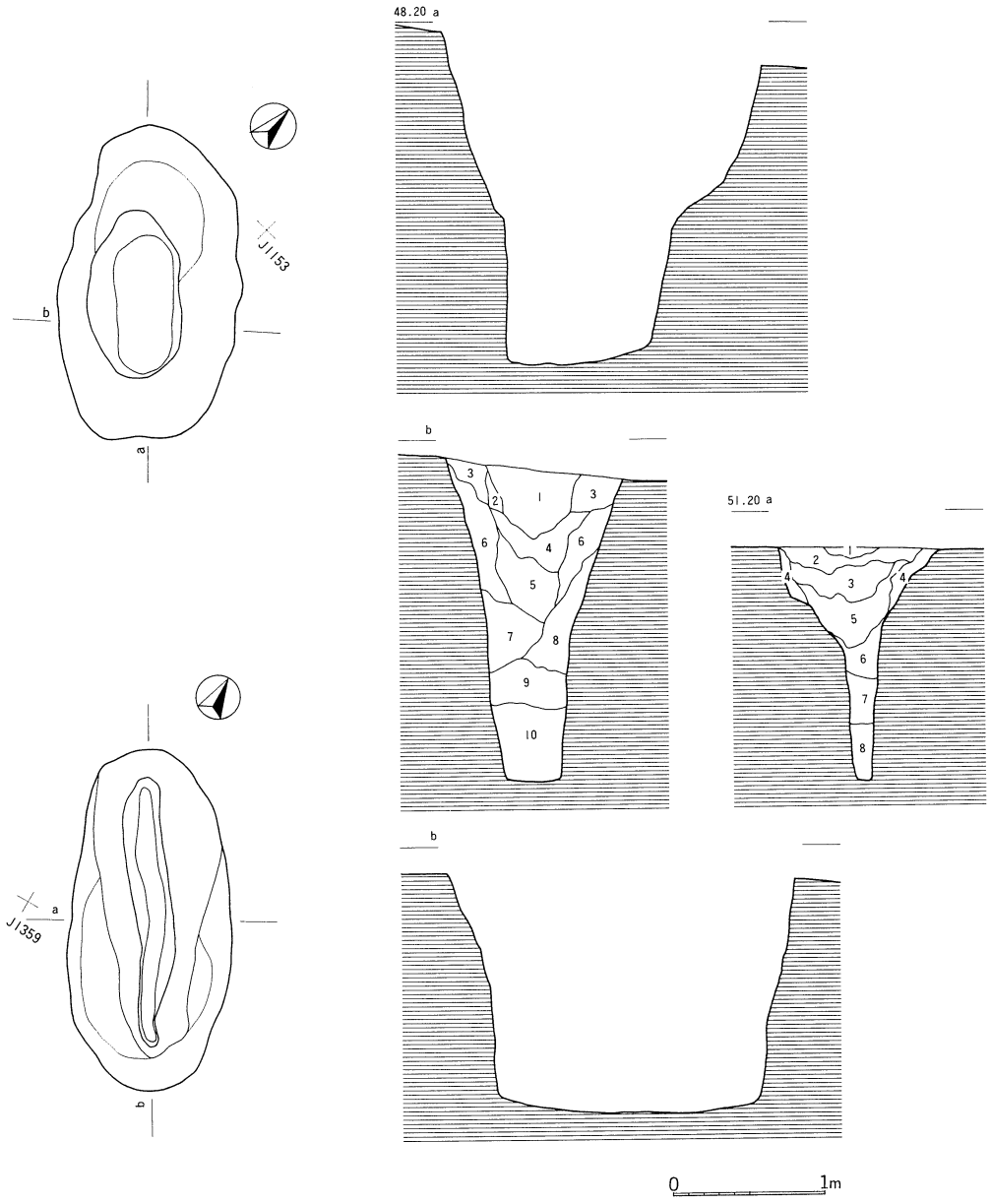
遺　構　長軸1.82m、短軸78cm、深さ97cmを測る。主軸方位はN—40°—Wである。平面は、確認面ではやや不正形であるが、底面は長方形を呈す。堆積土層は、1・2層が黒褐色土層、6層が明黒褐色土層、4・7層が黄褐色土層であり、5・7層がとくにしまりがなく、ボソボソであった。



第30図　08・09・10号土壙（1/50）



第31図　11・12・13号土壙（1/50）



第32図　14・15号土壙（1/50）

12号土壙（第31図中）

遺　構　長軸1.65m、短軸60cmを測る。主軸方位はN—43°—Wである。平面はほぼ長方形を呈す。底面は2段になり、深さは、確認面より、北側で78cm、南側で89cmを測る。

13号土壙（第31図下）

遺　構　長径2.93m、短径1.60m、深さ2.10mを測る。主軸方位はN—24°—Wである。平面は、確認面でほぼ楕円形を呈す。底面は、中央部がややひろがる溝状を呈し、中央から両端にむかっ

て浅くなる。堆積土層は、2・6層が黒褐色土層、1・5層が明黒褐色土層、3・4・7・8・9層が暗黄褐色土層である。7～9層は漸移的であり、基本的にしまりのない同一土層である。

14号土壙（第32図上）

遺　構　長径2.10m、短径1.22m、深さ2.25mを測る。主軸方位はN－45°－Wである。平面は、確認面、底面とも楕円形を呈す。ただし、確認面における平面形に対して底面はせまく、中段にテラスをもつ。土層は、1・4・5層が黒褐色土層であり、2層が黄褐色土層、3・6～10層が暗黄褐色土層である。6層以下の各層は、しまりがなく、粒子も全体に粗い。

15号土壙（第32図下）

遺　構　長径2.29m、短径1.09m、深さ1.62mを測る。主軸方位はN－31°－Wである。平面は、確認面において楕円形を呈す。底面は、溝状になり、屈曲する。堆積土層は、1・5層は黒褐色土層、2層が明黒褐色土層、6層が黄褐色土層、3・4・7・8層が暗黄褐色土層であり、7・8層はしまりがなく、大小のロームブロックを多量に混合する。

16号土壙（第33図上）

遺　構　長径1.58m、短径1.28m、深さ2.02mを測る。主軸方位はN－65°－Wである。平面は楕円形を呈す。土層は、2層が黒褐色土層、1・5・11層が明黒褐色土層、3・4・6～9層が暗黄褐色土層、9層が黄褐色土層である。6層以下の各層は、しまりがなく、その変化も漸移的である。

17号土壙（第33図下）

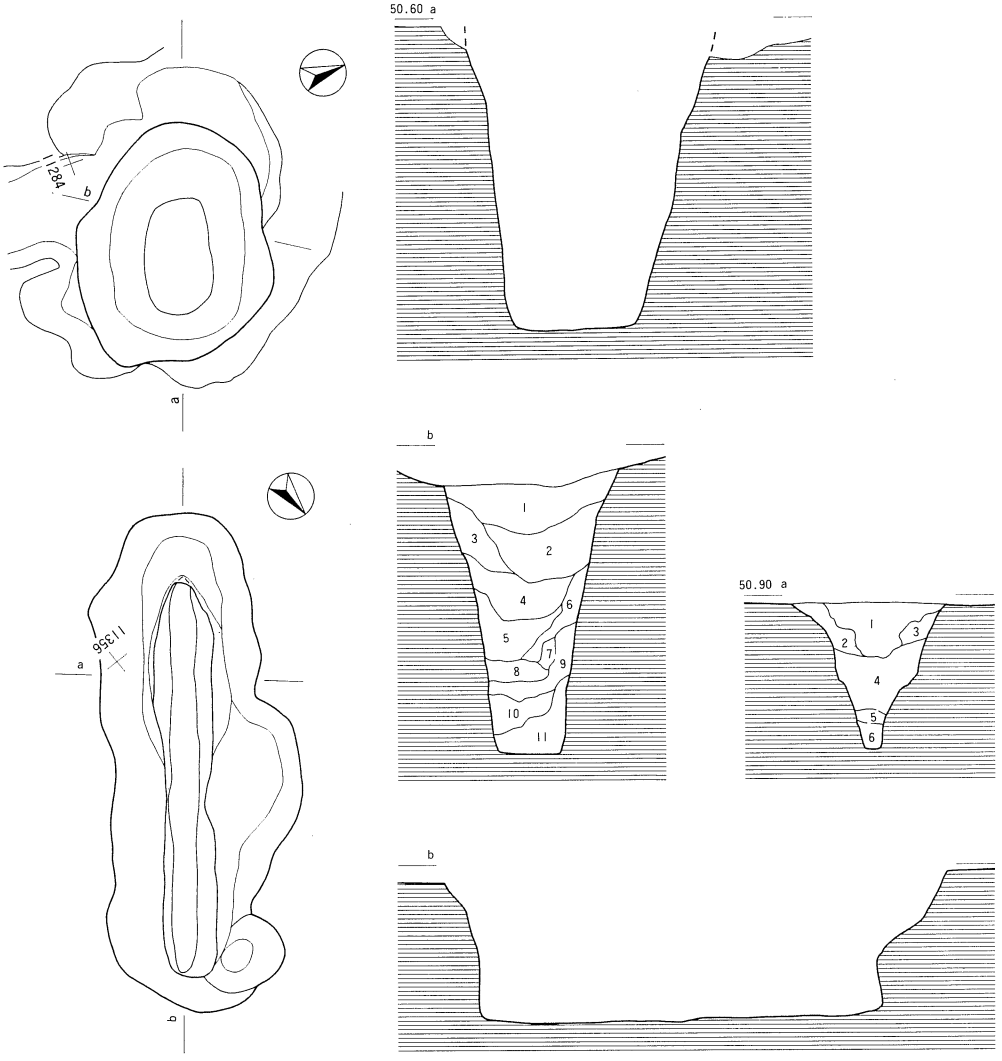
遺　構　長軸3.28m、短軸は最大で1.21m、深さは1.01mである。主軸方位はN－38°－Eである。平面は全体に細長く、底面は溝状になる。北側のピットは、本遺構に伴うものかどうか明らかではない。土層は、1層が明黒褐色土層、2～5層が暗黄褐色土層であり、4・5層はしまりがない。6層は、黒褐色土層であり、粘性・しまりが強い。

18号土壙（第34図上）

遺　構　長軸2.34m、短軸92cm、深さ1.26mを測る。主軸方位はN－47°－Wである。平面は、確認面でやや不定形の楕円を呈す。周縁部のピットは、本遺構に伴うものではない。底面は溝状になり、屈曲する。両端部はやや袋状になる。土層は、2層が黒褐色土層、1・3層は明黒褐色土層、4層が暗黄褐色土層である。全体にしまりが強い。

19号土壙（第34図中）

遺　構　長径1.14m、短径86cm、深さ1.49mを測る。主軸方位はN－2°－Eである。平面は、確認面、底面とも楕円形を呈す。周縁部の落ちこみは掘りすぎである。堆積土層は、1・4層が黒褐色土層、2層が明黒褐色土層、3層が黄褐色土層である。5層以下の各層は、暗黄褐色土層であり、崩落したローム粒・ロームブロックの量により、漸移的な変化をしめす。8・9層がとくにしまりがない。



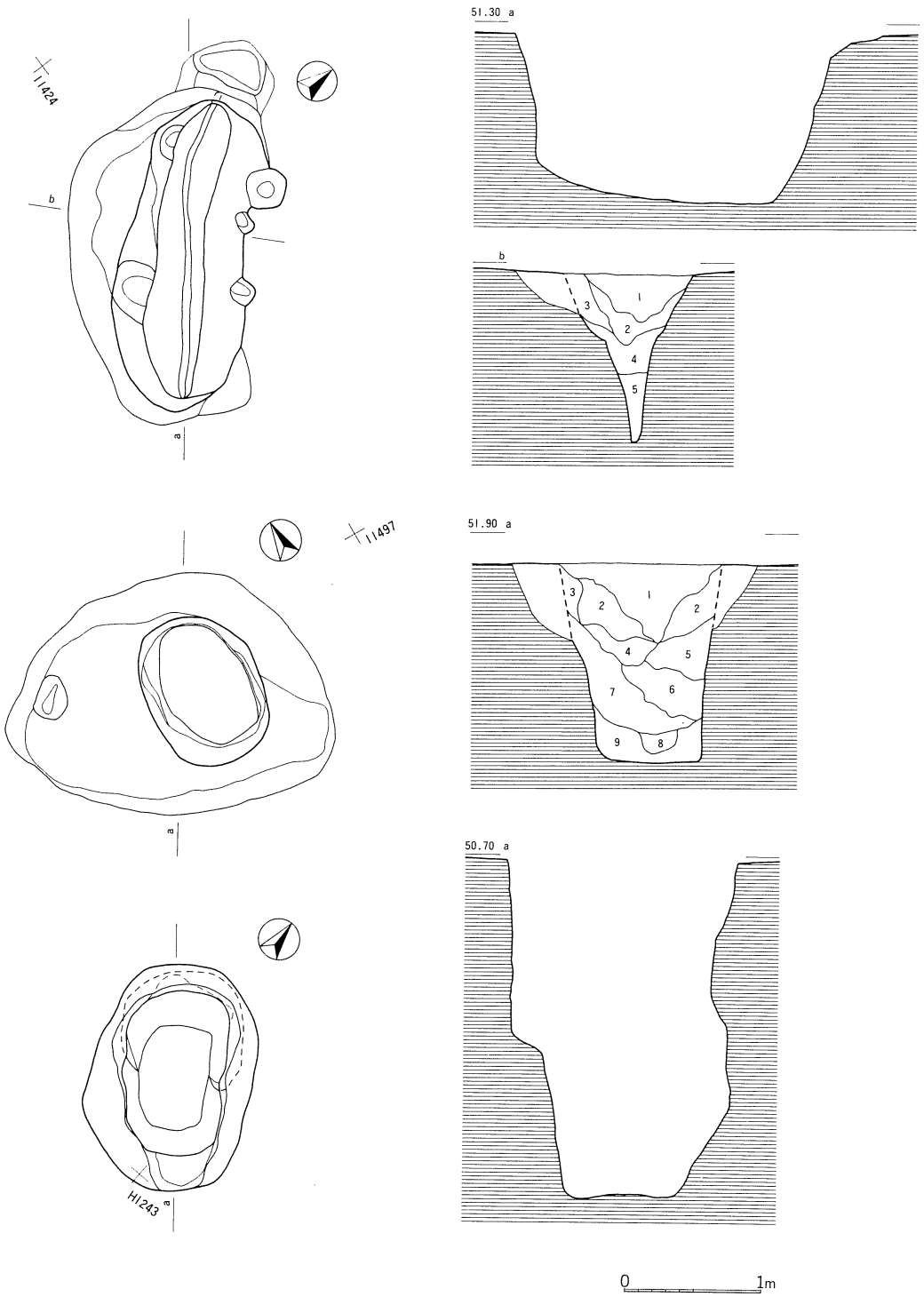
第33図　16・17号土壙（1/50）

20号土壙（第34図下）

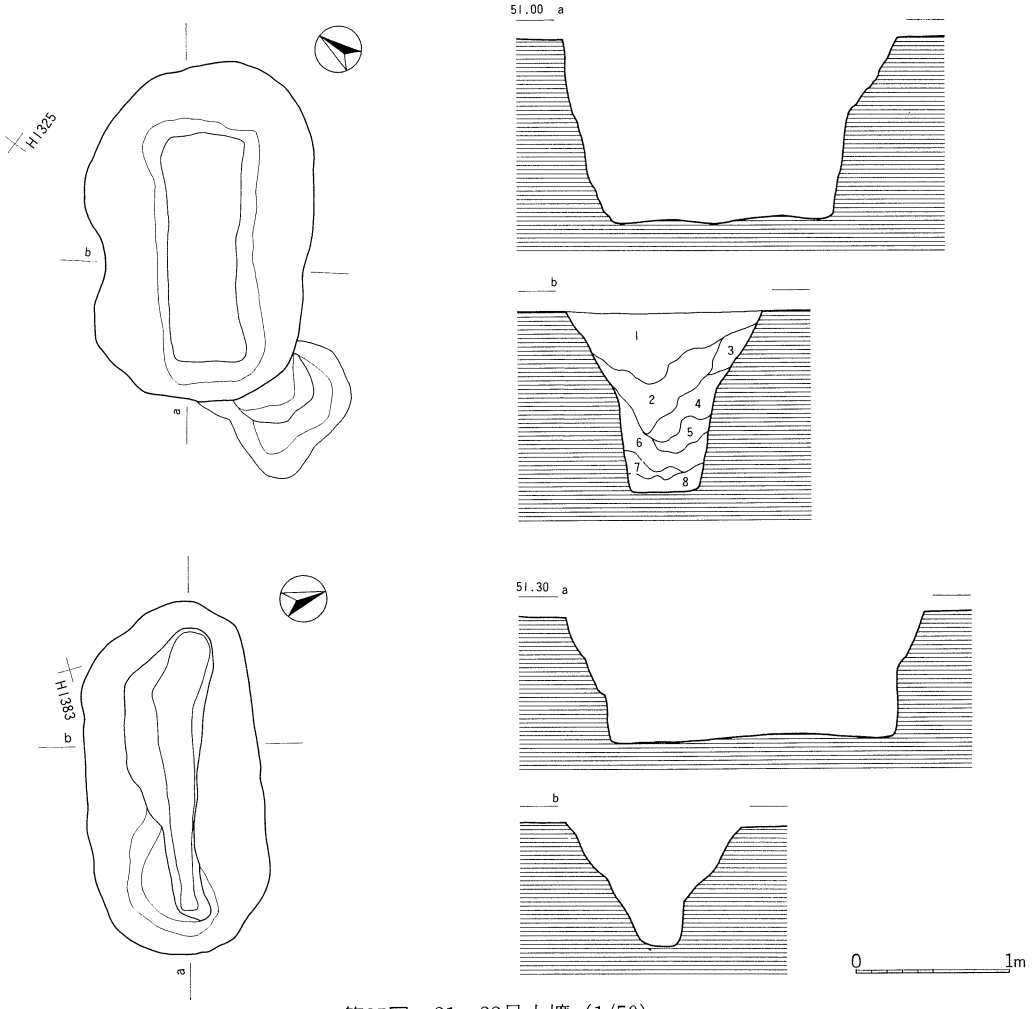
遺　構　長径1.70m、短径1.21m、深さ2.52mを測る。主軸方位はN－31°－Wである。平面は、確認面が楕円形、底面が長方形を呈す。断面は、ロームの崩落により袋状になる。本来の形状は明らかではない。

21号土壙（第35図上）

遺　構　長軸2.22m、短軸1.50m、深さ1.21mを測る。主軸方位はN－38°－Eである。平面は、確認面ではやや不定形であるが、底面では長方形を呈す。南西際の落ち込みは、本遺構に伴うものではない。堆積土層は、1層が明黒褐色土層、2層が黒褐色土層、5層が黄褐色土層、3・4・



第34図　18・19・20号土壙（1/50）



第35図　21・22号土壙（1/50）

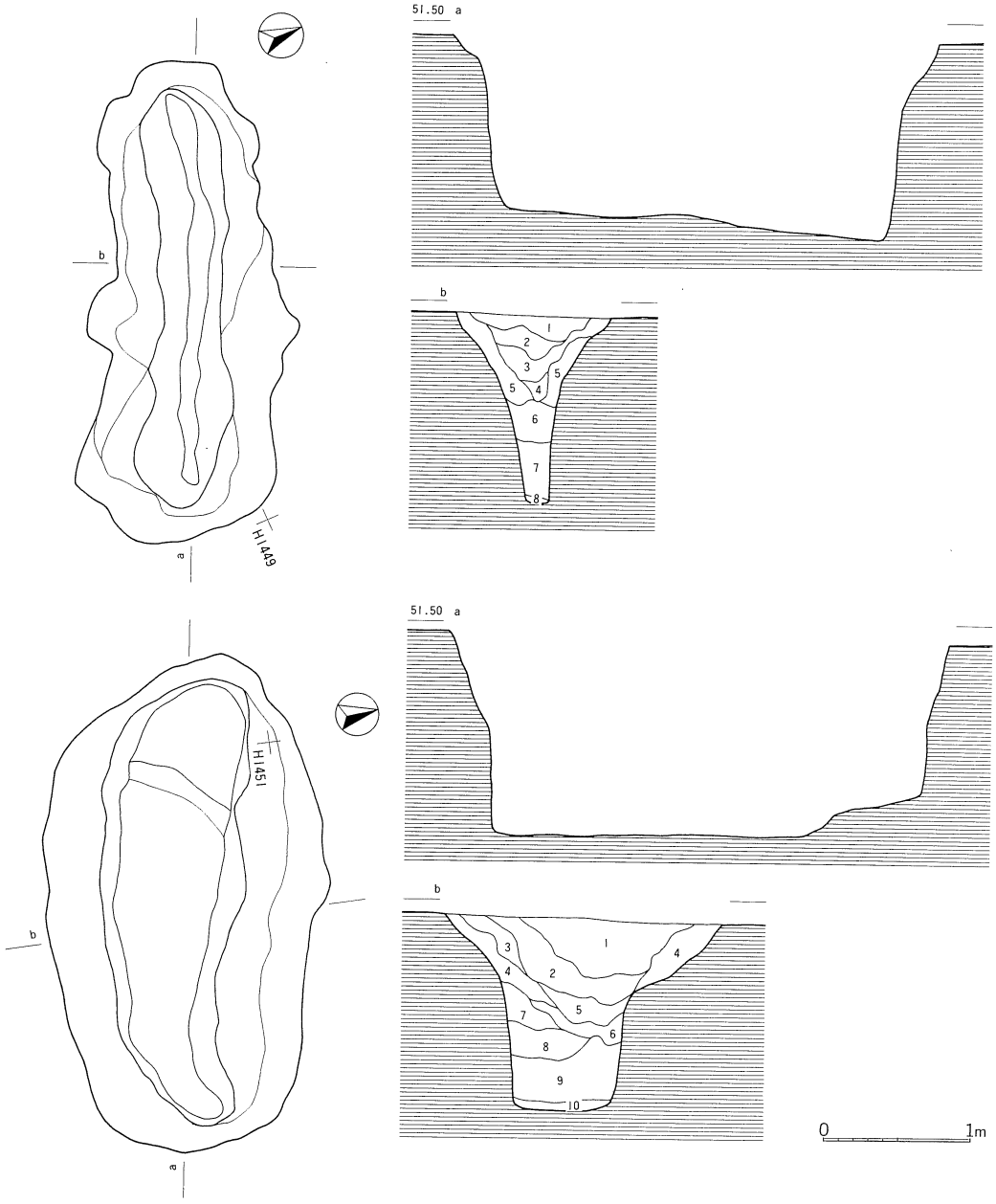
6～8層が暗黄褐色土層である。このうち、とくに4・7層はしまりがなく、全体に粒状であった。

22号土壙（第35図下）

遺　構　長径2.32m、短径1.17m、深さ87cmを測る。主軸方位はN－75°－Wである。平面は、確認面で楕円形を呈す。底面は溝状であり、西側でひろくなり屈曲する。東側は、中段でややテラス状になる。

23号土壙（第36図上）

遺　構　長軸3.29m、短軸1.06m、深さ1.41mを測る。主軸方位はN－66°－Wである。平面は、全体に細長く、ゆるやかに屈曲する。底面はほぼ平坦であるが、西側がやや深くなる。堆積土層は、1・4層が明黒褐色土層であり、2・3・6・7層が暗黄褐色土層、5層が黄褐色土層である。底面上の8層は黒褐色土層であり、しまりがなく、ローム粒を混合し粒状であった。



第36図　23・24号土壙（1/50）

24号土壙（第36図下）

遺　構　長径3.41m、短径1.94m、深さ1.34mを測る。主軸方位はN—81°—Wである。平面は、確認面でほぼ楕円形を呈す。底面は屈曲し、西側がひろくなる。また西側は、1段高くなり、底面との比高は21cmを測る。土層は、2・5層が黒褐色土層、1・10層が明黒褐色土層、4層が黄褐色土層、3・6～9層が暗黄褐色土層である。

25号土壙（第37図左上）

遺　物　長径1.69m、短径1.28m、深さ2.58mを測る。主軸方位はN－42°－Wである。平面は、確認面、底面とも楕円形を呈す。内部は崩落により、部分的に袋状になる。土層は、2層が黒褐色土層、1・3・5層が明黒褐色土層、4層が黄褐色土層、6～9層が暗黄褐色土層である。下部は図面を作成することができなかった。

26号土壙（第37図右上）

遺　物　長軸2.62m、短軸1.17mを測る。主軸方位はN－17°－Wである。平面は、確認面で不定形であるが、中段は長方形を呈す。その長軸は1.83m、短軸は68cmである。内側部が本来の形状を示す可能性がある。深さは、中段まで62cm、確認面から底面まで1.30mを測る。土層は、4層が黒褐色土層、1・8層が明黒褐色土層、2・6・7層が暗黄褐色土層、3・5層が黄褐色土層である。

27号土壙（第37図左下）

遺　構　長径1.38m、短径1.05m、深さ1.58mを測る。主軸方位はN－61°－Wである。平面は、確認面で楕円形を呈す。内部は、底面直上で若干袋状になる。また各部で崩落がみられる。

28号土壙（第37図右下）

遺　構　長径2.30m、短径1.86m、深さ2.04mを測る。主軸方位はN－63°－Wである。平面は、確認面、底面ともほぼ楕円形を呈す。ただし底面は、部分的に段をもち、最深部は不定形である。各部に崩落がみられ、本来の断面形は不明確である。ただし袋状になる可能性がある。

29号土壙（第38図上）

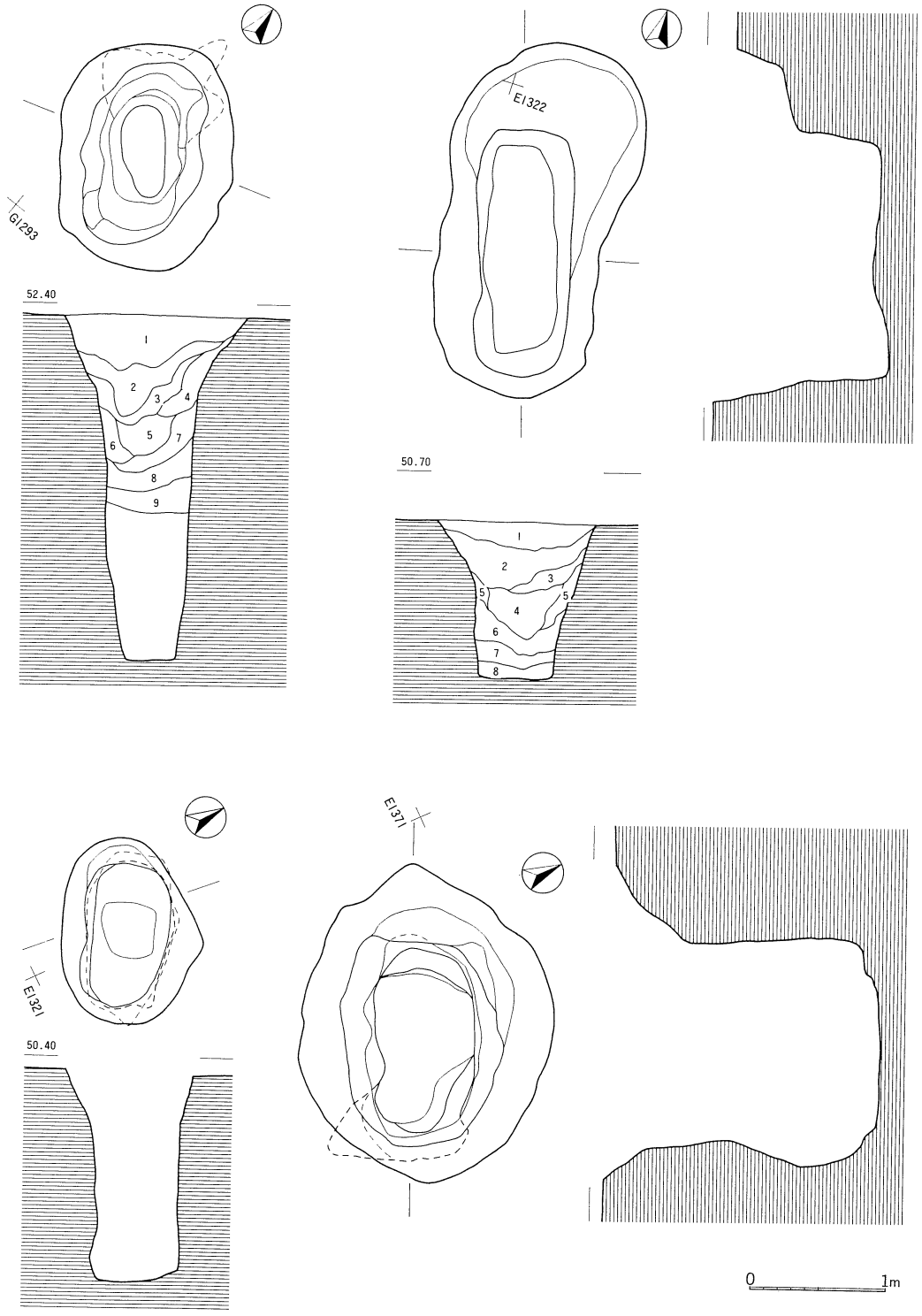
遺　物　長径1.78m、短径1.41mを測る。主軸方位はN－48°－Wである。平面は、確認面で楕円形を呈す。ただし、内側部分が、本来の形状を示すものと考えられる。その規模は、長軸で1.25m、短軸で60cmである。中央底面までの深さは89cmであり、底面には柱穴状のピットがみられる。その深さは、確認面より、西側で1.28m、東側で1.29mを測る。これを掘り方とする小ピットは検出されなかった。土層は、2層が黒褐色土層、1・5層が明黒褐色土層、3・4・6～8層が暗黄褐色土層である。

30号土壙（第38図下）

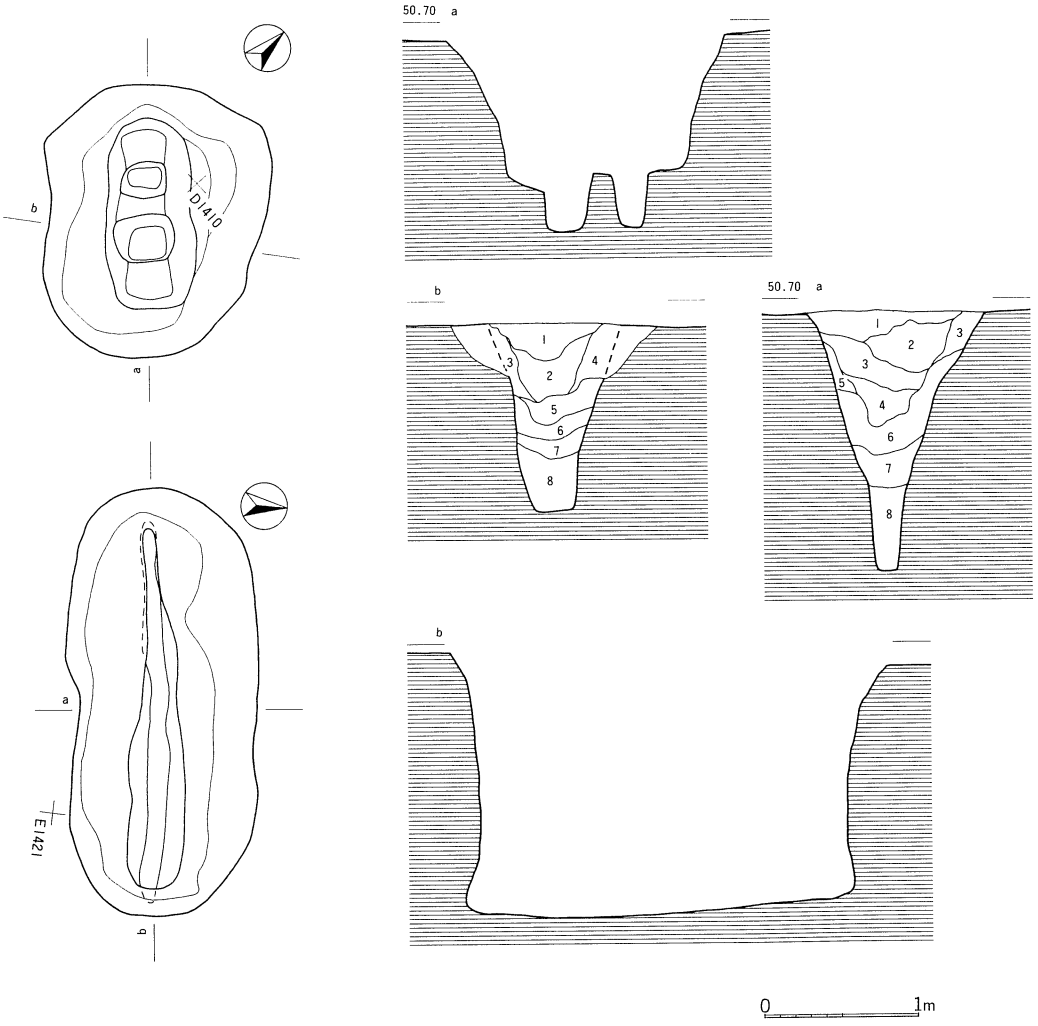
遺　構　長軸2.86m、短軸1.26m、深さ1.76mを測る。主軸方位はN－80°－Eである。平面は、確認面で長い楕円形を呈す。底部は溝状を呈し、両端は袋状になる。土層は、4層が黒褐色土層、1～3層が明黒褐色土層、5層が黄褐色土層、6～8層が暗黄褐色土層である。6～8層はしまりがなく、全体に粒状であった。

31号土壙（第39図上）

遺　構　長径2.41m、短径1.53m、深さ2.18mを測る。主軸方位はN－61°－Wである。平面は、確認面において楕円形を呈し、底面は溝状になる。底面はほぼ平坦で、両端部がやや袋状になる。



第37図　25・26・27・28 号土壙（1/50）



第38図　29・30号土壙（1/50）

土層は、3層が黒褐色土層、1・2・5層が明黒褐色土層、7層が黄褐色土層、4・6・8・9層が暗黄褐色土層であり、7～9層はしまりがなく、ボソボソある。

32号土壙（第39図左下）

遺　構　長軸2.04m、短軸1.04m、深さ56cmを測る。主軸方位はN—73°—Wである。底面には、方形の柱穴状のピットがみられる。土層は、1・3・6層が黒褐色土層、2・4・5層が暗黄褐色土層である。ピット内6層は、しまり、粘性があり、これを掘り方とする小ピットは検出することができなかった。東側壁際のピットは、01号住居跡出入口施設である。

33号土壙（第39図右下）

遺　構　径1.57～1.49m、深さ2.14mを測る。平面は、確認面、底面ともほぼ円形を呈す。堆積土層は、2・4層が黒褐色土層、1・3層が明黒褐色土層、5層が暗黄褐色土層であり、1～5

層は硬質である。以下A層は黄褐色土層、C層は黒褐色土層、B層はその混土層であり、しまりがなく、粒子が粗く、ボソボソである。

34号土壙（第40図上）

遺　構　長軸1.99m、短軸1.21m、深さ1.44mを測る。主軸方位はN—18°—Eである。平面はほぼ長方形を呈す。土層は、1・4層が黒褐色土層、2層が明黒褐色土層、3・5・7層が暗黄褐色土層、6層が黄褐色土層であり、5～7層はしまりがない。

35号土壙（第41図中）

遺　構　長径3.40m、短径1.63m、深さ2.74mを測る。主軸方位はN—34°—Wである。平面は、確認面で楕円形を呈し、底面が溝状になる。底面両端部は袋状になる。壁は、崩落により凹凸がはげしい。土層は、2層が黒褐色土層、1・3層が明黒褐色土層、4層が暗黄褐色土層、5層が黄褐色土層であり、1～5層はしまりが強い。以下A層は黄褐色土層、C層は黒褐色土層、B層はその混土層であり、互層に堆積している。A・B・C層は、しまりがなく、粒子が粗くボソボソである。ただし、きわめて硬質の暗灰褐色土層である6層を間層とする。

36号土壙（第41図下）

遺　構　長径1.81m、短径1.07m、深さ77cmを測る。主軸方位はN—27°—Wである。平面は、確認面、底面ともほぼ楕円形を呈す。土層は、1層が明黒褐色土層、2層が黒褐色土層、3層が黄褐色土層、4層が暗黄褐色土層であり、いずれも比較的硬質であった。

37号土壙（第42図左上）

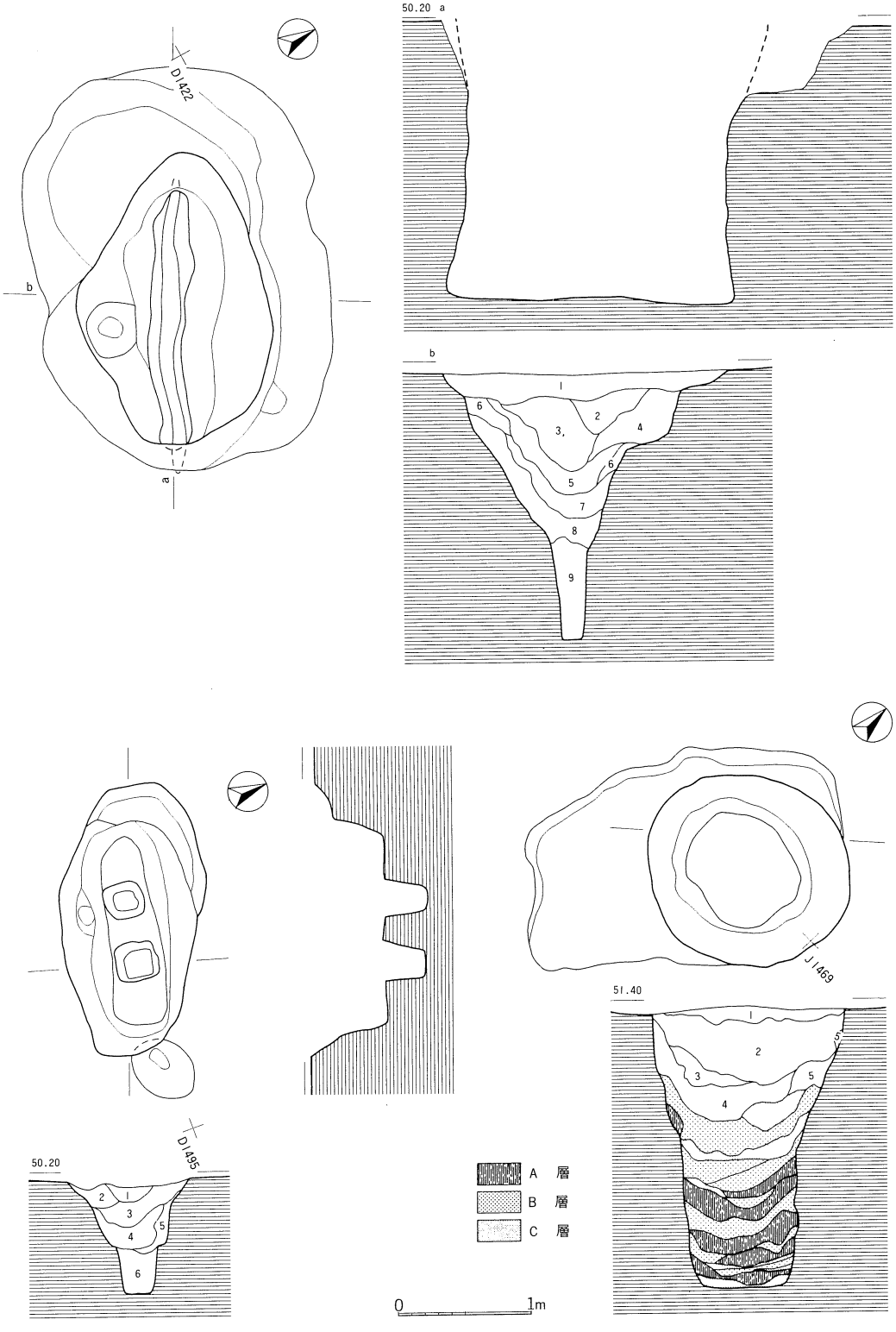
遺　構　長軸2.31m、短軸1.17m、深さ1.07mを測る。主軸方位はN—9°—Wである。平面は、確認面でややとがった楕円形を呈し、底面は溝状となる。土層は、1層が黒褐色土層、2・3層が明黒褐色土層、4・5層が暗黄褐色土層である。

38号土壙（第42図下）

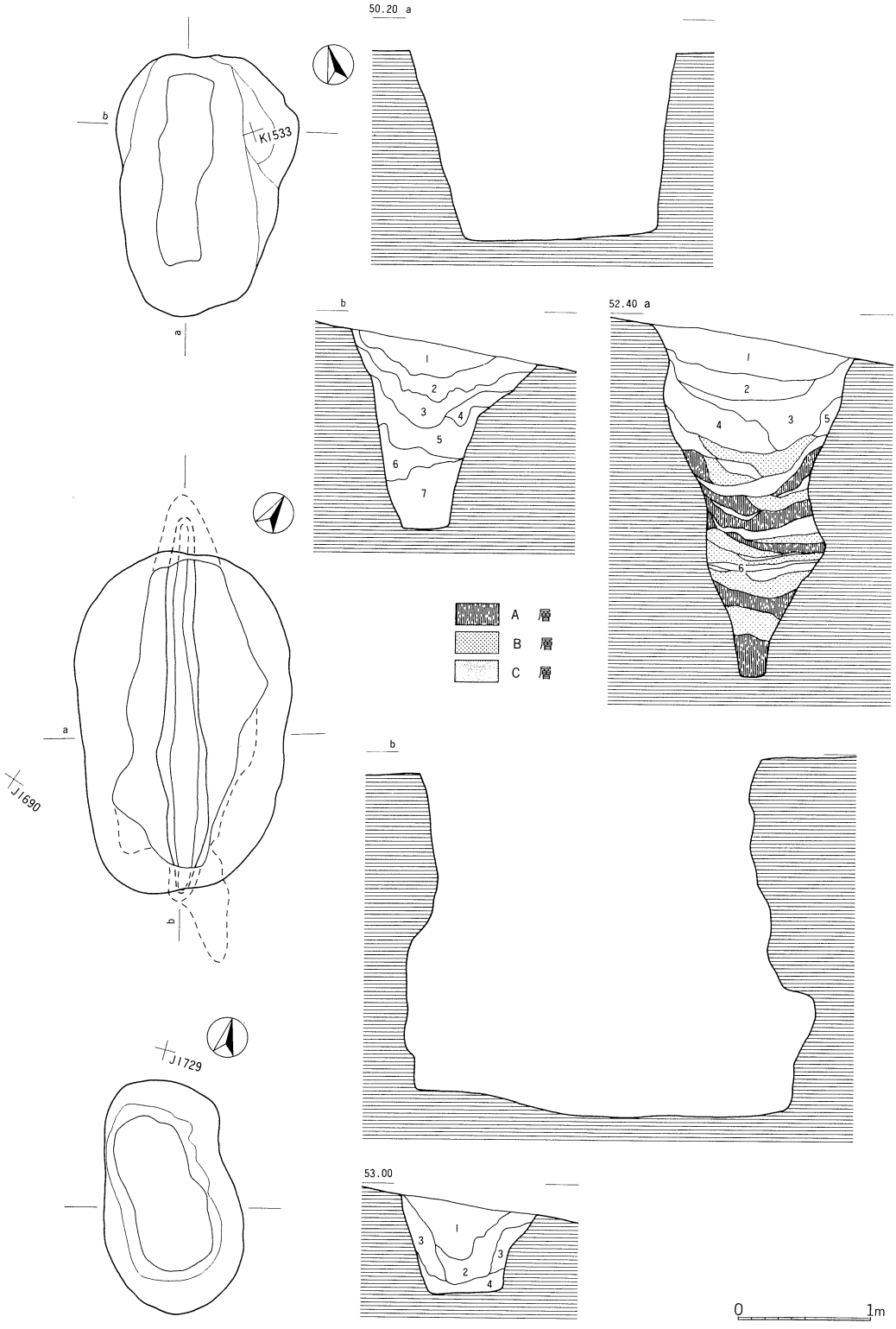
遺　構　長径2.79m、短径1.64m、深さ1.85mを測る。主軸方位はN—62°—Wである。平面は、確認面で楕円形を呈し、底面は中央部がややひろがる溝状である。5・17層が黒褐色土層、1・3・4・9・11層が明黒褐色土層、2・6・7・8・14層が暗黄褐色土層、10・12・13・15・16層が黄褐色土層である。1～7層はしまりがあり、以下の各層は粒状でボソボソであった。ただし17層は粘質で、しまりがある。また12層は、崩落した板状のロームが多量に混合する。

39号土壙（第42図右上）

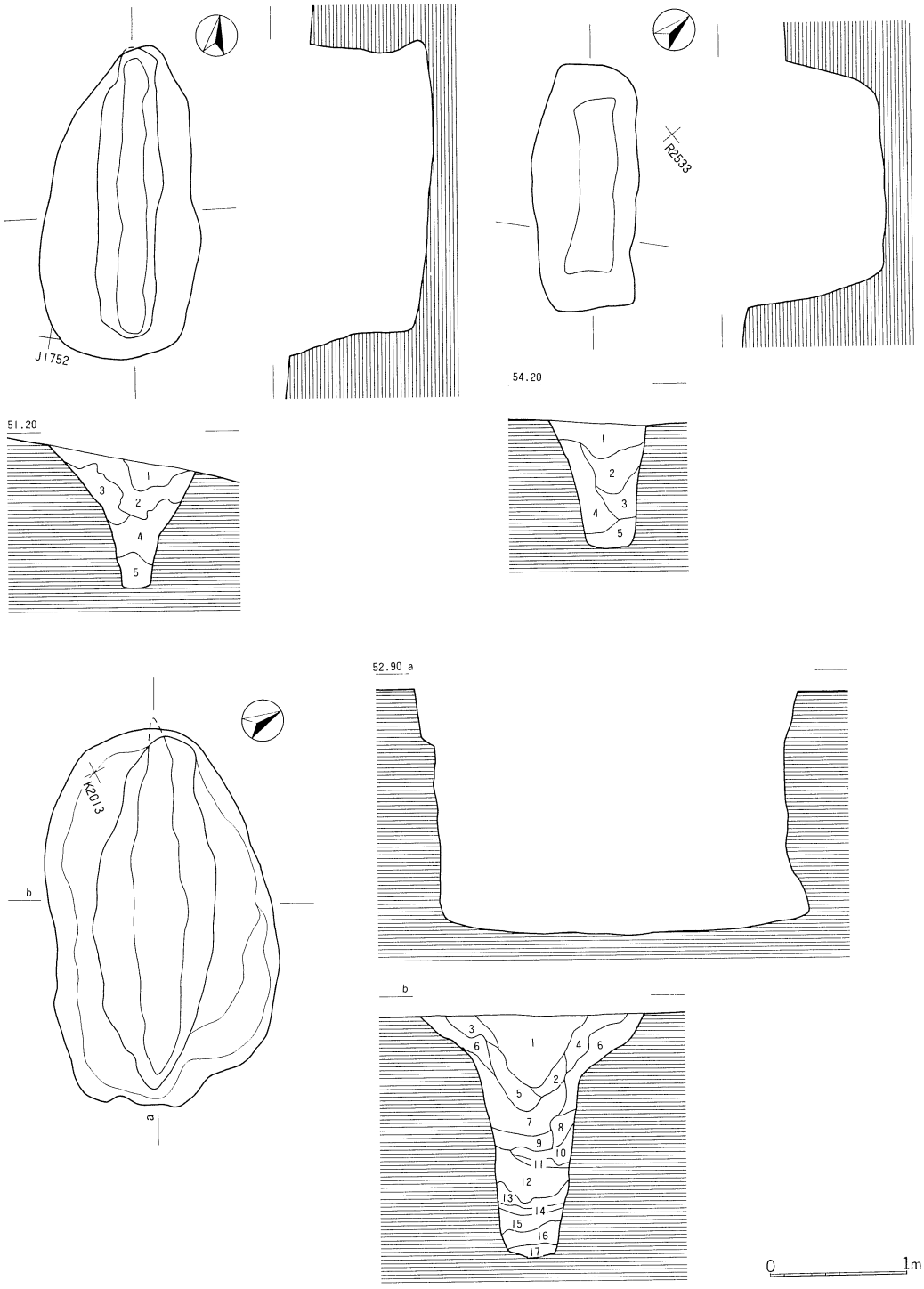
遺　構　長軸1.83m、短軸80cm、深さ1.03mを測る。主軸方位はN—49°—Wである。平面は、確認面、底面ともほぼ長方形を呈す。堆積土層は、2層が黒褐色土層、1・3層が明黒褐色土層、4層が黄褐色土層、5層が暗黄褐色土層である。



第39図　31・32・33号土壙（1/50）



第40図　34・35・36号土壙（1/50）

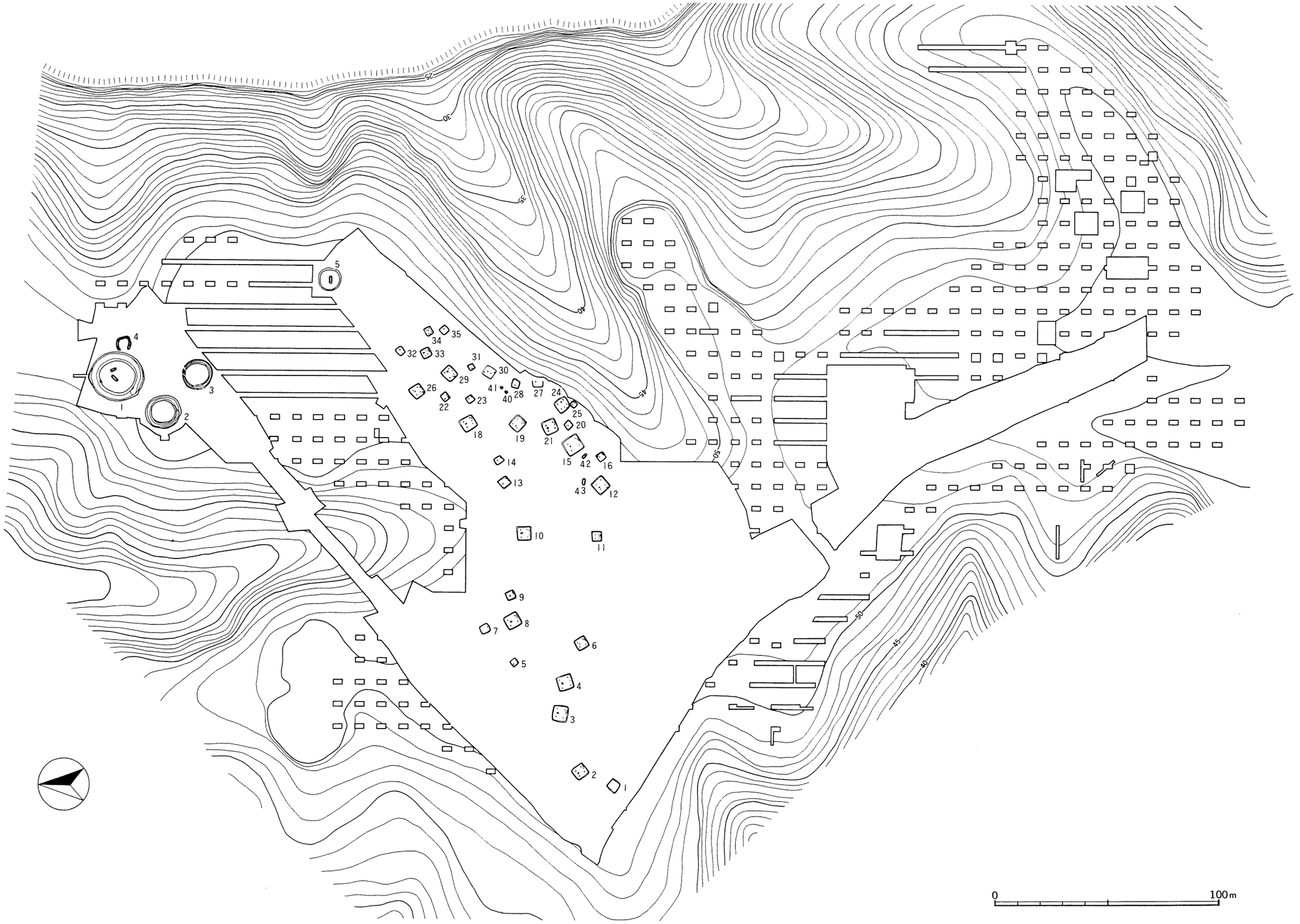


第41図　37・38・39 号土壙（1/50）

No.	出土地	種別	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
1	N02	石鏃	黒曜石	34	21	5	2.3	
2	N2467	石鏃	黒曜石	28	19	4	1.4	
3	N10	石鏃	黒曜石	28	16	5	1.3	
4	008	石鏃	黒曜石	(24)	16	6	1.4	
5	−	石鏃	黒曜石	(20)	18	4	0.9	
6	22号住居跡	石鏃	黒曜石	21	11	4	0.8	
7	J12	石鏃	黒曜石	17	14	2	0.3	
8	17号住居跡	石鏃	チャート	30	14	4	1.4	
9	009	石鏃	チャート	26	13	4	0.8	
10	G15	打製石斧	ホルンフェルス	103	54	25	178.6	
11	19号住居跡	打製石斧	砂岩	103	54	41	315	上面に敲打、側面に研磨がみられる。転用。
12	17号住居跡	打製石斧	ホルンフェルス	(81)	65	16	88.7	
13	17号住居跡	打製石斧	ホルンフェルス	66	32	13	38.8	
14	17号住居跡	敲打器	砂岩	(113)	66	55	456	側面に研磨
15	17号住居跡	磨石	石英斑岩	119	80	56	715	
16	36号住居跡	磨石	砂岩	(110)	99	48	807	若干の凹部をもつ
17	17号住居跡	磨石	ホルンフェルス	86	53	46	264	
18	36号住居跡	石皿	閃緑岩	(128)	(127)	34	676	表裏に磨面をもつ
19	17号住居跡	石皿	安山岩	(130)	(127)	43	992	
20	17号住居跡	石皿	片麻岩	(136)	(170)	60	1713	

(mm) (g)

第3表 石器計測観察表（1）



第42図　弥生・古墳時代の遺構（1/2000）

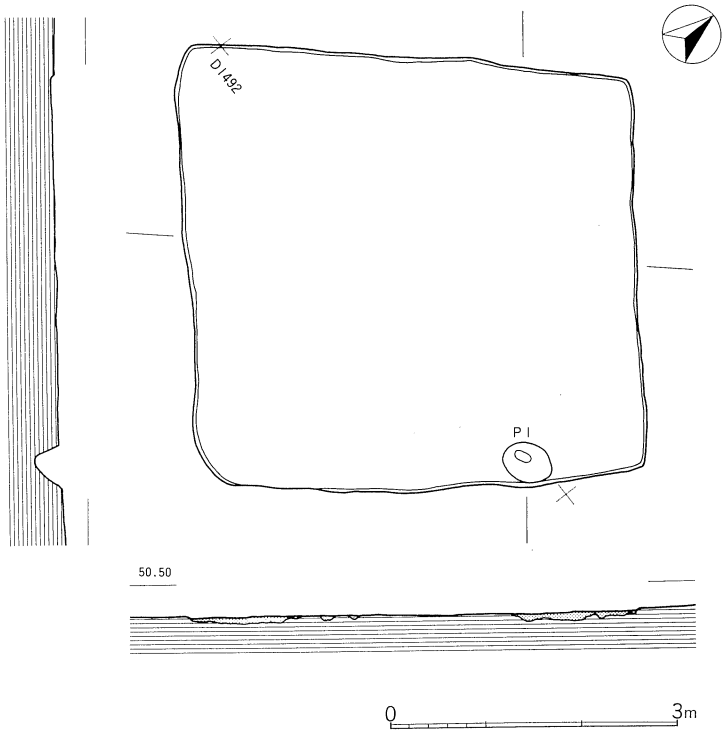
2　弥生・古墳時代の遺構と遺物

弥生・古墳時代の遺構は、竪穴住居跡35軒、土壙４基、古墳５基である（第42図）。住居跡群・古墳群は、地点を異にする。出土土器を基準とするならば、共存しないものの連続的であり、その有機的な関係が想定される。土壙のうち３基は遺物が出土せず、時期的な確証はない。ただし、覆土の状況、その配置から、一応当該期の所産とした。住居跡群は、弥生時代終末期から古墳時代前期に限定される。時期的には連続的であり、また各住居跡における出土土器量に差があり、弥生時代と古墳時代の住居跡を確実に分離することができなかったため、ここでは一括する。

(1)　竪穴住居跡

01号住居跡（第43図）

遺　構　住居竪穴の平面は、やや台形に近い隅丸方形を呈し、長軸4.73m、短軸（主軸）4.63mを測る。面積は、確認面（掘り込み面）で21.64㎡、床面で21.15㎡である。主軸方位はＮ―52°―Ｗを示す。遺存状態は不良であり、確認時に床面が露呈してしまった。壁高は３～５cm程度である。床面は貼り床であり、掘り方は周縁部が深くなる傾向がある。全体に軟質であった。柱穴、炉、いわゆる貯蔵穴、周溝は検出されなかった。Ｐ１は出入口施設と考えられ、深さ25cmを測る。これは、32号土壙調査時に検出された。

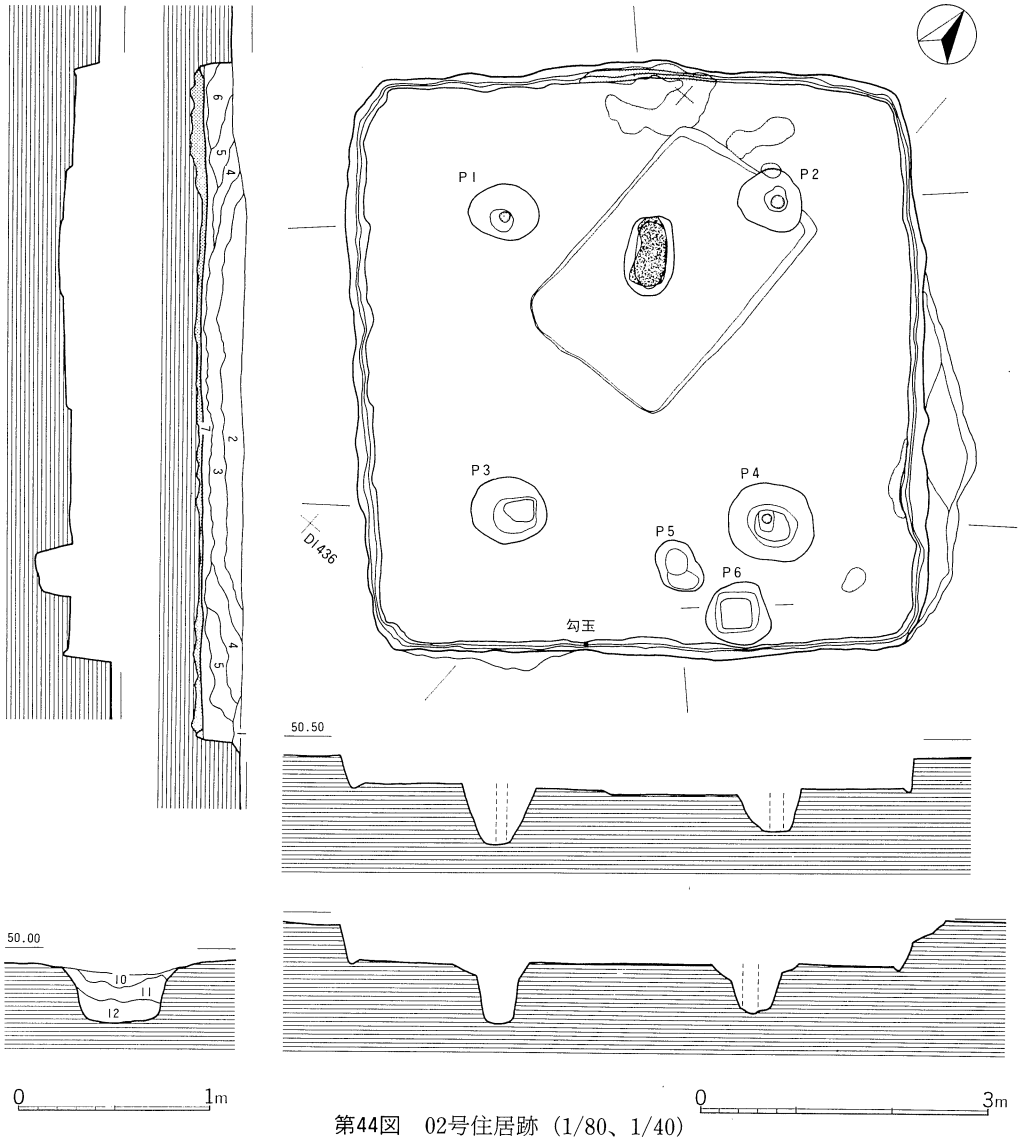


第43図　01号住居跡（1/80）

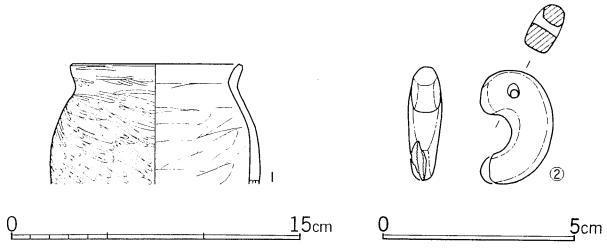
遺　物　土器は、細片が若干出土したのみであった。

02号住居跡（第44・45図）

遺　構　住居竪穴の平面は隅丸方形を呈し、長軸（主軸）6.29m、短軸6.01mを測る。面積は、確認面（掘り込み面）で37.93㎡、床面（周溝部を含む）で35.38㎡、内区（主柱穴内側）で8.92㎡を測る。主軸方位はＮ―44°―Ｗである。壁高は29～49cmである。床は貼り床であり、掘り方は周縁部が深くなる傾向がある。全体に軟質であった。柱穴はほぼ対角線上に４本検出さ



第44図　02号住居跡（1/80、1/40）

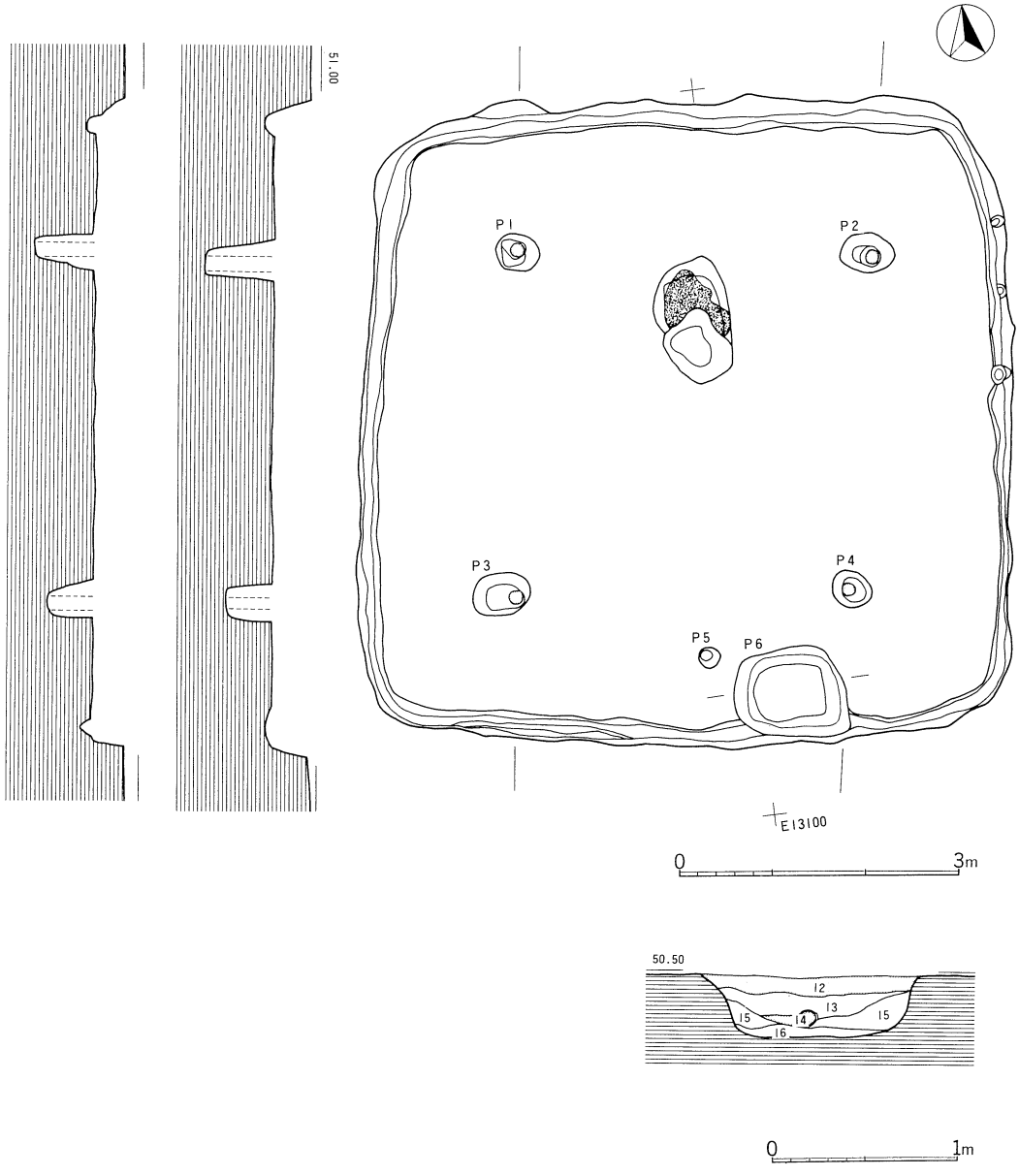


第45図　02号住居跡出土遺物（1/4、1/2）

れた。深さは、Ｐ１が67cm、Ｐ２が45cm、Ｐ３が67cm、Ｐ４が51cmであり、建て替えは認められない。柱間はＰ１・２は2.88m、Ｐ１・３が約3.1m、Ｐ２・４が3.36m、Ｐ３・４が約2.6mを測る。炉は主軸線上に位置する。規模は83×53cmであり、よく焼けていた。Ｐ６はいわゆる貯蔵穴であり、深さ32cmを測る。Ｐ５は出入口施設と考えられ、深さ39cmを測る。周溝は全周する。土層は、１層が攪乱、２層が黒褐色土層、３・

6・7・11層が明黒褐色土層、4・5・8・9・10・12層が暗黄褐色土層である。このうち8層が周溝、9層が貼り床部である。8層はしまりがなく、粒状であった。焼土は5・6層に対応するが局部的である。その下7層はローム粒を多量に混合するが焼土粒はわずかであった。P6内には焼土粒はみられない。焼失していると思われるが、焼土は床面上から間層をおく。

遺　物　床面から土器は出土していない。勾玉は、周溝上ほぼ床面レベルから出土した。



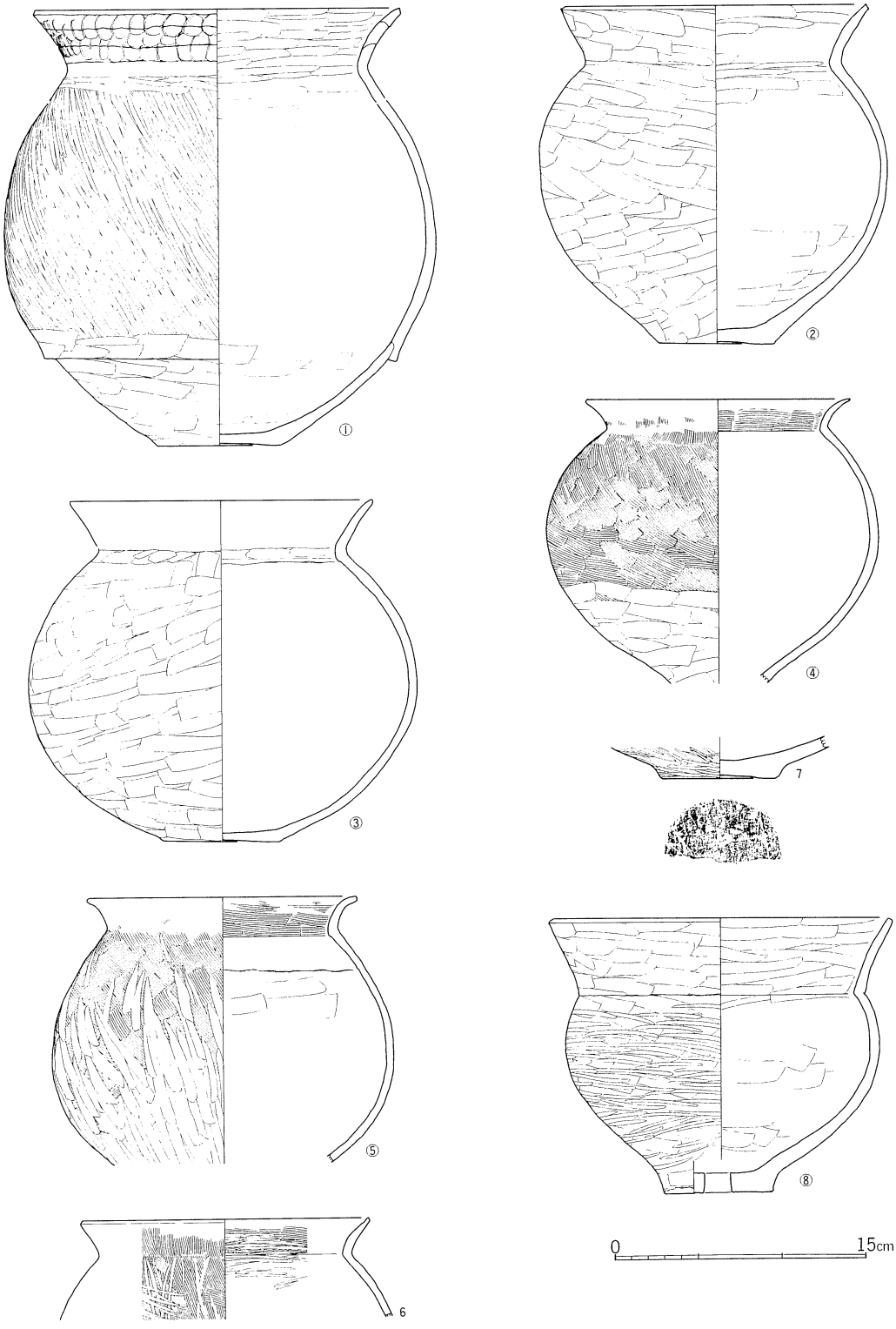
第46図　03号住居跡(1)（1/80、1/40）



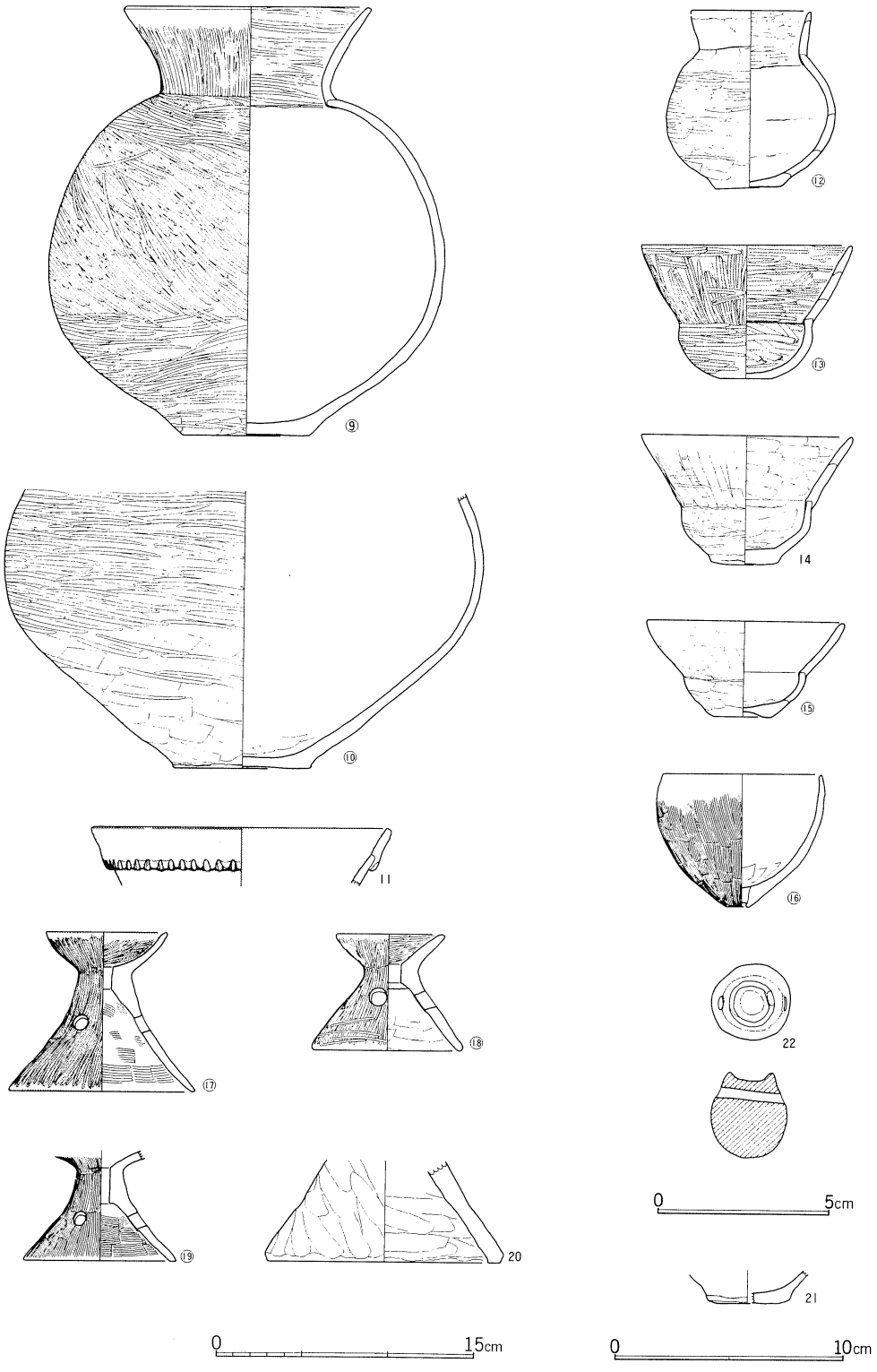
第47図　03号住居跡(2)（1/80）

03号住居跡（第46・47・48図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸（主軸）7.06m、短軸7.03mを測る。面積は確認面で47.72㎡、周溝を含む床面で45.73㎡、内区（主柱穴内側）で13.84㎡を測る。主軸方位はＮ－８°－Ｅである。壁高は30～41cm程度である。床は貼り床であり、掘り方は周縁部が深くなる傾向がある。全体に軟質であった。柱穴はほぼ対角線上に４本検出された。深さは、Ｐ１が62cm、Ｐ２が76cm、Ｐ３が51cm、Ｐ4が50cmであり、建て替えは認められない。柱間は、Ｐ１・２が3.85m、Ｐ１・３が3.81m、Ｐ２・４が3.65m、Ｐ３・４が3.60mを測る。炉は主軸線上に位置し、底面はよく焼けている。南側は攪乱されていた。Ｐ６は貯蔵穴であり、深さ34cmを測る。Ｐ５は出入口施設と考えられるものであり、深さは17cmである。周溝は全周し、東壁際は、壁柱穴が検出された。土層は、１層が攪乱層、2・４層が黒褐色土層、３・９・16層が明黒褐色土層、10・11・



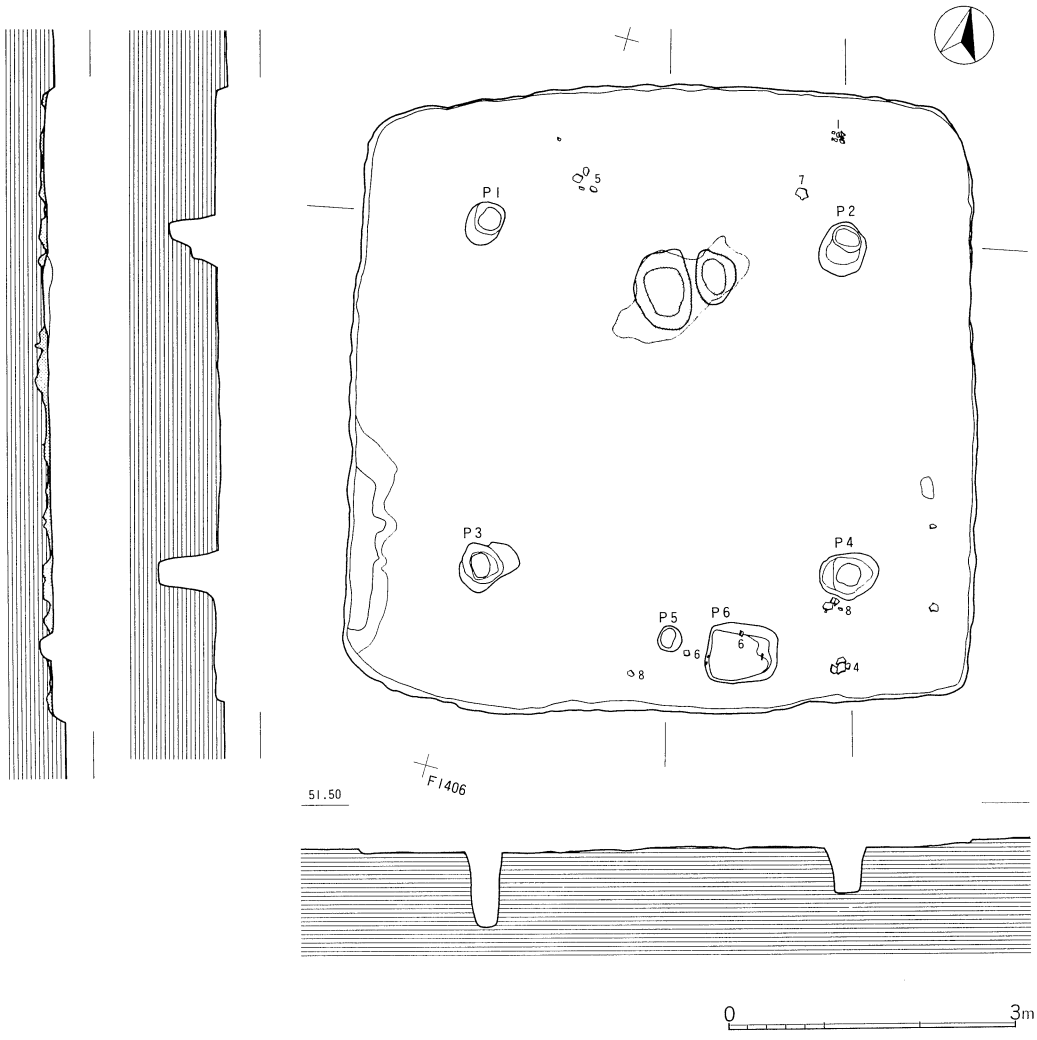
第48図　03号住居跡出土遺物(1)（1/4）



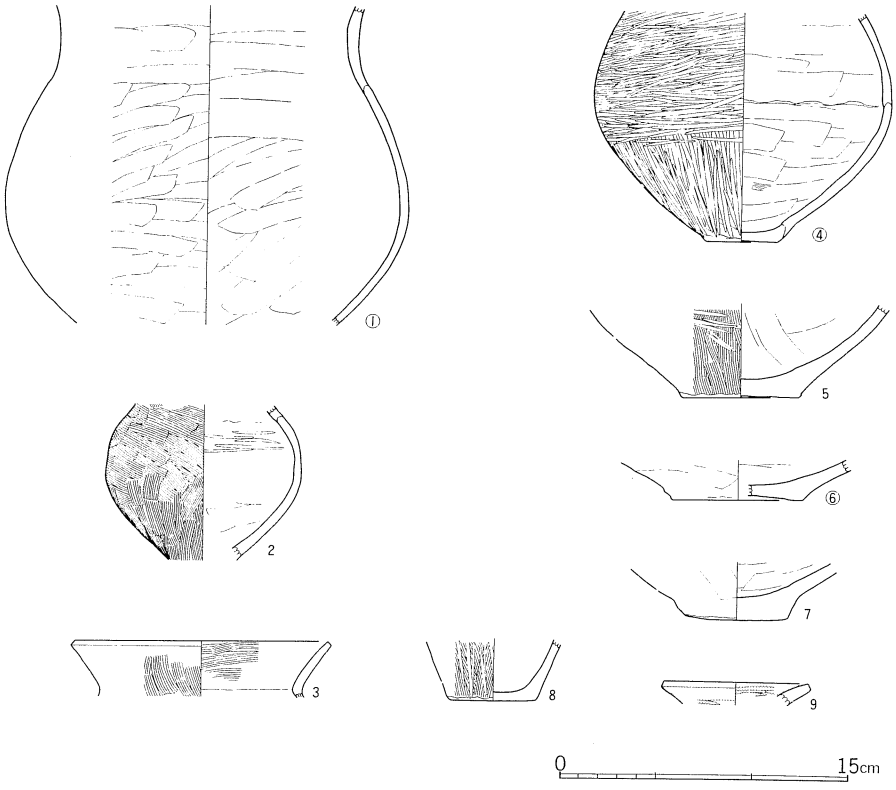
第49図　03号住居跡出土遺物(2)（1/4、1/2、1/3）

13・15層が暗黄褐色土層、6・8層が黄褐色土層、5・7・12・14層が焼土を多量に混合する。このうち床面上4層は、若干の焼土粒とともに多量の炭化物を含む。壁際の9層は、しまりがなく粒状であった。焼土層下6・8層は、粒状のロームを多量に混合する。貯蔵穴内の土層は、最下面に焼土はなく、間層をはさむ。なお、周溝部は10層、貼り床は11層である。11層は、周縁部が全体にやや暗色を呈す。

遺　物　遺物は、炉および貯蔵穴周辺に集中する。第48図－1～6・8、第49図－9・10・12・13・15・16～19が床面直上より出土した。1～6が甕形土器、7・9～11が壺形土器、8が甑形土器、12～15が坩形土器、16が椀形土器、18・19が器台形土器、20が支脚形土器、21がミニチュア土器である。第49図－22は有孔の土製品である。類例は多いが、その性格は明らかではない。なお、出入口部際床面より鉄片が、貯蔵穴横から粘土塊が出土している。



第50図　04号住居跡（1/80）

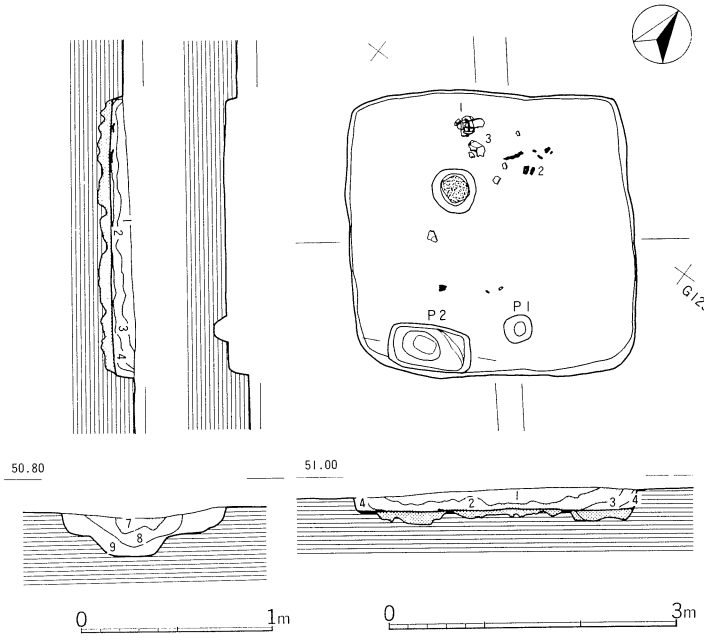


第51図　04号住居跡出土遺物（1/4）

04号住居跡（第50・51図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸（主軸）6.67m、短軸6.58mを測る。面積は、確認面で42.29㎡、床面で41.14㎡、内区（主柱穴内側）で13.74㎡を測る。主軸方位はN－14°－Wである。壁高は4～12cmである。床は貼り床であり、全体に軟弱であった。西壁際が一段高くなっている。柱穴はほぼ対角線上に4本検出された。深さは、P1が80cm、P2が27cm、49cm、P3が60cm、P4が64cmであり、P2をみるかぎりでは、建て替えが考えられる。柱痕はとらえることができなかったが、柱間は、P1・2が3.76m、P1・3が3.76m、P2・4が3.60m、P3・4が3.73m程度である。炉は2基検出された。底面は2基ともあまり焼けていなかったが、焼土が多量に堆積していた。2基の新古は不明である。P6はいわゆる貯蔵穴であり、平面規模は75×64cm、深さ36cmを測る。P5は深さ15cmである。周溝は検出されなかった。床面上、炉跡以外に、若干の焼土がみられるが、焼失は不明である。

遺　物　貯蔵穴周辺、北壁側に、若干の遺物がみられた。第51図－1・4・6が床面上から出土したものである。1～3・5は甕形土器、4は壺形土器、9は器台形土器である。6～8は器種が特定できない。2は、脚台部をもつ可能性が考えられる。

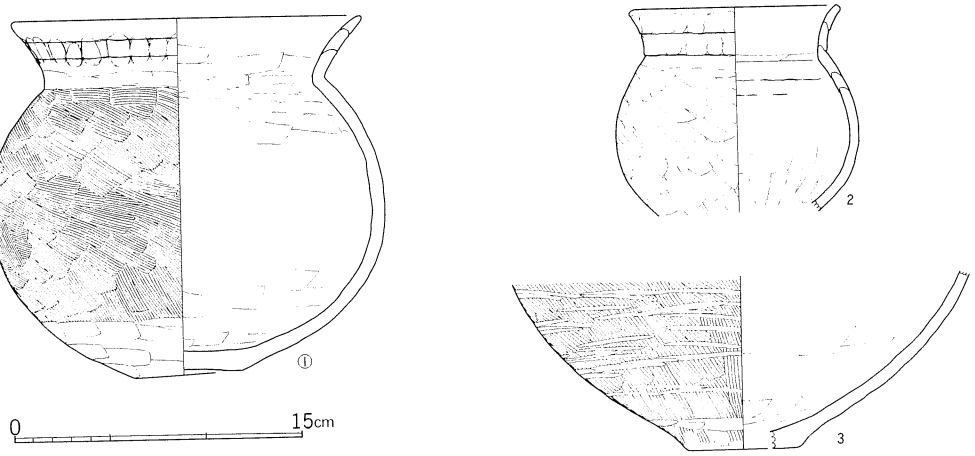


第52図　05号住居跡（1/80、1/40）

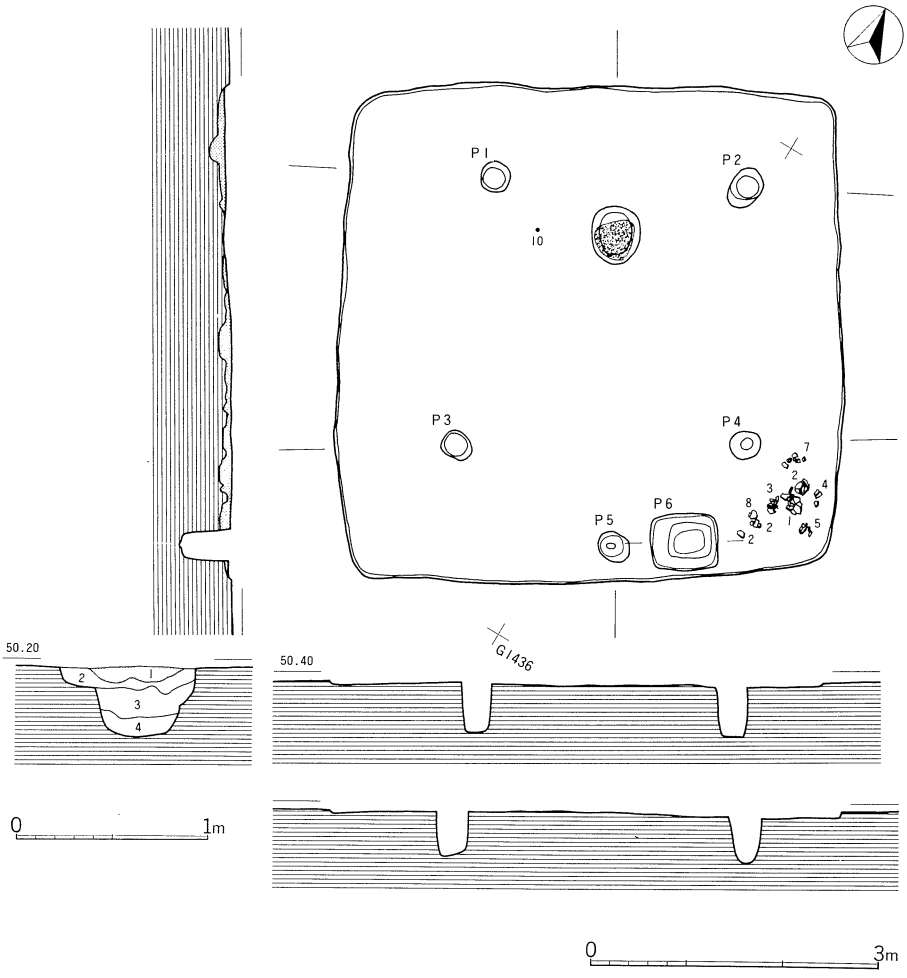
05号住居跡（第52・53図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸（主軸）2.95m、短軸2.94mを測る。面積は、確認面で8.41㎡、床面で7.88㎡を測る。主軸方位はN—39°—Wである。壁高は12～21cmである。床は貼り床であり、全体に比較的硬質であった。掘り方は、周辺部が深くなる傾向がみられる。柱穴は検出されなかった。炉は、主軸線上から西側にある。規模は48×46cmであり、深さは床面から4cmを測る。炉底面はよくやけ、焼土が厚く堆積していた。P2はいわゆる貯蔵穴であり、2段に掘り込まれている。深さは、13cm、24cmを測る。P1は出入口施設であり、深さ13cmを測る。土層は、1・8層が明黒褐色土層、2・7層は黒褐色土層であり、炭化物を多量に含む。3・9層は暗黄褐色土層であり、若干の炭化物を混合する。4層は黄褐色土層であり、ローム粒を多量に混合する。5・6層は貼り床部であり、中央部5層が黄褐色土層、6層は明黒褐色土層である。炭化物・炭化粒に対して、焼土は各層ともほとんどみられなかった。

遺　物　第51図—1が床面上から出土した。2は、床からややうくが、1と技法等類似する。1～3とも甕形土器である。



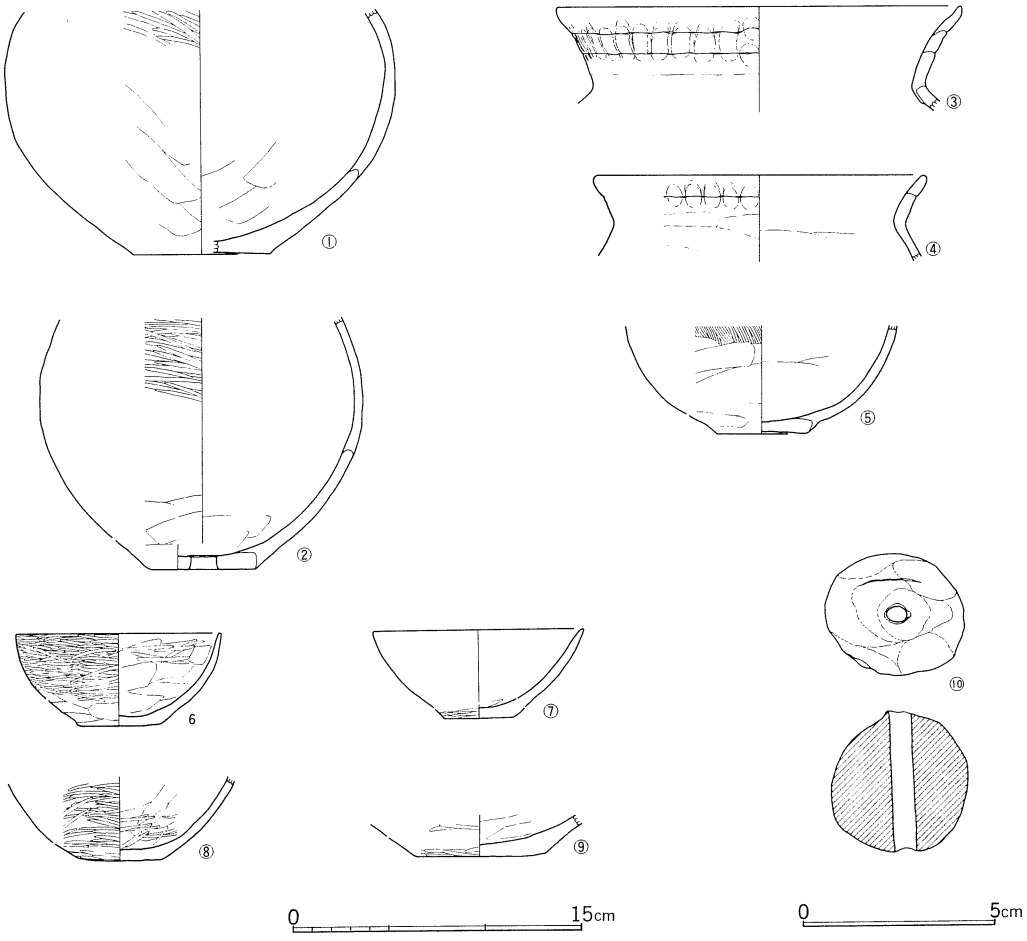
第53図　05号住居跡出土遺物（1/4）



第54図　06号住居跡（1/80、1/40）

06号住居跡（第54・55図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸5.29m、短軸（主軸）5.23mを測る。面積は、確認面で27.08㎡、床面で26.40㎡、内区（主柱穴内側）で7.90㎡を測る。主軸方位はN－30°－Wである。遺存状態は悪く、壁高は2～8cmにすぎない。床は貼り床であり、炉から出入口部にかけて硬質であった。柱穴は、全体にやや東側にずれて検出された。深さはP1が53cm、P2が53cm、P3が48cm、P4が51cmであり、建て替えは認められなかった。また柱痕も明確ではなかった。柱間は、P1・2が2.67m、P1・3が2.89m、P2・4が2.73m、P3・4が3.07mである。炉は、ほぼ主軸線上にあり、規模は62×53cm、深さ4cmである。焼土の堆積はうすいが、底面はよくやけていた。P5は、出入口施設に伴うものと考えられ、深さ58cmである。P6は、いわゆる貯蔵穴であり、2段に掘り込まれている。深さは88cmである。貯蔵穴内の土層は、1・2層



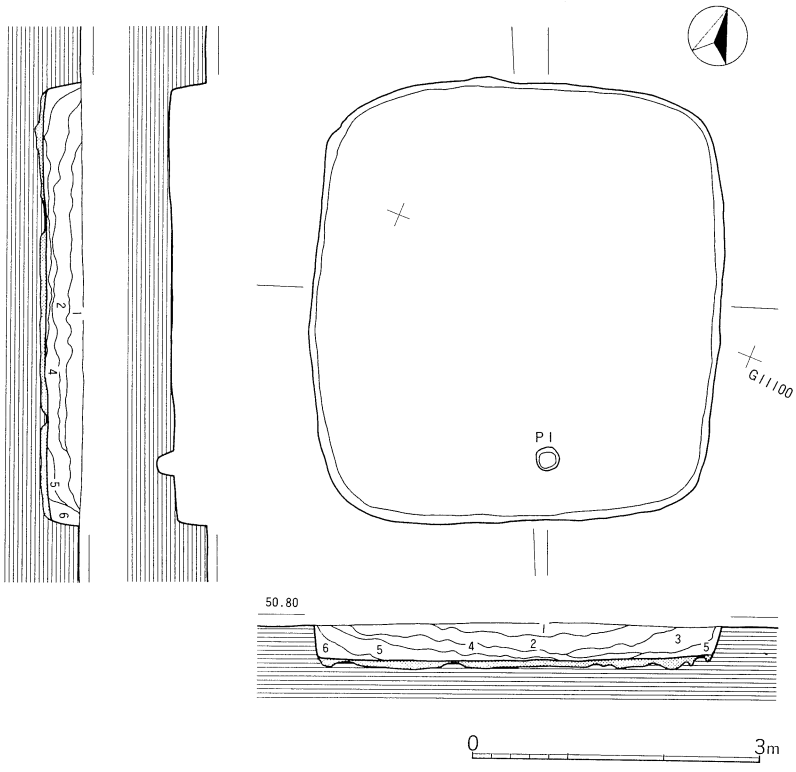
第55図　06号住居跡出土遺物（1/4、1/2）

が黒褐色土層、3層が明黒褐色土層、4層がローム粒を多量に混合する暗黄褐色土層である。1層は、炭化物・炭化粒を多量に混合するが、以下の各層には認められていない。床面に若干の炭化物の付着がみられ、本住居跡は焼失したものと考えられる。周溝は明確に検出できなかった。

遺　物　貯蔵穴脇、竪穴南東隅よりまとまって出土している。1～5・7～10が床面直上により出土したものである。1・5が壺形土器、3・4が甕形土器、2が甑形土器、6～8が椀形土器であり、9は器種が特定できない。10は土玉である。

07号住居跡（第56図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸長方形を呈し、長軸（主軸）4.67m、短軸4.26mを測る。面積は、確認面で18.77㎡、床面で16.73㎡である。主軸方位はN－19°－Wである。壁高は32～37cmを測る。床は貼り床であるが、全体に軟弱であった。掘り方面は凹凸はみられるものの、全体としては平坦である。炉・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。P1は、出入口施設に伴うものと考えられ、深さは17cmを測る。土層は、1・2・5層が明黒褐色土層、4層が黒褐色土層、3・6・



第56図　07号住居跡（1/80）

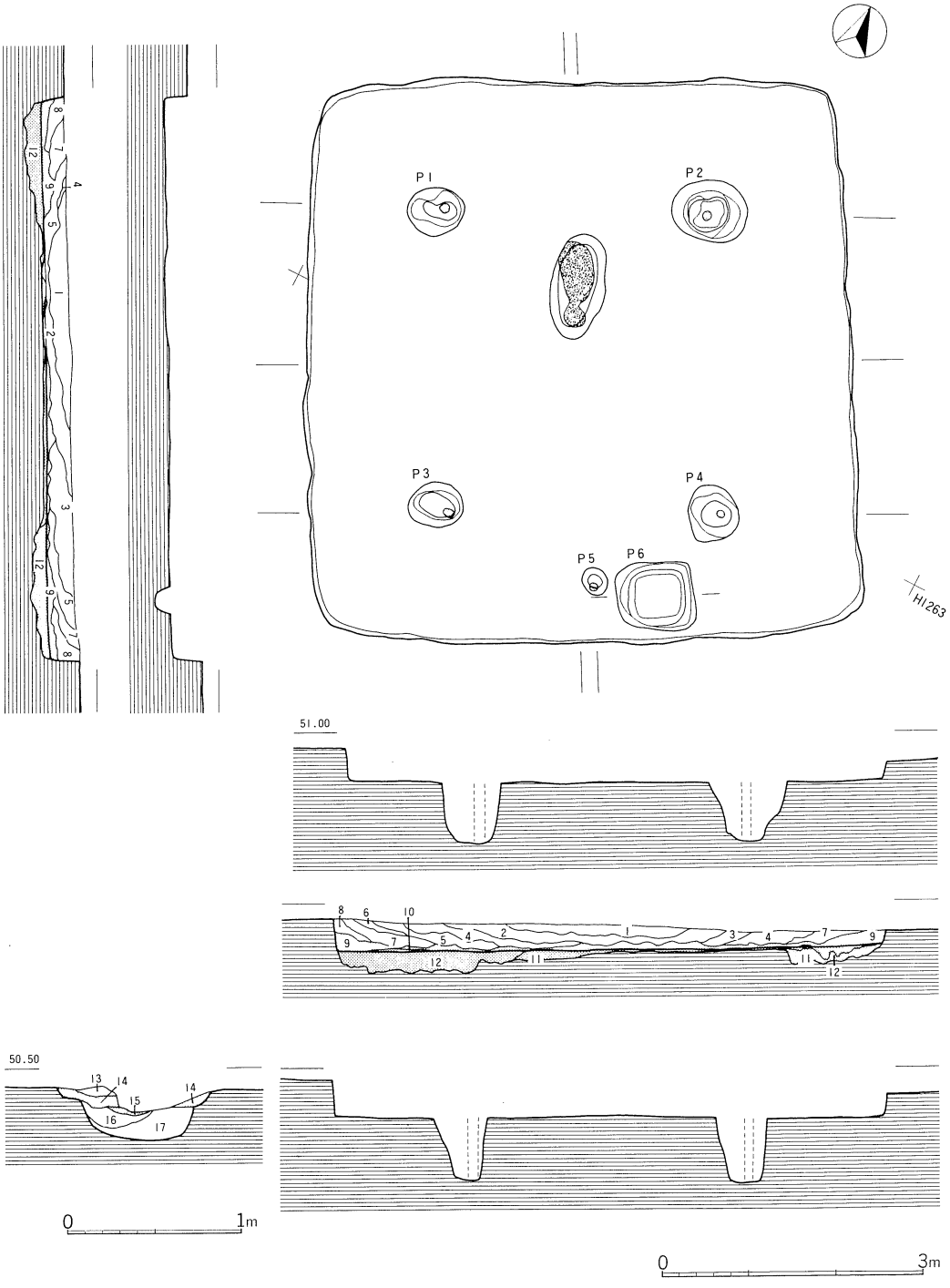
7層が暗黄褐色土層であり、床面上6層は、ロームを粒状に多量に混合する。7層は貼り床部であり、ロームブロックをしみ状に含む。各層とも、焼土・炭化物は認められなかった。

遺　物　破片を含めても、全く出土していない。

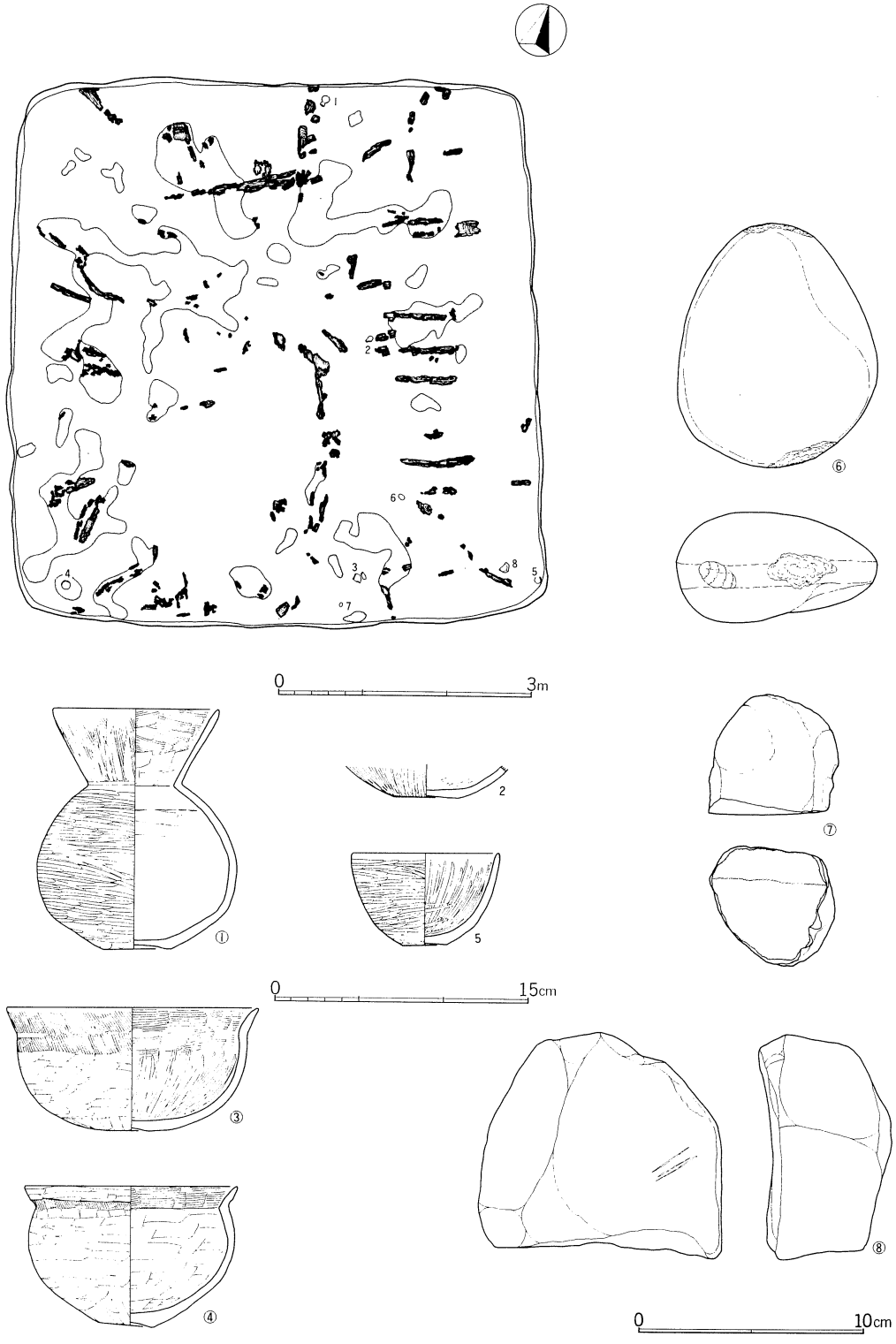
全体として、住居、あるいは作業所としての痕跡・機能は希薄である。

08号住居跡（第57・58図）

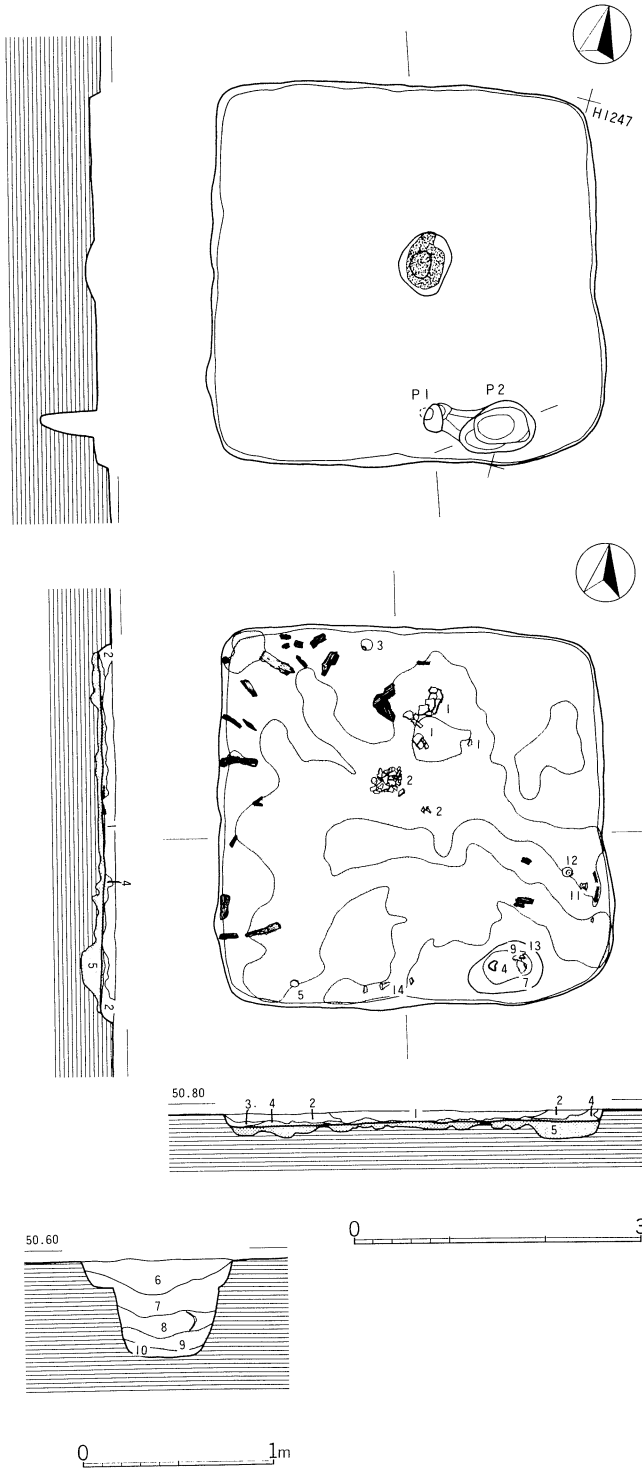
遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸（主軸）6.48m、短軸6.30mを測る。面積は、確認面で40.58㎡、床面で39.49㎡、内区（主柱穴内側）で10.75㎡を測る。主軸方位はN—28°—Wである。壁高は15～39cmである。床は貼り床であり、内区は全体に硬質であった。掘り方は、周縁部が深くなる傾向があり、中央部11層はロームを多量に混合する黄褐色土層、周縁部12層は、ロームブロックを含むものの、明黒褐色土層である。柱穴は、ほぼ対角線上に4本検出された。深さは、P1が75cm、P2が69cm、P3が72cm、P4が75cmであり、建て替えが想定される。柱間は、P1・2が3.04m、P1・3が3.55m、P2・4が3.48m、P3・4が3.15mを測る。柱痕が認められ、ほぼ径12cm程度である。炉は主軸線上に位置し、底面はよくやけていた。規模は、1.23m×64cm、深さ4cmである。P6は貯蔵穴であり、89×77cm、深さ63cmを測る。堆積土層は、13層が多量のローム粒、若干の焼土・炭化粒を含む暗黄褐色土層、14層が焼土・炭化粒を多量に混合する明黒褐色土層、15層が炭化物層、16層が暗黄褐色土層であり、焼土等ほとんど認められない。P5は、出入口施設と考えられるものであり、深さは17cmを測る。周溝は明確に検出することができなかった。竪穴内の土層は、1層が黒褐色土層、2・3・5・8層が暗黄褐色土層、4層が黄褐色土層、6・7・9層が明黒褐色土層、10層は純焼土層である。このうち9層は、多



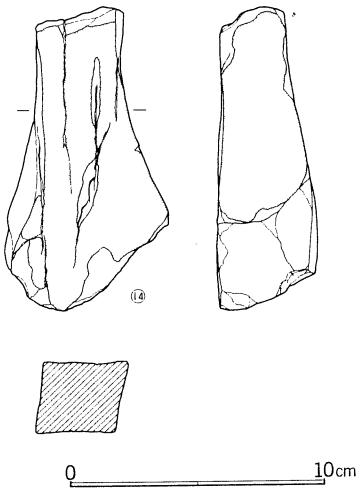
第57図　03号住居跡(1)（1/80、1/40）



第58図　08号住居跡(2)(1/80)、出土遺物(1/4、1/3)



第59図　09号住居跡（1/80、1/40）



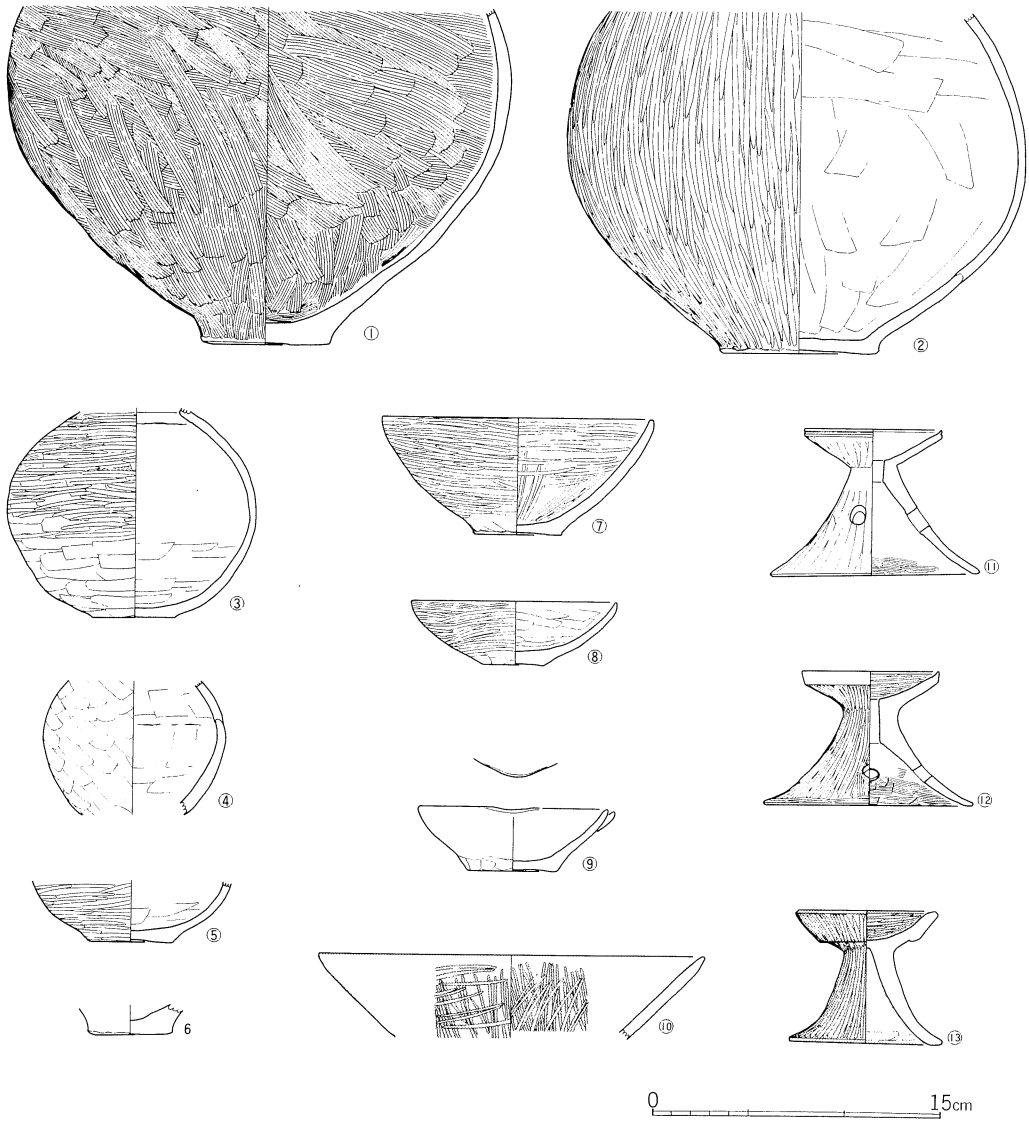
第60図　09号住居跡出土遺物(1)（1/3）

量の炭化物・焼土を混合する。また6・7層にも焼土がみられ、数次にわたって流れこんだものと考えられる。2～5層は、大量のローム粒・ロームブロックを含み、人為的である可能性もある。炭化物は、放射状にあり、上屋材が崩落した状態がわかる。

遺　物　1・3・4・6～8が床面上から出土している。1・2が坩形土器、3～5が椀形土器である。6は敲石、7・8は砥石である。6は、一応本住居跡に伴うものと考えておきたい。

09号住居跡（第59・60・61図）

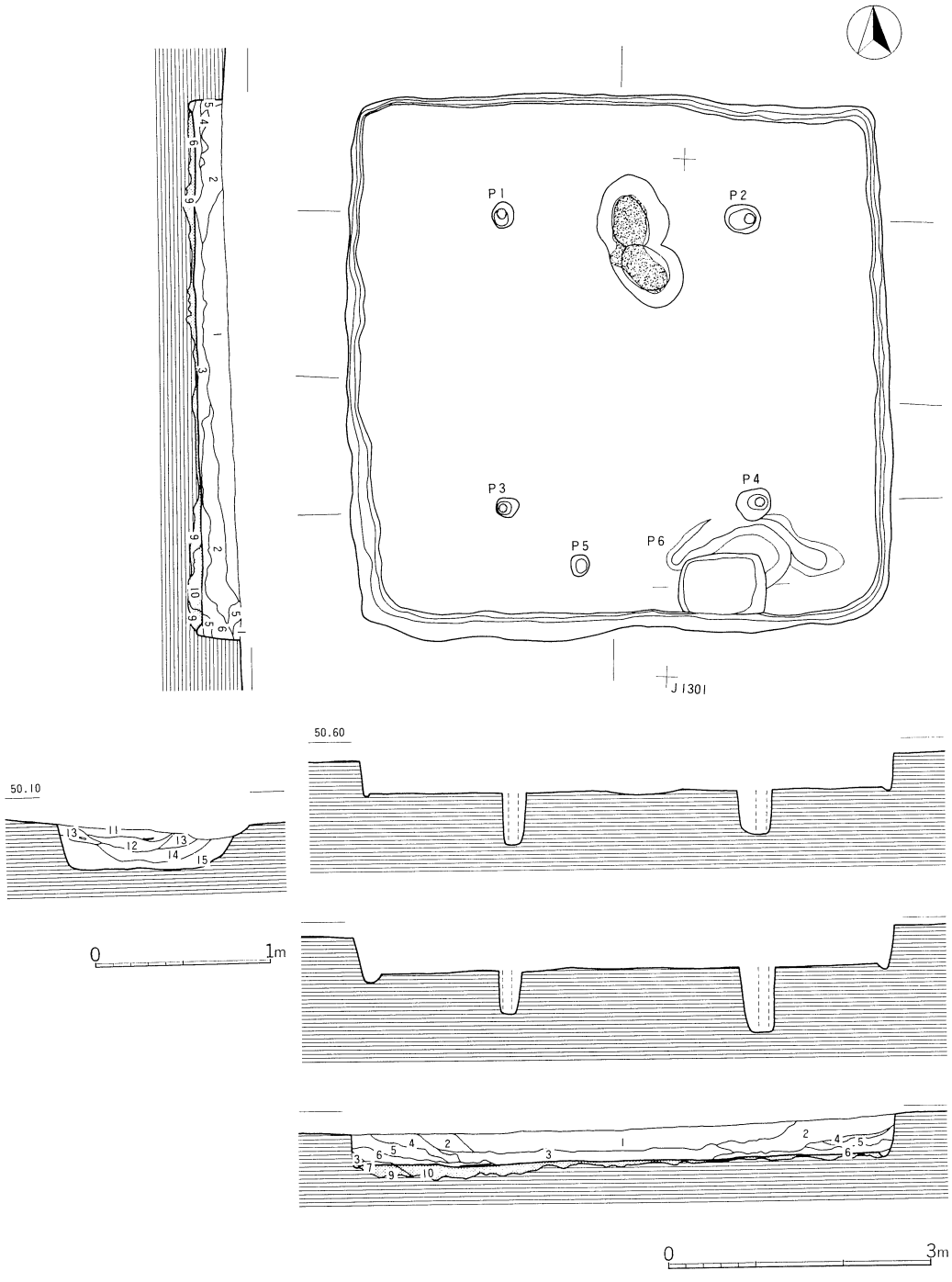
遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸4.04m、短軸（主軸）4.03mを測る。面積は、確認面で16.13m²、床面で15.28m²を測る。主軸方位はN－16°－Wである。壁高は6～9cmである。床は貼り



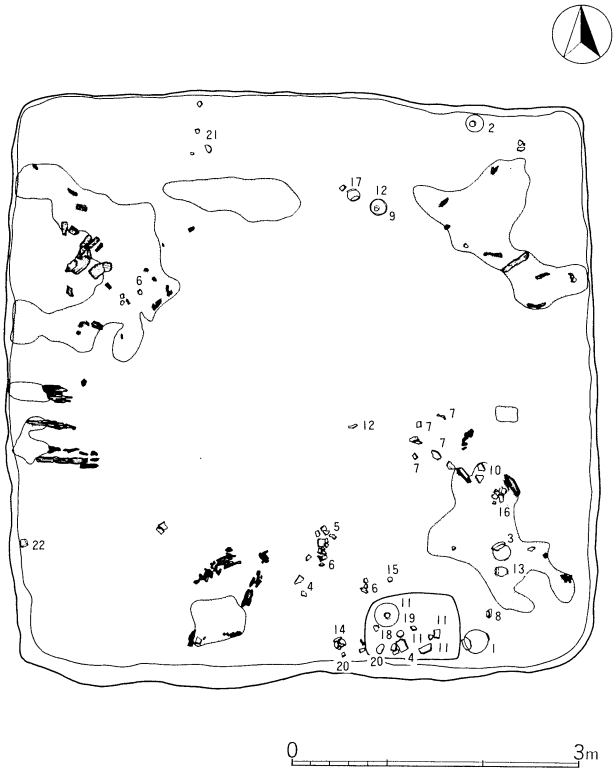
第61図　09号住居跡出土遺物(2) (1/4)

床であり、掘り方は周縁部が深くなる。床面は全体に硬質であった。炉は、竪穴中央からやや東側にある。柱穴・周溝は検出されなかった。Ｐ１は出入口施設であり、深さ57cmを測る。Ｐ２は貯蔵穴であり、深さ50cmである。土層は、１層が明黒褐色土層、２層がローム粒を多量に含む暗黄褐色土層、３層が粘性の強い黒褐色土層、４層は焼土層であり、多量の炭化物を含む。５層は暗黄褐色土層、貯蔵穴内６・８層は明黒褐色土層、７・10層は暗黄褐色土層、９層は焼土層である。

遺　物　１～３・５・８・10～12・14が床面上から、４・７・９・13が貯蔵穴内に転落した状態で出土した。１が甕形土器、２が壺形土器、３～５が坩形土器、７～９が椀形土器、10が高杯形土器、11～13が器台形土器である。14は砥石である。



第62図　10号住居跡(1)（1/80、1/40）

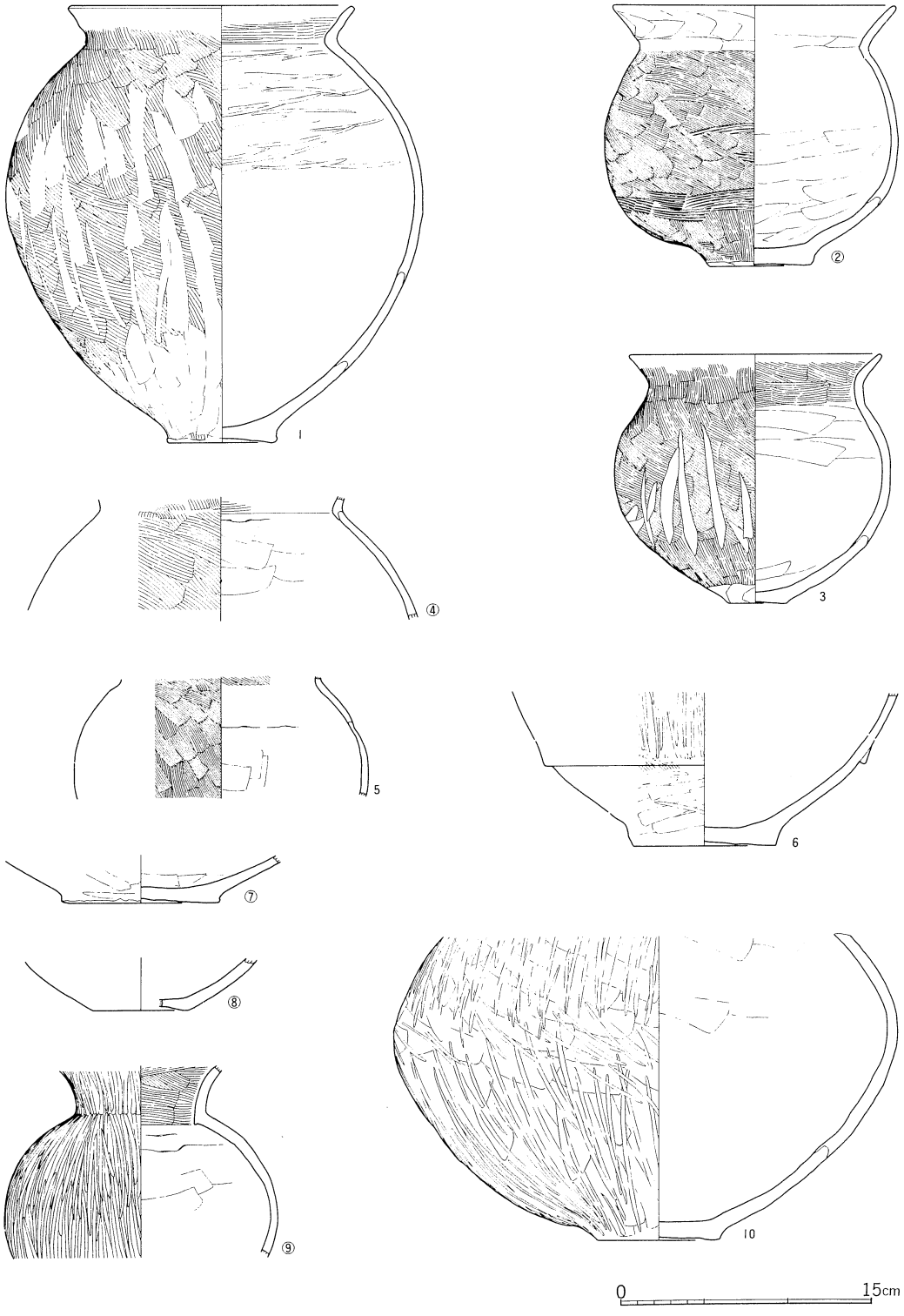


第63図　10号住居跡(2)（1/80）

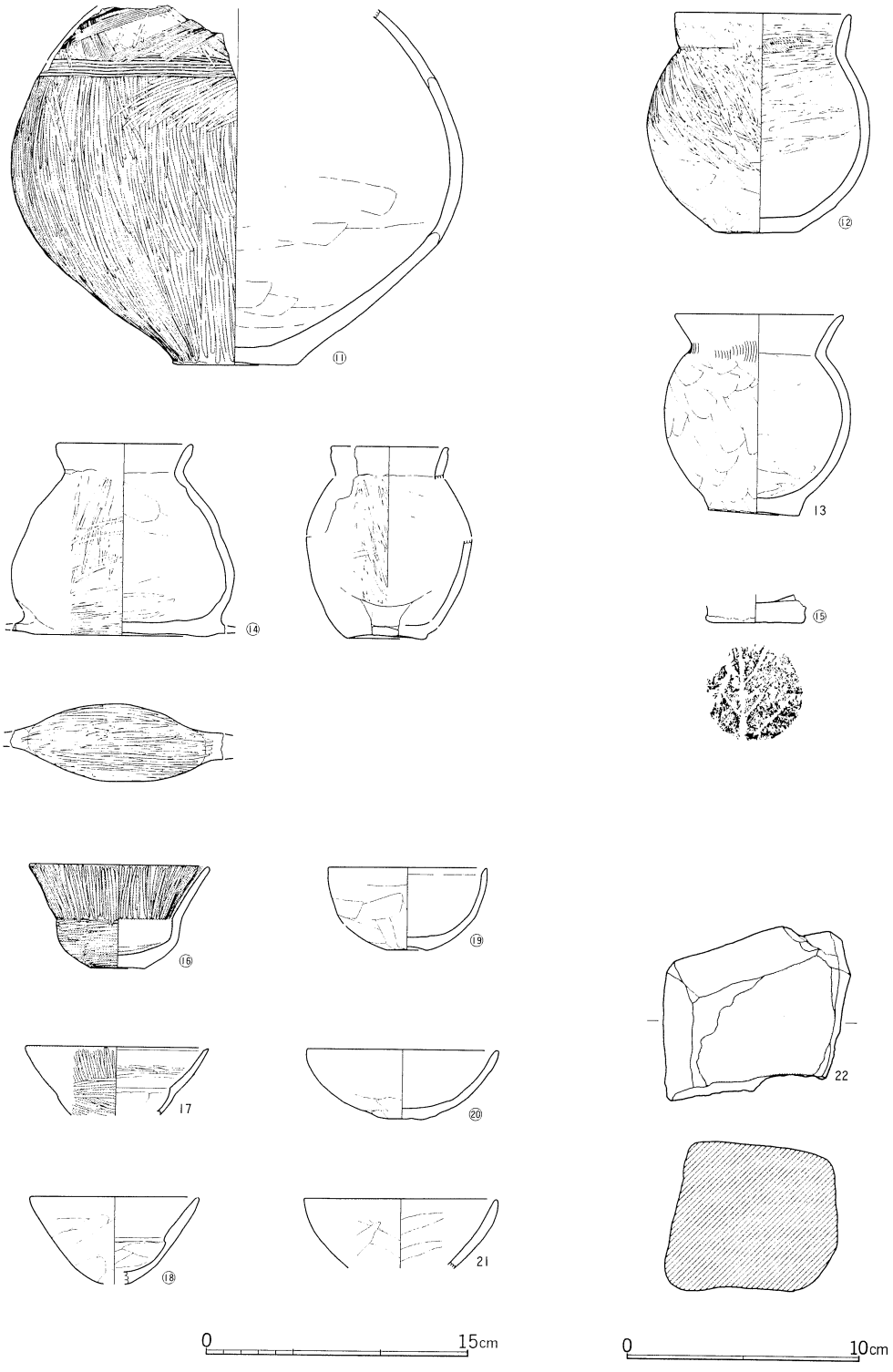
10号住居跡（第62・63・64・65図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸（主軸）6.18m、短軸6.13mを測る。面積は、確認面で37.83m²、周溝を含む床面で35.88m²、内区（主柱穴内側）で9.66m²を測る。主軸方位はN－3°—Wである。壁高は35～42cmである。床は貼り床であり、内区から出入口部にかけて硬質であった。掘り方は、周縁部が深くなる傾向があり、中央部9層はロームを多量に混合する暗黄褐色土層、周縁部10層は、ロームブロックを混合するものの地層は明黒褐色土である。9・10層の先後は、断面の観察によるかぎり部分によって異なり、明確ではない。柱穴は、ほぼ対角線上に4本検出された。建て替えの痕跡は認められない。深さは、P1が60cm、P2が52cm、P3が51cm、P4が76cmである。柱痕は、径12cm程度である。柱間は、P1・2が2.85m、P1・3が3.14m、P2・4が3.29m、P3・4が2.96mを測る。炉は2基重複して検出されたが、その先後は確認できなかった。両方とも底面はよくやけていた。P6はいわゆる貯蔵穴であり、深さ27cmを測る。堆積土層は、11・14層が明黒褐色土層、13層が黒褐色土層、12層がソフトローム状の黄褐色土層、15層が暗黄褐色土層であり、焼土粒は、11層に若干みられる程度であった。P5は、出入口施設と考えられるものであり、深さは18cmを測る。周溝は全周する。深さは、5～11cm程度である。竪穴内の土層は、1・3・6層が黒褐色土層であり、3層には焼土・炭化物を若干含む。2層は明黒褐色土層、4層は焼土層、5層はローム粒を多量に含む暗黄褐色土層、7層は黄褐色土層、8層周溝部は暗黄褐色土層である。本住居は、焼失したものと考えられるが、焼土の堆積は間層をはさむ。

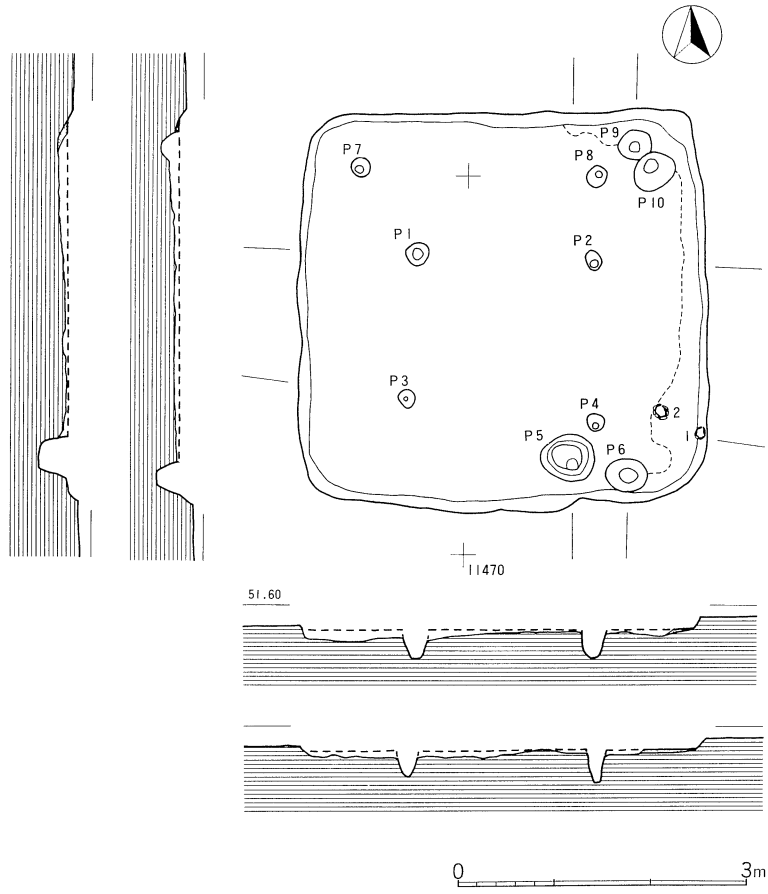
遺　物　2・4・7～9・11・12・14～16・18～20が床面上から出土した。ただし、覆土中1・3も本住居に伴う可能性がある。1～5が甕形土器、9～12が壺形土器、13・16～18が坩形土器、19～21が椀形土器である。14の異形の坩形土器は、遺存量は⅔程度あったが、遺存状態がきわめて不良であった。近似する例は、大阪府鷹塚山遺跡にあるが、その関係は認めにくい。

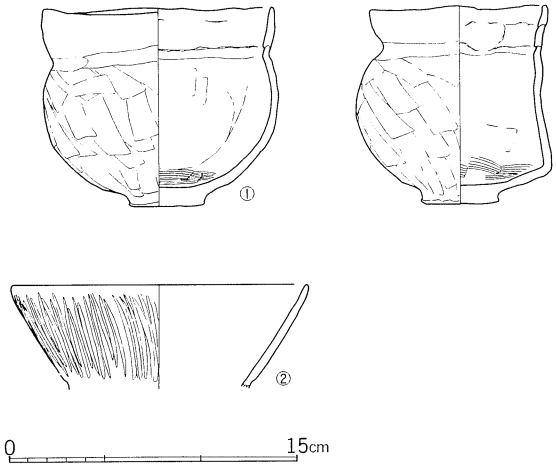


第64図　10号住居跡出土遺物(1)（1/4）



第65図　10号住居跡出土遺物(2)（1/4、1/3）



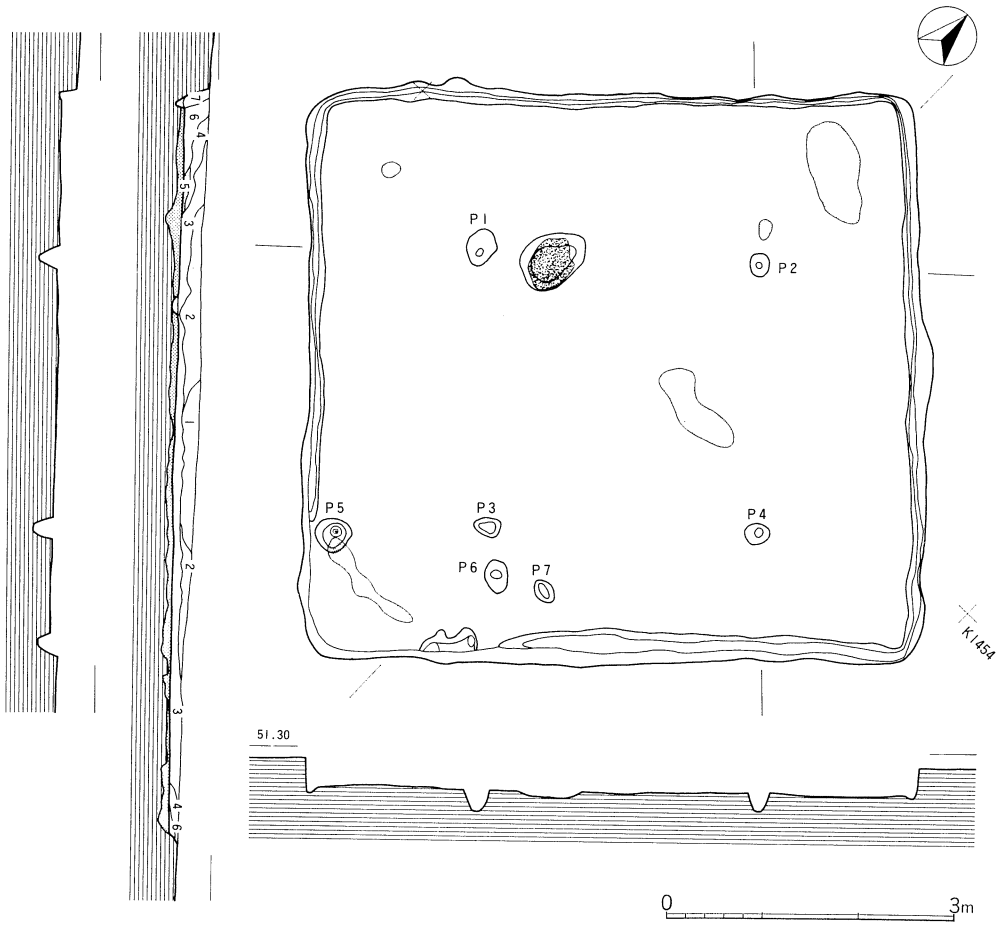


第66図　11号住居跡(1/80)、出土遺物(1/4)

11号住居跡(第66図)

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸4.25m、短軸（主軸）4.22mを測る。面積は、確認面で17.49㎡、床面でほぼ15.83㎡、内区で3.12㎡を測る。主軸方位はN－1°－Wである。全体に削平されてしまっていたため、遺存状態は悪く、床面が残存していた部分は、東壁際だけであった。床残存部で、壁高6～9cmを測る。主柱穴と考えられるものは、P1～4であり、現状での深さは、P1が23cm、P2が27cm、P3が20cm、P4が31cmである。柱痕は確認できなかったが、柱間は、P1・2がほぼ1.85m、P1・3が1.56m、P2・4が1.73m、P3・4が2.02mである。他に、P7が深さ10cm、P8が11cm、P9が11cm、P10が13cmを測る。P5・6は、貯蔵穴の可能性があり、深さは、P5が31cm、P6が24cmである。

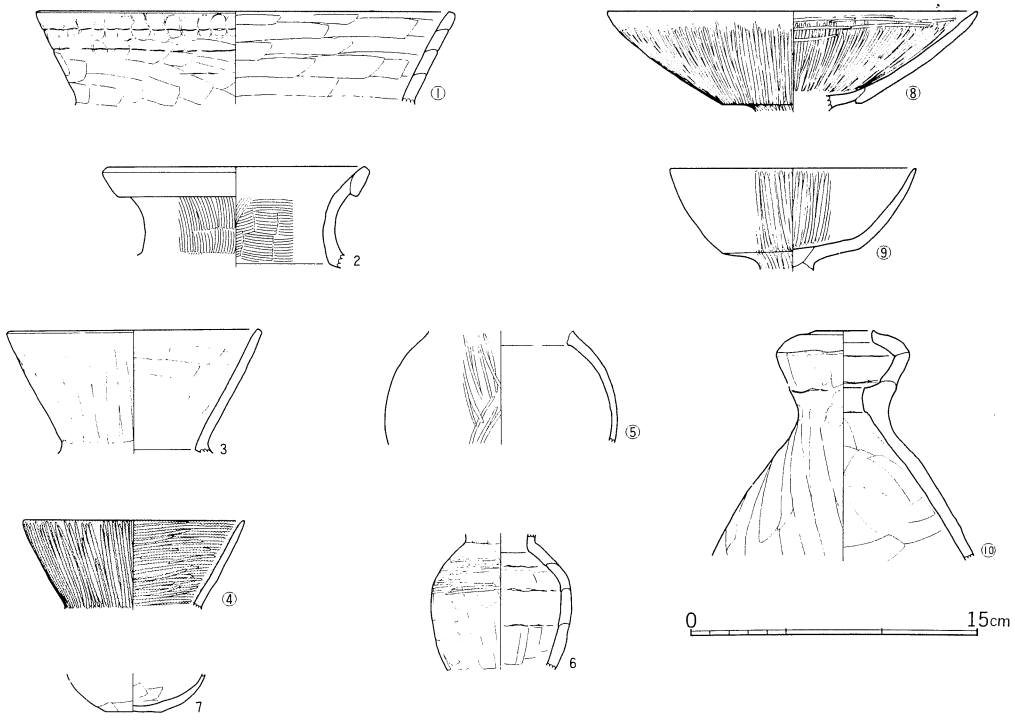
遺　物　1・2が床面上から出土しただけである。1は、焼成前に変形され、体部に平坦部をもつ。1は広口の壺形土器、2は坩形土器に分類しておく。



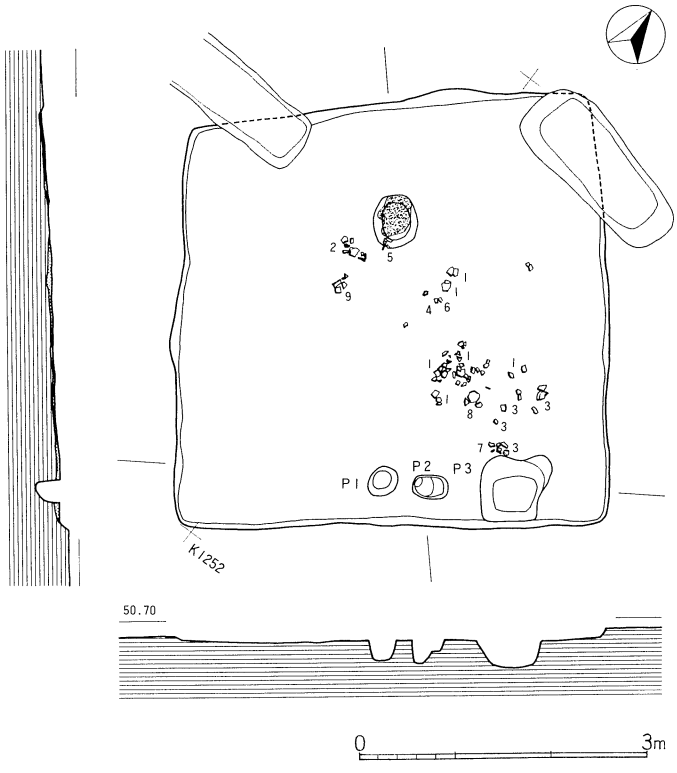
第67図　12号住居跡（1/80）

12号住居跡（第67・68図）

遺　構　住居竪穴の平面は、ほぼ方形を呈し、長軸6.50m、短軸（主軸）6.04mを測る。面積は、確認面で39.51㎡、周溝を含む床面で37.77㎡、内区（主柱穴内側）で8.28㎡を測る。主軸方位はN—44°—Wである。壁高は9～31cmである。床は貼り床であり、床面は全体に軟弱であった。柱穴の深さは、P1が24cm、P2が19cm、P3が23cm、P4が23cmであり、いずれも浅い。また柱痕も確認できなかった。柱間は、P1・2が2.95m、P1・3が2.92m、P2・4が2.83m、P3・4が2.84m程度である。他に、P5は深さ8cm、P6は13cm、P7は6cmである。炉は、主軸線上から西側に位置する。長軸73cm、深さ7cmである。周溝は、南隅がやや不明確であった。竪穴内の土層は、1層が黒褐色土層、2・6層が明黒褐色土層、3層が暗黄褐色土層であり、若干の焼土粒を含む。4・7層は黄褐色土層、5層が焼土層である。周溝部8層は暗黄褐色土層であり、ロームブロックを多量に混合する。本住居は焼失したものと考えられるが、焼土の堆積は全体として希薄であり、炭化物も局部的であった。



第68図　12号住居跡出土遺物（1/4）

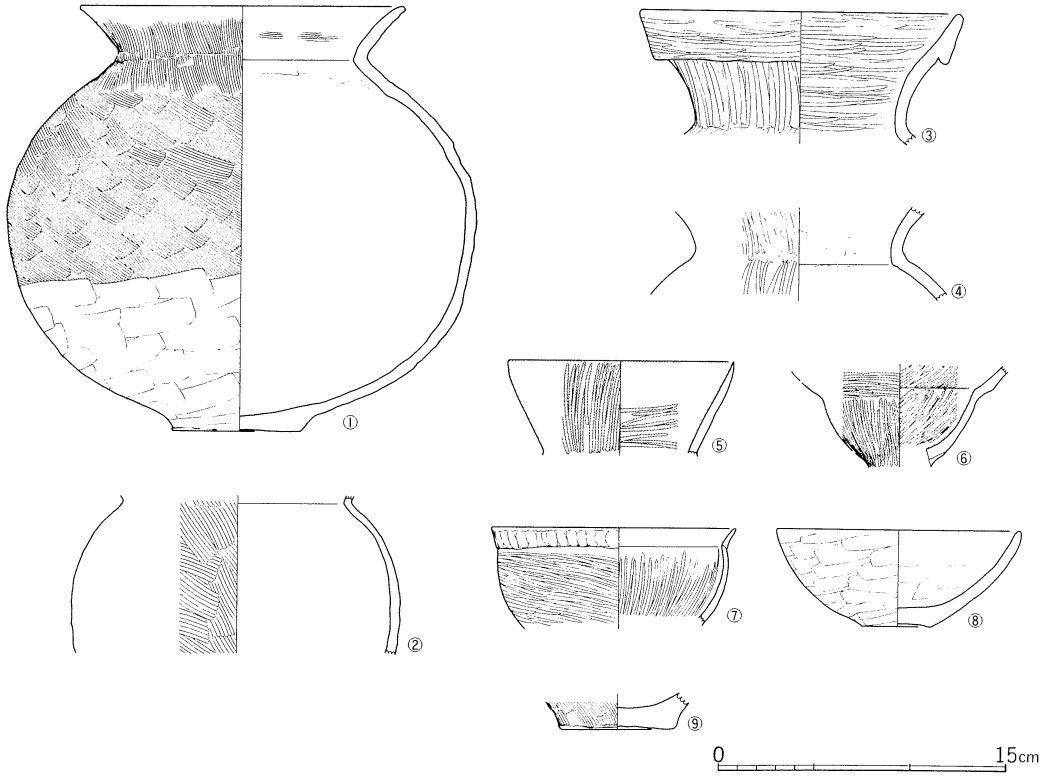


第69図　13号住居跡（1/80）

遺　物　1・4・5・8・10が床面上より出土した。ただしいずれも破片である。9は、P5底面より出土した。1は甕形土器、2は甕形土器、3～6は坩形土器、8・9は高杯形土器、10は支脚形土器である。

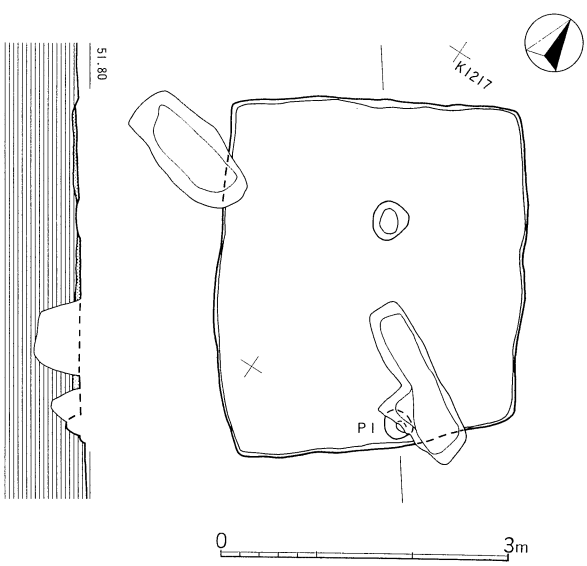
13号住居跡（第69・70図）

遺　構　表土を除去した段階で一部床面が露呈した。また北壁側に攪乱部がある。住居竪穴の平面は、方形であり、長軸4.55m、短軸（主軸）4.50mを測る。面積は、確認面で20.12㎡、床面で19.01㎡である。主軸方位はN—36°—Wである。壁高は3～6cmにすぎない。床は貼り床であ



第70図　13号住居跡出土遺物（1/4）

り、全体に比較的硬質であった。柱穴は検出されなかった。炉は、ほぼ主軸線上にある。規模は56×47cmであり、深さは3cm程度であった。P1・2は、出入口施設に関連するものと考えられ、深さは、P1が21cm、P2が25cmを測る。P3はいわゆる貯蔵穴であり、深さは29cmを測る。竪穴覆土の状態は不明確であるが、焼土・炭化物は確認できなかった。

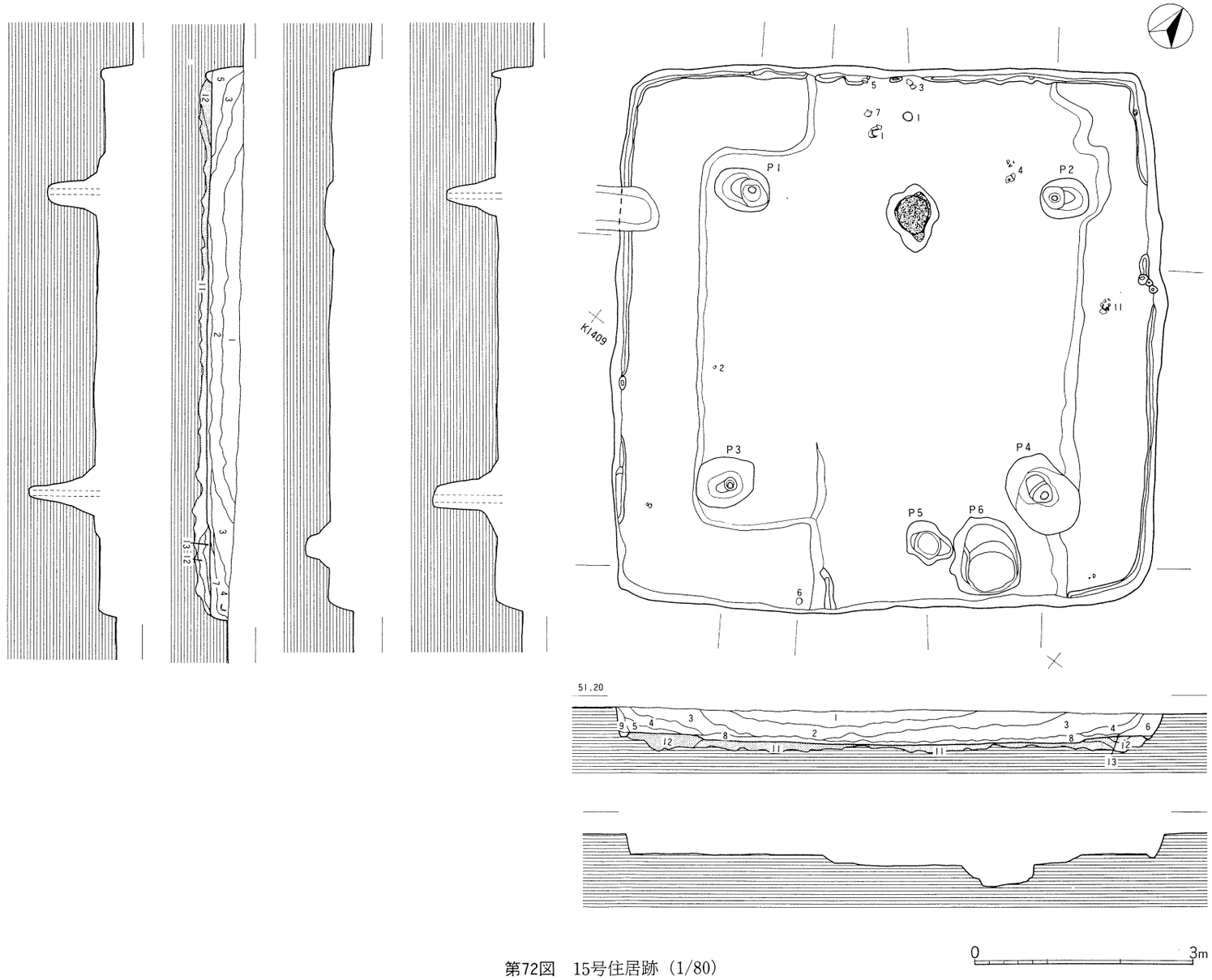


第71図　14号住居跡（1/80）

遺　物　いずれも床面直上より出土している。分布は、貯蔵穴から炉にかけての範囲である。1・2・9は甕形土器、3・4は壺形土器、5・6は坩形土器、7・8は椀形土器である。1は、小破片になって出土したこともあり、その器形・法量はかならずしも確実なものではない。

14号住居跡（第71図）

遺　構　表土を除去した段階で、一部床



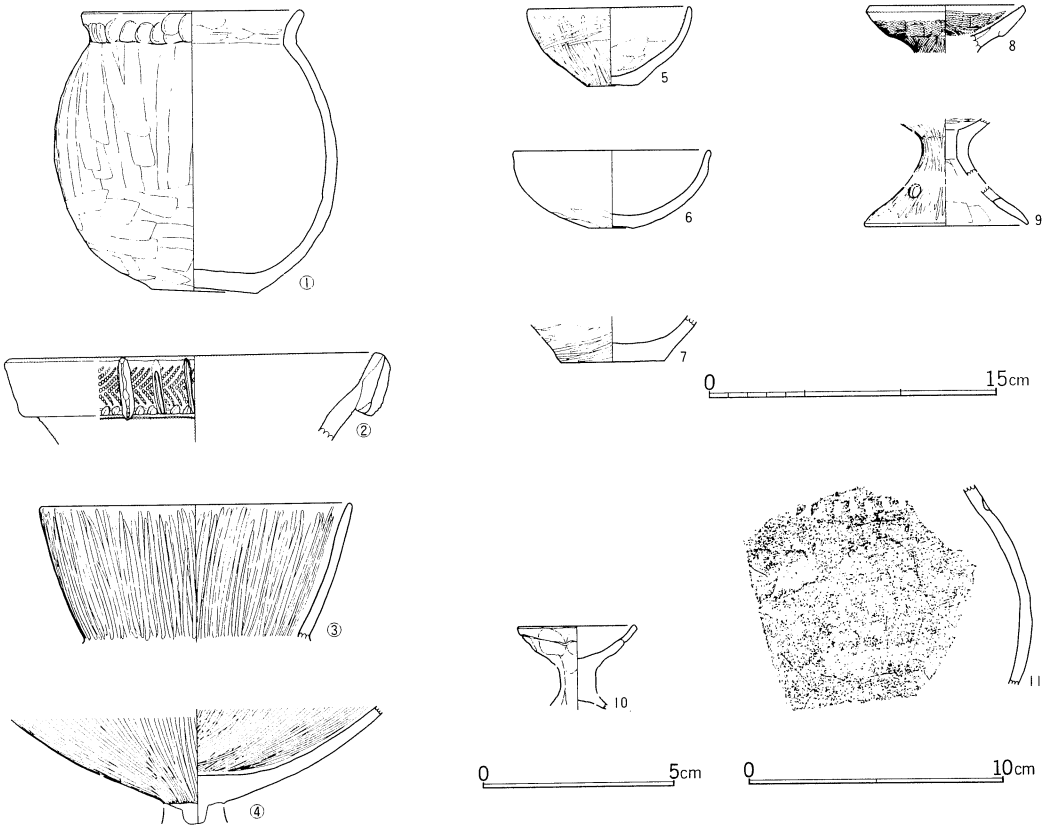
第72図　15号住居跡（1/80）

面が露呈した。また攪乱により一部破壊されている。住居竪穴の平面は、台形に近い長方形を呈す。長軸（主軸）3.71m、短軸3.21mを測る。面積は、確認面で11.50㎡、床面で11.08㎡である。主軸方位はN—31°—Wである。壁高は4㎝程度である。床は貼り床であり、掘り方は、周囲が若干深くなる傾向が認められた。柱穴は検出されなかった。炉は、掘り込みも浅く、底面もあまりやけていなかった。P1は、出入口施設に関連するものと考えられ、深さは15cmである。貯蔵穴は認められなかったが、攪乱部に位置する可能性もある。竪穴内、焼土・炭化物は認められなかった。

遺　物　小破片がわずかに出土しただけであり、図示できるものはない。

15号住居跡（第72・73図）

遺　構　住居竪穴の平面は、ほぼ方形を呈し、長軸7.60m、短軸（主軸）7.55mを測る。面積は、確認面で57.05㎡、周溝を含む床面で54.94㎡、内区（主柱穴内側）で17.70㎡を測る。主軸方位はN—36°—Wである。壁高は27～52cmである。床は貼り床であり、床面は全体的に硬質であった。東西周縁部は一段高くなり、いわゆるベッド状を呈す。その平面は、西側がコ字状になるのに対して、東側は一線状に区画される。床掘り方は、周縁部が深くなり、12・13層は黄褐色土層、12



第73図　15号住居跡出土遺物（1/4、1/2、1/3）

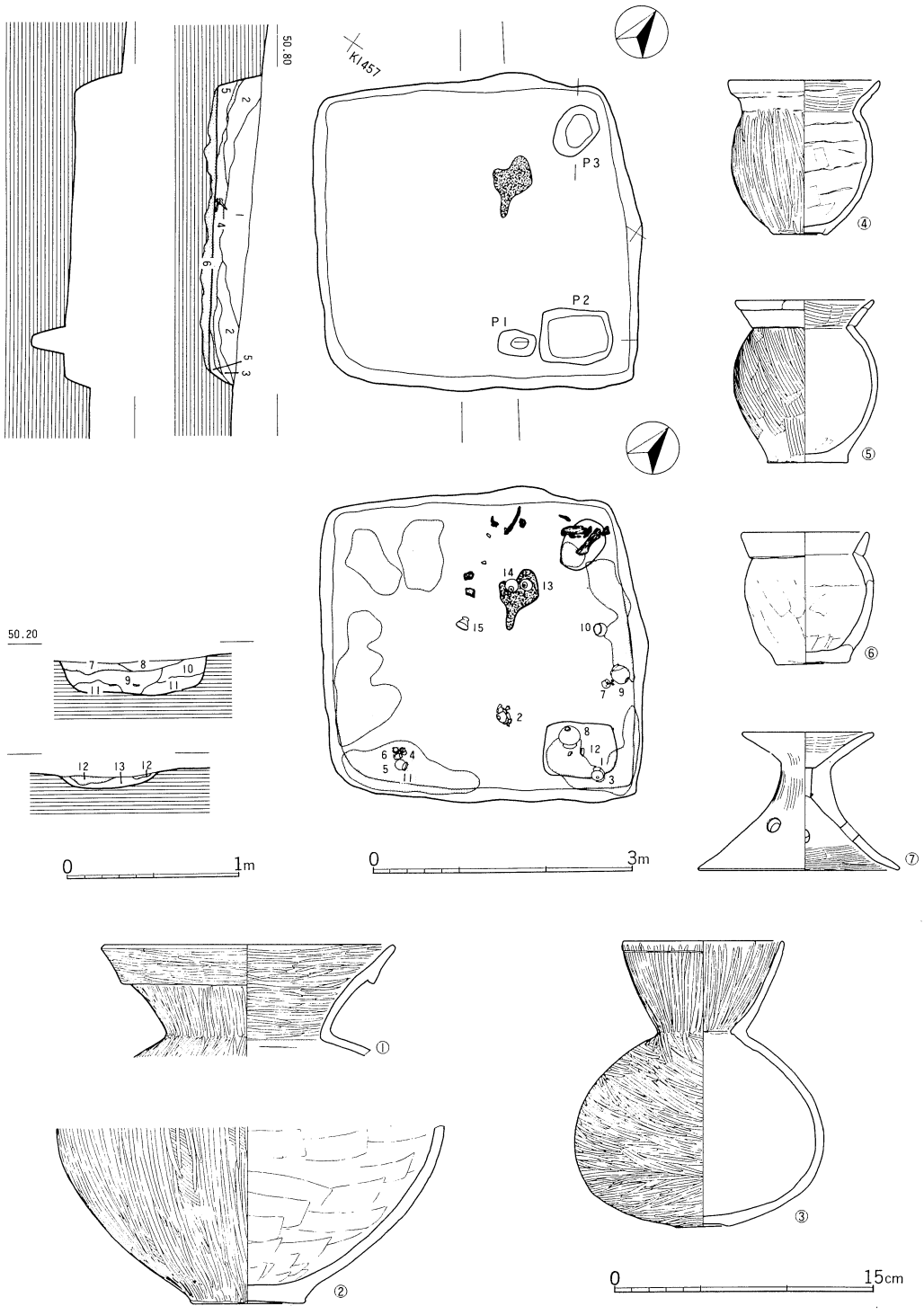
層は明黒褐色土層である。柱穴は、ほぼ対角線上に検出され、建て替えの痕跡が認められる。深さは、Ｐ１が68cm、Ｐ２が68cm、Ｐ３が92cm、Ｐ４が91cm、柱間は、Ｐ１・２が4.20m、Ｐ１・３が4.13m、Ｐ２・４が4.16m、Ｐ３・４が4.36mを測る。炉は、ほぼ主軸線上に認められ、規模は92×73cm、深さ10cmである。底面はよくやけていた。Ｐ６はいわゆる貯蔵穴であり、深さ29cmである。Ｐ５は出入口施設に関連すると考えられるものであり、深さ33cmを測る。周溝は、断続的に検出された。壁柱穴と考えられるものもあるが、いずれも浅い。竪穴内の土層は、１層が黒褐色土層、２層が明黒褐色土層、３・６・８層は暗黄褐色土層、４・５・７層は黄褐色土層であり、ロームブロック、ローム粒を多量に混合する。９層は、壁体部に関連するものか、サラサラのローム粒を主体とする。本住居は、焼土・炭化物は認められず、焼失の痕跡はない。全体として、ロームを主体とする黄褐色土が下層に認められ、これは、壁体部の崩落によるものと考えられるが、人為的なものかどうかは明らかではない。

遺　物　１～４が床面上から検出された。１・11は甕形土器、２は壺形土器、３は坩形土器、４は高杯形土器、５・６は椀形土器、８・９は器台形土器、10はミニチュア品である。

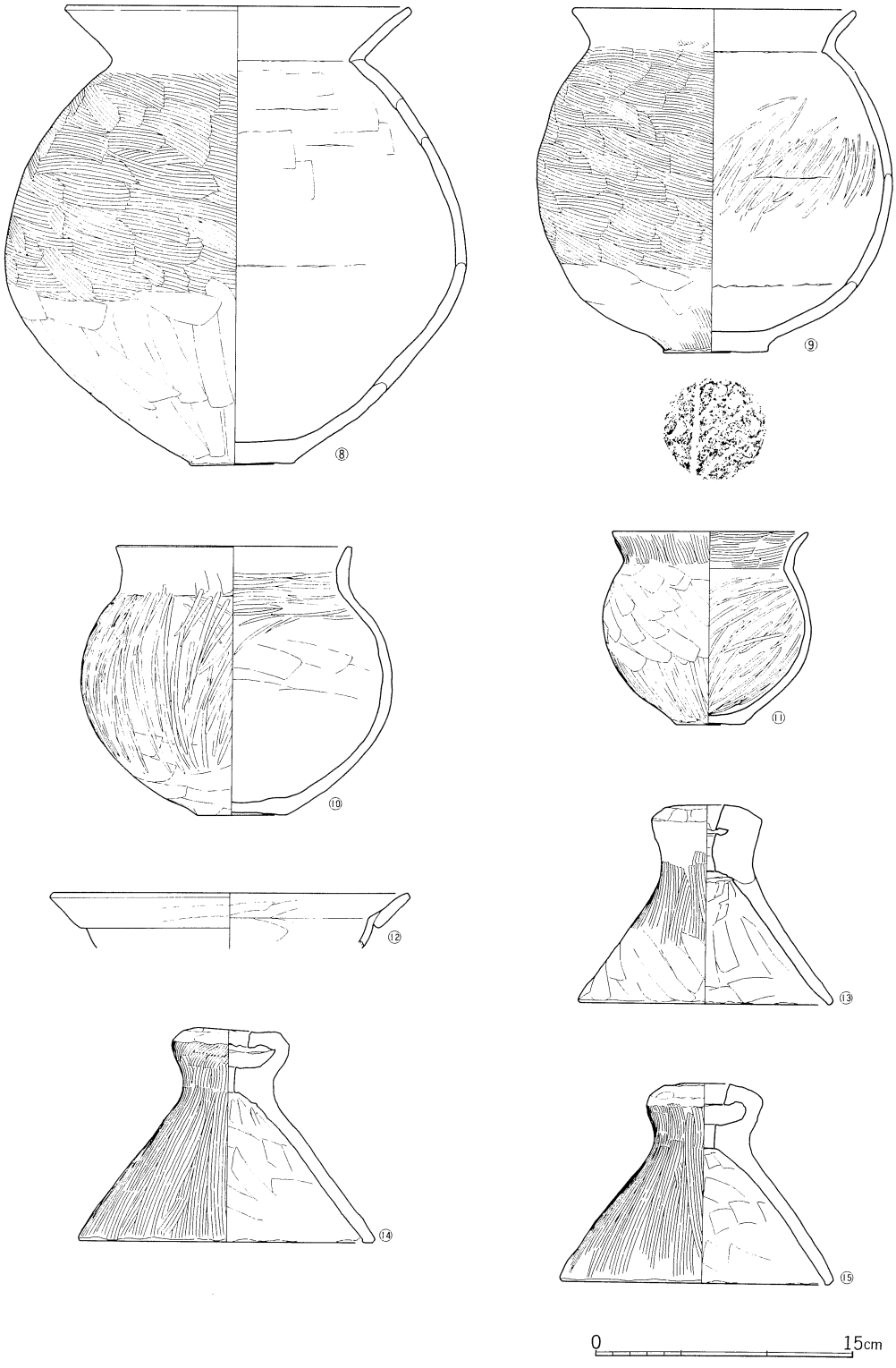
16号住居跡（第74・75図）

遺　構　住居竪穴の平面は、ほぼ方形を呈し、長軸3.76m、短軸（主軸）3.63mを測る。面積は、確認面で13.02㎡、床面で11.34㎡を測る。主軸方位はＮ－39°－Ｗである。壁高は27～52cmである。床は貼り床であり、全体的に硬質であった。柱穴は検出されなかった。炉は、主軸線上から西側に偏し、掘り込みは認められなかった。Ｐ１は、出入口施設に関連するものと考えられ、深さは39cmを測る。Ｐ２は、いわゆる貯蔵穴と考えられるものであり、規模は85×64cm、深さ23cmである。Ｐ３も、貯蔵穴の可能性があるが、掘り込みは浅く、深さ８cmである。周溝は明確に検出することができなかった。竪穴内の土層は、１層は黒褐色土層、２層は明黒褐色土層、３層は若干の焼土粒・炭化物を含む明黒褐色土層、４層は焼土を主体とする層、５層はローム粒を多量に混合する暗黄褐色土層である。５層には、焼土はほとんど認められない。６層は貼り床部であり、大形のロームブロックを多量に混合する明黒褐色土層である。Ｐ２・３内の土層は、７層が焼土層、８層が黒褐色土層、９層が明黒褐色土層、10・11層が暗黄褐色土層、12層が炭化物層、13層が暗黄褐色土層である。Ｐ２・３とも上層部に焼土、炭化物が認められ、その下層には明確ではなかった。

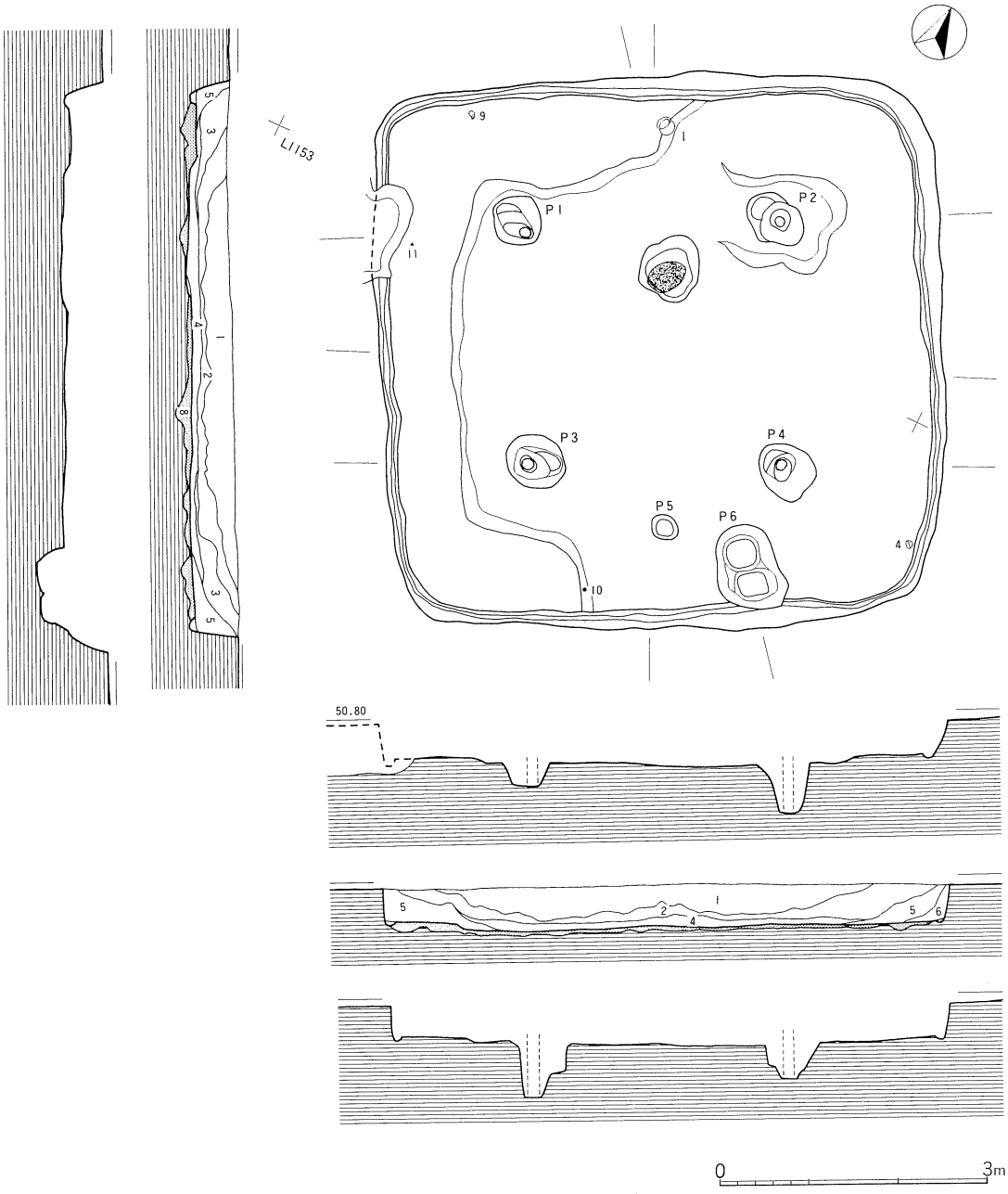
遺　物　いずれも床面上ないしは貯蔵穴内から出土した。基本的に、原位置を示すものと考えられる。１は、３をのせ、器台として使用されているが、貯蔵穴上、ほぼ床面レベルより出土している。８は、貯蔵穴内、上層部にある。１・２は壺形土器、３～６は坩形土器、７は器台形土器、８～11は甕形土器、12は甑形土器、13～15は支脚形土器である。



第74図　16号住居跡(1/80、1/40)、出土遺物(1)(1/4)



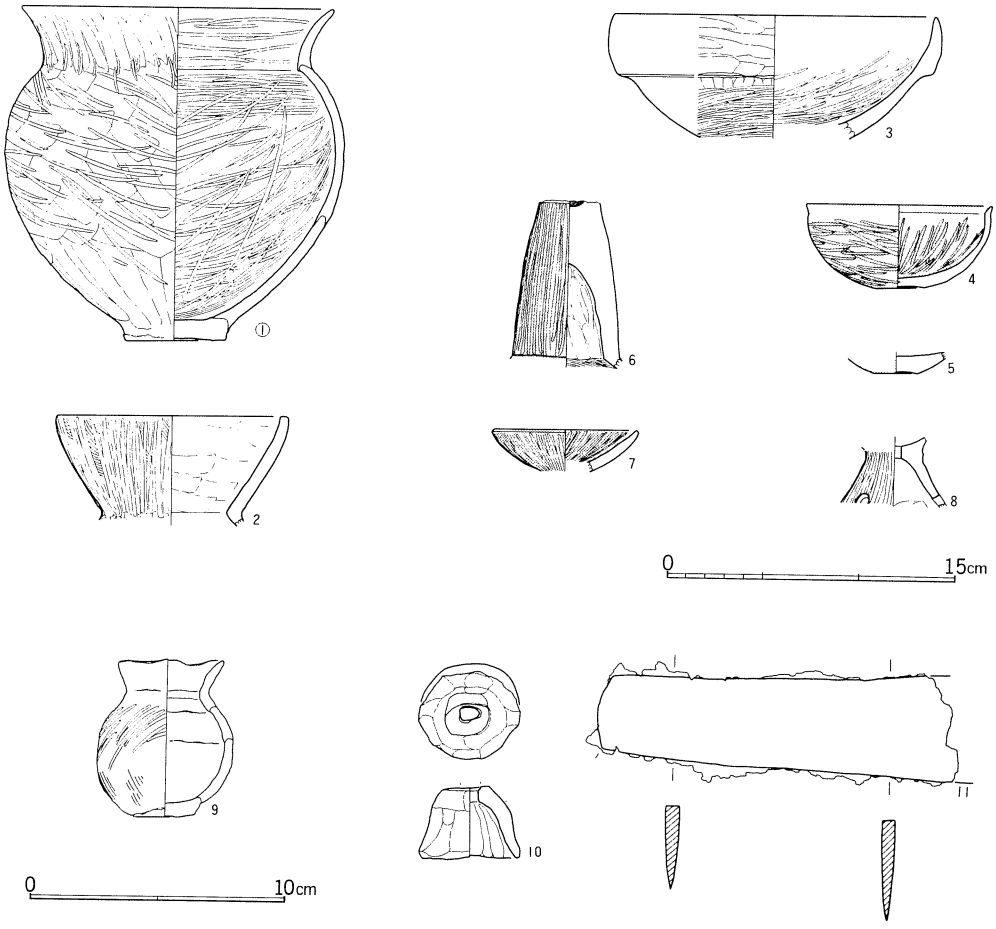
第75図　16号住居跡出土遺物(2)（1/4）



第76図　18号住居跡（1/80）

18号住居跡（第76・77図）

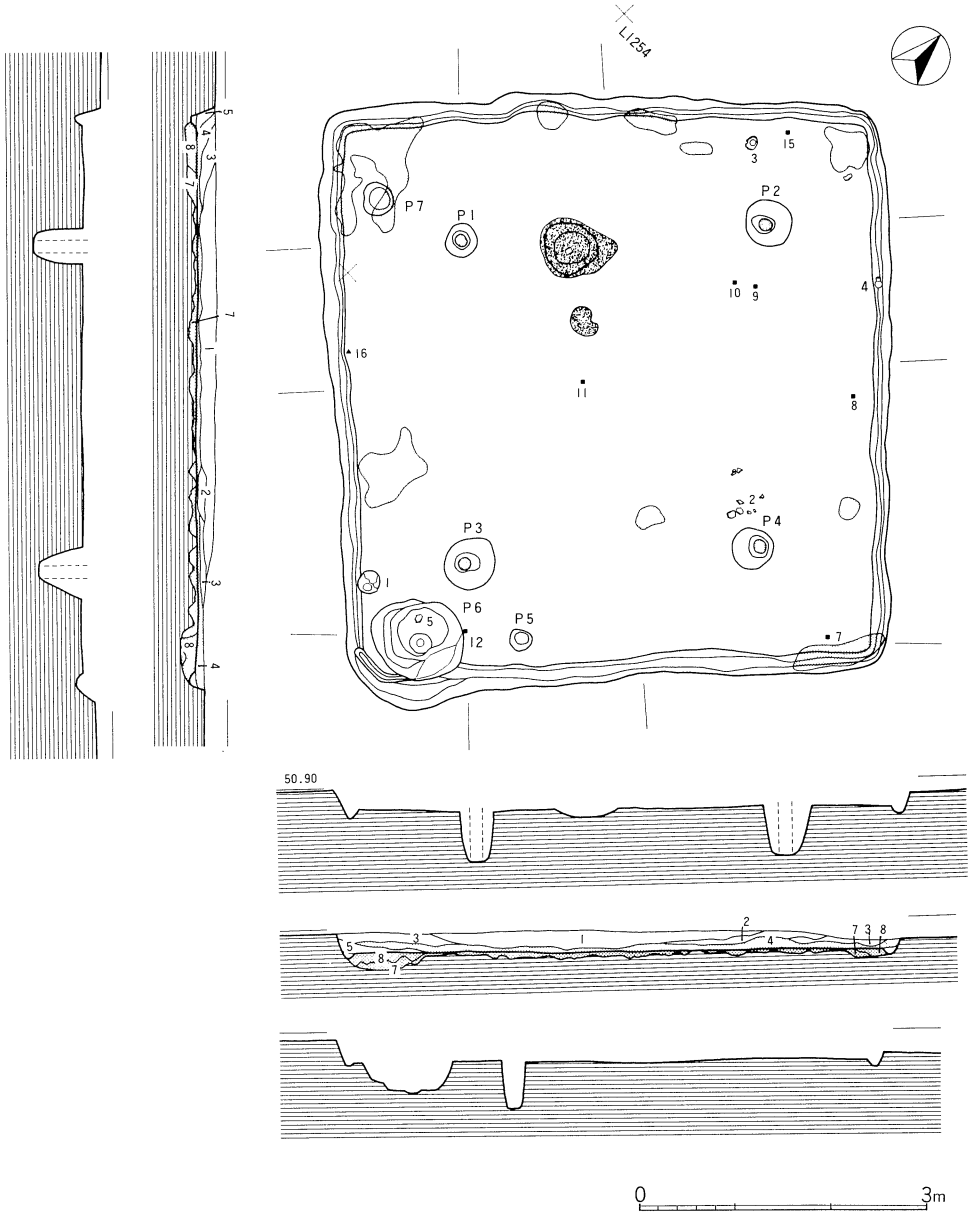
遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸6.34m、短軸（主軸）6.31mを測る。面積は、確認面で38.74㎡、周溝を含む床面で36.41㎡、内区（主柱穴内側）で7.79㎡を測る。主軸方位はN—26°—Wである。壁高は40～48cmである。床は貼り床であり、床面は全体的に硬質であった。西側周縁部は一段高くなり、いわゆるベッド状を呈す。床掘り方は、周縁部が深くなる。柱穴は、



第77図　18号住居跡出土遺物(1/4、1/3、1/2)

ほぼ対角線上に検出され、建て替えの痕跡が認められる。深さはＰ１（新）が29cm、（古）が26cm、Ｐ２（新）が57cm、（古）が29cm、Ｐ３（新）が60cm、（古）が32cm、Ｐ４（新）が37cm、（古）が24cmである。新期の柱間は、Ｐ１・２が2.89m、Ｐ１・３が2.64m、Ｐ２・４が2.79m、Ｐ３・４が2.88mである。Ｐ５は深さ25cmを測る。Ｐ６は、底面が２段となり、深さは、北が24cm、南が22cmである。炉は、ほぼ主軸線上に検出された。底面はよくやけており、深さは５cmを測る。竪穴内の土層は、１・３層が黒褐色土層、２・４・５層が明黒褐色土層、６層は粒状の黄褐色土層である。周溝部７層は、ブロック状の暗黄褐色土層、貼り床部８層は、明黒褐色土を地層とし、ロームブロックを混合する。覆土内には、焼土等は認められなかった。

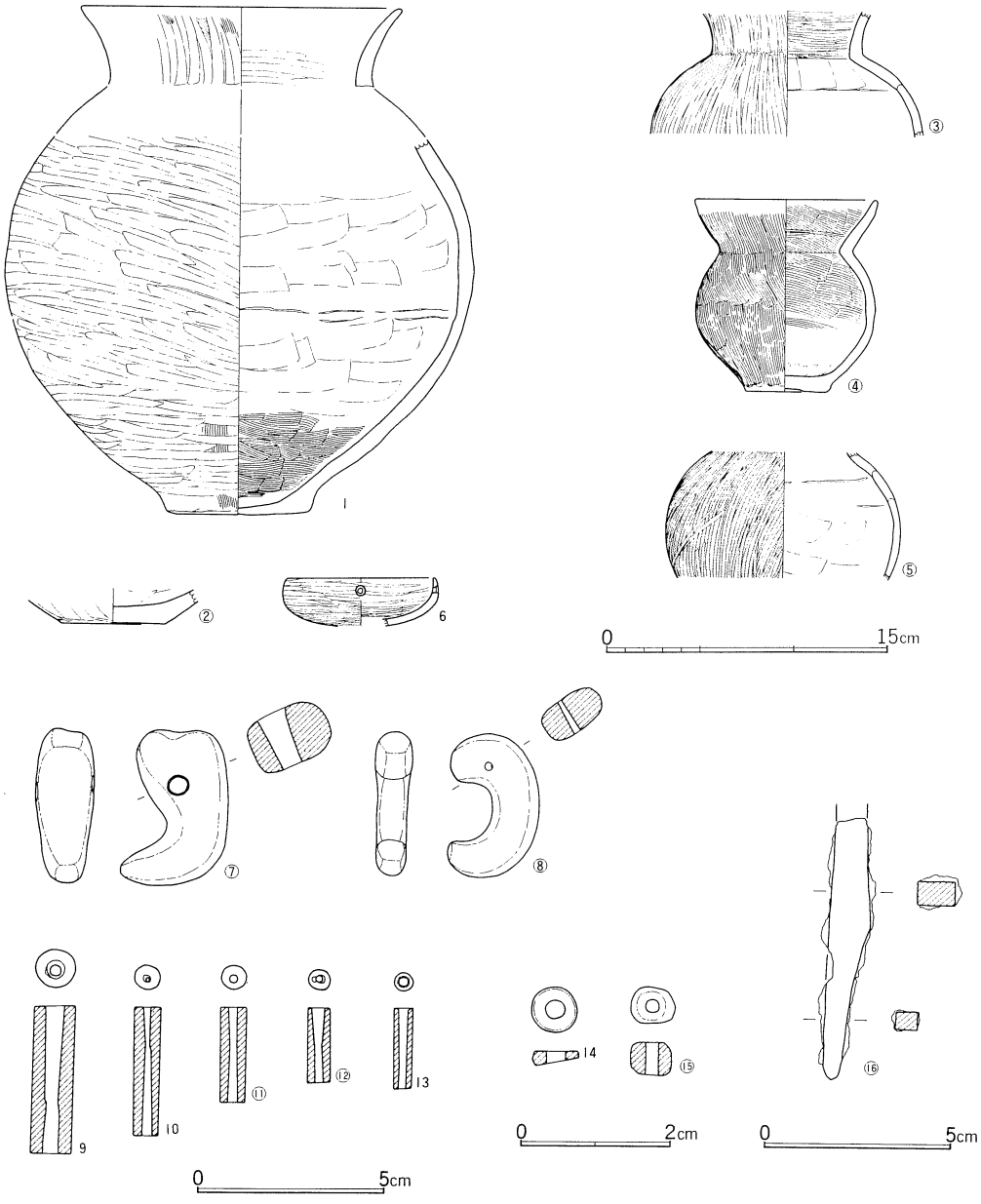
遺　物　１が、床面上より出土した。１は甕形土器、２・５は坩形土器、３・４は椀形土器、６は高杯形土器、７・８は器台形土器、９はミニチュア品である。10は、有孔の土製品であるが、性格は不明である。11は鎌と考えられるが、基部が欠損している。



第78図　19号住居跡（1/80）

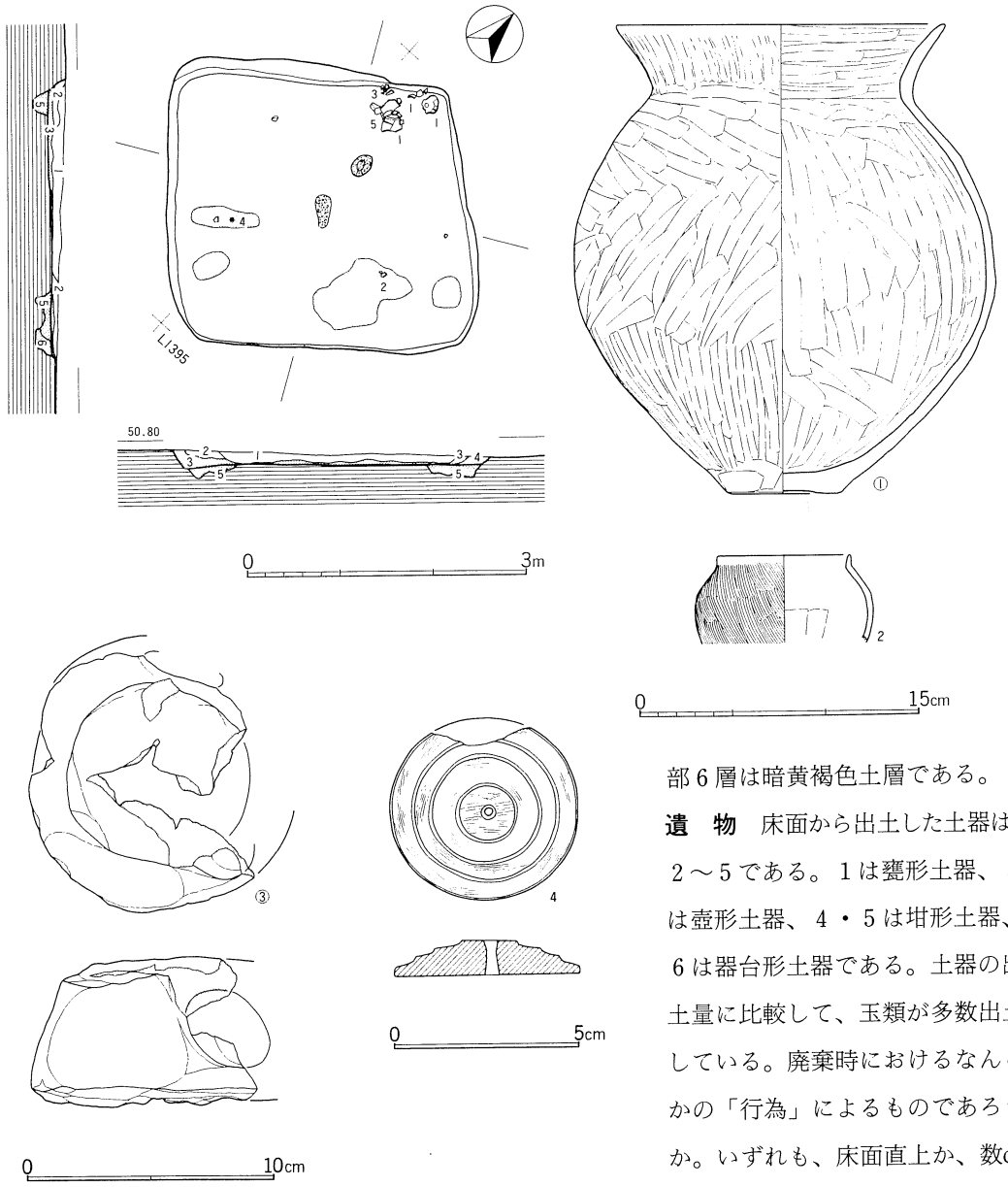
19号住居跡（第78・79図）

遺　構　住居竪穴の平面は、ほぼ方形を呈し、長軸（主軸）6.15m、短軸5.85mを測る。面積は、確認面で37.92㎡、周溝を含む床面で34.27㎡、内区（主柱穴内側）で10.77㎡を測る。主軸方位はN—49°—Wである。壁高は8～24cmである。床は貼り床であり、全体的に軟質であった。掘り方は、周囲が深くなり、土層は、7層が黄褐色土層、8層が明黒褐色土層である。柱穴は、ほぼ対角線上に検出され、深さは、P1が52cm、P2が53cm、P3が44cm、P4が44cmである。建て替



第79図　19号住居跡出土遺物(1/4、1/1、1/2)

えはない。柱間は、Ｐ１・２が3.24m、Ｐ１・３が3.41m、Ｐ２・４が3.41m、Ｐ３・４が3.12mである。他に、Ｐ７は深さ35cm、出入口施設に関連すると考えられるＰ５は51cmを測る。炉は、主軸線上から西側で検出された。底面は、その周囲を含めてよくやけていた。その南側にも床がやけている部分が確認された。Ｐ６は、いわゆる貯蔵穴であり、深さは33cmを測る。底面は南西側が一段テラス状になり、また下面は乳頭状になる。竪穴内の土層は、１層が黒褐色土層、２層が暗黄褐色土層、３層が明黒褐色土層、４層が焼土を主体とする層、５層が暗黄褐色土層、周溝



第80図　20号住居跡(1/80)、出土遺物(1/4、1/3、1/2)

部6層は暗黄褐色土層である。

遺　物　床面から出土した土器は、2～5である。1は甕形土器、3は壺形土器、4・5は坩形土器、6は器台形土器である。土器の出土量に比較して、玉類が多数出土している。廃棄時におけるなんらかの「行為」によるものであろうか。いずれも、床面直上か、数cmういているだけである。16は、刀子状であるが、刃部が認められない。

20号住居跡（第80図）

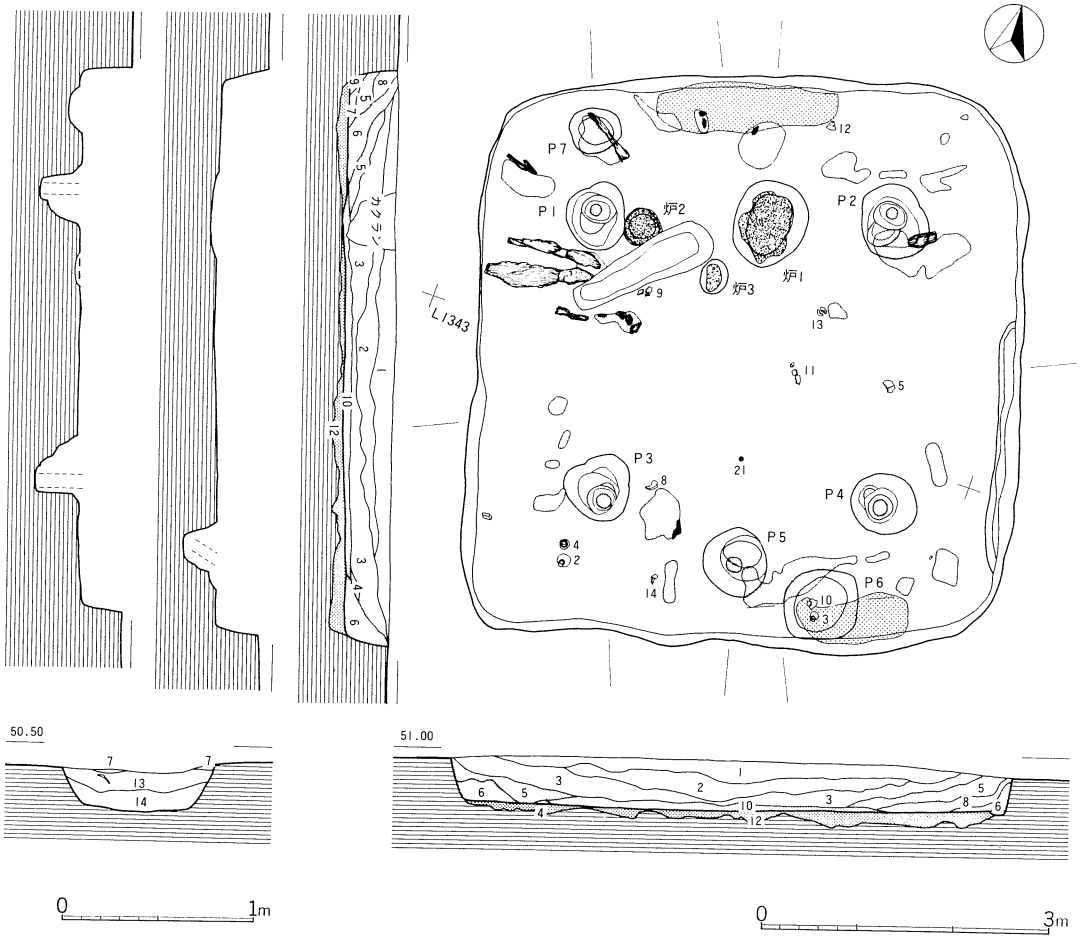
遺　構　住居竪穴の平面は、やや変形の隅丸方形を呈し、長軸3.24m、短軸（主軸）3.12mを測る。面積は、確認面で9.83m²、床面で8.79m²である。主軸方位はN－47°－Wである。壁高は9～19cmを測る。床は貼り床であり、掘り方は周縁部が深くなる。5層は黄褐色土層、6層はロームブロックを多量に混合する暗黄褐色土層である。柱穴等は検出されなかった。炉と考えられるもの

は２か所あり、北側のものは27×19cm、深さ４cmである。中央のものは掘り込みがない。竪穴内の土層は、１・４層は暗黄褐色土層、２層は明黒褐色土層、３層は焼土を主体とする層である。本住居は、焼失したものと考えられる。

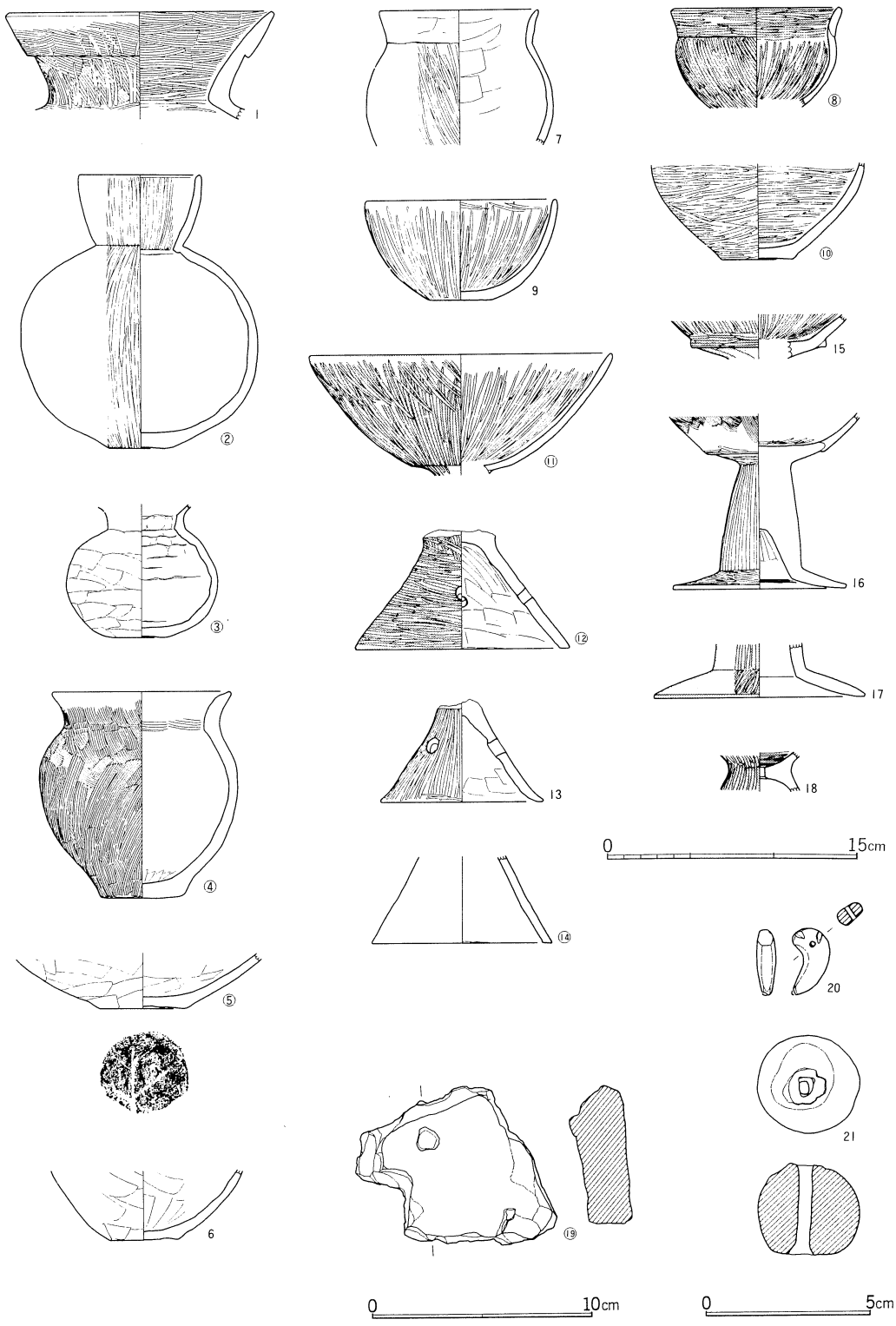
遺　物　１・３が床面上から出土している。１は甕形土器、２は椀形土器である。３の土製品は、支脚の可能性がある。側面に２か所に凹部が認められる。他に１点土製品が出土しているが、形状は復原できない。４は、紡錘車形の石製品であり、焼土上より検出された。

21号住居跡（第81・82図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸（主軸）5.96m、短軸5.75mを測る。面積は、確認面で33.54㎡、周溝を含む床面で31.43㎡、内区（主柱穴内側）で9.40㎡を測る。主軸方位はN－17°－Wである。壁高は35～58cmである。床は貼り床であり、掘り方は、周縁部が若干深くなる傾向がみられる。貼り床部12層は、暗黄褐色土層である。柱穴は、ほぼ対角線上に検出された。建て替えの痕跡が認められる。深さは、Ｐ１（新）が42cm、（古）が32cm、Ｐ２（新）が48cm、（古）



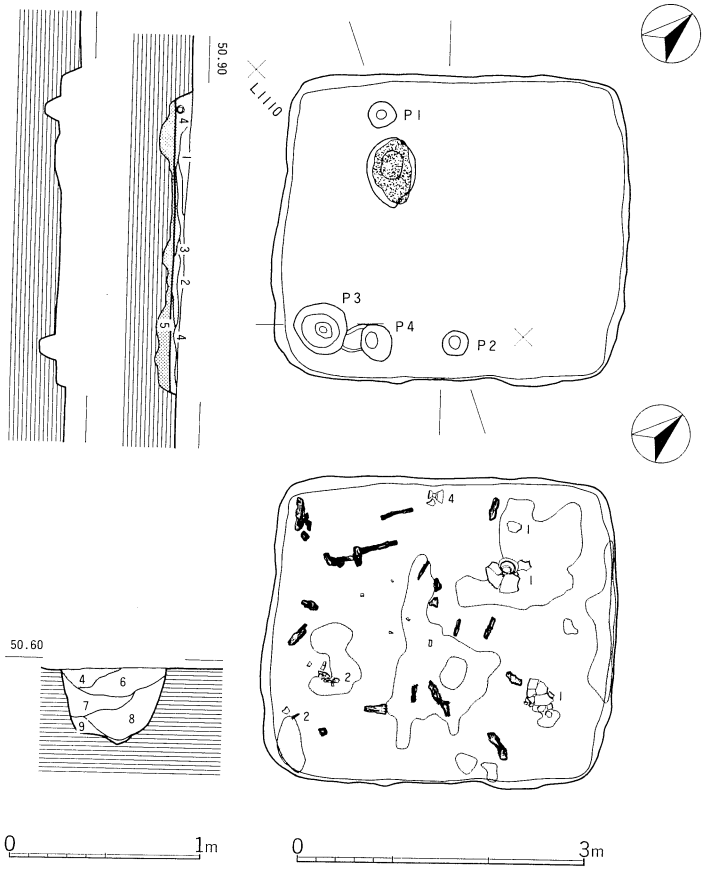
第81図　21号住居跡（1/80、1/40）



第82図　21号住居跡出土遺物(1/4、1/3、1/2)

が37cm、Ｐ３（新）が45cm、（古）が40cm、Ｐ４（新）が54cm、（古）が33cmである。新期の柱間は、Ｐ１・２が3.12m、Ｐ１・３が3.11m、Ｐ２・４が3.13m、Ｐ３・４が2.92mを測る。炉は３か所検出された。炉は１は92×76cm、深さ９cm、炉２は40×39cm、深さ３cm、炉３は36×27cm、深さ３cmであり、とくに炉１底面はよくやけていた。先後関係、同時性は明らかではない。Ｐ５は、出入口施設に関連するものであり、床面、底面の痕跡から、斜位に埋置されていたことがわかる。Ｐ６はいわゆる貯蔵穴であり、深さ26cmを測る。堆積土層は、13層が若干の焼土粒を含む明黒褐色土層、14層はローム粒を混合する黒褐色土層である。竪穴内の土層は、１・３・５・10層が明黒褐色土層、２層は黒褐色土層、６・８層は暗黄褐色土層、７・９層は黄褐色土層、４層は焼土層である。５・６層にも多量の焼土が混合し、10層は焼土とともに炭化物を含む。また７層は、均質の粘性のあるソフトローム状であり、これは北壁際、および貯蔵穴上に認められた。本住居は焼失したものと考えられるが、焼土の堆積は、数次にわたる。

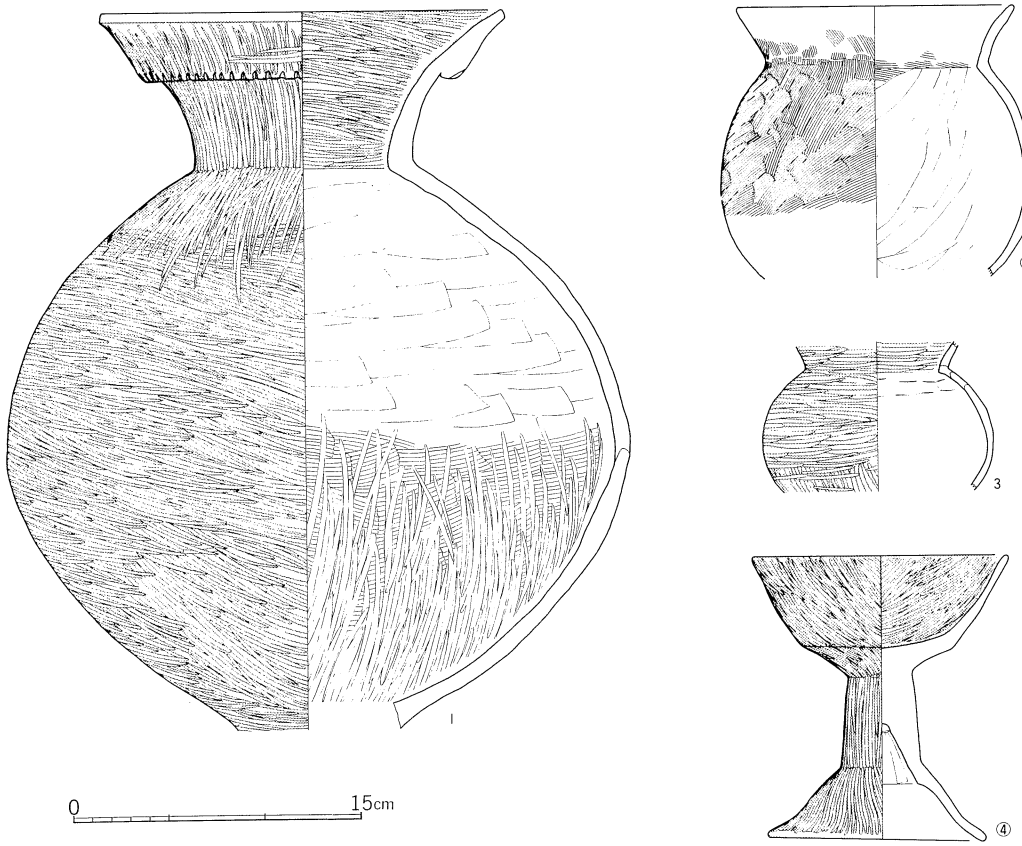
遺　物　１～５・８・10～12・14が床直上及び貯蔵穴内から検出された。また、覆土からは、小破片が多いものの、比較的多数の土器が出土している。１・７が壺形土器、４・５が甕形土器、２・３・６が坩形土器、８～10が椀形土器、11～17が高杯形土器、18が器台形土器である。19は、炉１内より出土した土製品であるが、あるいは鳥形とも考えられる。他に勾玉、土玉が出土している。



第83図　22号住居跡（1/80、1/40）

22号住居跡（第83･84図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸長方形を呈し、長軸3.67m、短軸（主軸）3.20mを測る。面積は、確認面で11.60㎡、床面で10.72㎡を測る。主軸方位はＮ―43°―Ｗである。壁高は８～20cmである。床は貼り床であり、床面は全体に硬質であった。掘り方は、周囲が深くなる。主柱穴と考えられ



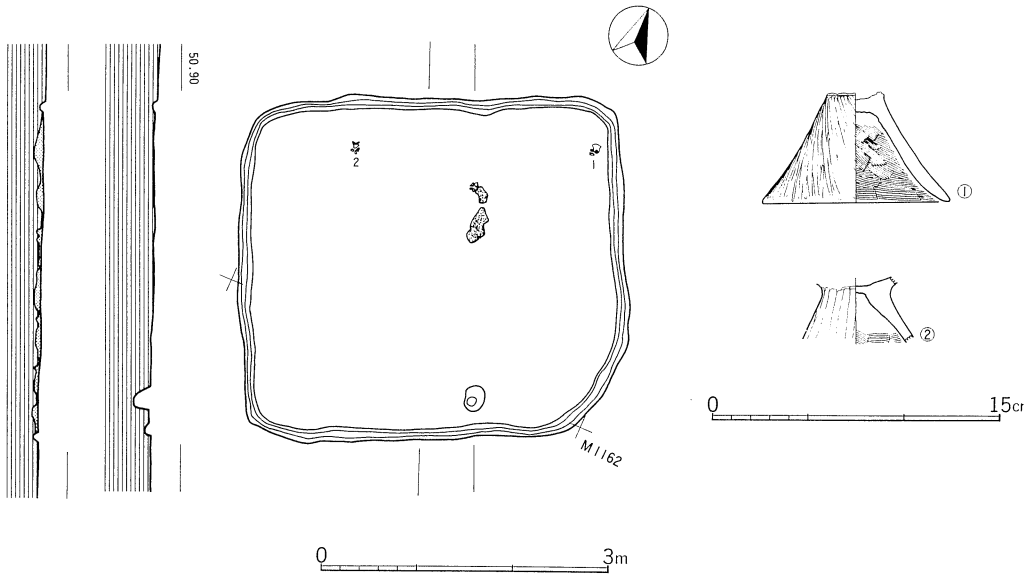
第84図　22号住居跡出土遺物（1/4）

るものは検出されなかった。Ｐ１は深さ14cm、Ｐ２は17cm、Ｐ４は40cmである。Ｐ４は、掘り方面において検出された。Ｐ３はいわゆる貯蔵穴であり、深さ49cmを測る。断面は乳頭状を呈す。竪穴内の土層は、１層が明黒褐色土層、２層が黒褐色土層、３・４層が焼土を主体とする層であり、３層はとくに密度が濃い。また貯蔵穴内４層は焼土層、６・７層は明黒褐色土層、８・９層は暗黄褐色土層である。焼土粒は、６層には若干みられるものの、以下の層では認められなかった。本住居は、焼失したものと考えられる。

遺　物　２・４が床面上より出土した。１は、焼土上より検出された。１は壺形土器、２は甕形土器、３は坩形土器、４は高杯形土器である。

23号住居跡（第85図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸長方形を呈し、長軸4.03m、短軸（主軸）3.63mを測る。面積は、確認面で14.27㎡、床面で13.64㎡を測る。主軸方位はＮ―24°―Ｗである。遺存状態は不良であり、確認段階で床面が露呈した。床は、貼り床であり、床面は全体的に硬質であった。掘り方は、全体としては平坦であるが、東側周縁部がやや深くなる。柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。炉は、主軸線上からやや東側で確認された。掘り込みは認められないが、板状のハードロームを



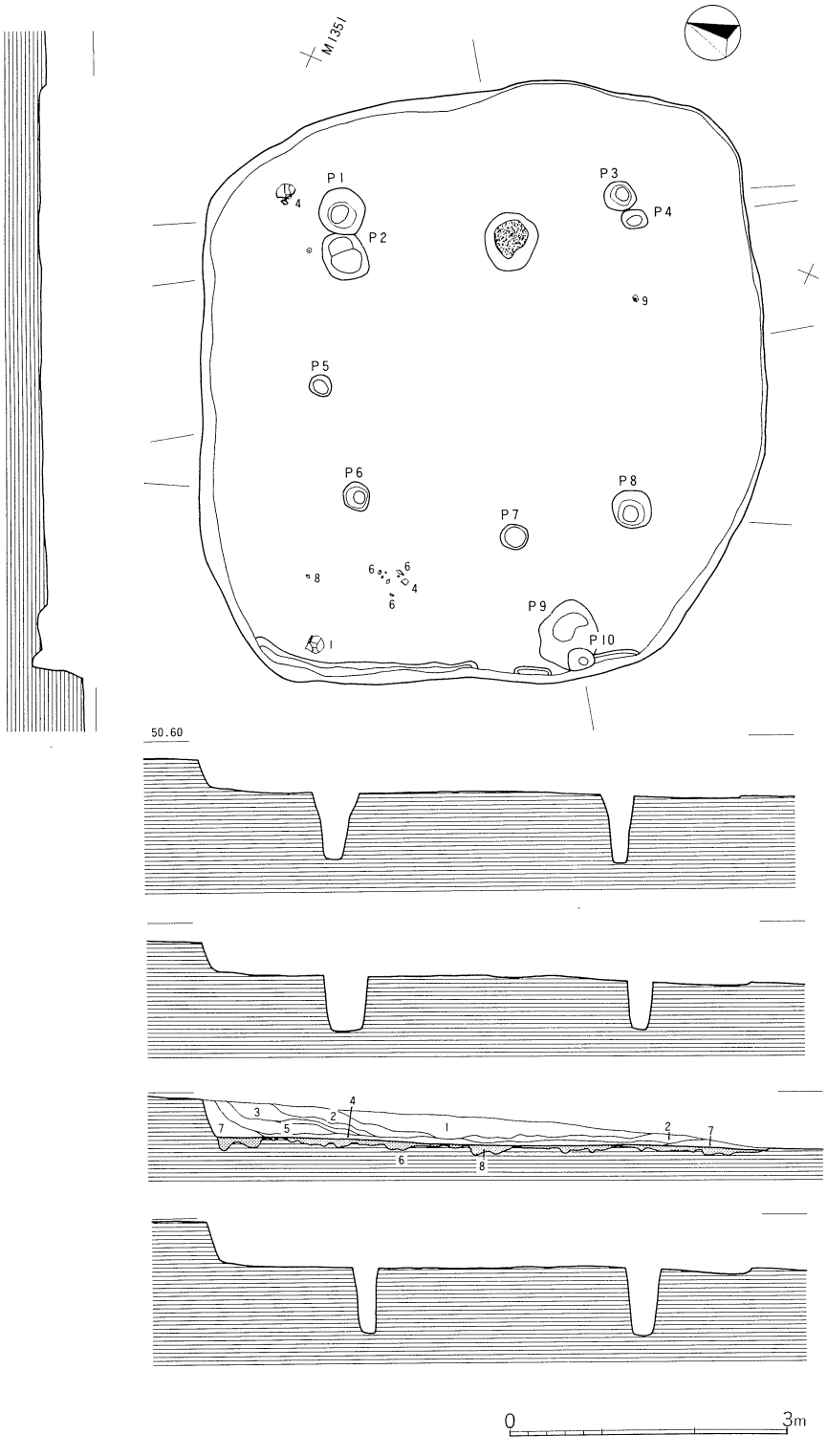
第85図　23号住居跡(1/80)、出土遺物(1/4)

敷いている。出入口施設に関連すると考えられるピットは、深さ15cmを測る。周溝は全周し、幅9～14cm、深さ3～5cmである。覆土の状態は不明であるが、焼土、炭化物の付着は認められなかった。

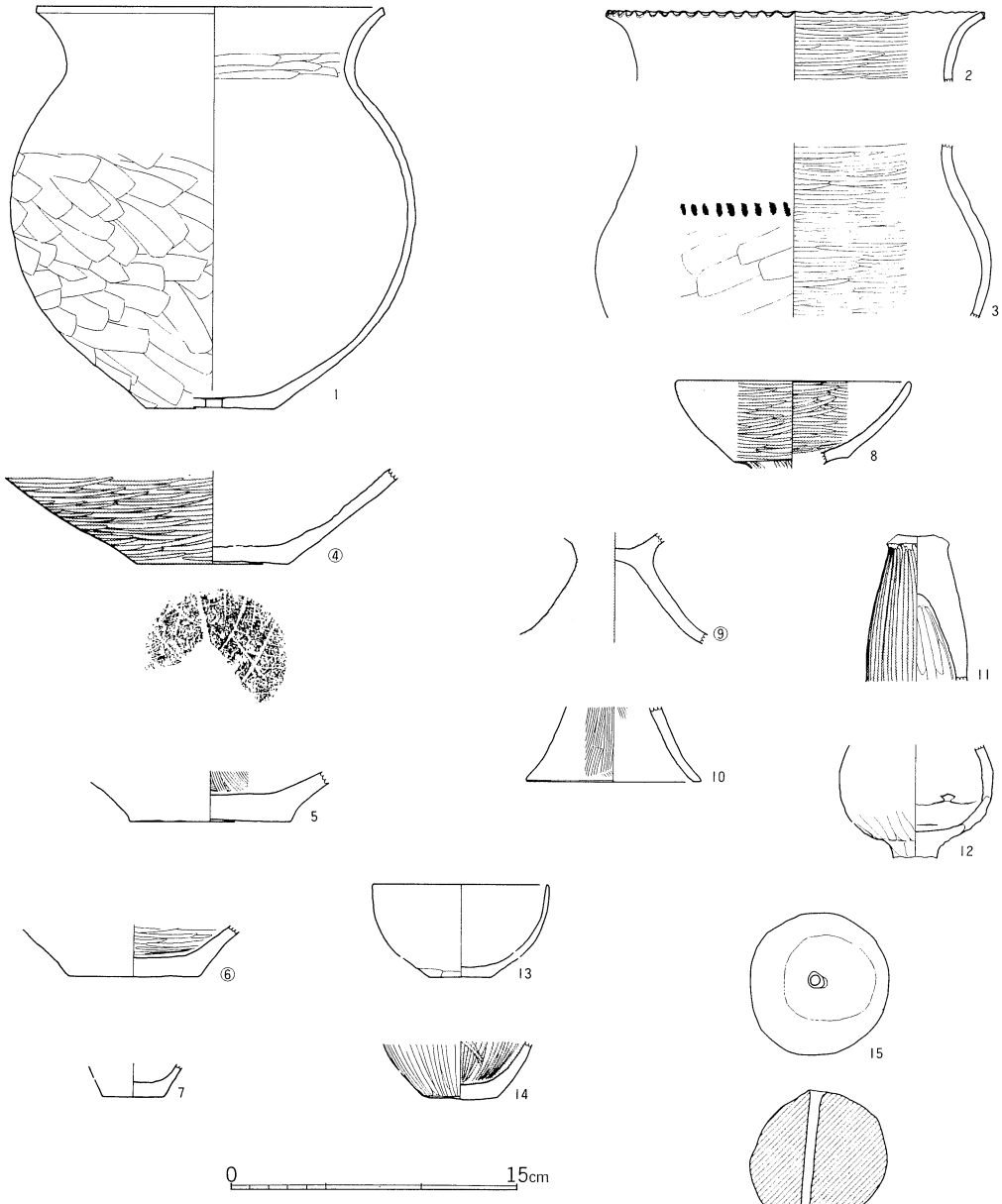
遺　物　1・2の床面に密着して検出された。1は高杯形土器である。2も高杯形土器の可能性があるが特定できない。

24号住居跡（第86・87図）

遺　構　住居竪穴の平面は、やや変形した隅丸長方形を呈し、長軸（主軸）6.52m、短軸6.18mを測る。面積は、確認面で36.99m²、周溝を含む床面で34.86m²、内区（主柱穴内側）で10.30m²である。主軸方位はN－64°－Eである。壁高は3～36cmを測る。床は貼り床であり、床面は6.18mであった。掘り方面は、凹凸がはげしいが、周囲が深くなる傾向はみられない。主柱穴は、P1・2、P3・4、P6、P8であり、P1・2、P3・4は建て替えによるものと考えられる。P2、P4が古期のものであり、掘り方面において検出した。ただし、P6、P8には、建て替えの痕跡が認められない。深さは、P1が73cm、P2が55～60cm、P3が70cm、P4が46cm、P5が40cm、P6が77cm、P7が48cm、P8が79cmである。P5、P7も掘り方面において検出した。柱痕は明確ではなかったが、新期の柱間は、P1・3が3.12m、P1・6が3.16m、P3・8が3.53m、P6・8が3.01m程度である。P9はいわゆる貯蔵穴と考えられるが、不定形を呈す。P9は深さ12cm、P10は18cmである。炉は、主軸線上からやや南側にある。規模は64×60cm、深さ4cmを測る。周溝は西壁際で検出されたが、全体として不明確であった。竪穴内の土層は、1



第86図　24号住居跡（1/80）



第87図　24号住居跡出土遺物（1/4、1/2）

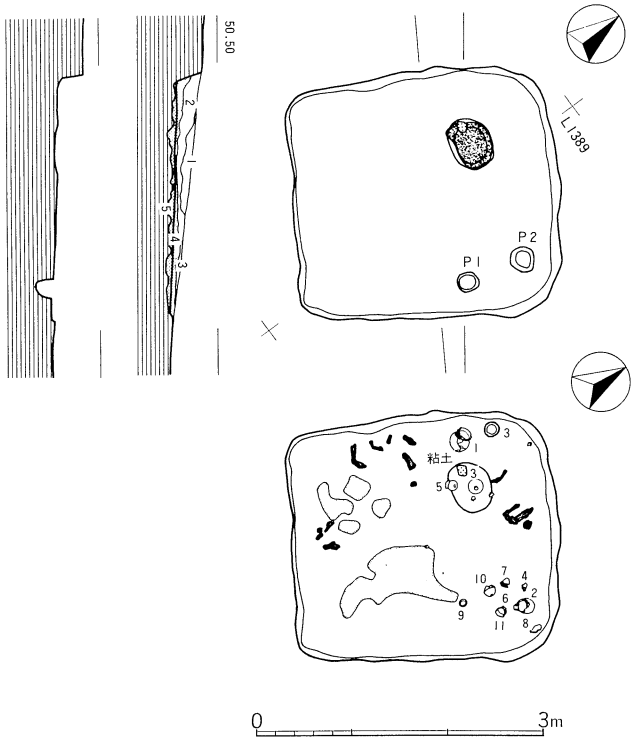
層が黒褐色土層、2・3層が明黒褐色土層であり、その変化は漸移的である。4層は黄褐色土層、5～7層は暗黄褐色土層であり、7層は全体として粒状であった。覆土内に、焼土・炭化物は認められず、火災の痕跡はない。

遺　物　床面上から出土した遺物は少なく、4・6だけである。1は甑形土器、2・3・6は甕形土器、4・5は壺形土器、8～11は高杯形土器、13・14は椀形土器、12は、台付のミニチュア

品である。1の甑形土器は甕形土器の転用であり、底部の一孔は、焼成後の穿孔である。15は土玉であり、覆土中からの出土である。

25号住居跡（第88・89図）

遺　構　住居竪穴の平面は、ほぼ隅丸の方形を呈し、長軸2.83m、短軸（主軸）2.63mを測る。面積は、確認面で7.07㎡、床面で6.40㎡を測る。主軸方位はN－60°－Wである。壁高は4～27cmである。床は貼り床であり、床面は東側が比較的硬質であった。掘り方は、全体としては平坦であり、周縁部が深くなる傾向は認められない。主柱穴と考えられるものは検出されていない。P1は深さ22cm、P2は28cmである。P1は、出入口施設に関連するものと考えられる。炉は、主軸線上に対して北東側に偏している。規模は52×46cm、深さ2cmである。底面はよくやけていた。炉北西部には、表面のやけた粘土塊がおかれている。周溝は検出されなかった。竪穴内の堆積土層は、1層が暗黄褐色土層、2層が明黒褐色土層、3層が暗黄褐色土層、4層が焼土粒、炭化物を多量に混合する明黒褐色土層である。本住居は、焼失したものと考えられる。

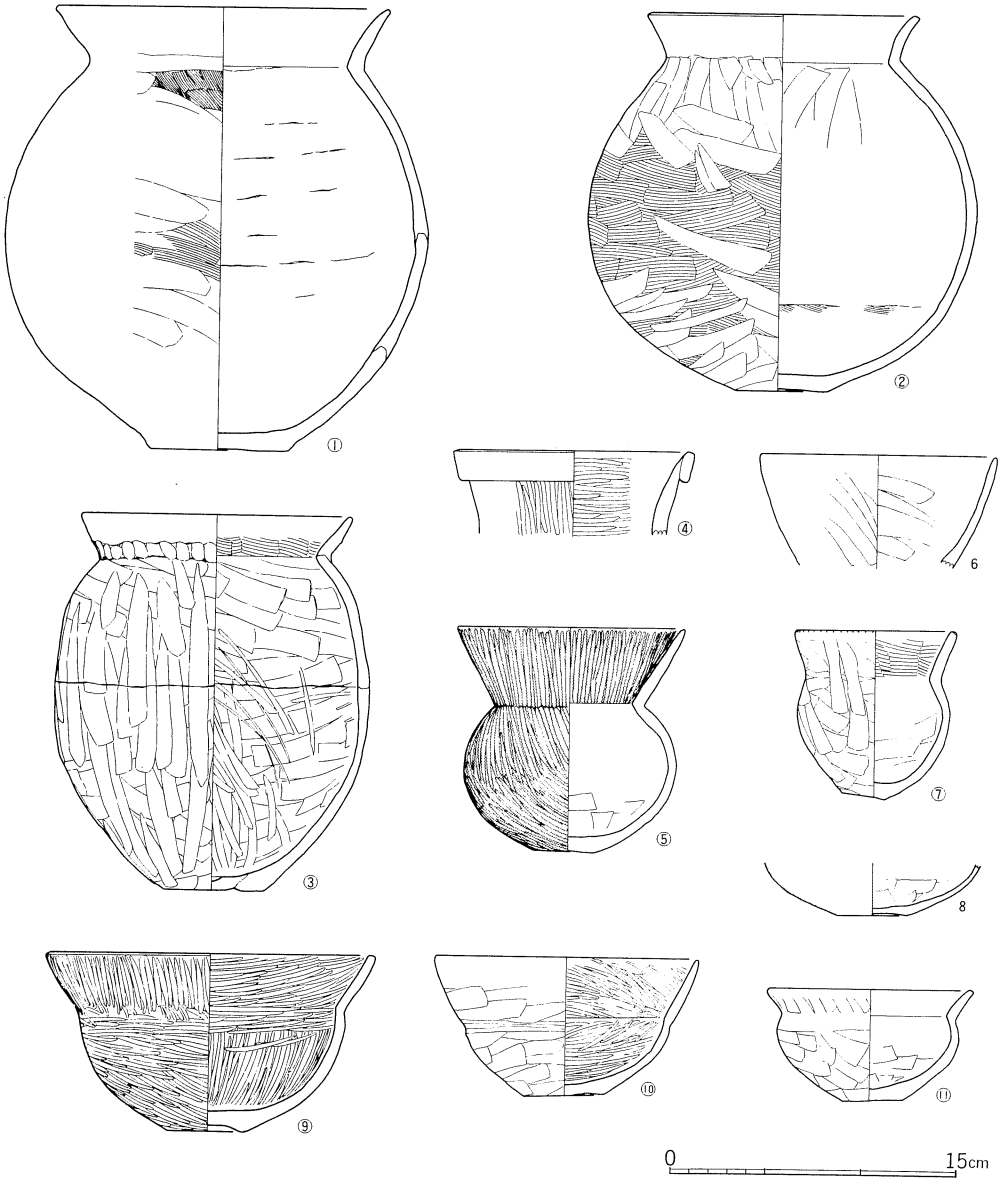


第88図　25号住居跡（1/80）

遺　物　6・8を除き、いずれも床面上より出土した。また床面上の土器は、4を除き完形ないしはそれに近い。1～3は甕形土器、4は壺形土器、5～11は坩形土器である。3は、上下分離して出土し、下半部は炉内に、上半部は北西壁際より出土している。上半部は器台、下半部は椀として使用されたものであろうか。7は、P2より出土している。

26号住居跡（第90図）

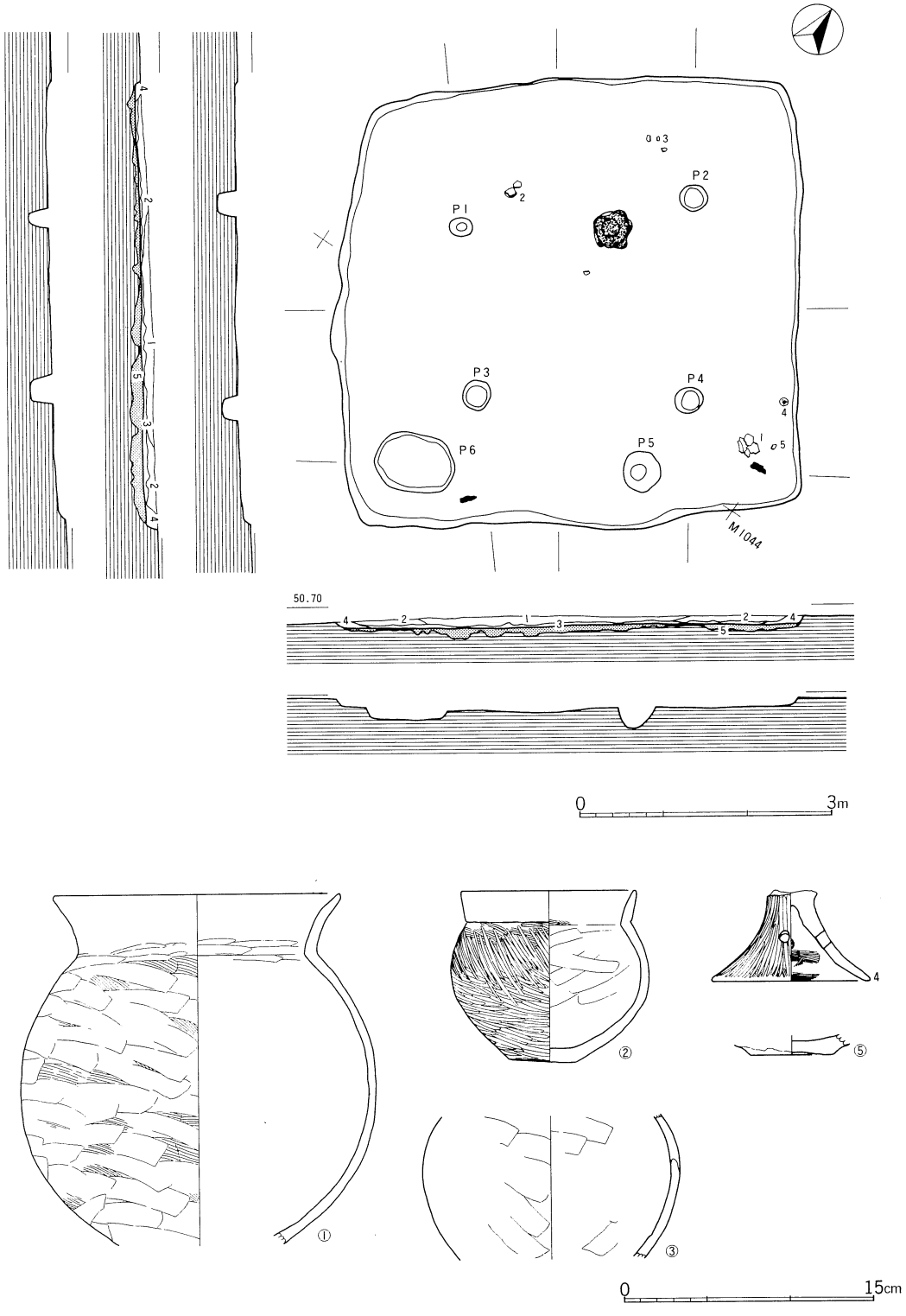
遺　構　住居竪穴の平面は、ほぼ方形を呈し、長軸5.60m、短軸（主軸）5.47mを測る。面積は、確認面が29.60㎡、床面が27.97㎡、内区（主柱穴内側）は6.20㎡である。主軸方位はN－32°－Wである。壁高は10cm前後である。床は貼り床であり、全体的に軟弱であった。掘り方は、南側周縁部がやや深くなる。主柱穴は、ほぼ対角線上に検出された。いずれも浅く、P1は24cm、P2は23cm、P3は27cm、P4は19cmである。柱痕は確認できなかったが、柱間は、P1・2が2.84m、P1・3は2.11m、P2・4は2.47m、P3・4は2.60m程度になる。P6は、いわゆる貯



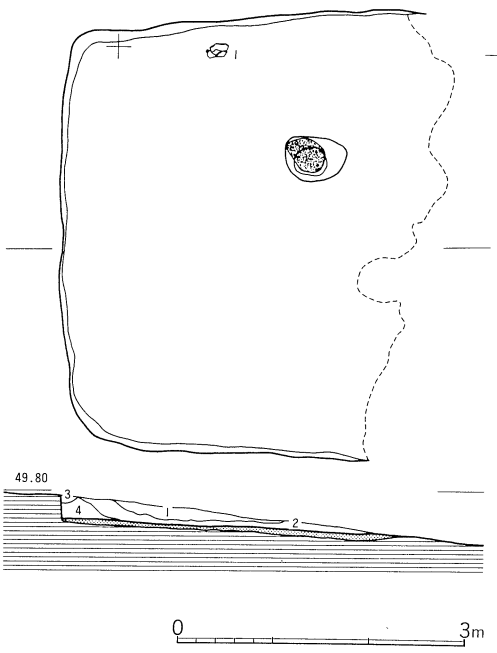
第89図　25号住居跡出土遺物（1/4）

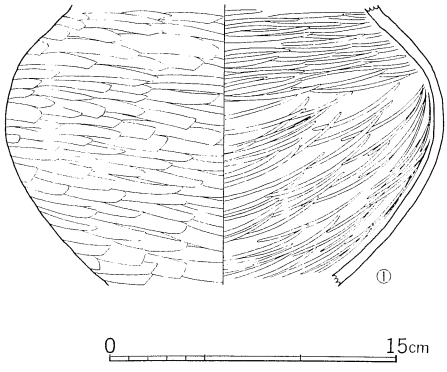
蔵穴であるが、深さ13cmにすぎず、その平面はやや不確実である。Ｐ５は、出入口施設に関連すると考えられるものであり、深さ25cmを測る。炉は、主軸線上からやや東側にあり、規模は44×41cm、深さ10cmである。底面はあまりやけていなかった。周溝は検出されなかった。竪穴内の土層は、１層が黒褐色土層、２層が明黒褐色土層、３・４層は暗黄褐色土層である。３層は局部的に炭化物を混合する。また４層は、ブロック状のロームを多量に混合する。貼り床部５層は、ローム粒、黒色粒を全体に混合する。

遺　物　１～３・５が床面上より出土した。１・３が甕形土器、２が広口の壺形土器、４が高杯



第90図　26号住居跡(1/80)、出土遺物(1/4)





第91図　27号住居跡(1/80)、出土遺物(1/4)

形土器である。

27号住居跡（第91図）

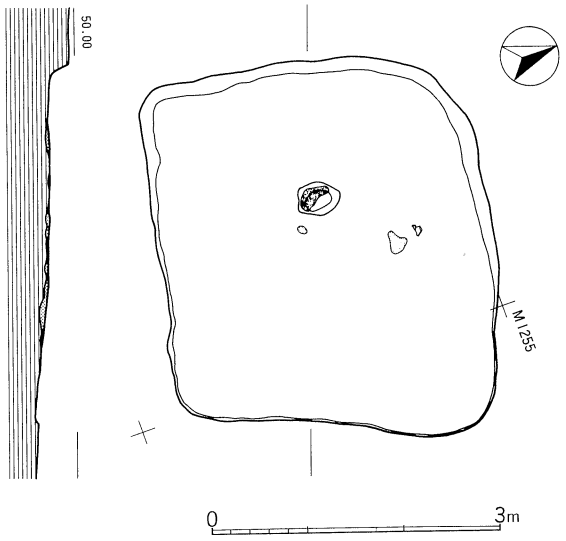
遺　構　東側範囲については明確ではない。炉を基準とした主軸長で4.69mを測る。ただし、ほぼ方形の平面を推定した場合、主軸線は炉の西側による。主軸方位はN－3°－Wである。床は貼り床であり、床面は軟弱であった。掘り方面はほぼ平坦である。柱穴、貯蔵穴、周溝等は検出されなかった。炉は、63×48cm、深さ5cmを測る。底面はよくやけていた。竪穴内の土層は、1層がベタ状の暗黄褐色土層、2・4層が明黒褐色土層、3層が黒褐色土層である。焼土は認められなかった。ただし、床面で一部炭化物の付着が認められた。火災については、不明確である。

遺　物　1が床面上から出土しているのみである。肩の張る甕形土器である。器形的には脚台部をもつ可能性もある。

28号住居跡（第92図）

遺　構　住居竪穴の平面は、やや不定形を呈す。ただし、東側は、壁がほとんど遺存しておらず、平面形態もやや不確実である。現状で、長軸（主軸）3.80m、短軸3.59mである。面積は、確認面で13.06m²、床面で11.95m²を測る。主軸方位はN－71°－Wであるが、出入口施設に伴うピット等が検出されておらず、主軸の設定自体かならずしも明確なものではない。壁高は2～28cmである。床は貼り床であるが、硬質面は認められなかった。柱穴、貯蔵穴、周溝等は検出されていない。炉は、48×36cm、深さ3cmを測る。底面は、部分的であるがよくやけていた。床面上焼土が若干確認されたが、火災の有無については、明確ではない。掘り方の土層は、明黒褐色土を地層とし、ローム粒、ロームブロックを多量に混合する。

遺　物　底面より甕形土器の小破片が検出されたが、図示できるものはない。破片資料をみるかぎり、他の住居跡群とほぼ同時期である。

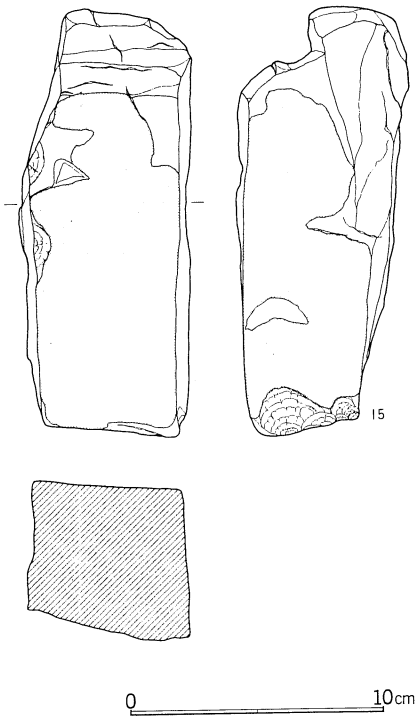


第92図　28号住居跡（1/80）

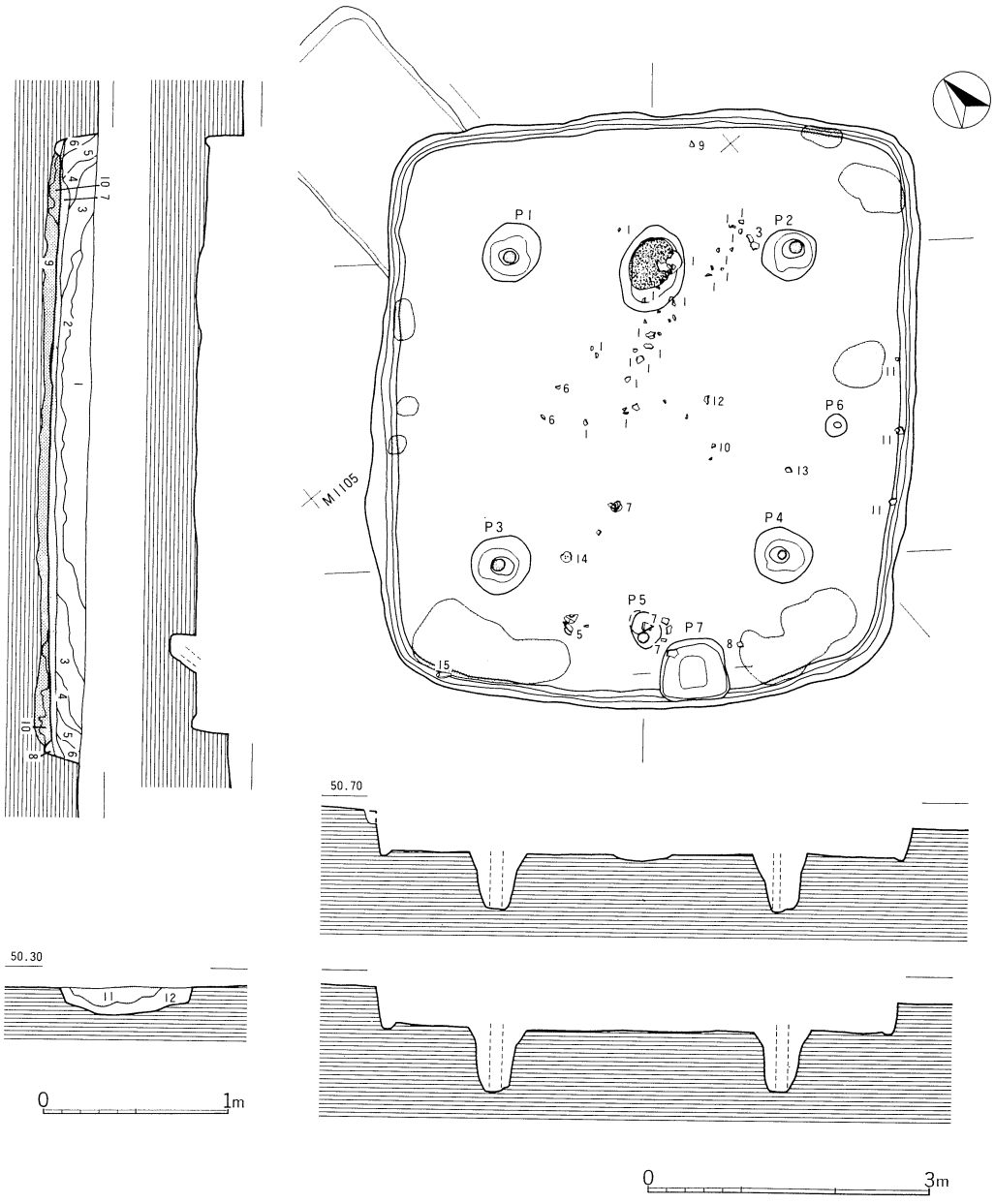
29号住居跡（第93・94・95図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸長方形を呈し、長軸（主軸）6.48m、短軸5.85mを測る。面積は、確認面で35.63㎡、周溝を含む床面で34.47㎡、内区（主柱穴内側）で10.41㎡を測る。主軸方位はN—42°—Eである。壁高は32～42cmである。床は、貼り床であり、床面は、炉周辺部を除き軟弱であった。掘り方は、周縁部が深くなる傾向が認められ、9層は黄褐色土層であり、全体にブロック状であった。10層は黒褐色土を地層とし、ロームブロックを混合する。柱穴は、ほぼ主軸線上に検出され、建て替えの痕跡は認められない。深さは、P1が64cm、P2が67cm、P3が69cm、P4が68cmである。柱間は、P1・2が3.11m、P1・3が3.37m、P2・4が3.37m、P2・4が3.37m、P3・4が3.08mを測る。炉は、主軸線上北側にあり、規模は、96×69cm、深さ10cmである。底面はよくやけていた。P5・6は、出入口施設の可能性が考えられるものであり、P5は深さ27cm、P6は21cmを測る。P5は、床面、底面における柱痕位置から、斜位に設置されていたことがわかる。P7は、いわゆる貯蔵穴であり、規模は72×66cm、深さ17cmである。貯蔵穴内の土層は、11層が焼土を含む明黒褐色土層、12層が暗黄褐色土層である。周溝は全周する。幅12～19cm、深さ6～12cmである。若干の凹凸はみられるが、壁柱穴は確認できなかった。竪穴内の土層は、1層が黒褐色土層、2・3層が明黒褐色土層、4～6層は暗黄褐色土層であり、その変化は漸移的である。床面上7層は、明黒褐色土を地層とし、多量の焼土、ローム粒を混合する。周溝部8層は、暗黄褐色土層であり、粒状であった。本住居は、焼失したものと考えられるが、焼土の密度は、他住居と比較して希薄であった。なお、住居北壁部の長方形の掘り込みは、確認調査によるものである。

遺　物　床面から出土したものは、6・11のみであり、



第93図　29号住居跡出土遺物(1)（1/3）

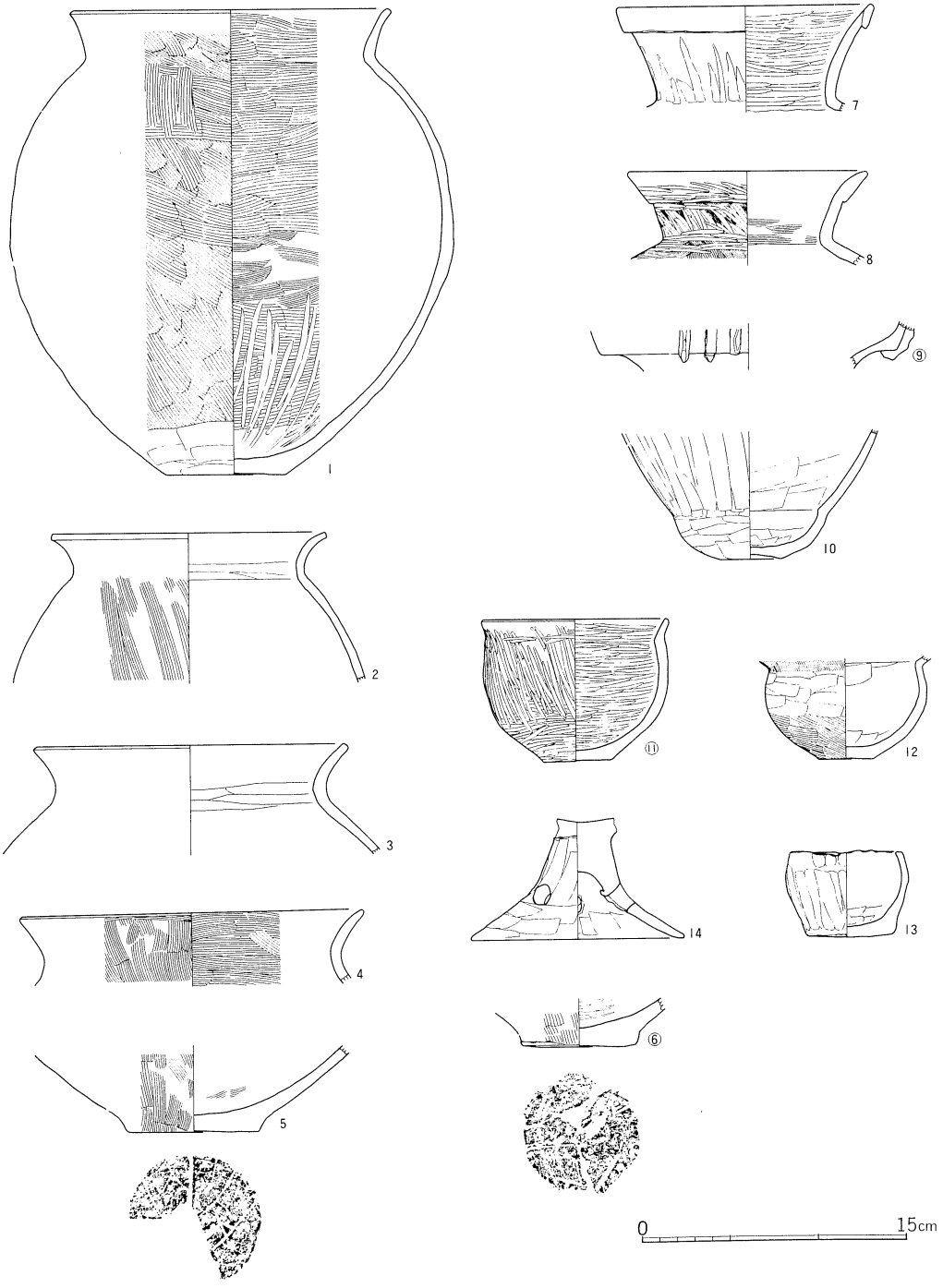


第94図　29号住居跡（1/80、1/40）

他は、とくに竪穴内中央部、覆土中から、小破片となって出土した。1～6は甕形土器、7～9は壺形土器、10は坩形土器、11～13は椀形土器、14は高杯形土器である。12については坩形土器の可能性もある。床面上9を基準とした場合、覆土資料は明らかな時期差があるが、ほぼ時期的に限定される。第93図―15は、砥石であり、床面より24cm上より出土した。

30号住居跡（第96・97図）

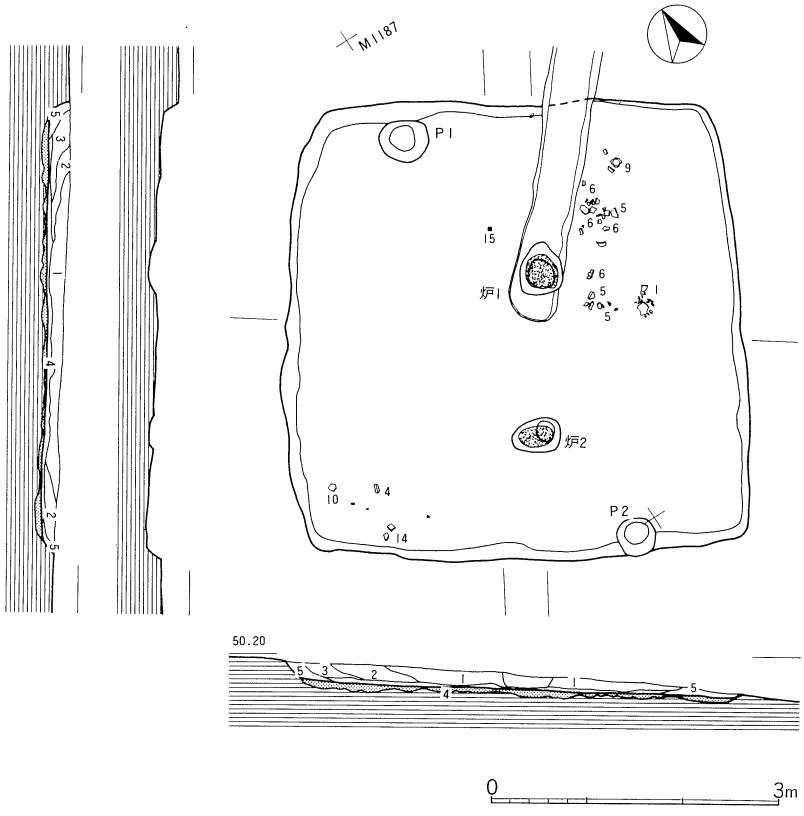
遺　構　住居竪穴の平面は、ほぼ方形を呈し、長軸（主軸）4.81m、短軸4.78mを測る。面積は、



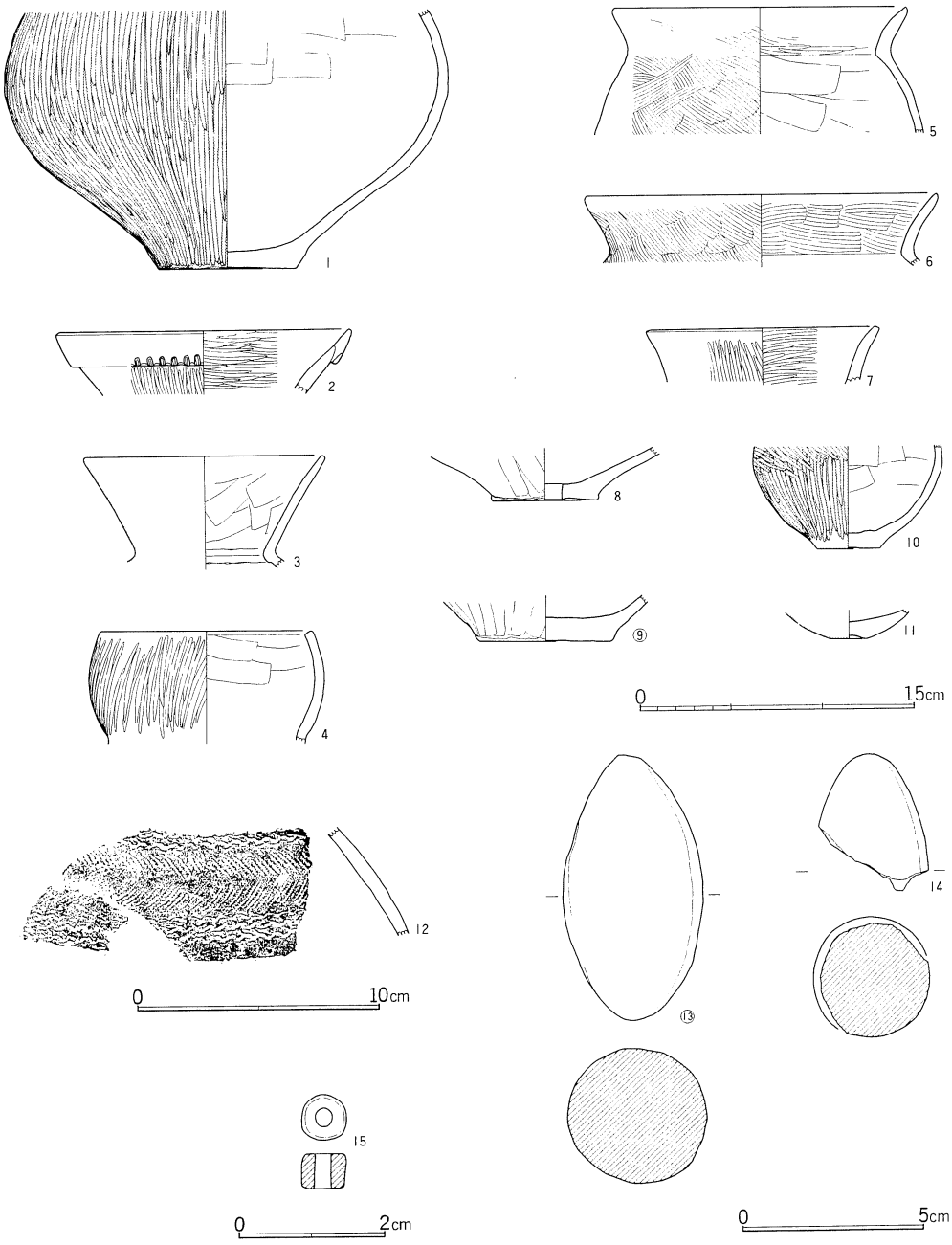
第95図　29号住居跡出土遺物(2)（1/4）

確認面で22.81㎡、床面で20.78㎡を測る。主軸方位はN－31°－Eである。壁高は5～23cmである。床は貼り床であり、軟弱であった。掘り方6層は、黄褐色土層であり、粘性が強くベタ状であった。主柱穴と考えられるものは検出することができなかった。炉は2基確認された。炉1は上面が攪乱されているが、規模は57×45cm、床面レベルから深さ9cmを測る。炉2は、51×35cm、深さ6cmである。ともに焼土が厚く堆積していた。新旧、あるいは同時性は明らかではない。P1・P2は、いわゆる貯蔵穴に対比される可能性がある。深さは、P1が21cm、P2が12cmである。周溝は検出されなかった。竪穴内の土層は、1層が黒褐色土層、2層が明黒褐色土層、3・4層が暗黄褐色土層であり、1～4層の変化は漸移的である。5層は、黄褐色土層であり、全体に粒状であった。焼土は、西隅上層に若干認められたが、局部的であり、他では、炭化物を含め、認められなかった。一応、焼失していないと考えておきたい。

遺　物　土器では、9が床面上より出土した他、いずれも覆土からの出土である。1・2・7・12は壺形土器、3・4・10・11が坩形土器、5・6・9が甕形土器、8が甑形土器である。13・14は、その形状が投弾、土弾と考えられるものである。13は床直上から出土した。表面は、明確な調整痕が認められない。重量は13で91.7gを測る。関東地方では、類例がなく、仮に投弾であるとするならば、その系譜関係を今後明らかにする必要がある。15はガラス小玉であり、覆土中より出土したものである。



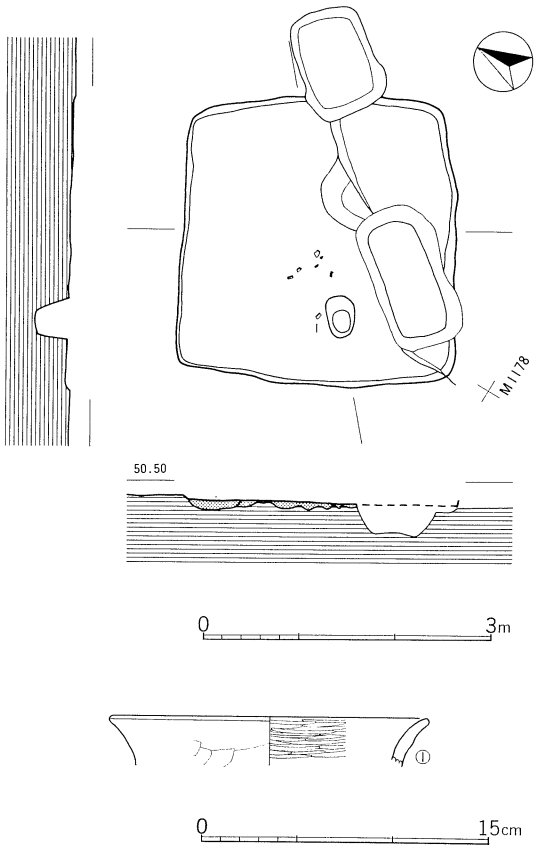
第96図　30号住居跡（1/80）



第97図　30号住居跡出土遺物(1/4、1/3、1/1、1/2)

31号住居跡（第98図）

遺　構　2か所が深く攪乱され、また、南側は削平され、掘り方面において平面規模を確認した。住居竪穴の平面は、ほぼ方形を呈し、長軸（主軸）3.03m、短軸2.88mを測る。面積は、確認面で8.48㎡、床面で7.84㎡である。主軸方位はN－61°－Eである。壁高は5cm以下である。床は貼



第98図　31号住居跡(1/80)、出土遺物(1/4)

り床であり、その掘り方は、周縁部が深くなる。土層は、周縁部がやや暗色を呈す。床面は全体的に軟弱であった。柱穴、炉、周溝、貯蔵穴等は検出されなかった。炉については、南側剝平面においても、焼けた面は全く確認できず、あるいは当初よりなかった可能性もある。出入口施設に関連すると考えられる西壁際のピットは、掘り方面において検出した。床面からの深さは35cmを測る。覆土の状態については、かならずしも明確ではないが、炭化物は認められなかった。一応焼失していないと考えておきたい。

遺　物　出入口施設ピット周辺部床面上より若干の小破片が出土している。1は甕形土器である。他も同一個体と考えられるか、接合しなかった。

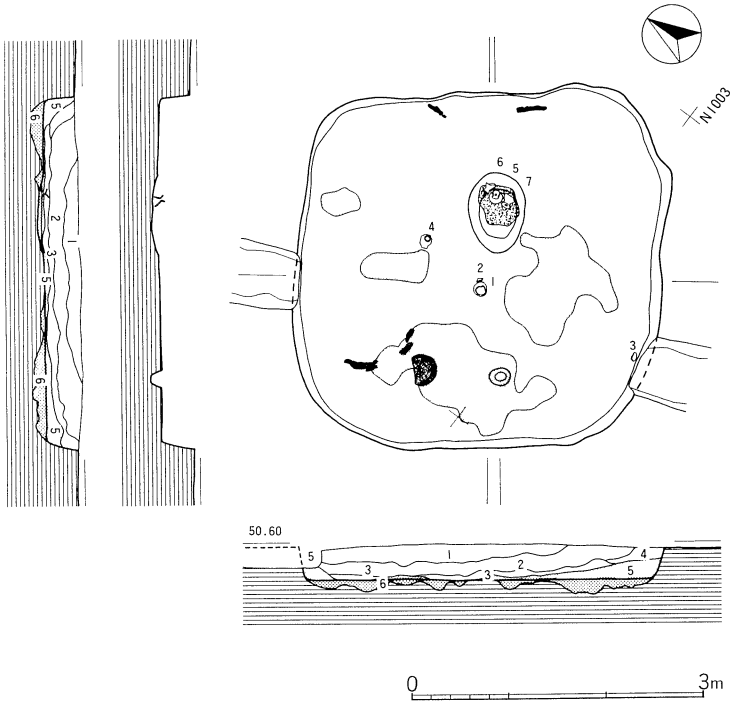
32号住居跡（第99・100図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸3.81m、短軸（主軸）3.77mを測る。面積は、確認面で13.53m²、床面で12.50m²を測る。主軸方位はN—56°—Eである。壁高は30～38cmである。床は貼り床であり、掘り方は周縁部が深くなる傾向が認められる。貼り床部6層は、粒状の暗黄褐色土層であり、周縁部がやや暗色を呈す。床面は全体的に軟弱であった。主柱穴と考えられるものは検出されなかった。炉は、84×59cm、深さ8cmを測る。底面はよくやけていたが、焼土の堆積は薄い。ほぼ主軸線上、炉の西側にあるピットは、出入口施設に関連するものであり、深さ12cmである。貯蔵穴、周溝等は検出されなかった。竪穴内の土層は、1・3層が黒褐色土層、2層が明黒褐色土層、4層が暗黄褐色土層、5層が焼土を主体とする層であり、多量の炭化物、ローム粒を混合する。本住居は焼失したものと考えられる。

遺　物　床面から出土したものは、5～7の支脚形土器である。これは炉底面にあり、その機能を復原することができる。1は坩形土器、2は甕形土器、3は楕円形を呈す浅い椀形土器、4は高杯形土器である。

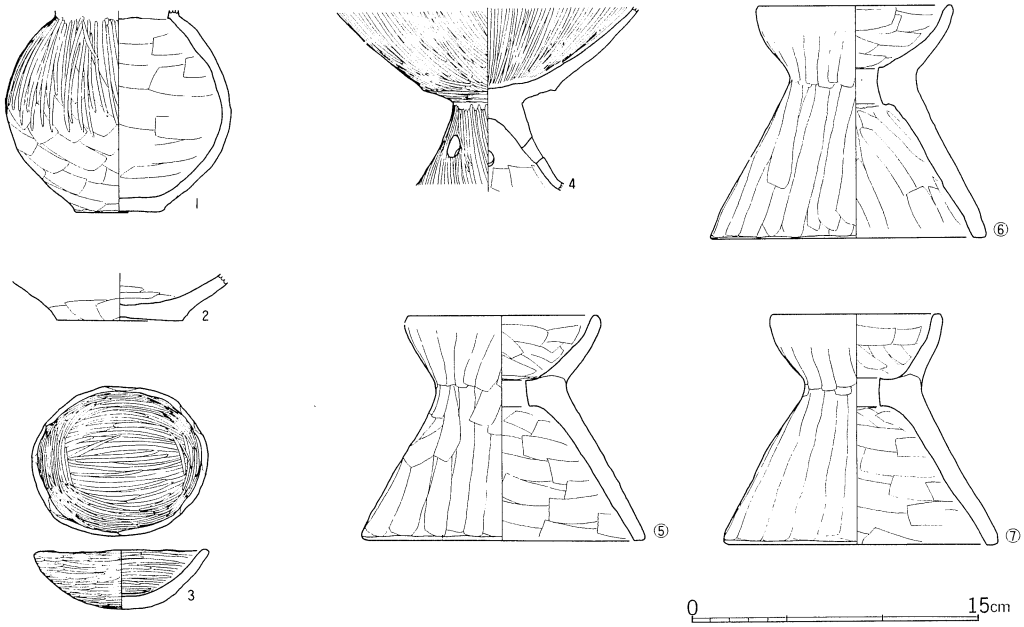
33号住居跡（第101図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸（主軸）4.57m、短軸4.56mを測る。面積は、確認面で20.10m²、周溝を含む床面で18.74m²を測る。主軸方位はN—26°—Wである。壁高は35～47

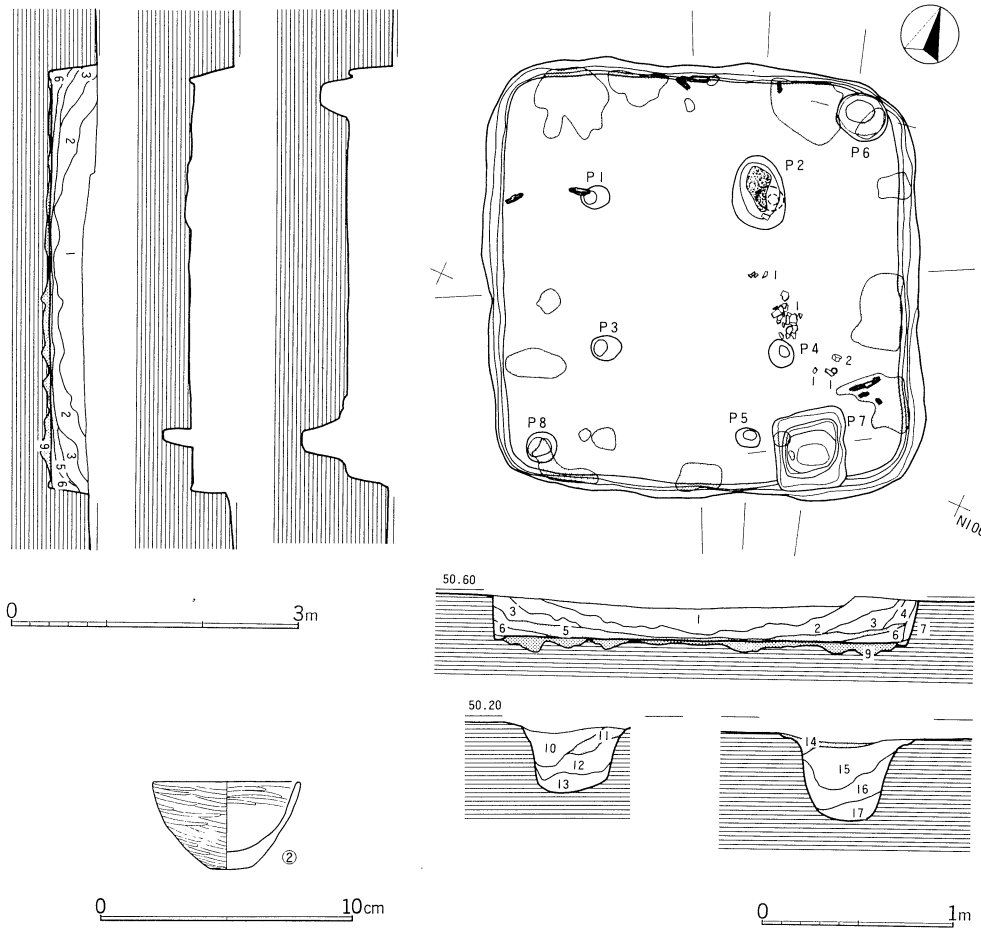


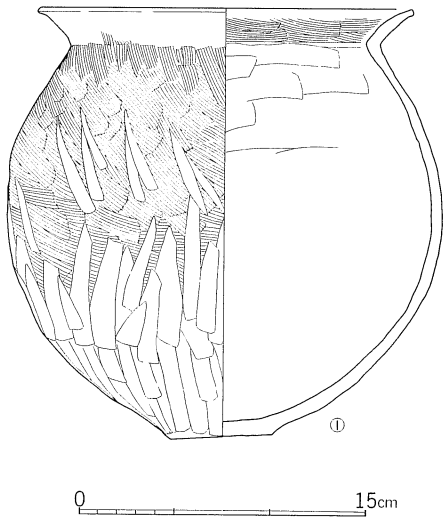
第99図　32号住居跡（1/80）

cmである。床は貼り床であり、掘り方は、周縁部が深くなる傾向がみられる。貼り床部９層は、明黒褐色土を地層とし、ローム粒、ロームブロックを多量に混合する。床面は、周縁部を除き硬質であった。Ｐ１～４は、主柱穴に対比されるものであるが、床面が硬質であったにもかかわらず、貼り床面では確認できなかった。またＰ２は、炉の下にある。その埋土もロームブロックを充填したものであり、柱痕は認められなかった。柱穴としては未使用で



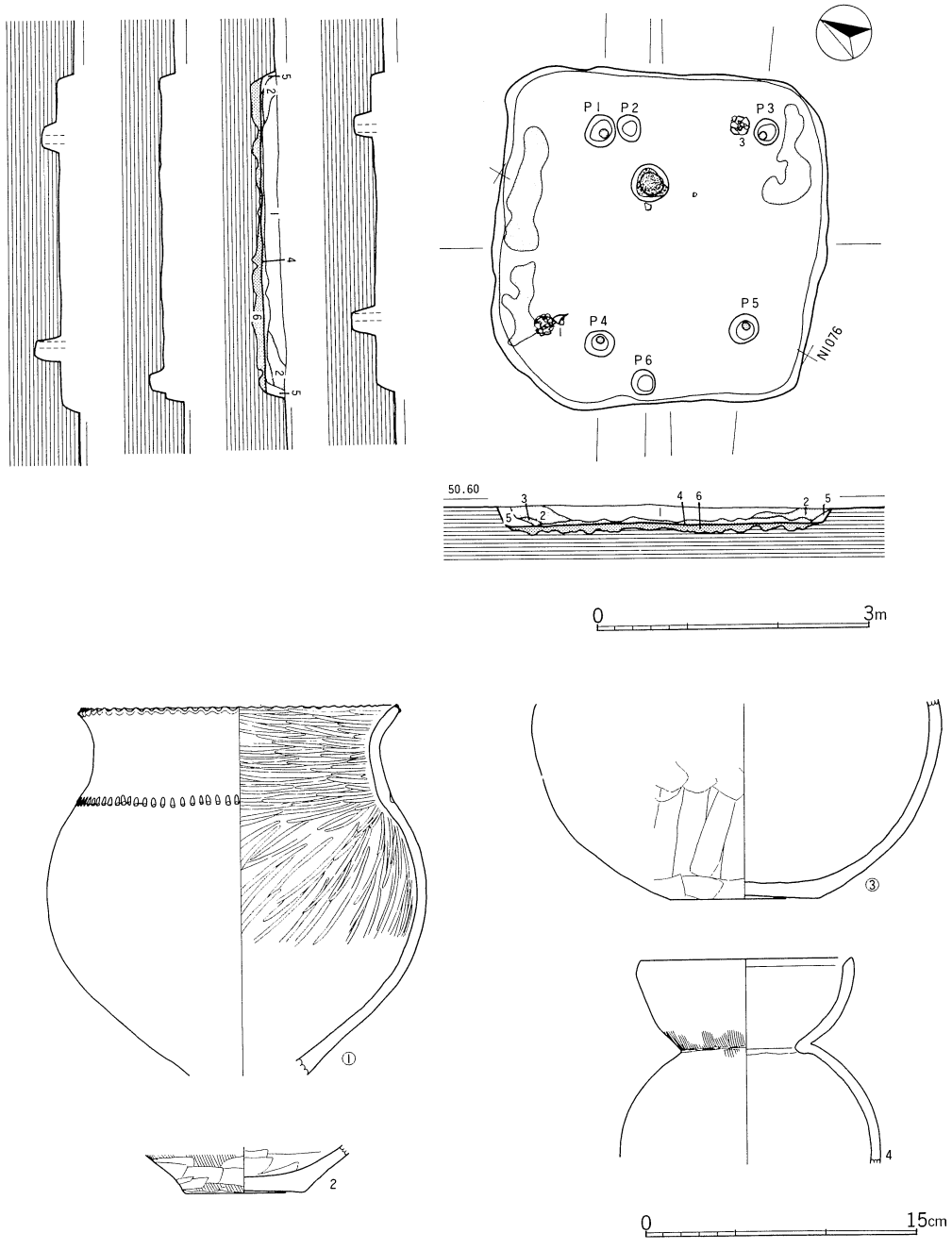
第100図　32号住居跡出土遺物（1/4）





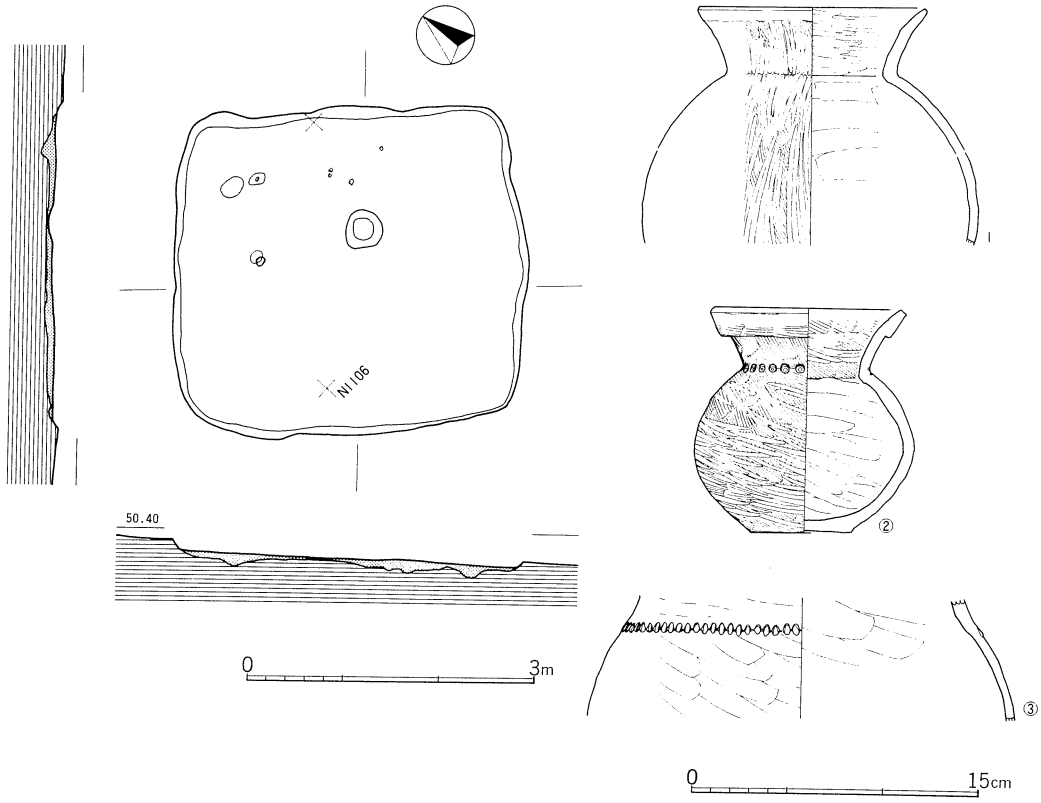
第101図　33号住居跡(1/80、1/40)、出土遺物(1/4、1/3)

あると考えられる。床面レベルからの深さは、P1が30cm、P2が34cm、P3が26cm、P4が22cmである。炉は、主軸線上から東側にあり、79×55cm、深さ6cmである。底面はよくやけていた。P5は、出入口施設に関連するものと考えられ、深さ25cmを測る。P6、P7は、いわゆる貯蔵穴であり、深さは、P6が76cm、P7が95cmを測る。P7は2段に掘り込まれている。P6の土層は、10層が明黒褐色土層、11層が焼土を主体とする層、12・13層が暗黄褐色土層であり、10・12層にも若干の焼土が認められた。P7の土層は、14層が焼土を主体とする層、15・17層が明黒褐色土層、16



第102図　34号住居跡（1/80）、出土遺物（1/4）

層が黒褐色土層であり、15・16層にも若干の焼土が混合する。Ｐ８は、掘り方面において検出された。床面レベルからの深さは25cmを測る。周溝は全周する。幅は７～12cm、深さ４～８cmである。竪穴内の土層は、１層が黒褐色土層、２・３・７層が明黒褐色土層、４・６層が暗黄褐色土層、５層が焼土を主体とする層である。１～４層の変化を漸移的であるが、３・４層はローム粒を多量に



第103図　35号住居跡（1/80）、出土遺物（1/4）

混合する。6層には、焼土が若干認められた。7層はしまりがなく、全体として粒状であった。8層周溝部は、ロームブロックを充填したものである。本住居は、焼失したものと考えられる。

遺　物　1・2は床面上から出土した。1は甕形土器、2はミニチュアの椀形土器である。

34号住居跡（第102図）

遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸3.72m、短軸（主軸）3.71mを測る。面積は確認面で12.96m²、床面で11.98m²、内区（主柱穴内側）で3.77m²を測る。主軸方位はN－64°－Eである。壁高は16～24cmを測る。床は貼り床であり、床面は全体的に軟質であった。掘り方土層6層は、暗黄褐色を呈し、粘性が強く、均質でブロック状ではなかった。主柱穴はP1・P3・P4・P5であり、深さは、P1が19cm、P3が23cm、P4が31cm、P5が25cmを測る。いずれも柱痕が認められ、柱間は、P1・3が1.77m、P1・4が2.32m、P3・5が2.16m、P4・5が1.64mを測る。P1の横に検出されたP2は、深さ15cmである。炉は、ほぼ主軸線上に検出された。規模は41×43cm、深さ3cm程度であり、底面はあまり焼けていなかった。いわゆる貯蔵穴及び周溝は検出されなかった。P6は出入口施設に関連するものであり、深さ17cmを測る。竪穴内の堆積土層は、1層が黒褐色土層、2層が明黒褐色土層、3層が焼土を主体とする層、4・5層が暗黄褐色土層である。2・4層には、焼土粒が若干混合する。壁際5層は、全体的に粒状で

粘性が乏しい。本住居は焼失したものと考えられるが、焼土に対して５層の堆積が先行し、また炭化物もあまり認められなかった。

遺　物　１・３が床面上から出土した。１～３は甕形土器、４は坩形土器である。１の胴部の区画は、段が消失し、押捺と、一部ヘラ描き沈線によって表現している。

35号住居跡（第103図）

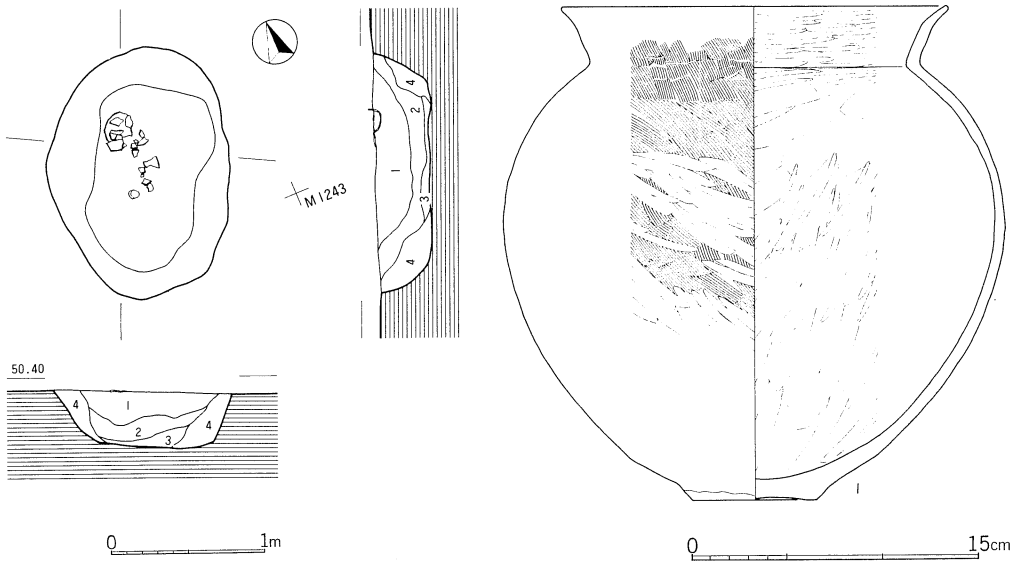
遺　構　住居竪穴の平面は、隅丸方形を呈し、長軸3.72m、短軸（主軸）3.50mを測る。面積は、確認面で12.11㎡、床面で11.15㎡を測る。主軸方位はＮ－46°－Ｅである。壁高は４～12cmである。床は貼り床であり、床面は全体に軟質であった。その掘り方は、周縁部が深くなる傾向が認められた。土層は、明黒褐色土層を地層とし、大形のロームブロックを全体に混合する。柱穴、出入口施設、いわゆる貯蔵穴、周溝等は検出されなかった。炉は、ほぼ主軸線上にあり、径38cm、深さ３cmである。底面はあまりやけておらず、炉覆土は、若干の焼土粒を均質に混合する。竪穴内の覆土は、暗黄褐色土層であり、局部的に焼土が認められた。炭化物は認められず、本住居が焼失したものであるかどうかは、明確ではない。

遺　物　２・３が床面から出土した。１・２が壺形土器、３が甕形土器である。２は完形のまま出土した。３は胴部中位を、押捺文をもつ若干の段によって区画するものである。

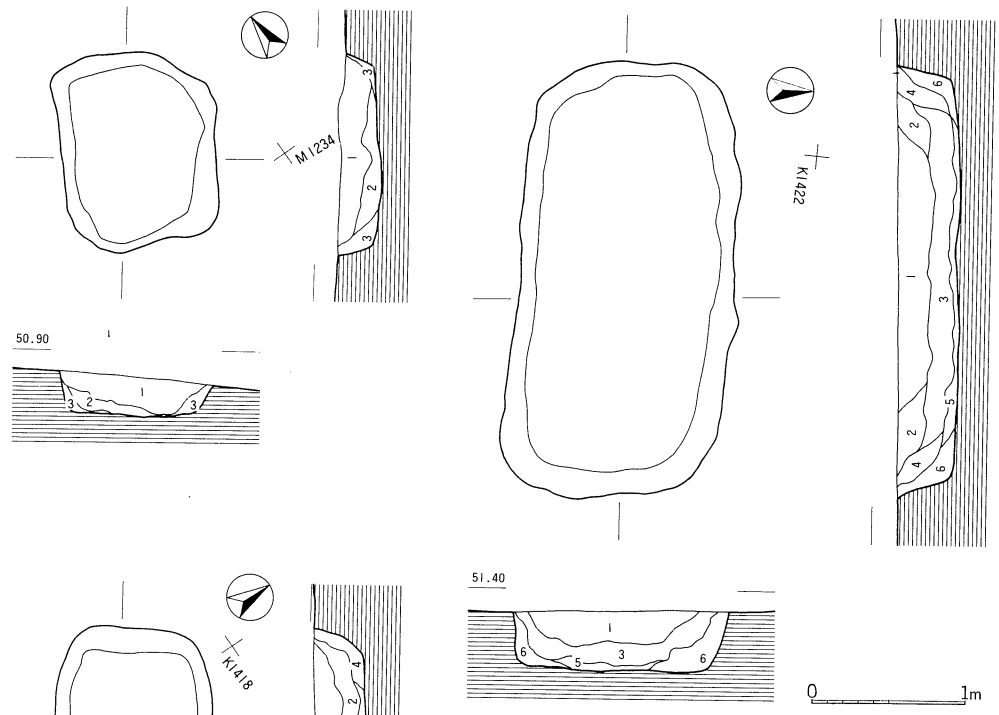
(2)　土　　壙

40号土壙（第104図）

遺　構　長径1.67m、短径1.21m、深さ37cmを測る。主軸方位はＮ－24°－Ｅである。平面はほぼ楕円形を呈す。底面はほぼ平坦である。堆積土層は、１・２層が明黒褐色土層、３層が黒褐色土



第104図　40号土壙（1/50）、出土遺物（1/4）



第105図　41・42・43号土壙（1/50）

層、4層はローム粒を多量に含む明黒褐色土層である。

遺　物　1が1層より出土した。他の個体は破片を含め認められなかった。

41号土壙（第105図左上）

遺　構　40号土壙に隣接する。長軸1.33m、短軸1.01m、深さ29cmを測る。主軸方位はN—36°—Eである。平面は、やや不定形の隅丸方形を呈す。底面はほぼ平坦である。堆積土層は、1層が黒褐色土層、2層が明黒褐色土層、3層が暗黄褐色土層である。

42号土壙（第105図下）

遺　構　長軸2.52m、短軸1.05m、深さ37cmを測る。主軸方位はN—53°—Wである。平面は一方のややとがる隅丸長方形を呈す。堆積土層は、1層が黒褐色土層、2・3層が明黒褐色土層、4層が暗黄褐色土層である。土壙墓とも考えられるか、棺の痕跡は不明確である。

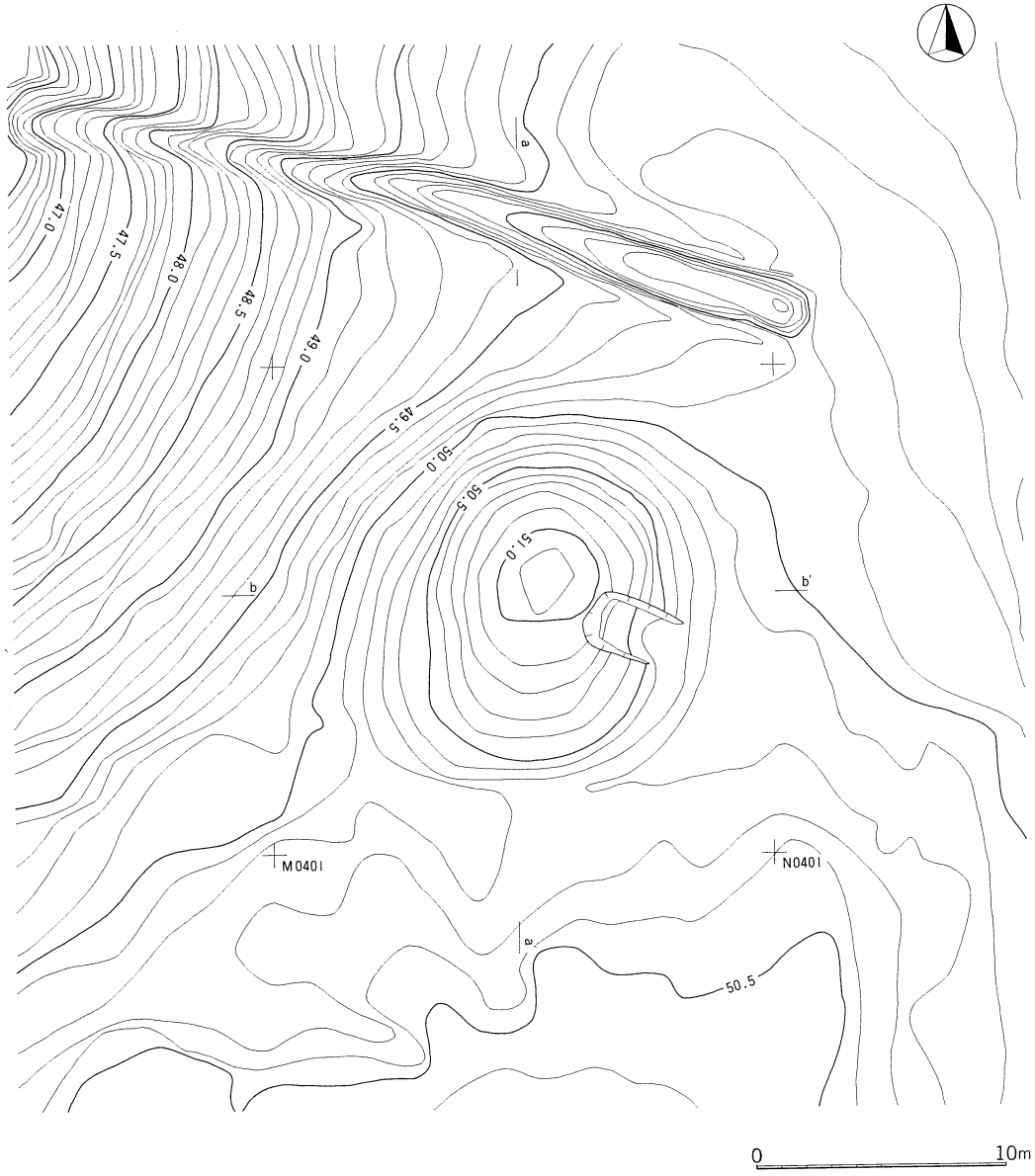
43号土壙（第105図右上）

遺　構　長軸2.85m、短軸1.41m、深さ41cmを測る。主軸方位はN—85°—Eである。平面は隅丸長方形を呈す。堆積土層は、1層が黒褐色土層、2～5層は明黒褐色土層であり、その変化は漸移的である。6層は暗黄褐色土層である。

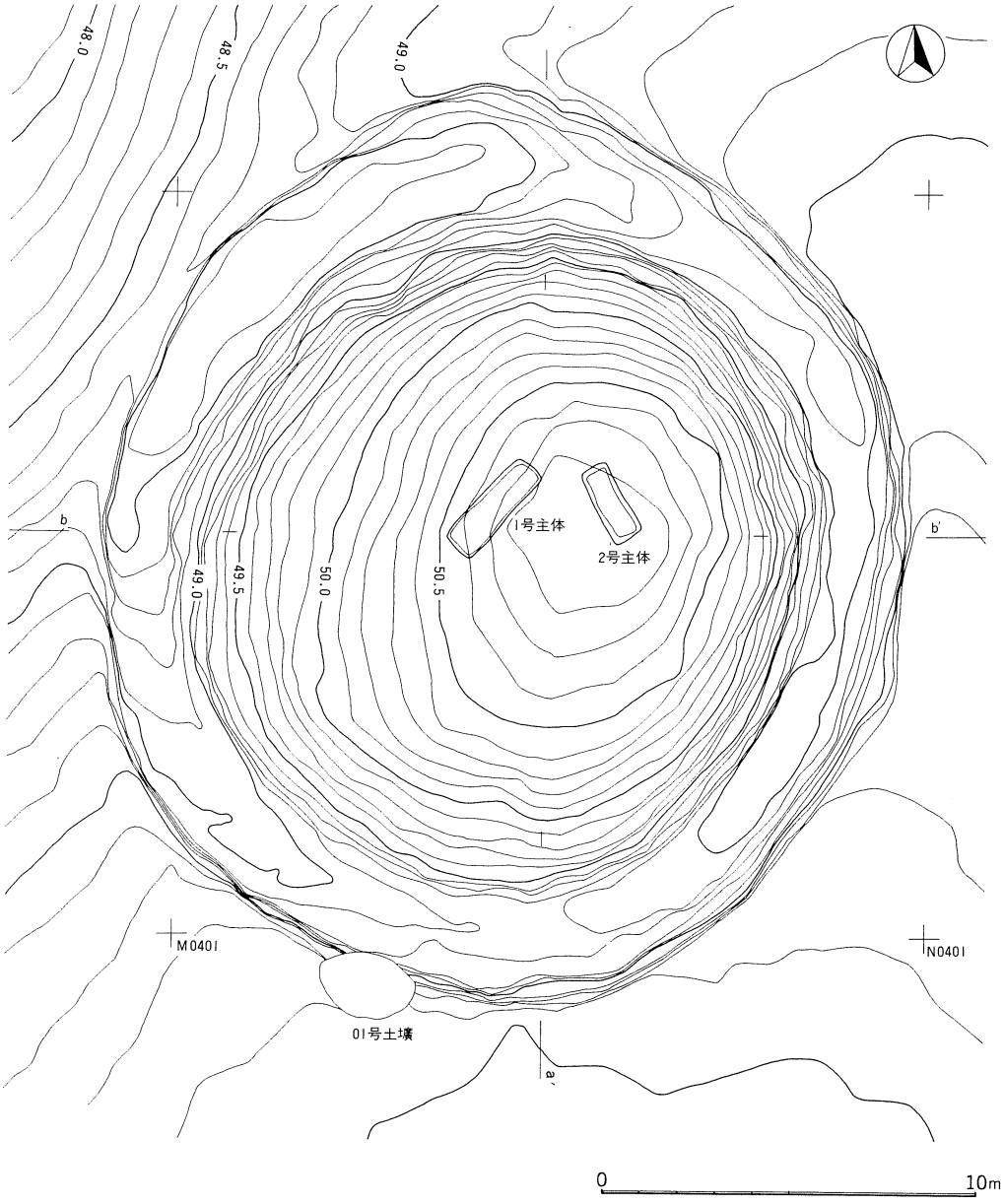
(3) 古　　墳

01号墳（第106図～第113図）

墳丘と周溝　01号墳は、調査区北端部に位置する。両側は谷がせまり、台地平坦面が最もせまくなる部分にあたる。調査前は、全体が雑木や篠竹におおわれ、墳形や規模も判然としない状態であった。第106図、墳丘東側の落ち込みは、確認調査前、市文化課が実施した試掘によるものであるが、見通しもきかない状態であったため、一部カットされてしまっている。伐木後全容が明らかとなった墳丘は、比較的遺存度も良好であり、見かけで直径約16mの円墳であることが明らか



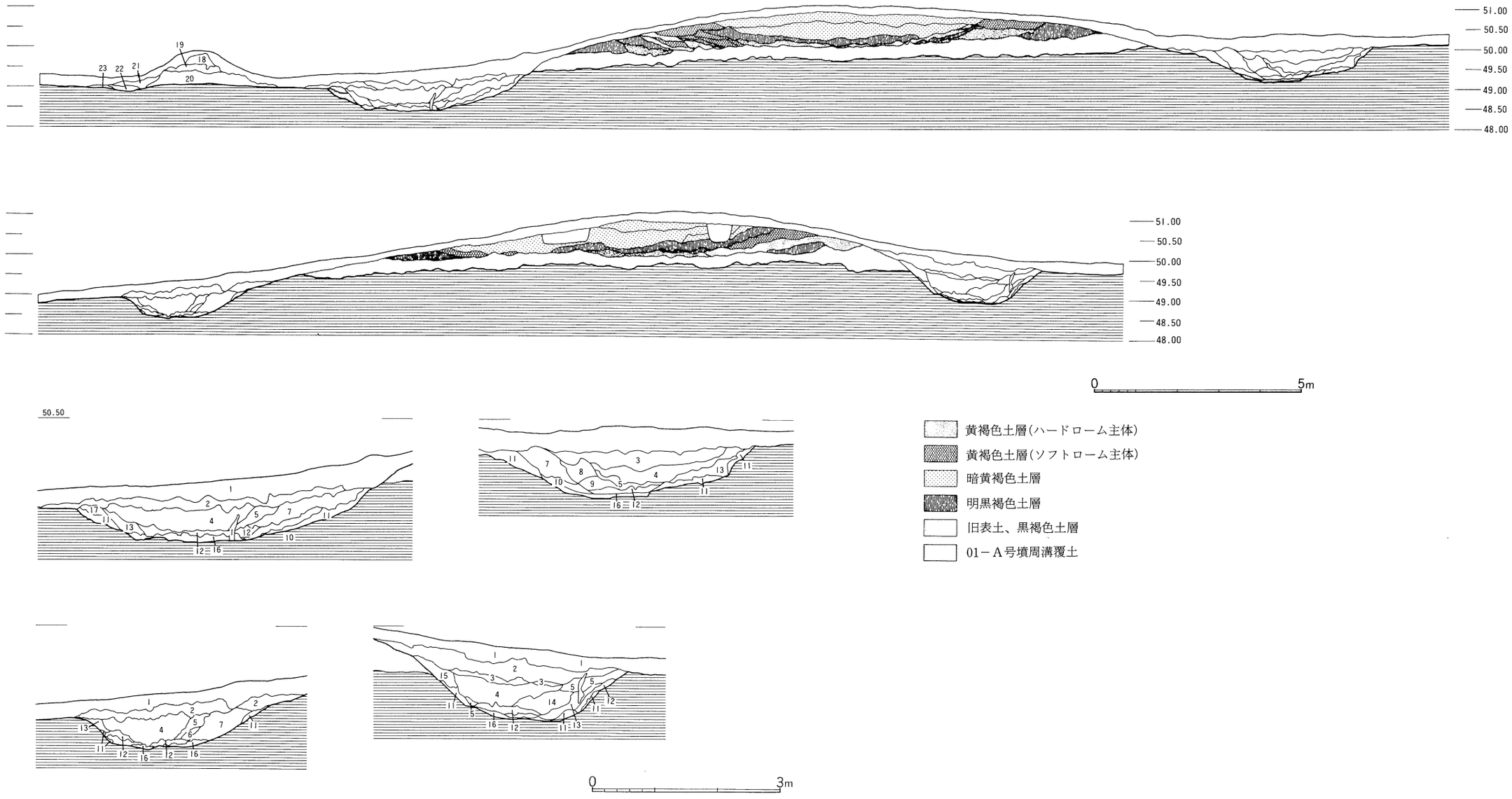
第106図　01号墳(1)（1/300）



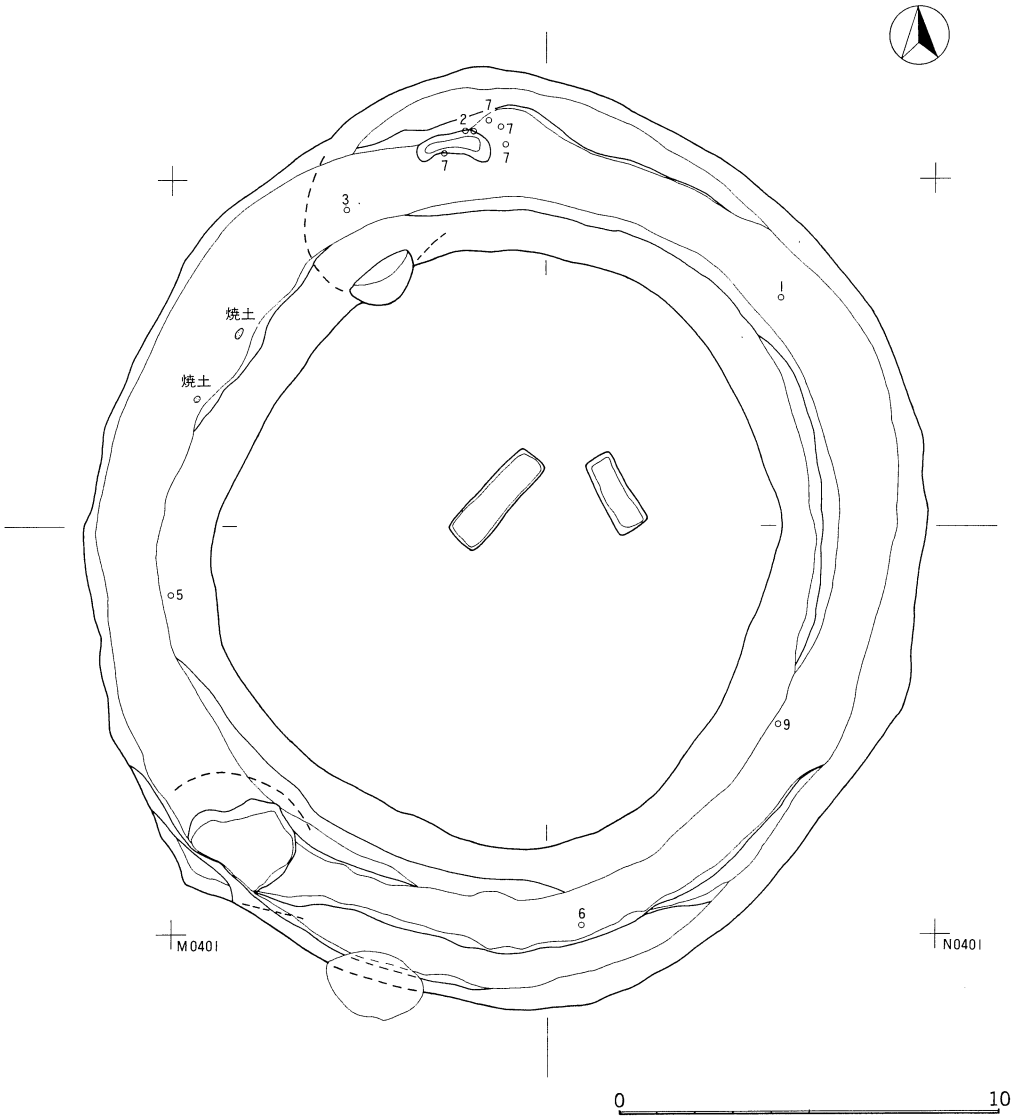
第107図　01号墳(2)（1/200）

となった。見かけの墳丘高は約２ｍであった。墳丘は、南側がやや緩斜面となっているが、南側隣接地が一時畑地として利用されたことがあるため、あるいは若干の土取りがなされた可能性もある。なお、北側の土塁は、旧地主の言によるならば、馬土手とのことである。全体として、明確な改変部、撹乱坑等は認められなかった。

調査は、座標北、発掘区にあわせ、全体を４分割し実施した。墳丘築造の過程で、旧地形を改変•利用した痕跡は明確ではない。旧表土は、断面ａ—ａ′（南北断面）では、やや北側に傾斜し、

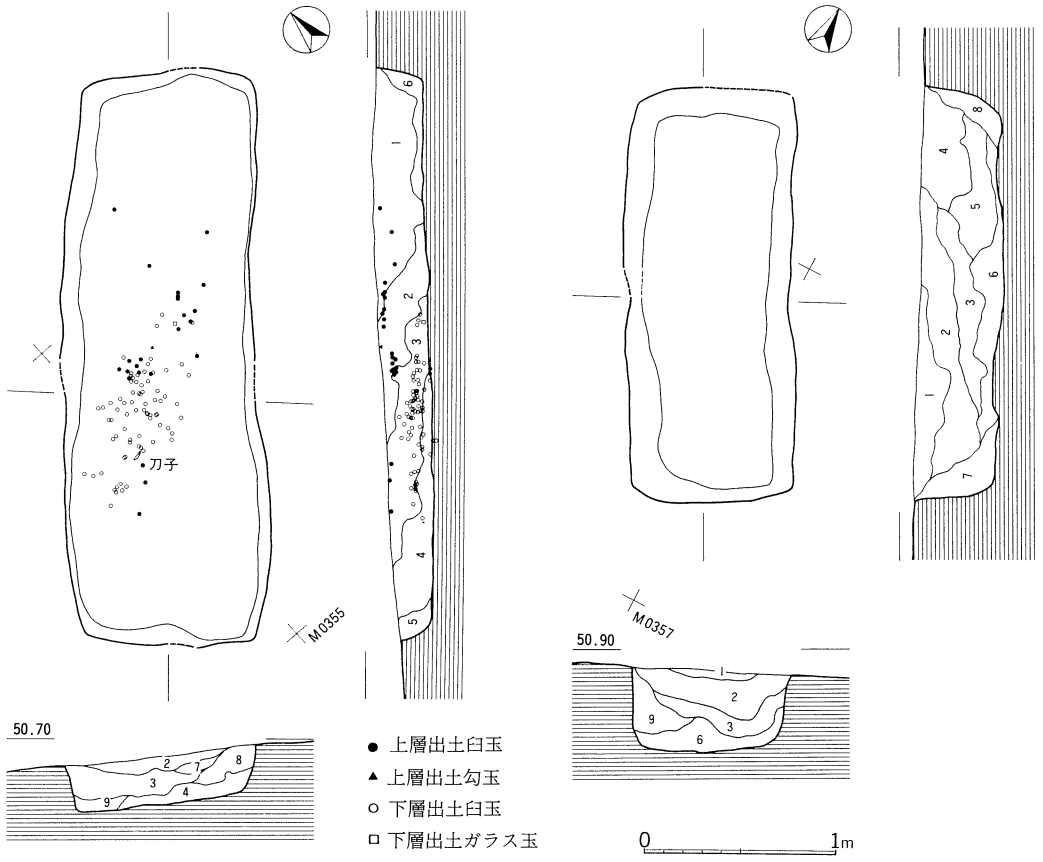


第108図　01号墳(3)（1/120、1/80）



第109図　01号墳(4)（1/200）

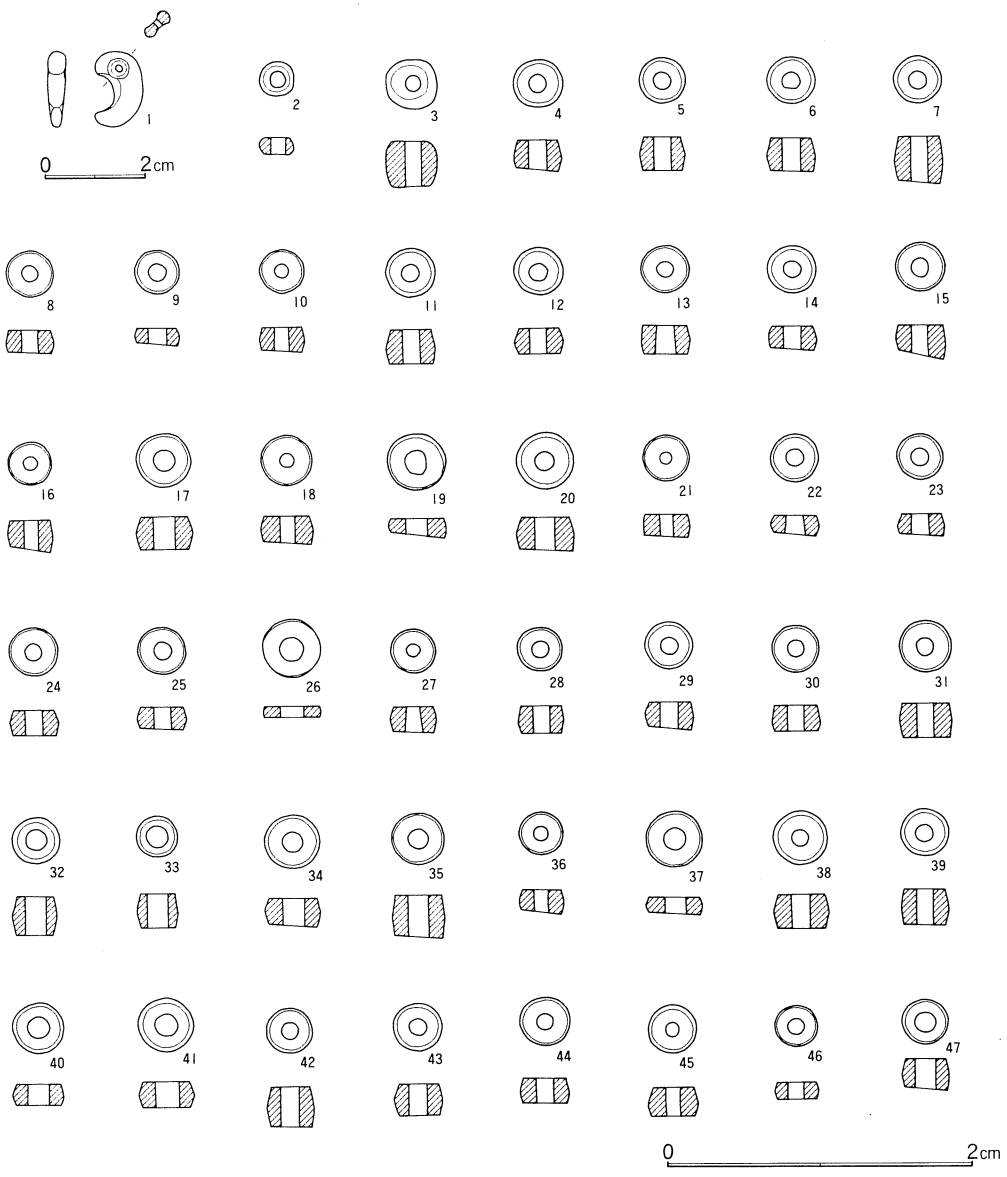
標高49.85m～50.30mを測る。厚さは28～50cm程度である。旧表土下面で径14.85m、その上面、盛土部は、径12.95mを測る。断面ｂ－ｂ′（東西断面）では、全体が西側へ傾斜し、旧表土標高は49.90～50.30mを測る。厚さは、東側が厚く約70cmを測る部分もあるが、盛土との境界がやや不明瞭であった。旧表土遺存部で径14.70m、盛土は11.55mにわたる。旧表土面は、凹凸がみられるものの、全体としては平坦であり、表面には、焼土・炭化物等は認められなかった。現状における盛土部は、中心点で表土を含め厚さ1.10mを測る。周囲より中央部にむかって積み上げ、外周は黒褐色土層がみられる。外周部黒褐色土の上層は、黒褐色土、黄褐色土を比較的薄く互層に積み上げている部分がみられる。墳丘中央部は、周縁部に土堤状の盛土をめぐらしたのちに充填



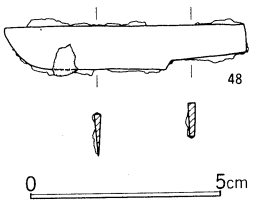
第110図　01号墳1・2号主体（1/40）

される。中央部暗黄褐色土層は、全体として比較的均質であり、ブロック状ではなかった。これは、一連の工程によるものであり、後述する周溝にみられる掘り直しに対応する二次的な盛土は認められなかった。この墳丘の規模については、自然崩落を考慮する必要もあり、現状では、計測点のとり方で誤差がみられる。一応傾斜変換点から、南北15m、東西14.5m前後と考えておきたい。

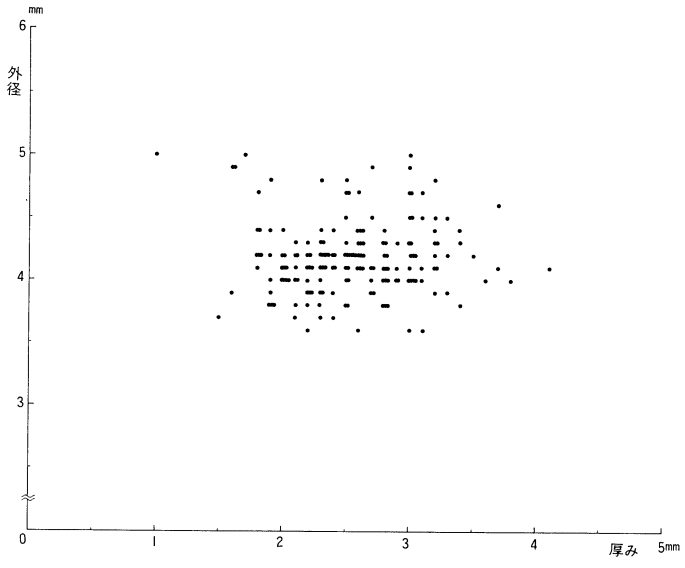
周溝は、一回の掘り直しがみられ、これに伴い平面形が若干改変されている。古期（01—A号墳）は、西側が開口する。周溝両端部の状況はやや不明確ではあるが、幅が広くなり、南側は直線的に、北側は屈曲して終わる。また、南北溝外周はやや直線的であり、この平面形は、04号墳と類似する。新期（01—B号墳）周溝は、西側が掘りぬかれ、南側は外側に、東・北側はやや内側に掘り直され、全体が円形化する。掘り直しの状況は、とくに南側周溝底面が明確であり、2段になる。深さは、断面a—a′北溝で、周溝外周確認面より56cm、南溝で88cm、断面b—b′東溝で82cm、西溝で52cmを測る。B号墳は、南溝で6cm程度浅くなると考えられる。また、標高では、北溝底面で48.43m、南溝で49.22m、東溝で48.90m、西溝で48.45m程であり、とくに南から西側にかけて、急激に傾斜する。周溝の幅は、周溝外周確認面レベルを基準とした場合、断面a—a′



第111図　1号主体出土遺物(2/3、2/1、1/2)
(1.勾玉　2.ガラス玉　3～47滑石製臼玉)



北溝で4.32m、南溝で4.92m、断面b－b′東溝で3.16m、西溝で2.68mを測る。A・B号墳の区分については、断面土層の観察だけでは、明確に判断できない。周溝覆土については、人為的な埋めもどしは認められない。1層は表土層、4・6・9・14層が黒褐色土層、2・3・5・7・8層が明黒褐色土層であり、その変化は漸移的である。2層はしまりがなく、7層は大小ロームブロックを局部的に混合する。10・12・15～17層は暗黄褐色土層であり、10層はしまり、粘性が強く均質的、15～17層はブロック状であった。なお、周溝北西部底



第112図　1号主体出土滑石製臼玉計測値分布図

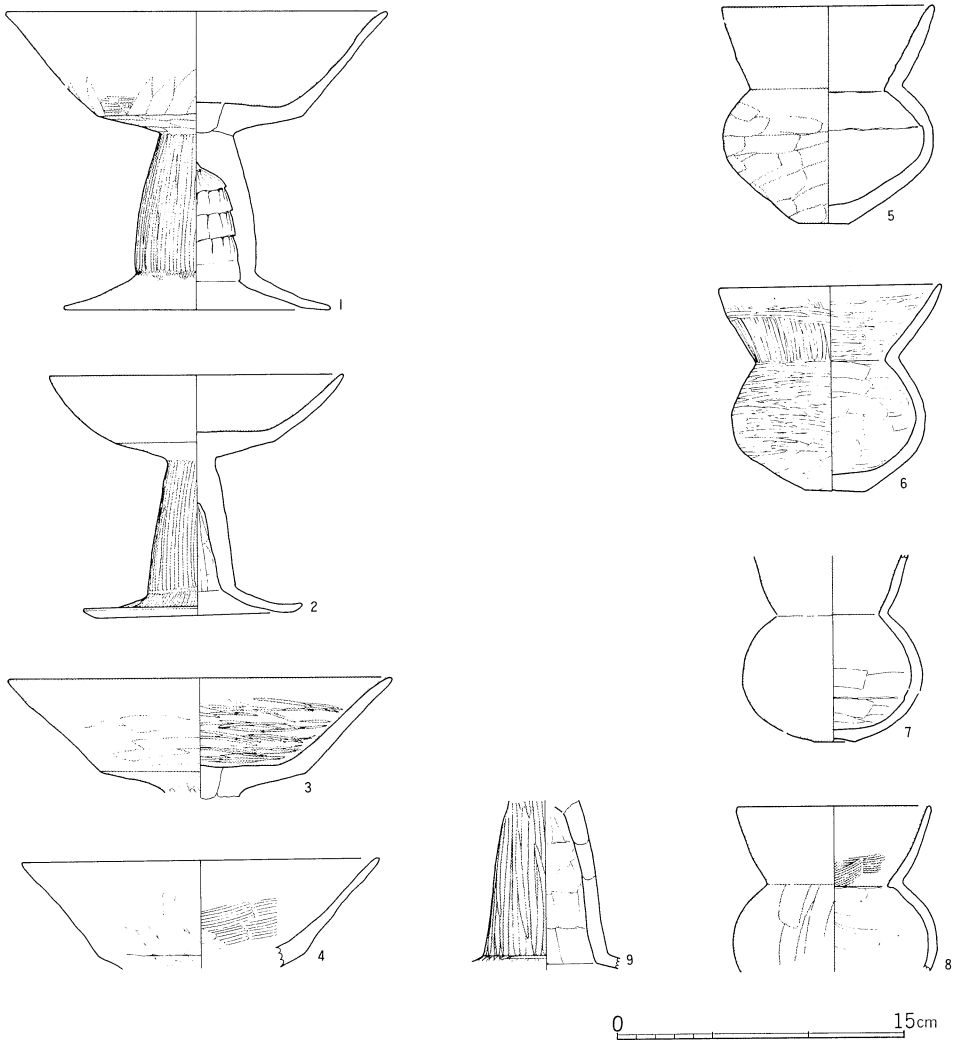
面上に、若干の焼土粒の分布がみられた（第109図）。ただし、これは、その場で火をたいた跡というよりは、流れ込み状であった。周溝をも含めた古墳の規模は、南北25.1m、東西22.1mを測る。南北B号墳は、24.7m程度と考えられる。なお、01—A号墳については、N—85°—W前後の主軸方位が設定できる。これは04号墳と対応する。

内部施設　表土下において確認・検出することができた。内部施設は、主軸方位をかえ2基認められたが、その新旧関係は明らかではない。周溝に認められた2時期に対応する可能性があるが、位置的には両者とも墳丘中心からはずれ、重複関係もない。1号主体は、墳丘中心からやや北西側にある。長軸3.03m、短軸1.01m、確認面からの深さは約25cmを測る。主軸方位はN—42°—Eである。底面はやや南面に傾斜するが平坦である。底面は標高で50.35m程である。2号主体は、1号主体の東側にあり、長軸2.20m、短軸84cm、深さ44cmを測る。主軸方位は、N—28°—Wである。底面のレベルは、約50.35mであり、1号主体とほぼ一致する。1・2号主体とも棺の設置に伴う、なんらの施設も認められなかった。また、05号墳内部施設とはことなり、木棺痕が検出できなかった。またその規模から、墓壙壁に密着して棺を設置、あるいは組み合わせたものと考えられ、ほぼ同時期と考えられる、千葉市石神2号墳、千葉市上赤塚1号墳などと、まったくことなる構造をとる。内部の土層は、1号主体は、1・3・7層が暗黄褐色土層であり、しみ状にロームを混合する。2・8層は明黒褐色土層、3層は暗黄褐色土層であり、しまりが強く、ローム粒はあまりめだたない。5・6層は明黒褐色土を地層とし、ロームブロックを混合する。9層は3層とにるが、局部的にローム粒を混合する。2号主体は、1層が明黒褐色土層であり、大小ローム粒を混合する。2・3・4層は黒褐色土層であり、とくに3層は暗く、ベタ状であった。ただしその変化は漸移的である。5層は明黒褐色土層、6層は黒褐色土層であり、多量にロームブロックを混合する。7・8層は暗黄褐色土層であり、全体に粒状であった。

主体部出土遺物　1号主体から、玉類、鉄器が出土した。2号主体からは、全く遺物は検出されなかった。1号主体から検出された玉類は、滑石製の勾玉1点、淡青色を呈するガラス玉2点、滑石製臼玉174点である（第8表）。このうち、勾玉、ガラス玉1点、臼玉99点の出土位置が計測

できた。他はフルイによって出土したものである。勾玉は、偏平なものであり、穿孔は片面である。臼玉は、外径3.5㎜～5.1㎜に分布がみられ、主体とするものは4.2㎜前後である。厚さは、1㎜～4.1㎜であり、2.0～2.5㎜のものが一般的である。玉類の出土状態は、底面に密着するものはあまりなく、覆土中から検出された。後世の撹乱の痕跡も認められず、遺体に装着されたものとは考えにくい。また、出土状態も2段階であり、土層とは明確には対応しないものの、ほぼ2層に対応する上層部、3層に対応する下層にわかれる。勾玉は上層部から、出土位置のわかるガラス玉は下層から出土している。平面的な分布範囲は、上層が北東側に、下層は墓壙中央からやや西側にみられた。上・下層で、滑石製臼玉の形状について変化は認められない。刀子については、ほぼ底面上より出土した。ミニチュア品であり、一部に布の痕跡が認められた。

周溝出土遺物　第113図1～9は、基本的に本古墳に伴う可能性が考えられる。器種は限定され、



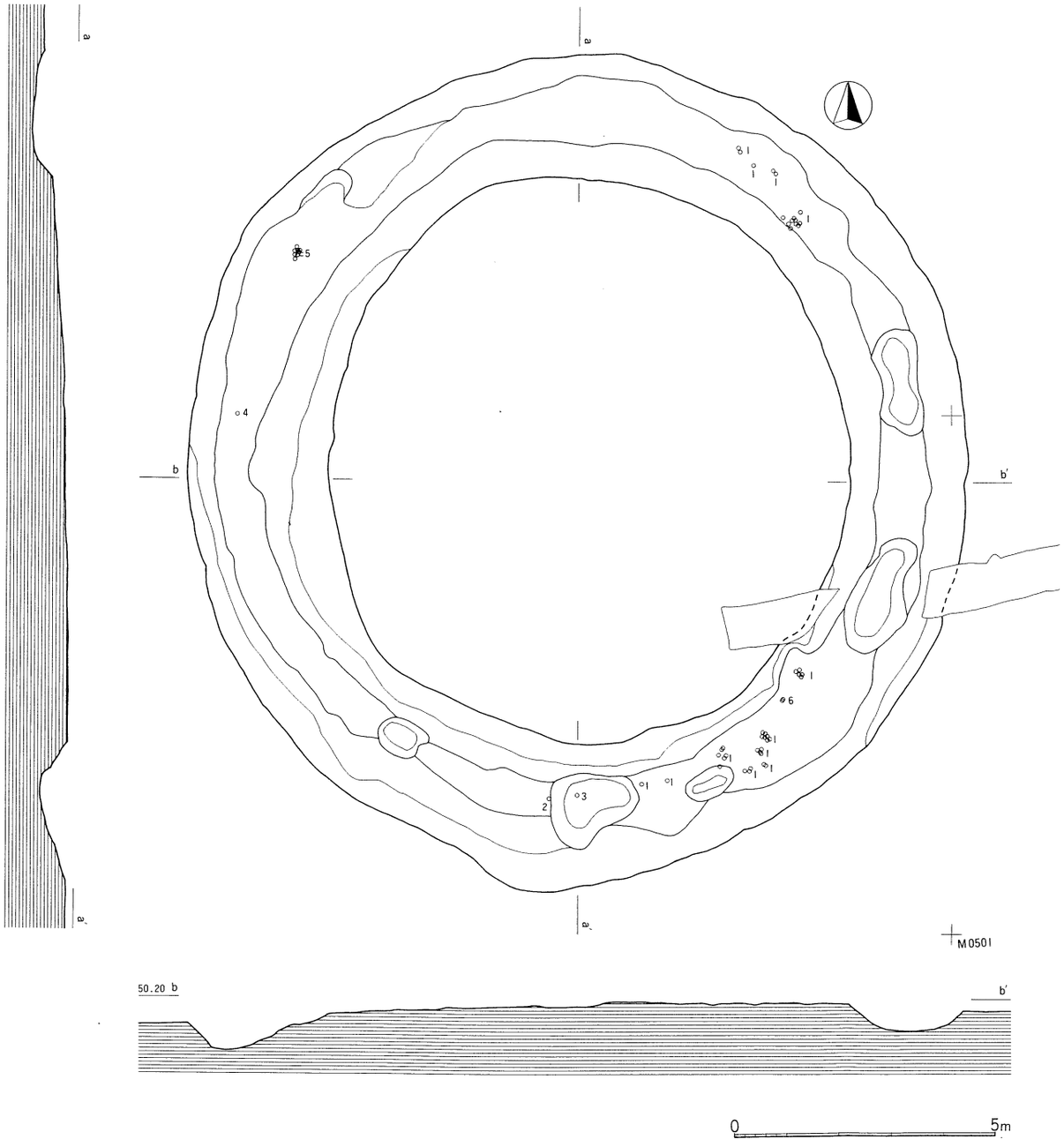
第113図　01号墳周溝出土遺物（1/4）

1～4・9が高杯形土器、5～8が坩形土器であり、4・6を除き赤彩されている。3・9は、同一個体の可能性も考えられたが、接合しない。2・7を除き、いずれも単独で出土している。このうち、1・3・5・6・9は、出土位置・層位から、B号墳に伴う可能性が強い。これに対して、2・7は、他に対してやや古相を示し、A号墳に伴う可能性も考えられる。その出土位置は、断面a－a′部に比してやや掘り込みが深いが、ほぼ12・13・16層に対応する。ただし、これがA号墳に属するものであるかどうかの判断はできない。4は、南東周溝、8は北東周溝覆土より出土しているが、小破片で出土したため、層位等明らかではない。

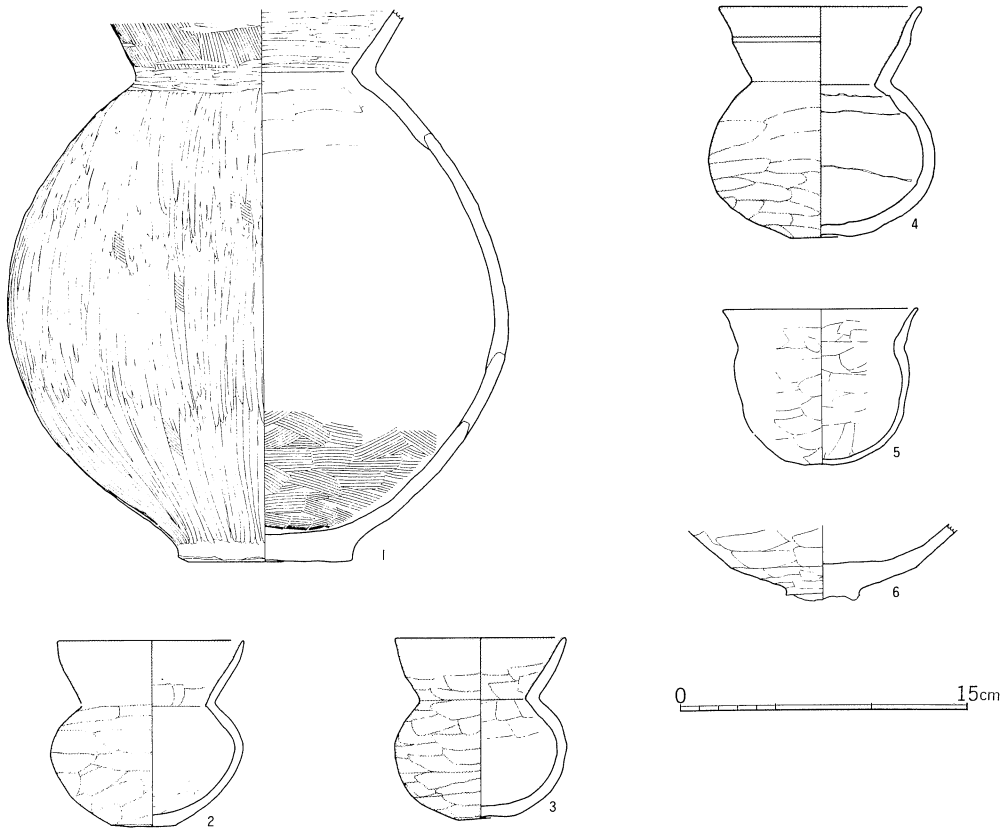
02号墳（第114・115図）

遺　構　01号墳南西側にある。墳丘・内部施設は遺存していなかった。外周の平面は、やや南北に突出するものの、ほぼ均整のとれた円形を呈す。断面a－a′（南北断面）で外径16.00m、断面b－b′（東西断面）で14.85mを測る。内径円台部は、断面a－a′で10.87m、断面b－b′で9.98mを測る。周溝は、北溝で幅2.39m、確認面から深さ31cm、標高49.27m、南溝で幅2.74m、深さ51cm、標高49.54m、東溝で幅2.18m、深さ43cm、標高49.55m、西溝で幅2.69m、深さ58cm、標高で49.15mを測る。周溝底面は、全体に北西側へゆるやかに傾斜している。若干の凹凸は認められるが、断面a－a′上、南溝部が15cm程度深くなる他は、いずれも浅く、周溝内に埋葬施設等は認められなかった。周溝断面は、各部とも、外側の傾斜が急であった。掘り直しは認められない。周溝内の堆積土層は、1層が明黒褐色土層であり、ローム粒を多量に含み、全体に粒状であった。2層は、1層よりやや明るい明黒褐色土層、3層は黒褐色土層であり、粘性が強い。4・5層は、黄褐色土層であり、4層はベタ状のローム質土、5層はブロック状であった。7・8層は暗黄褐色土層であり、とくに8層は全体がブロック状であった。9層は明黒褐色土層であり、1層よりやや明るく、多量のローム粒を混合する。10層は、黒褐色土層であり、3層に比較して、ローム粒を多量に混合する。

出土遺物　甕形土器1、坩形土器4、高杯形土器1が周溝内より出土している。いずれも本古墳に伴う可能性が強い。このうち甕形土器は、周溝東側2地点にわかれて出土し、全体に散在的であった。出土層位は、2～4層であり、底面より5～19cm上、主体的には5～10cm前後より出土した。口縁部は、小破片を含め、認められなかった。他は、完存、あるいはまとまった状態で出土している。第115図－2は周溝底＋9cm、3は周溝底＋4cm、4は周溝底＋14cm、5は周溝底＋13～15cm、6は周溝底＋1～14cmであり、いずれも覆土内の出土である。正立した状態で出土したものはないが、墳丘からの転落かどうかは、判断できない。



第114図　02号墳（1/120、1/60）

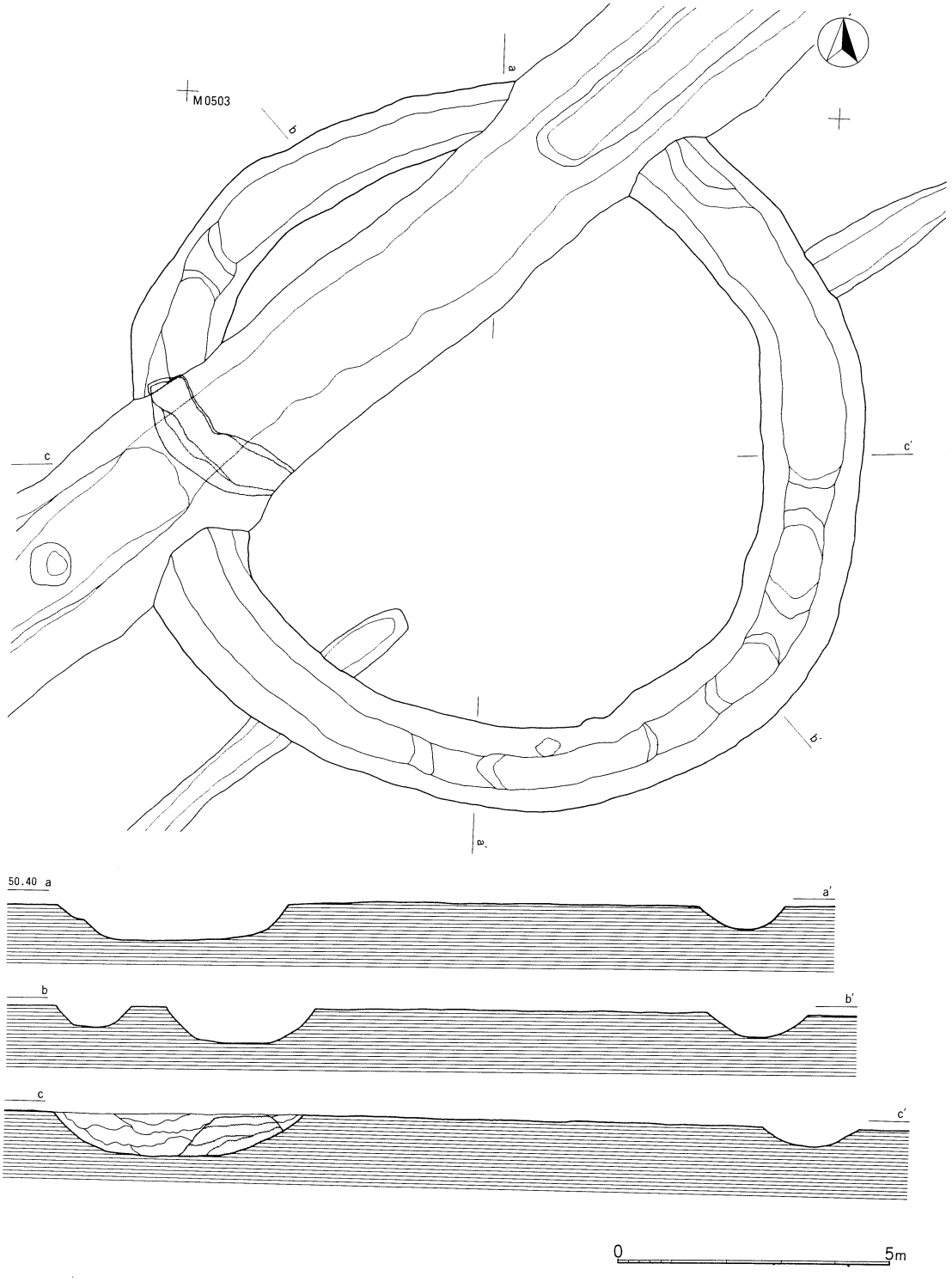


第115図　02号墳出土遺物（1/4）

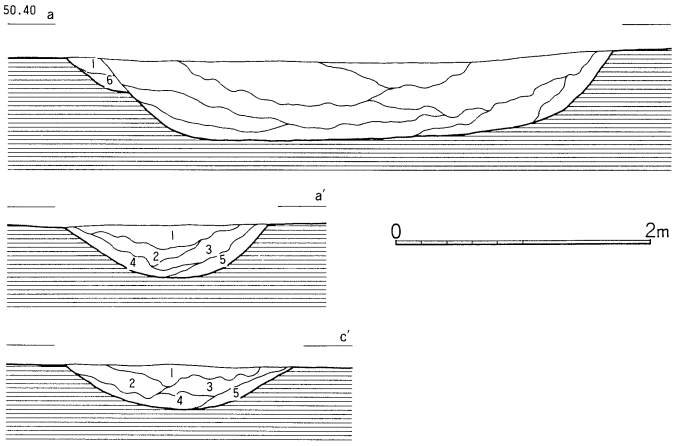
03号墳（第116・117図）

遺　構　墳丘は遺存していなかった。平安期における01・02号溝によって、その大部分が破壊されたものと考えられる。外周の平面は、ややいびつではあるが、ほぼ正円形を呈す。規模は、断面ａ－ａ′（南北断面）で13.39m、断面ｂ－ｂ′（北西南東断面）で13.77mを測る。内径円台部は、断面ｂ－ｂ′で10.60mを測る。周溝は、断面ａ－ａ′南溝で幅1.60m、確認面から深さ43cm、標高49.83m、断面ｂ－ｂ′北西溝で幅1.37m、深さ38cm、標高49.87m、断面ｂ－ｂ′南東溝で幅1.85m、深さ44cm、標高49.82m、断面ｃ－ｃ′東溝で幅1.78m、深さ35cm、標高49.89mを測る。周溝底面は、とくに南東側に凹凸がみられるが、比高はいずれも５cm以内であり、標高もほぼ一定している。周溝内では、埋葬施設等検出されなかった。周溝断面形については、内外とも立ち上がりの傾斜はほぼ一定であった。周溝内堆積土層は、１層が黒褐色土層、２・３層が明黒褐色土層であり、その変化は漸移的であった。４層は暗黄褐色土層、５層は黄褐色土層であり、とくに４層はロームをブロック状に混合する。重複する01・02号溝については、後述する。

出土遺物　縄文土器小片が検出された他、本遺構に伴うと考えられるものは出土しなかった。



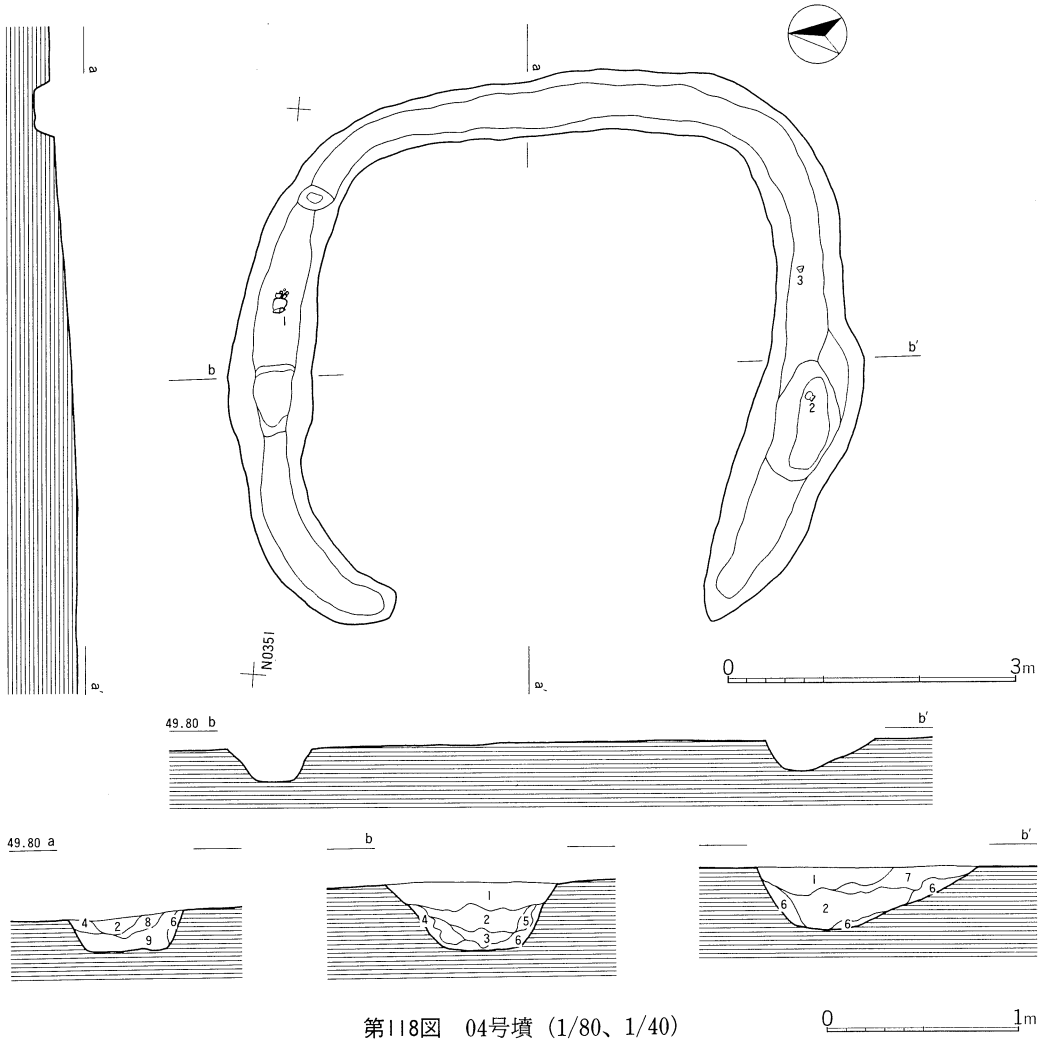
第116図　03号墳(1) (1/120)



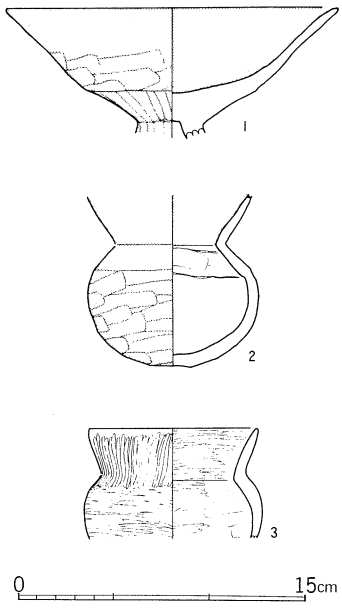
第117図　03号墳(2)（1/60）

04号墳（第118・119図）

遺　構　01号墳東側に隣接する。墳丘は遺存していない。平面形は、西側が開口し、01—A号墳に類似する。とくに、周溝両端部の形状は、ほぼ対応する。01—A号墳との新旧関係は、出土土器を含め、明確に判断することはできないが、01—A号墳を主墳とし、これに付随して、



第118図　04号墳（1/80、1/40）



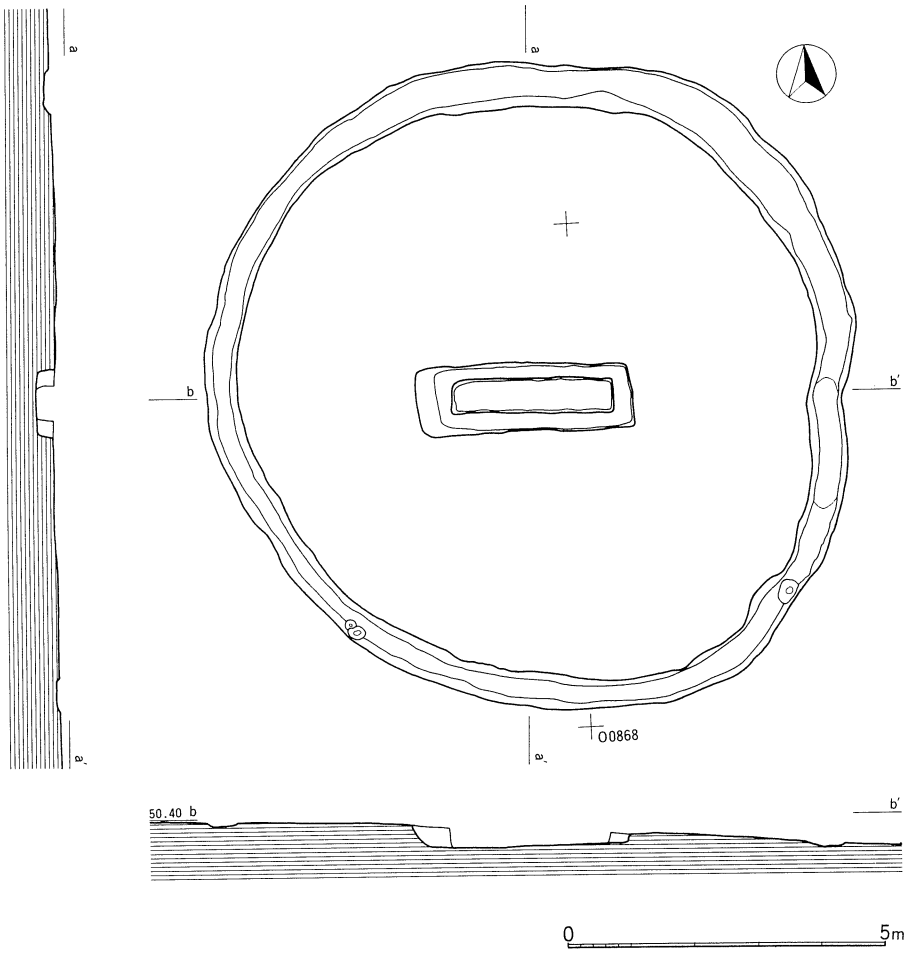
第119図　04号墳出土遺物(1/4)

05号墳が造営された可能性が考えられる。ただし、05号墳は、北東、南東隅が明確に屈曲し、全体は方形を呈す。周溝を含む規模は、断面ａ－ａ′（東西断面）で、周溝両端部を結ぶ線上まで、5.73mを測る。断面ｂ－ｂ′（南北断面）で6.71m、また方台部は4.78mを測る。断面ａ－ａ′線を主軸として仮定した場合、方位はＮ－85°－Ｅである。周溝は、断面ａ－ａ′東溝で、幅60cm、深さ確認面より19cm、断面ｂ－ｂ′北溝で、幅88cm、深さ37cm、南溝で、幅1.05m、深さ33cmを測る。周溝底は、標高49.30mを前後し、ほぼ一定であった。南溝掘り込みは、比高６cm、北溝掘り込みは比高９cmであるが、ともに埋葬施設等に対比できるものではない。周溝内の堆積土層は、１・２層が黒褐色土層であり、とくに１層が暗色を呈し、２層は、ローム粒を多量に含む。３・４・５層は暗黄褐色土層、６層はブロック状の黄褐色土層である。７・８層は明黒褐色土層、９層はベタ状のローム質の黄褐色土層である。

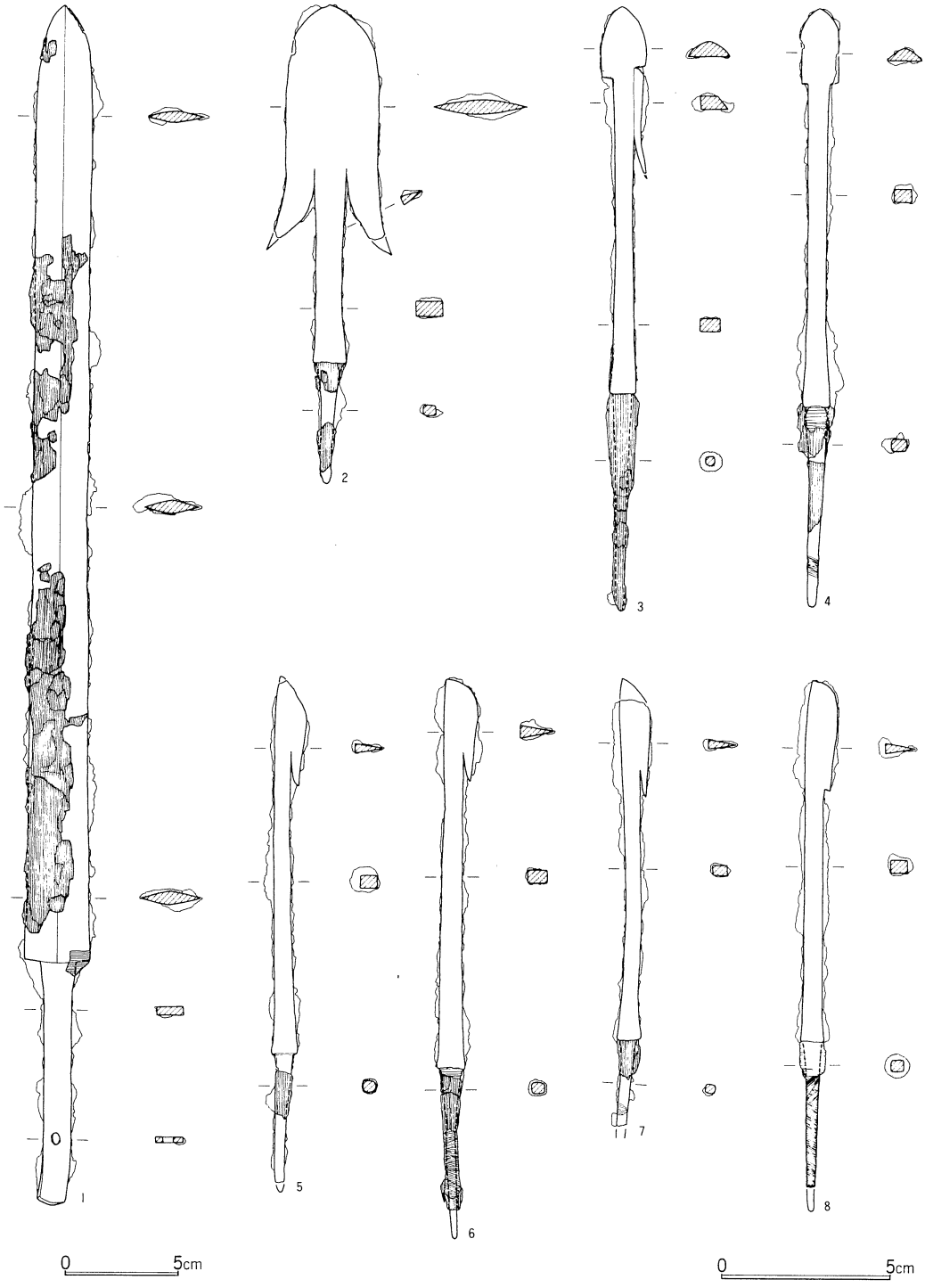
出土遺物　高杯形土器１、坩形土器２が出土した。いずれも底面よりうき、１は底面＋18cm、２は底面＋14cm、３は底面＋18cmを測る。

05号墳（第120・121図）

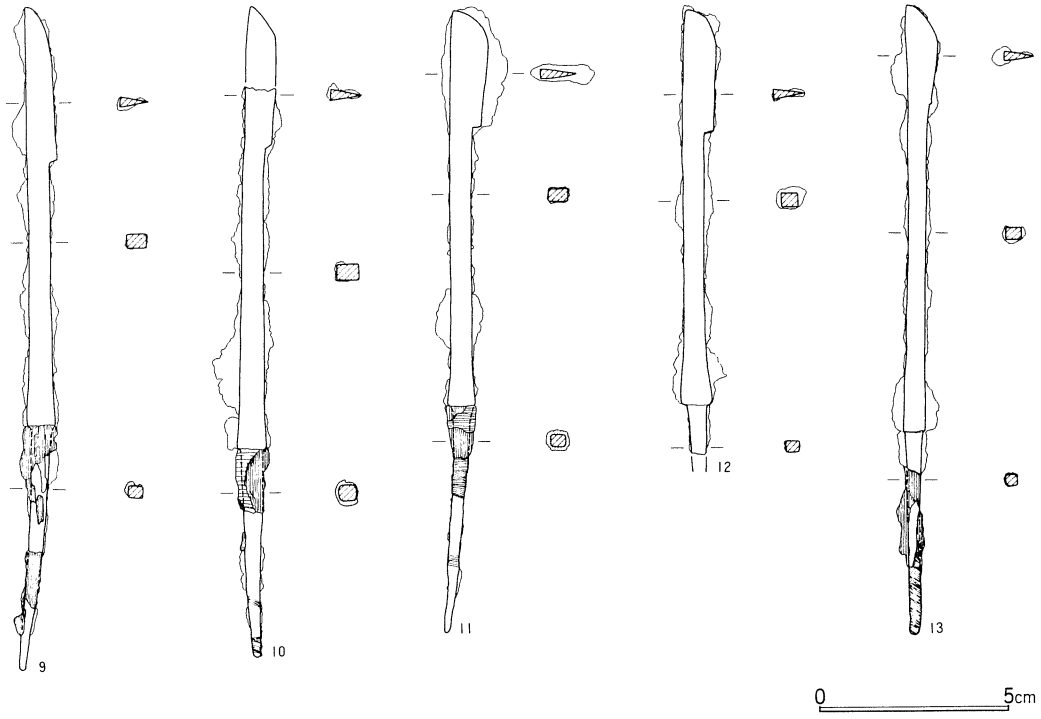
遺　構　他の古墳とは、距離をおき、時期・構造もやや他と相違する。周溝平面は、いびつな円形を呈す。ただし、とくに東側は浅く、平面形はかならずしも明確なものではない。規模は断面ａ－ａ′（南北断面）外径10.22m、内径で8.98m、断面ｂ－ｂ′（東西断面）外径10.00m、内径で8.98mを測る。周溝は、断面ａ－ａ′北溝で幅69cm、深さ確認面より13cm、標高で50.06m、断面ａ－ａ′南溝で幅55cm、深さ６cm、標高で50.19mを測る。断面ｂ－ｂ′（東西断面）東溝で、幅54cm、深さ８cm、標高49.83m、西溝で幅48cm、深さ８cm、標高50.27mを測る。周溝底は、全体に北東側に傾斜している。墳丘は、遺存していなかったが、埋葬施設は、ロームを掘り込んでいたため、検出することができた。01号墳主体部とは異なり、木棺痕も明確であった。検出された主体部は、Ｎ－86°－Ｅに主軸方位をとり、確認面での規模は、掘り方で長軸3.45m、短軸1.07m、木棺部で長軸2.56m、短軸55cmを測る。底面は、棺底部を含め、ほぼ平坦であり、小口板等の痕跡も認められなかった。棺内土層は、１・４層は暗黄褐色土層であり、４層はとくに大小ロームブロックを多量に混合する。２層は明黒褐色であり、全体的に粒状であった。３層はベタ状のローム質の黄褐色土層、５・６層は黒褐色土層である。墓壙内７層は、明黒褐色土層を地層とし、大小ロームブロックをしみ状に混合する。



第120図　05号墳（1/120、1/60）



第121図　05号墳出土遺物(1) (1/3、1/2)



第122図　05号墳出土遺物(2)（1/2）

出土遺物　周溝内からは、本墳に伴うと考えられる遺物は全く出土していない。棺内からは、ほぼ底面に密着して、剣形利器１、鉄鏃12が出土した。棺内西側、いずれも切先箭頭を西に向け出土している。鉄鏃は、その形式構成が多様であり、２は両丸造長頸腸抉柳葉式、３・４は片丸造長頸鏨頭式であり、３は片方に逆刺をもつ。５～７は長頸腸抉片刃箭式、８～13は長頸片関片刃箭式である。ただし、とくに鉄鏃は遺存状態が悪く、形状がやや不明確なものもある。重量等は第６表に記してある。

3　奈良・平安時代およびそれ以降の遺構と遺物

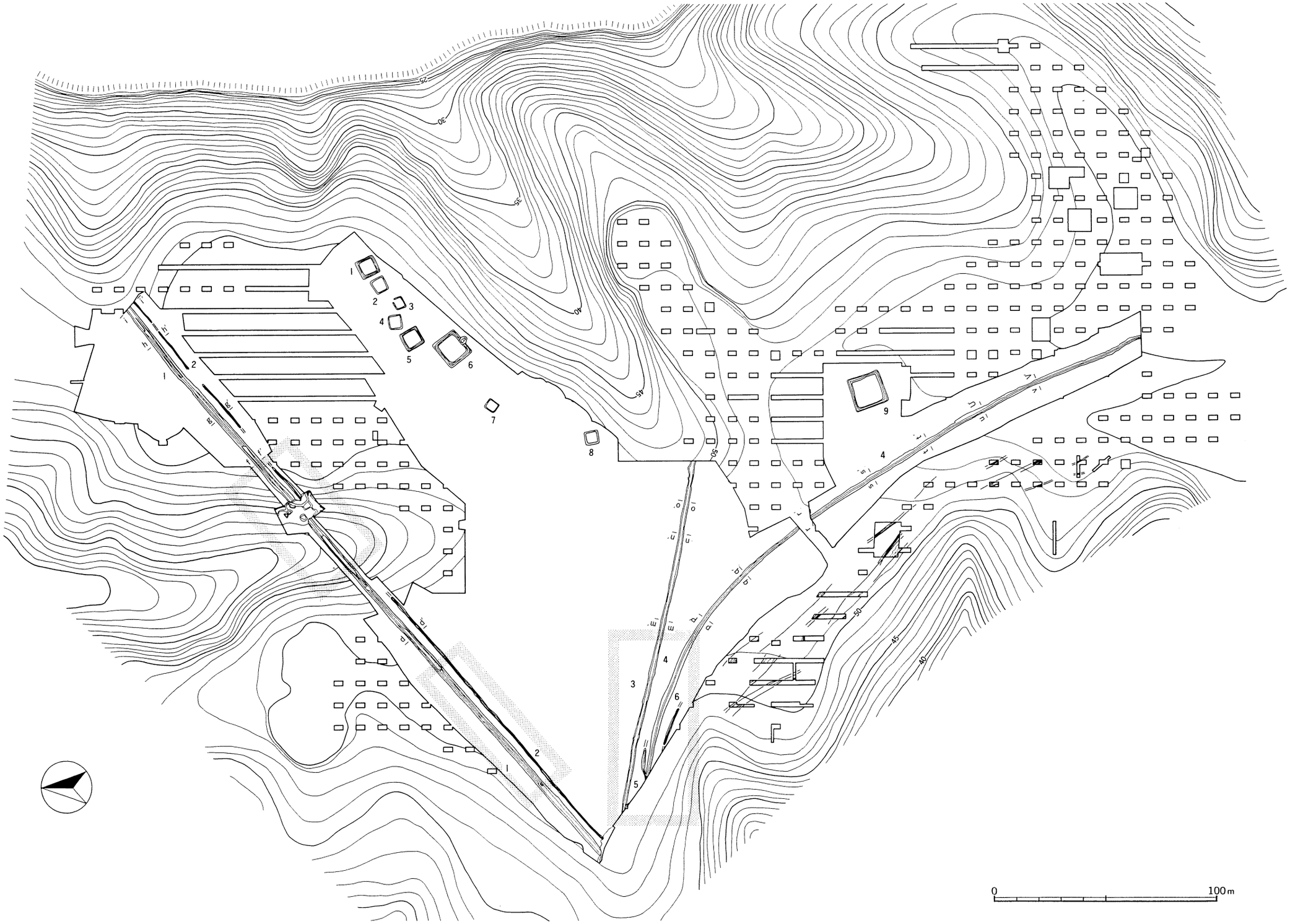
奈良・平安時代の遺構としては、方形周溝９基、溝２条がある（第123図）。他に時期不明の溝17条が検出されているが、西側斜面の溝13条については、本調査範囲から除外されている。03～06号溝を含め、その多くは道路跡と考えられるが、かならずしも明らかではない。方形周溝については、これに伴うと考えられる遺物は皆無であり、遺物から時期を特定することはできない。01・05・06・09号方形周溝については、周溝の形状、埋葬施設等から、ほぼ奈良・平安期の所産と考えられるが、他は、五領式期の集落・居住区と対置する位置にあるものもあり、その関連を全く否定することはできない。一応、配列などから、当該期に一括しておくが、確証はない。なお、同遺構については、「方形周溝」、「方形周溝状遺構」等の呼称が与えられているが、「方形周溝墓」、「方墳」との相違を含め、かならずしも適切なものとは思われない。ここでの使用については、便宜的なものである。他に土墨状遺構がある。

(1)　方形周溝

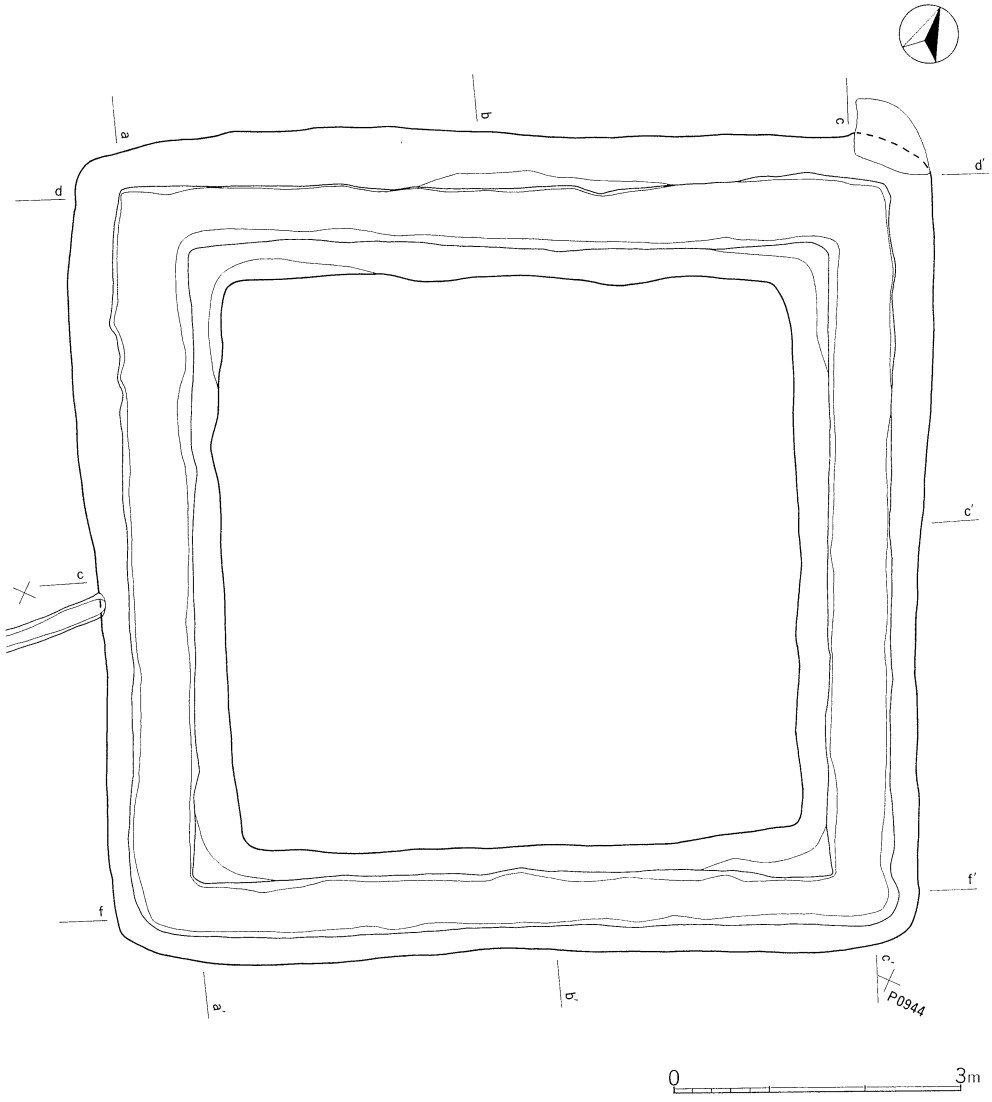
01号方形周溝（第124・125図）

遺　構　墳丘については、その痕跡を認めることはできなかった。周溝平面は、各隅とも明確に屈曲する方形を呈す。確認面における規模は、東溝（断面ｃ－ｃ′を基準）で8.59m、西溝（断面ａ－ａ′）で8.61m、南溝（断面ｆ－ｆ′）で8.44m、北溝（断面ｄ－ｄ′）で8.98mを測る。断面ｂ－ｂ′（南北断面）外周で8.71m、方台部で6.04m、断面ｅ－ｅ′（東西断面）外周で8.69m、方台部で6.08mを測る。主軸方位については、方台部南北辺中心線を基準とした場合、N－27°－Wを示す。周溝は、断面ｂ－ｂ′北溝で幅1.55m、確認面からの深さ92cm、標高49.36m、断面ｂ－ｂ′南溝で幅1.12m、深さ81cm、標高で49.29m、断面ｅ－ｅ′東溝で幅1.30m、深さ95cm、標高で49.16m、断面ｅ－ｅ′西溝で幅1.31m、深さ93cm、標高49.41mを測る。周溝底面はほぼ平坦であり、一方向へ傾斜することもない。周溝断面は、中位に稜をもち、２段に立ち上がる。掘り直しの可能性も考えられるが、土層断面を含め、明確な確証はない。周溝内の土層は、１層がローム粒、ロームブロックを多量に混合する明黒褐色土層、２・３層が黒褐色土層、４・５・８・９・10層が暗黄褐色土層であり、とくにしみ状にローム質土を混合する。11・13・14層は、同様に暗黄褐色土層であるが、全体にブロック状・粒状であった。６・７・12層は黄褐色土層であり、ロームブロックを主体とする。なお、周溝縦方向の土層断面の設定は、周溝内の埋葬施設の確認を目的としたものであったが、内部施設については、方台部、周溝内とも検出することはできなかった。

出土遺物　縄文土器小片が出土したのみである。



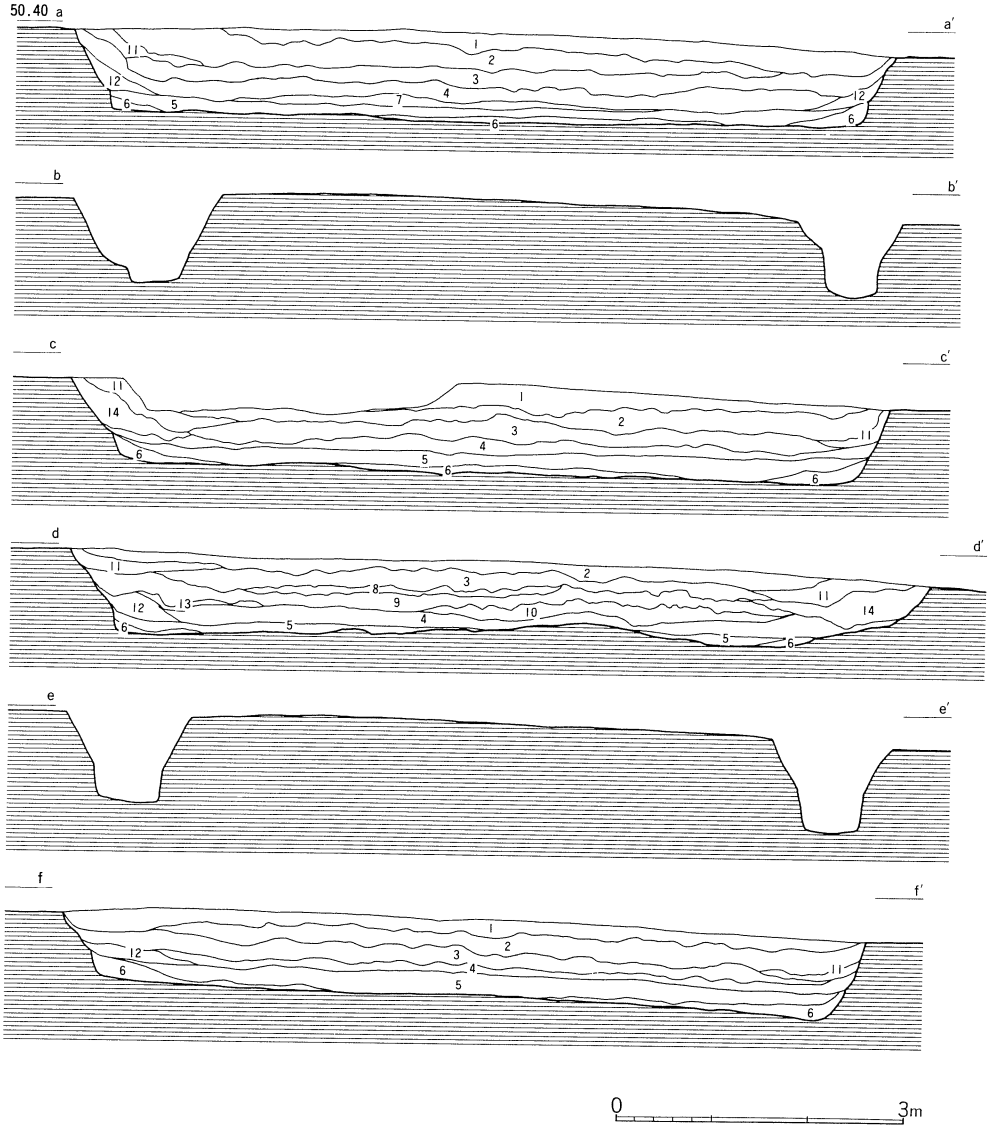
第123図　奈良・平安時代およびそれ以降の遺構（1/2,000）



第124図　01号方形周溝(1)（1/80）

02号方形周溝（第126図）

遺　構　01号方形周溝に隣接する。東西に横断する溝は、本遺構に伴うものではない。遺存状態は不良であり、掘り込みは浅く、とくに北隅付近の平面形は、やや不確実である。周溝外周および方台部の平面は、隅丸台形を呈す。確認面における規模は、東溝（断面ａ－ａ′を基準）で6.73m、西溝（断面ｃ－ｃ′）で5.57m、北溝（断面ｄ－ｄ′）で6.92m、南溝（断面ｆ－ｆ′）で6.10mを測る。断面ｂ－ｂ′（南北断面）外周で6.69m、方台部で5.69m、断面ｅ－ｅ′（東西断面）外周で6.96m、方台部で6.09mである。主軸方位については、方台部南北辺中心線を基準とした場合、Ｎ－31°－Ｗを示す。周溝については、断面ｂ－ｂ′北溝で幅49cm、確認面からの深さ6cm、断面ｂ－ｂ′南溝で幅51cm、深さ12cm、断面ｅ－ｅ′東溝で幅41cm、深さ6cm、断面ｅ－ｅ′西溝で幅46cm、



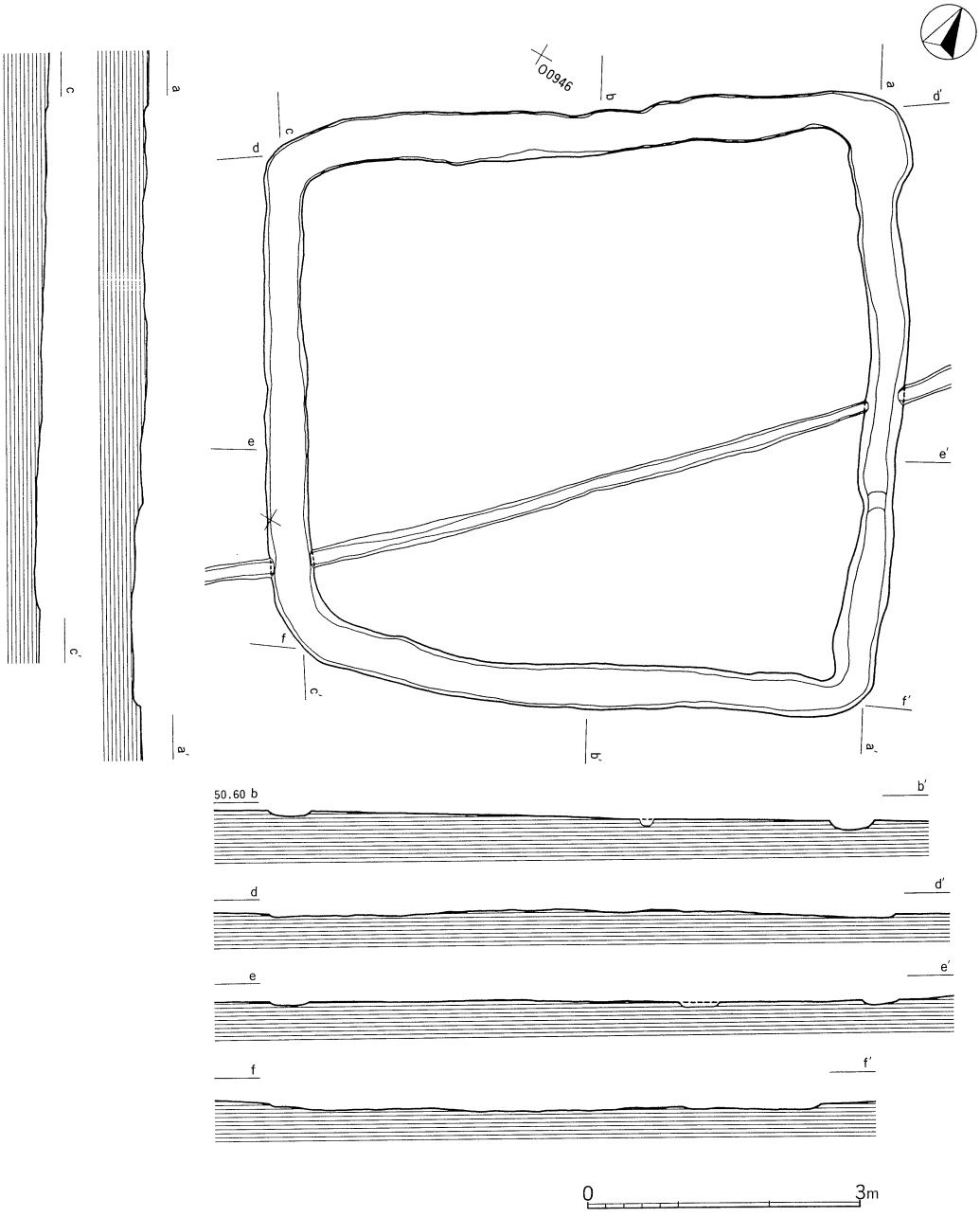
第125図　01号方形周溝(2)（1/80）

深さ5cmを測る。周溝底面は、全体に凸凹がみられ、東溝は段をもつ。また南東側に傾斜し、標高50.23～50.45mを測る。埋葬施設は、検出することができなかった。

出土遺物　出土していない。

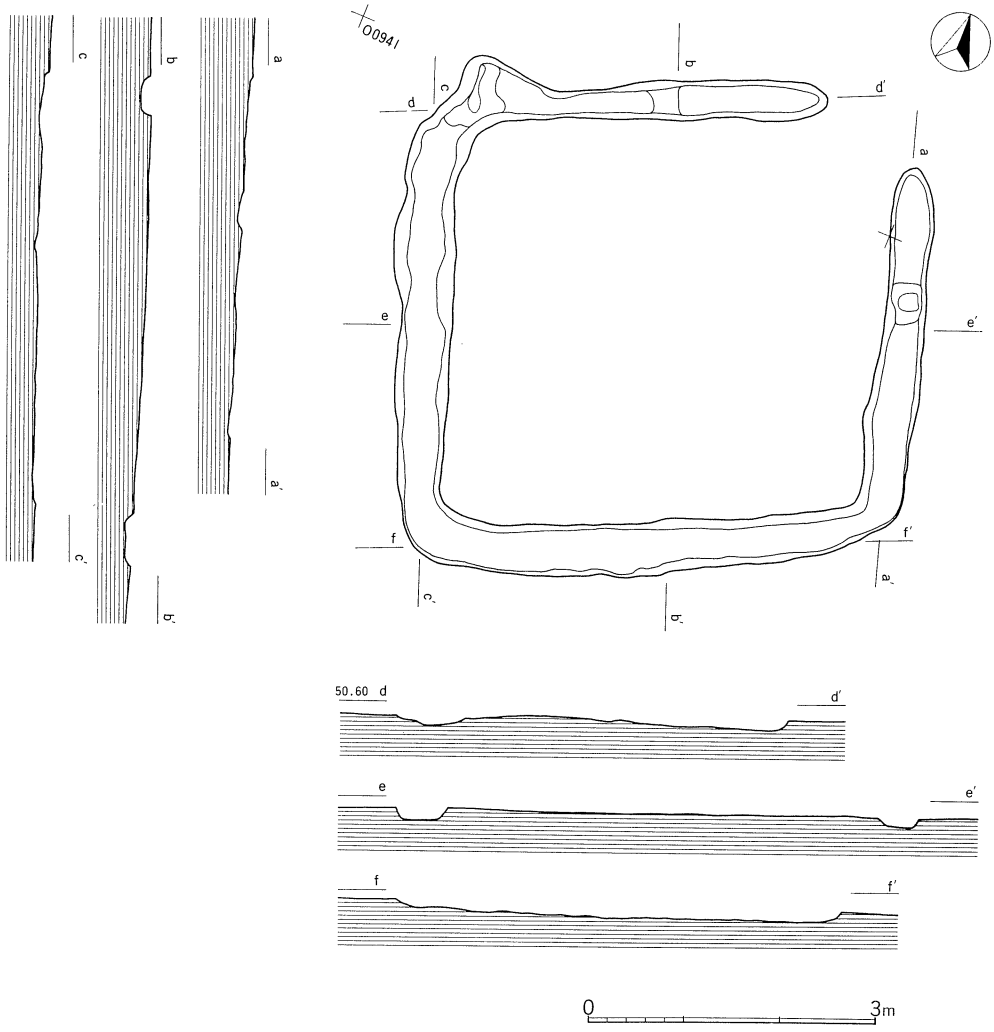
03号方形周溝（第127図）

遺　構　確認面に対する掘り込みは浅く、遺存状態は不良であった。北東隅は開口するが、これが本来の形状であるかどうかは不明確である。また北西隅は、一部撹乱され、プランを確実にとらえることはできなかった。周溝外周および方台部の平面は、隅丸方形を呈す。確認面における規模は、東溝（断面ａ－ａ′を基準）で3.83m、西溝（断面ｃ－ｃ′）で4.63m、北溝（断面ｄ－ｄ′）



第126図　02号方形周溝（1/80）

で4.12m、南溝（断面ｆ－ｆ′）で4.65mを測る。断面ｂ－ｂ′（南北断面）外周で5.21m、方台部で4.20m、断面ｅ－ｅ′（東西断面）外周で5.49m、方台部で4.53mである。主軸方位については、方台部南北辺中心線を基準とした場合、N－18°－Wを示す。周溝については、断面ｂ－ｂ′北溝で幅42cm、確認面からの深さ9cm、断面ｂ－ｂ′南溝で幅59cm、深さ9cm、断面ｅ－ｅ′西溝で幅42cm、深さ11cm、断面ｅ－ｅ′東溝で幅54cm、深さ10cmである。周溝底面は、全体に凸凹がみられ、また



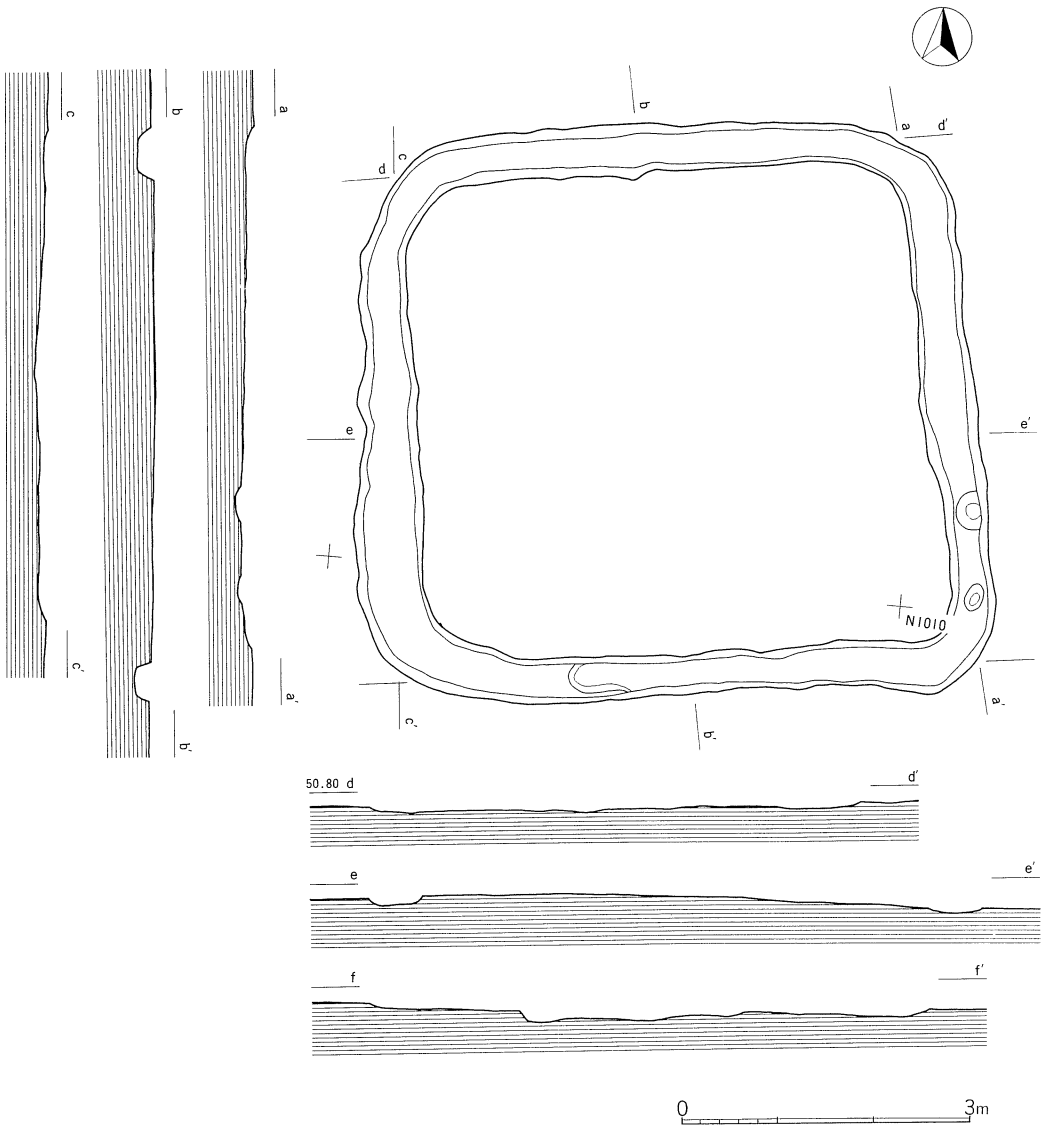
第127図　03号方形周溝（1/80）

東南側へ傾斜する。標高は50.22mから50.41mを測る。埋葬施設は、周溝を含め、検出することができなかった。

出土遺物　縄文土器、土師器（五領式）小片が出土したのみである。

04号方形周溝（第128図）

遺　構　掘り込みは浅く、全体に遺存状態は不良であった。とくに南東隅については、ややその範囲は不確実である。周溝外周および方台部の平面は、隅丸台形を呈し、南東隅がやや突出する。確認面における規模は、東溝（断面ａ－ａ′を基準）で5.53m、西溝（断面ｃ－ｃ′）で5.16m、北溝（断面ｄ－ｄ′）で5.23m、南溝（断面ｆ－ｆ′）で5.83mを測る。また断面ｂ－ｂ′（南北断面）外周で6.07m、方台部で5.10m、断面ｅ－ｅ′（東西断面）外周で6.45m、方台部で5.31mである。主軸方位については、方台部南北辺中心線を基準として設定した場合、N－10°－Wである。周溝



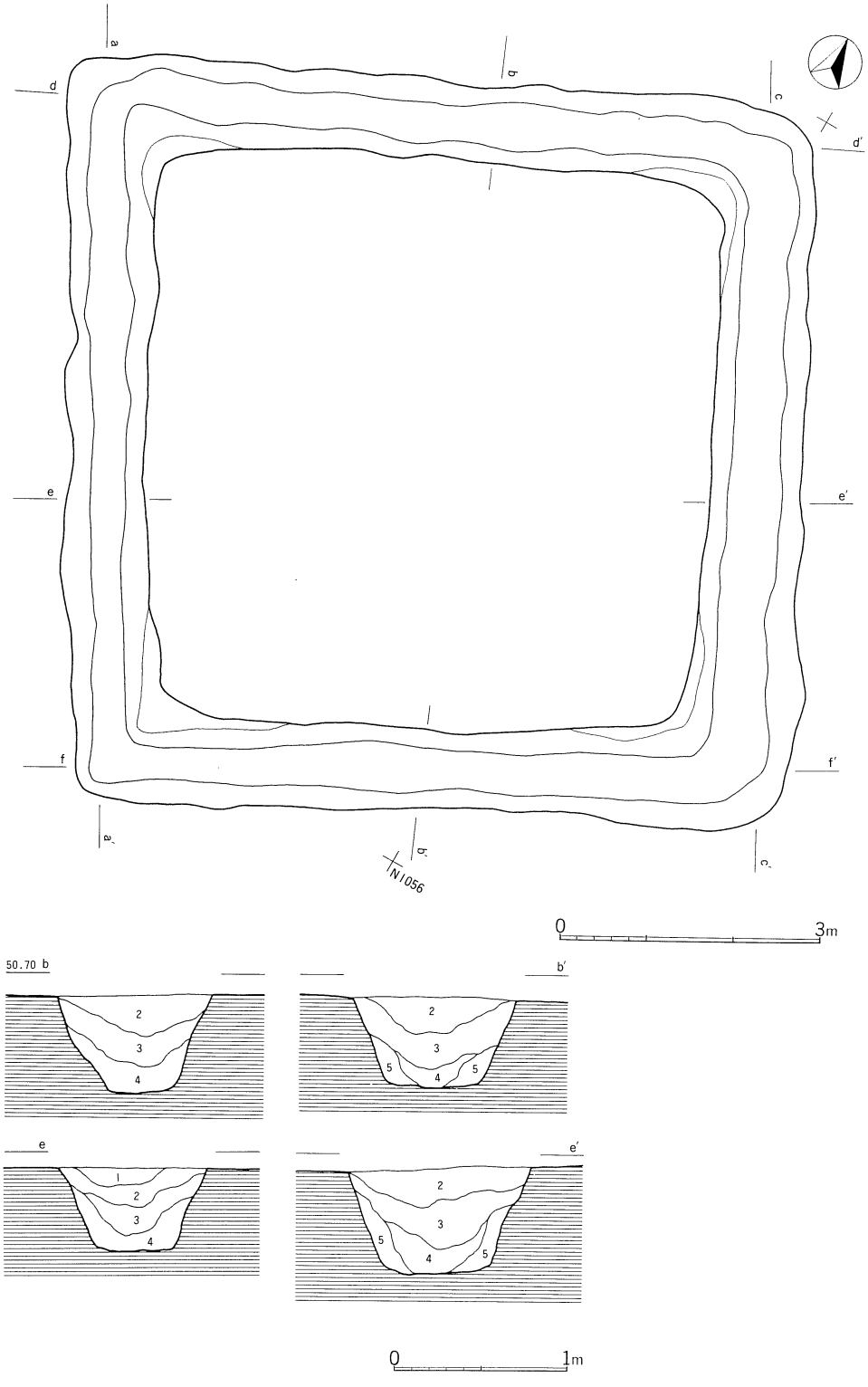
第128図　04号方形周溝（1/80）

については、断面ｂ－ｂ′北溝で幅56cm、確認面からの深さ15cm、断面ｂ－ｂ′南溝で幅41cm、深さ17cm、断面ｅ－ｅ′西溝で幅57cm、深さ10cm、断面ｅ－ｅ′東溝で幅57cm、深さ５cmを測る。周溝底面は、全体に凹凸がみられるが、東溝南側の掘り込みは、本遺構に伴うものとは考えられない。南溝には、段がみられ、比高は13cmである。全体は東側に傾斜し、標高は50.37～50.59mである。

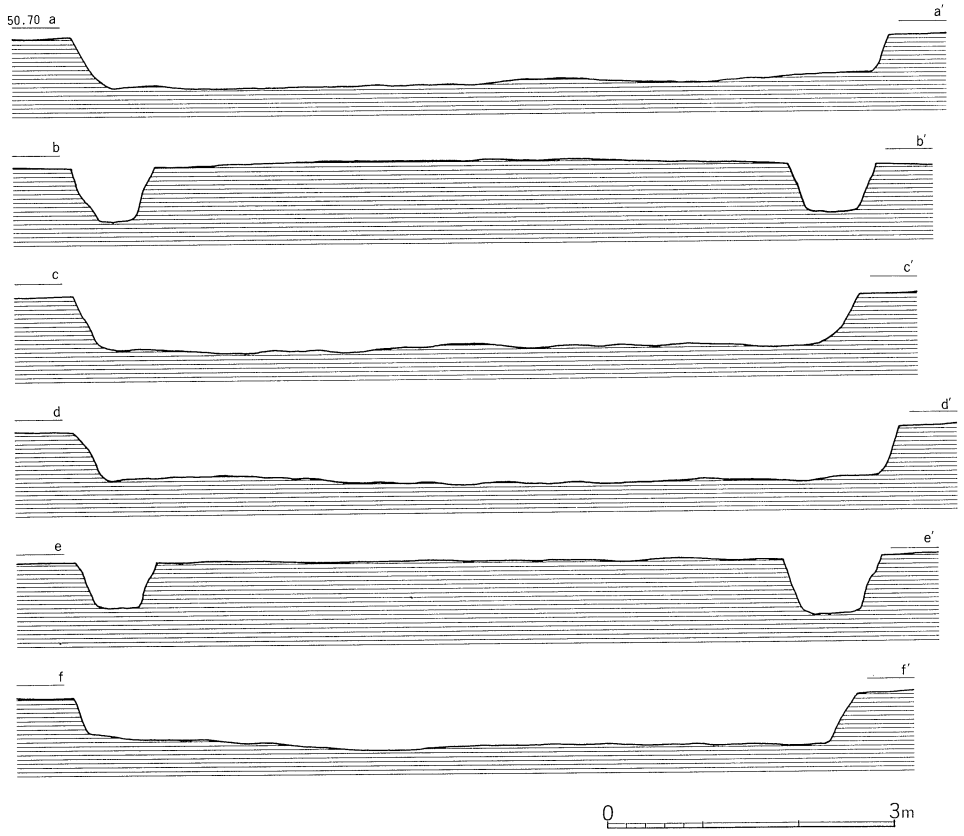
出土遺物　本遺構に伴うと考えられるものは出土していない。

05号方形周溝（第129・130図）

遺　構　周溝平面は、外周・方台部各隅とも明確に屈曲し、方形を呈す。確認面における規模は、東溝（断面ｃ－ｃ′を基準）で8.30m、西溝（断面ａ－ａ′）で8.63m、南溝（断面ｆ－ｆ′）で8.27



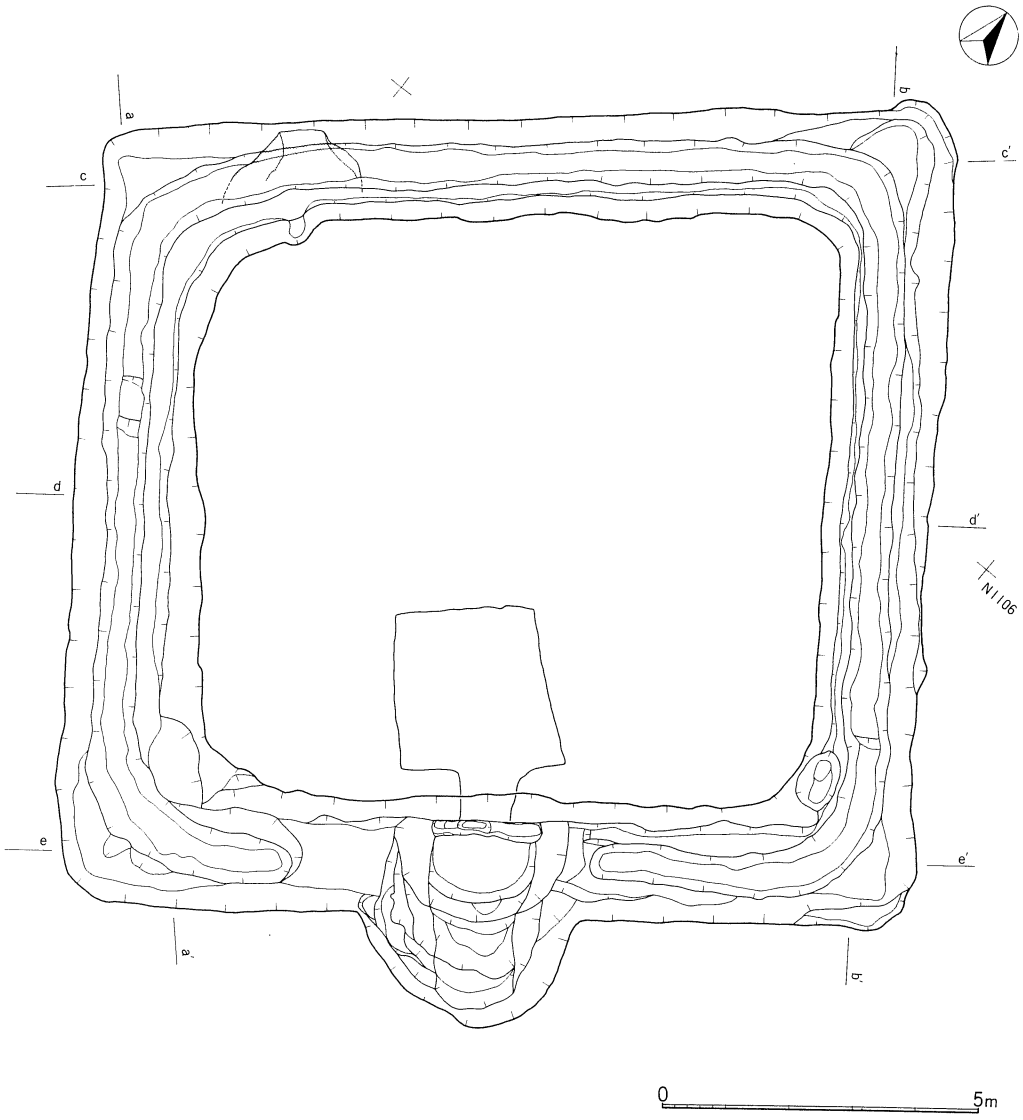
第129図　05号方形周溝(1)（1/80、1/40）



第130図　05号墳方形周溝(2)（1/80）

m、北溝（断面ｄ－ｄ′）で8.70mを測る。断面ｂ－ｂ′（南北断面）外周で8.48m、方台部で6.67m、断面ｅ－ｅ′（東西断面）外周で8.55m、方台部で6.60mを測る。主軸方位については、方台部南北辺中心線を基準とした場合、N－28°－Wを示す。周溝は、断面ｂ－ｂ′北溝で幅88cm、確認面からの深さ58cm、標高49.98m、断面ｂ－ｂ′南溝で幅93cm、深さ53cm、標高50.03m、断面ｅ－ｅ′西溝で幅88cm、深さ49cm、標高50.11m、断面ｅ－ｅ′東溝で幅1.07m、深さ61cm、標高50.00mを測る。周溝断面は台形を呈し、底面は平坦であった。墳丘は、全く確認することはできず、埋葬施設についても、検出することができなかった。なお西側周溝上層より、軟質砂岩塊が出土したが、本遺構に伴うものであるかどうかは不明である。表面整形痕等認められなかった。周溝内の土層は、２層が黒褐色土層であり、１層はこれに砂岩片を多量に含む。３層は明黒褐色土層、４層は明黒褐色土層でありローム粒、ロームブロックを多量に含む。５層は暗黄褐色土層であり、しみ状にロームを混含する。

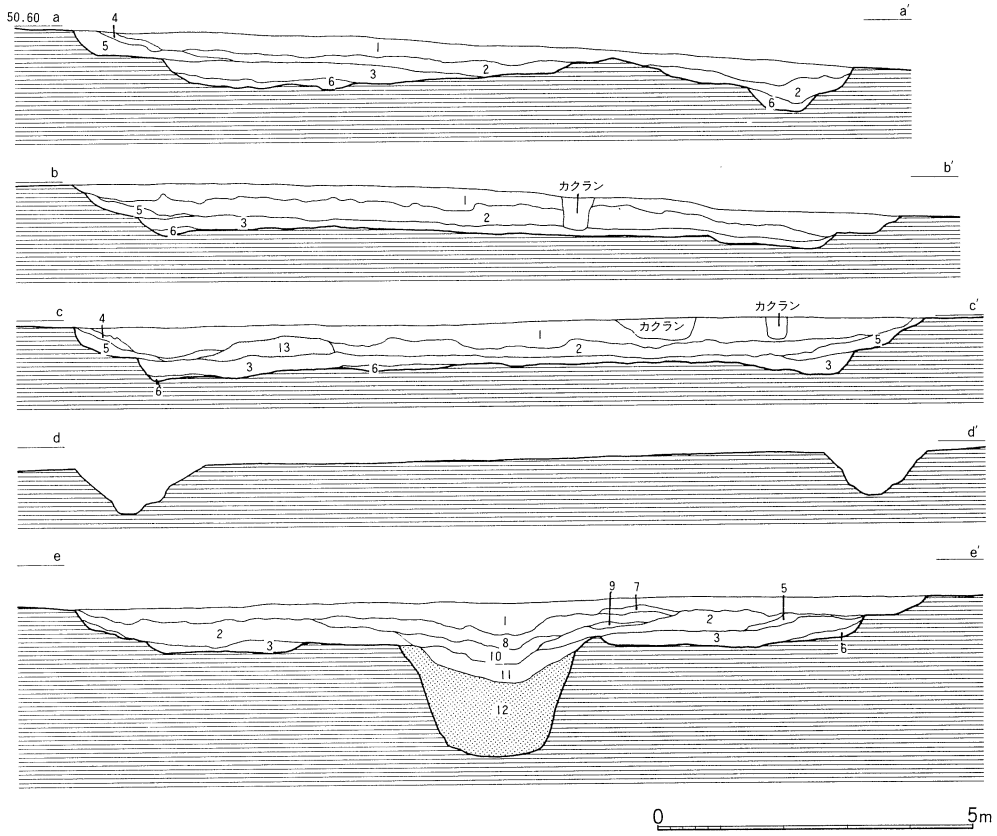
出土遺物　五領式土器小片が若干出土したのみである。



第131図　06号方形周溝(1)（1/120）

06号方形周溝（第131・132・133図）

遺　溝　周溝外周は、各隅とも明確に屈曲するのに対して、方台部はやや隅丸の方形を呈す。確認面における規模は、東溝（断面ｂ－ｂ′を基準）が13.03m、西溝（断面ａ－ａ′）が12.33m、南溝（断面ｅ－ｅ′）が13.47m、北溝（断面ｃ－ｃ′）が13.45mを測る。また断面ｄ－ｄ′（東西断面）外周で13.47m、方台部で9.78m、南北最大長で外周14.43m、方台部9.09mを測る。方位については、南北辺中心線を基準とした場合、Ｎ－39°－Ｗを示す。周溝は、２段に掘り込まれている。断面ｄ－ｄ′東溝で幅1.68m、確認面からの深さ71cm、中段部深さ54cm、断面ｄ－ｄ′西溝で幅2.01m、深さ79cm、中段部深さ63cmである。周溝幅は、西溝がややひろい他、北溝が1.6m前後、南溝



第132図　06号方形周溝(2)（1/120）

が1.8～1.9mである。周溝底面は、やや南溝が深くなり、標高は49.23m～49.80m、比高60cm程度である。周溝は、掘り直しの可能性があり、これが妥当であるならば、後述する北溝陸橋部の状況等から、深い部分が古い段階の周溝と考えられる。その周溝平面は、新期のものとはややことなり、各隅はゆるやかに屈曲する。ただしこの場合、南溝は埋葬施設の脇でとぎれ、この部分が浅くなっていたのか、あるいは開口していたことになる。周溝内の堆積土層は、１層が黒褐色土層、２層が明黒褐色土層、３・４・５層が暗黄褐色土層、６層がブロック状の黄褐色土層である。また南溝７・９層は暗黄褐色土層、８層が明黒褐色土層、９層が黒褐色土層、11層が暗黄褐色土層である。12層は粒状のロームを主体とする比較的均質な黄褐色土層、13層は粘性の強いベタ状のローム質土、14層は黒褐色土層、15層が暗黄褐色土層、16・17・18層がブロック状の黄褐色土層である。このうち、北溝13層は、断面ｃ－ｃ′南側については、範囲を確認しないまま除去してしまったが、人為的な土橋状の施設と考えられ、３層上につくられている。これは、３・６層堆積後、あるいは新期の周溝掘り直しの段階につくられたものと考えられる。

内部施設　南溝に、階段状になる、墓道状の施設があり、これを入口部とする地下式横穴墓が検出された。確認面から、深さ2.78mを測る。12層は、この閉塞に伴う埋土と考えられ、上面レベ

ルは、中央部が現状で落ちこんでいるものの、両脇の周溝底面、開口部閉塞施設に対応する。直接の閉塞施設は検出されなかったが、木板であると考えられ、玄門周囲が、台形に5㎝程度掘り込まれている。また下部は溝状になっている。開塞板付設部は、上端左右で1.37m、最大1.68m、高さ1.73mを測る。19層は、サラサラの黒色粒、ローム粒であるが、これは、木板の腐植時に流入したものと考えられる。開口部は、上下93㎝、左右最大で92㎝を測り、底面がやや平坦になる他、ほぼ円形を呈す。埋納部（玄室）は、奥壁で幅2.11m、前壁で2.47m、長軸2.51mを測り、台形の平面を呈す。主軸方位は、奥壁・前壁中心線を基準とした場合N—44°—W、中央部の溝状の落ち込みのプランを参考とした場合N—38°—Wを示す。後者の場合、周溝主軸とほぼ対応する。天井部については、崩壊により明確ではないが、奥壁で高さ97㎝を測り、ほぼアーチ状になるものと考えられる、玄室内中央部は、方形に深さ8㎝程度、幅57～78㎝落ち込んでおり、両側は棺座状になる。ただし、人骨等が出土せず、埋葬位置は不明であり、また棺座としては、東側が明らかにせまい。なお、北東際の落ち込みについては、本遺構に伴うものであるかどうか不明確である。堆積土は、22層がベタ状の明黒褐色土であり、20・21層はロームブロックを主体とする。基本的には、天井の崩落によるものである。なお、壁面には、明瞭な整形痕が認められた。

出土遺物　周溝内からは、縄文土器、土師器（五領式）小片が出土している。地下式横穴墓を含め、本遺構に伴う可能性のある遺物は皆無である。

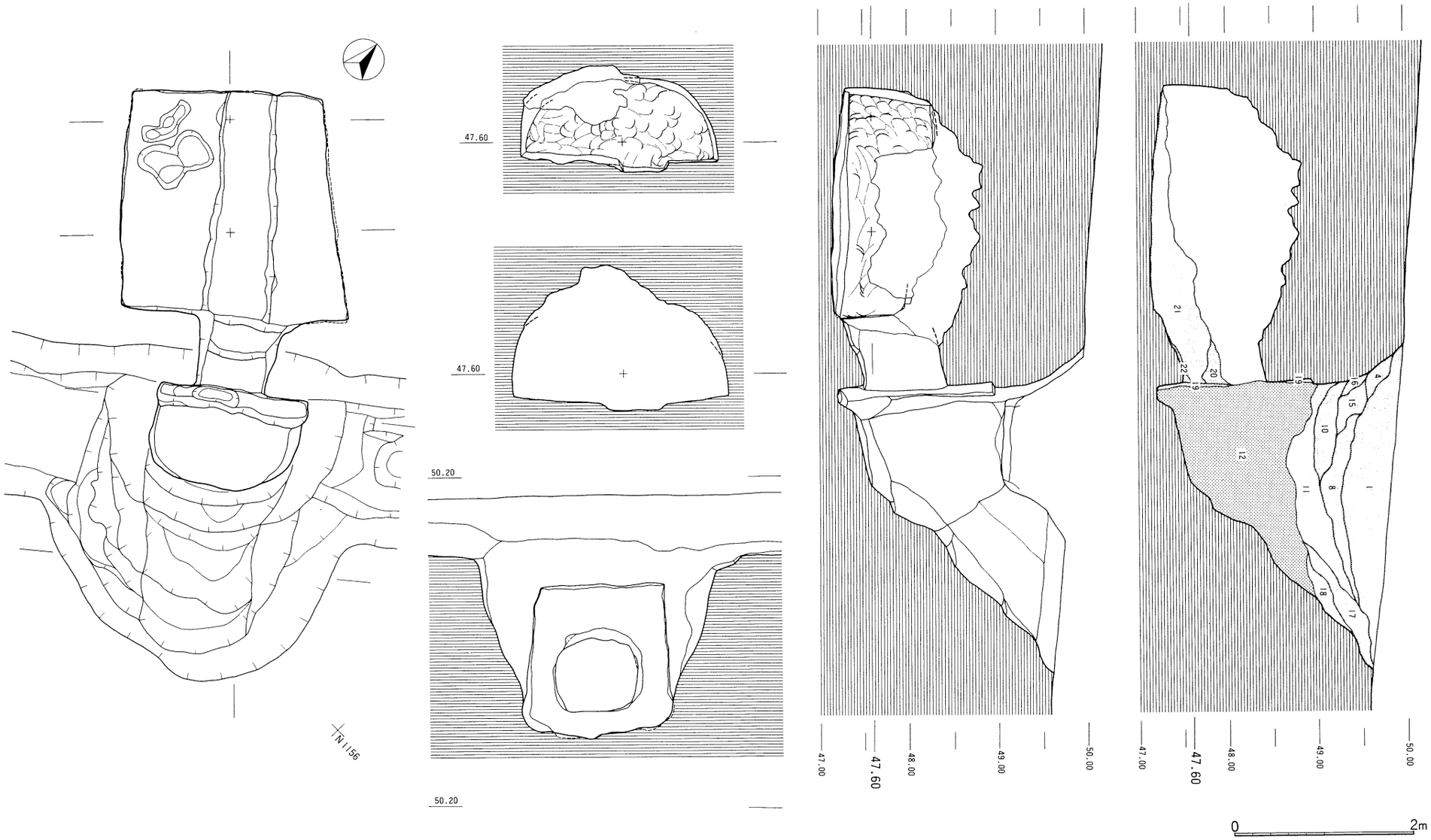
07号方形周溝（第134図）

遺　構　01～06号方形周溝とははなれ、単独で存在する。遺存状態は全体に不良である。北隅際は、木根による撹乱をうけている。平面は、とくに方台部がやや台形を呈す。確認面における規模は、北東溝（断面a—a′を基準）で4.65m、南西溝（断面c—c′）で5.21m、南東溝（断面f—f′）で5.03m、北西溝（断面d—d′）で5.36mを測る。また断面b—b′（北西・南東断面）外周で5.40m、方台部で4.43m、断面e—e′（南西・北東断面）外周で5.55m、方台部で4.48mを測る。主軸方位については、方台部北西・南東辺中心線を基準として設定した場合、N—54°—Wを示す。周溝については、断面b—b′北西溝で幅35㎝、確認面からの深さ5㎝、断面b—b′南東溝で幅62㎝、深さ5㎝、断面e—e′南西溝で幅52㎝、深さ9㎝、断面e—e′北東溝で幅55㎝、深さ13㎝を測る。周溝底面には、若干の凹凸がみられるが、本遺構に伴うものであるかどうかは明確ではない。全体はやや東側に傾斜し、底面の標高は、50.65～50.37mである。埋葬施設は、検出することができなかった。

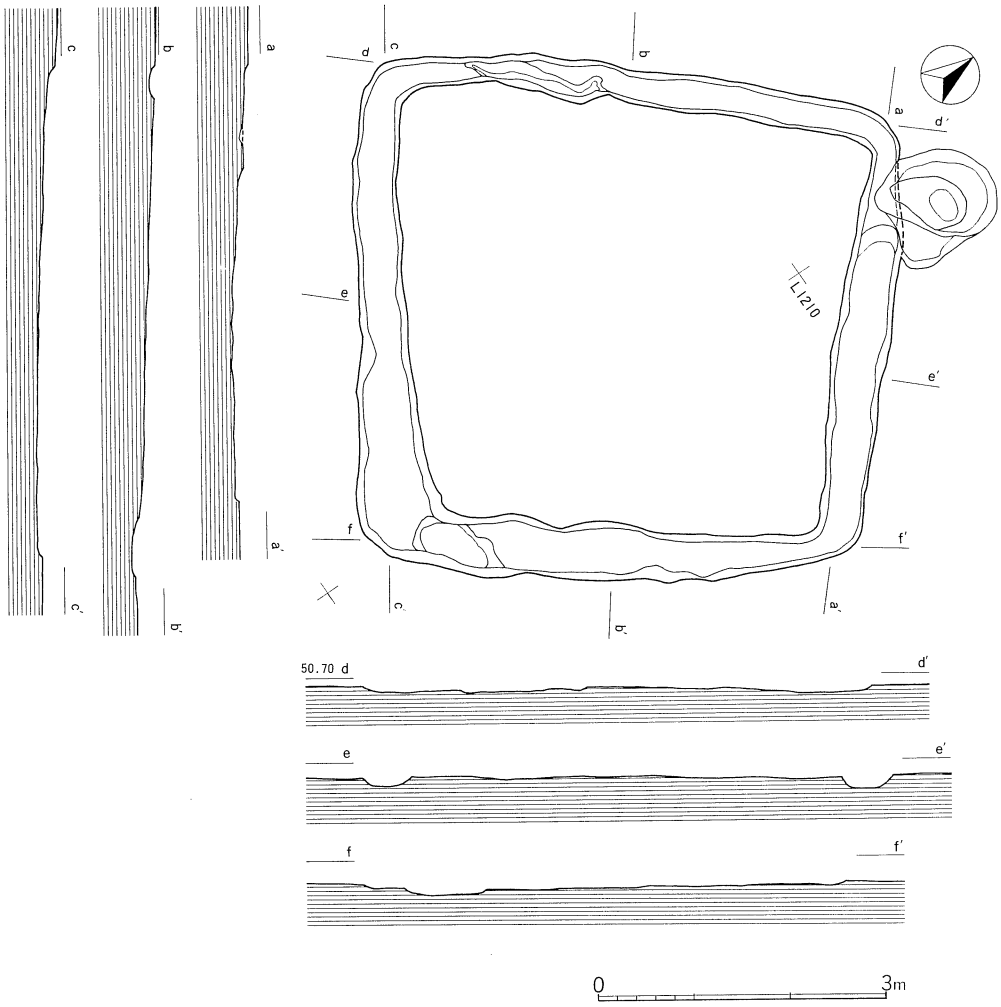
出土遺物　本遺構に伴うと考えられる遺物はない。

08号方形周溝（第135図）

遺　構　他の方形周溝とははなれ、単独で存在する。周溝平面は、隅丸方形を呈す。確認面における規模は、東溝（断面a—a′を基準）で6.26m、西溝（断面c—c′）で6.17m、南溝（断面f—f′）で6.39m、北溝（断面d—d′）で6.15mを測る。また断面b—b′（南北断面）外周で6.52



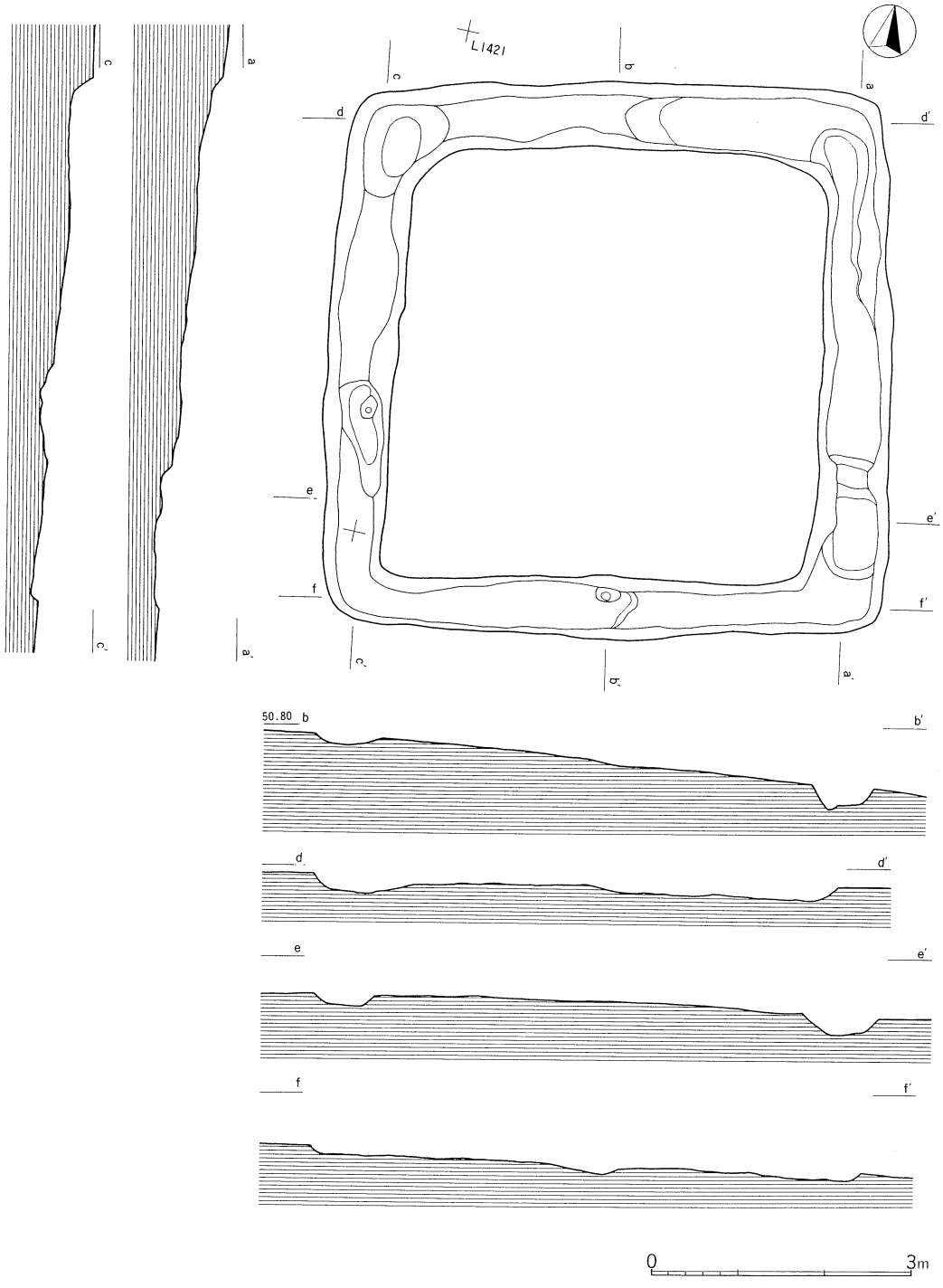
第133図　06号方形周溝(3)（1/60）



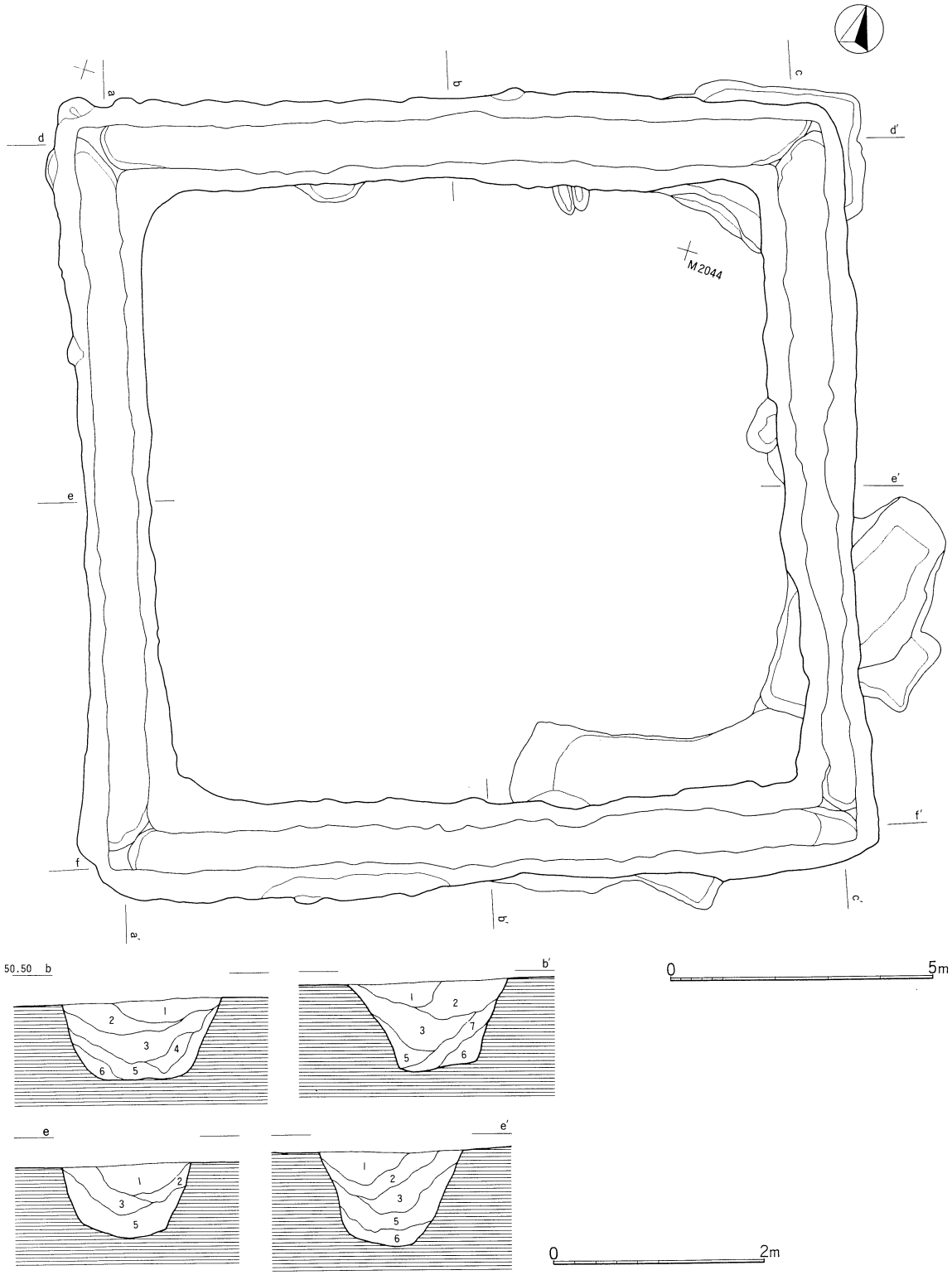
第134図　07号方形周溝（1/80）

m、方台部で4.99m、断面ｅ－ｅ′（東西断面）外周で6.56m、方台部で4.97mである。主軸方位については、方台部南北辺中心線を基準として設定した場合、N－8°—Wを示す。周溝については、断面ｂ－ｂ′北溝で幅77cm、確認面からの深さ10cm、断面ｂ－ｂ′南溝で幅76cm、深さ28cm、断面ｅ－ｅ′西溝で幅71cm、深さ13cm、断面ｅ－ｅ′東溝で幅88cm、深さ23cmを測る。本遺構は、斜面部に位置することから、周溝底も南側に傾斜し、標高で49.82～50.57m、比高75cm程度を測る。周溝底面は凹凸がみられ、東溝は階段状になる。また北西隅および西溝南側に落ち込みがみられる。ただし、これがなんらかの施設に伴うものであるかどうかは不明確である。埋葬施設と考えられるものは検出されていない。

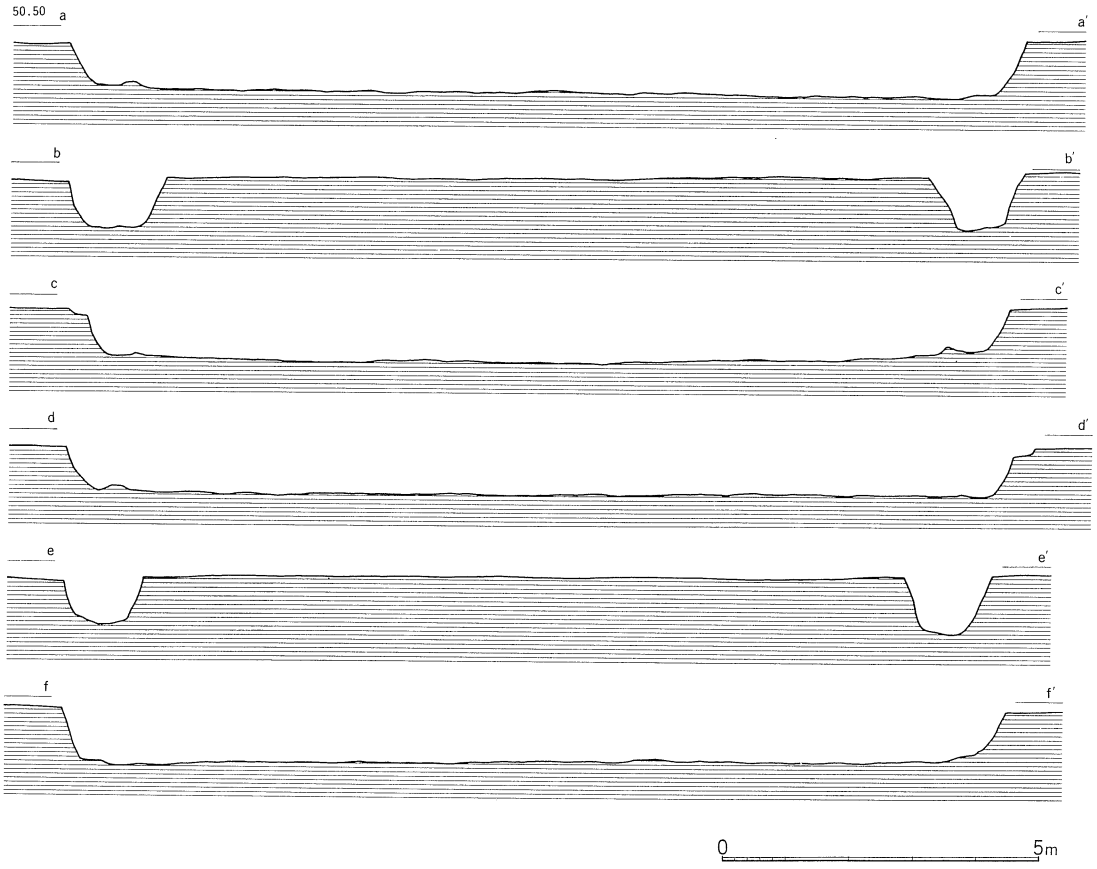
出土遺物　五領式土器小片が出土しているのみである。



第135図　08号方形周溝（1/80）



第136図　09号方形周溝(1)（1/120、1/60）

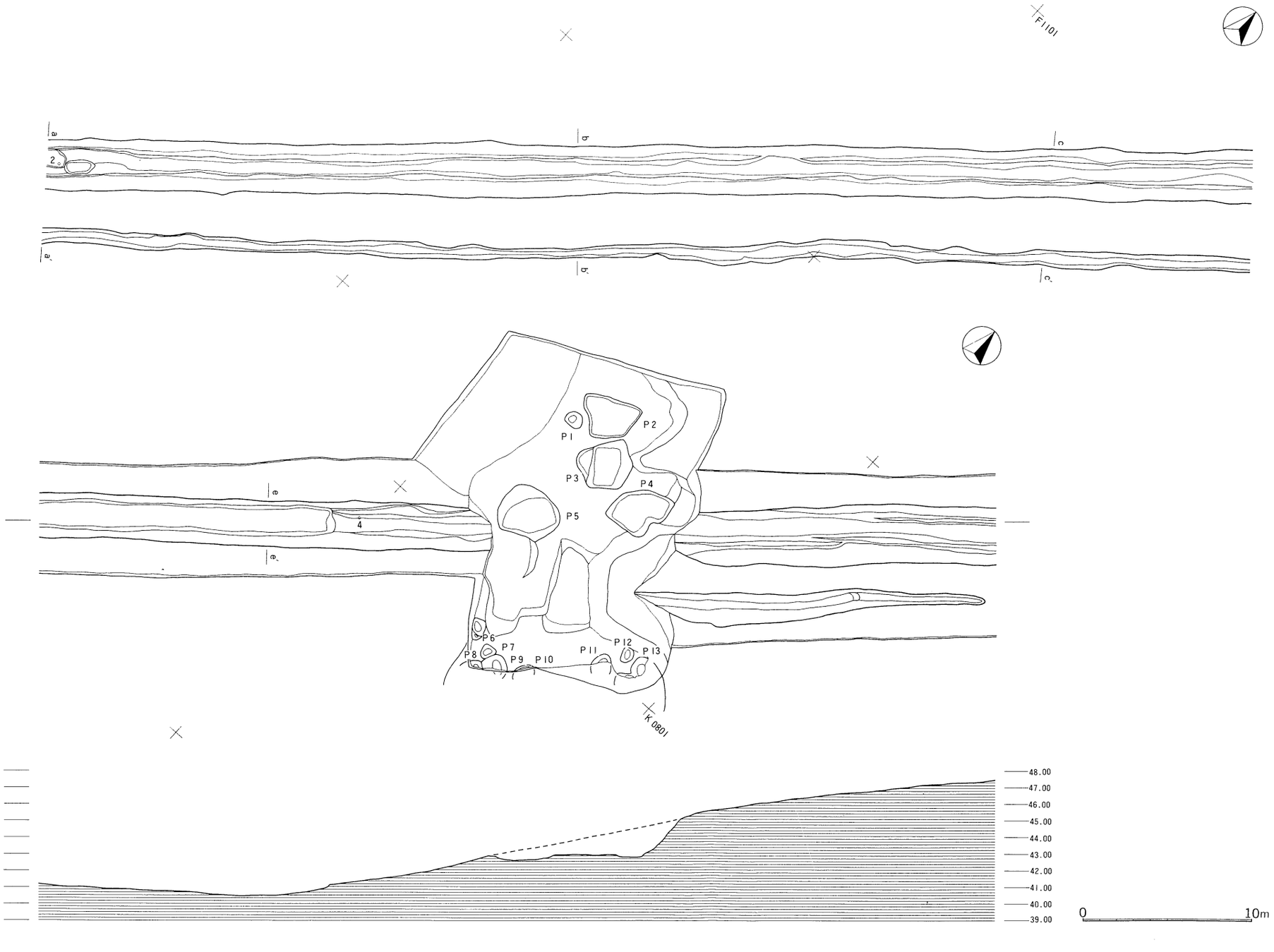


第137図　09号方形周溝(2)（1/120）

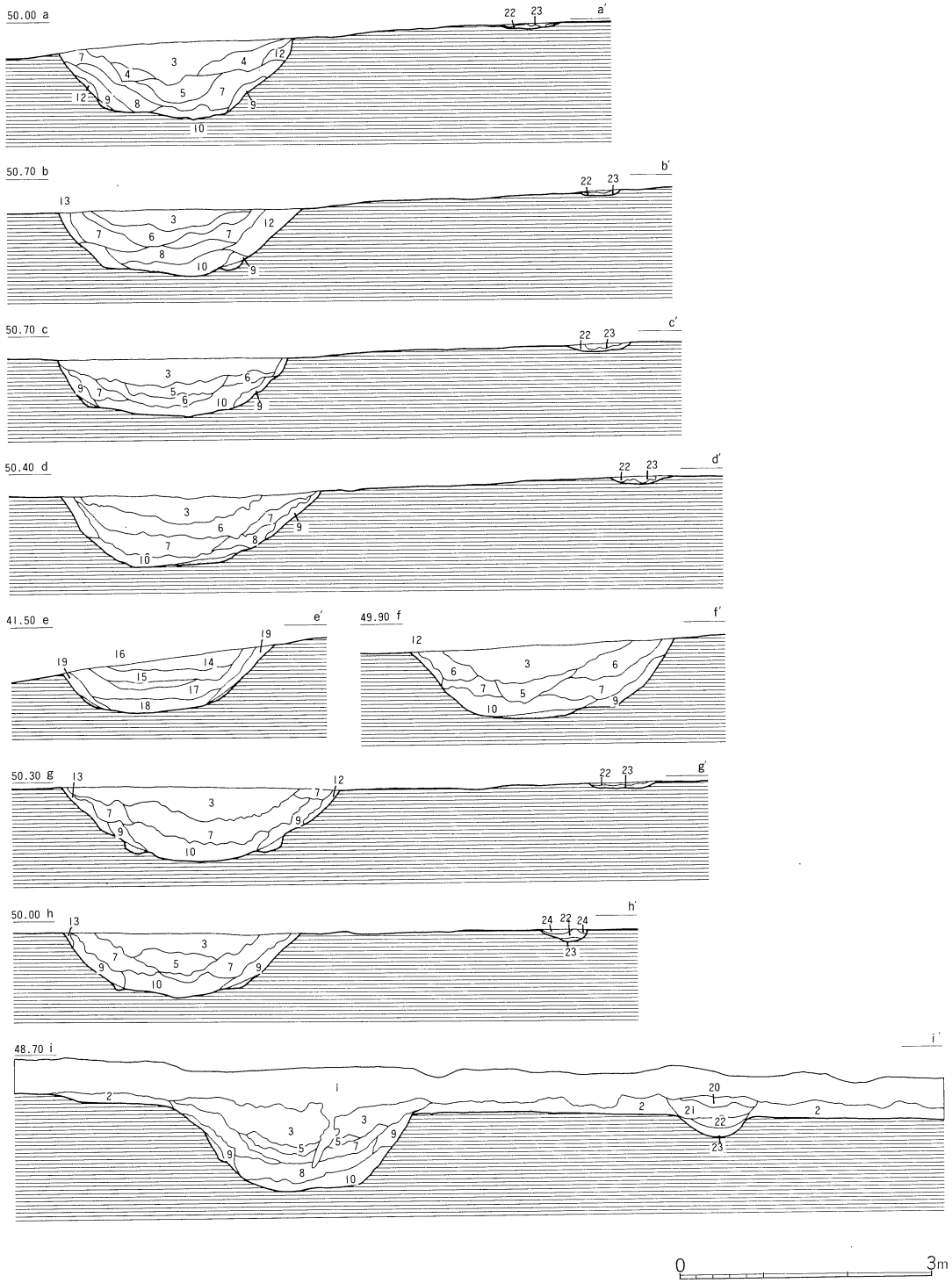
09号方形周溝（第136・137図）

遺　構　他の方形周溝とははなれ、単独で存在する。北東隅、東溝南側は、試掘等撹乱をうけている。周溝平面は、外周、方台部とも、各隅は明確に屈曲し、方形を呈する。確認面における規模は、東溝（断面ｃ－ｃ′を基準）で14.57m、西溝（断面ａ－ａ′）で15.11m、南溝（断面ｆ－ｆ′）で14.89m、北溝（断面ｄ－ｄ′）で14.94mを測る。断面ｂ－ｂ′（南北断面）外周で15.03m、方台部で12.01m、断面ｅ－ｅ′（東西断面）外周で14.64m、方台部で12.08mを測る。主軸方位は、方台部南北辺中心線を基準とした場合Ｎ－20°－Ｗを示す。周溝は、断面ｂ－ｂ′北溝で幅1.50m、確認面からの深さ73cm、断面ｂ－ｂ′南溝で幅1.52m、深さ85cm、断面ｅ－ｅ′西溝で幅1.21m、深さ69cm、南西ｅ－ｅ′東溝で幅1.35m、深さ88cmである。周溝底面は平坦であり、標高はほぼ49.50m前後である。ただし、各隅は、やや浅くなる。周溝内の土層は、１・２層が明黒褐色土層、３層が黒褐色土層、４・７層がブロック状の黄褐色土層、５・６層は暗黄褐色土層である。埋葬施設は、検出することができなかった。

出土遺物　縄文土器小片が、数点出土したのみである。



第138図　01・02号溝(1) (1/300)



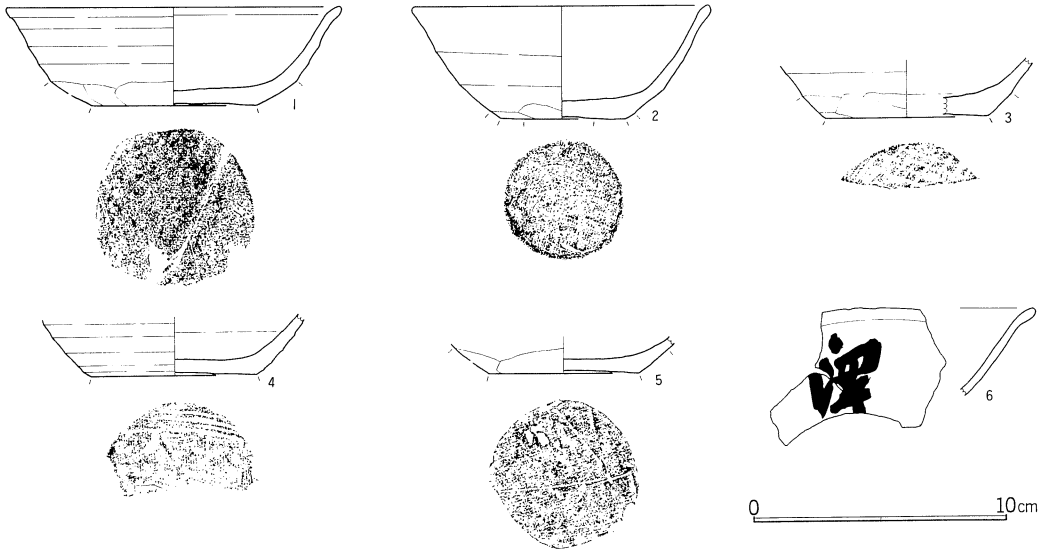
第139図　01・02号溝(2)（1/80）

(2) 溝・土墓状遺構

01・02号溝（第116・123・138・139・140図）

遺　構　北東方向から南西へ、調査区北側を横断する。両者はほぼ平行し、03号墳部分でやや湾曲するものの、きわめて直線的であり、方位は、N－49°－Eを示す。調査区内で全長329mを測り、調査対象区外へ連続する。02号溝は、掘り込みが浅く、断続的に検出されたが、本来一連のものと考えられる。ただし、02号溝谷部については、不明確であった。03号墳は、これが掘削された段階で、ほぼ破壊されたものと考えられるが、02号溝は、調査確認レベルでは、墳丘両端部で中断する。規模は、断面ａ－ａ′、01号溝確認面で幅2.78m、確認面からの深さ93cm、標高48.81m、02号溝幅72cm、深さ７cm、標高49.88m、01・02号溝の間隔2.48mを測る。断面ｂ－ｂ′、01号溝幅2.89m、深さ81cm、標高49.50m、02号溝幅47cm、深さ６cm、標高50.45m、01・02号溝の間隔3.36m、断面ｃ－ｃ′、01号溝幅2.75m、深さ70cm、標高49.71m、02号溝幅75cm、深さ９cm、標高50.47m、間隔3.33m、断面ｄ－ｄ′、01号溝幅3.09m、深さ85cm、標高49.26m、02号溝幅76cm、深さ10cm、標高50.21m、間隔3.48m、断面ｅ－ｅ′、01号溝幅2.53m、深さ61cm、標高40.45m、断面ｆ－ｆ′、01号溝幅3.17m、深さ88cm、標高48.73m、断面ｇ－ｇ′、01号溝幅3.33m、深さ89cm、標高49.33m、02号溝幅81cm、深さ７cm、標高50.14m、間隔2.99m、断面ｈ－ｈ′、01号溝幅2.84m、深さ77cm、標高49.05m、02号溝幅57cm、深さ15cm、標高49.67m、間隔2.87mを測る。断面ｉ－ｉ′、01号溝、表土下確認できる掘り込み面での幅3.13m表土からの深さ1.48m、標高47.03m、02号溝幅1.08m、深さ80cm、標高47.63m、間隔2.84mを測る。01号溝断面は、底面に明瞭な平坦面をもたないU字形を呈す。ただし、底面両端が側溝状になり、これは掘り直しの痕跡としてとらえられる。掘り直しは、確認できる範囲では、基本的に一回であると考えられる。土層は、１層が表土層、２層が黒褐色土層であり、溝内３・４・７層が明黒褐色土層、５・６層が黒褐色土層であり、とくに５層が暗色を呈す。８・10・11・12層が暗黄褐色土層、９・13層が黄褐色土層である。図網部11層については、掘り直し前の土層と判断した。谷部断面ｅ－ｅ′については、他と異なり、14・15・17層が明黒褐色土層、16・19層は、しみ状の黄色粒を混合する暗黄褐色土層、18層は白色粘土粒を含む明黒褐色土層である。02号溝は、20・22層が黒褐色土層、21・24層が明黒褐色土層であり、24層は黄色スコリアを多量に混合し、ザラザラである。23層はロームブロックを混合する暗黄褐色土層である。

01号溝は、中央谷部において、カットされている。出土遺物がないため、その年代は明らかではないが、人為的である可能性が考えられる。南側については、掘削範囲を確認することができなかったこともあり、その性格については、明確ではないが、東側断面で、粘土層上面が標高43.50m程度であり、粘土採掘による可能性がある。ただし、平坦面における掘り込みはいずれも浅く、Ｐ１で25cm、Ｐ２が23cm、Ｐ３が28cm、Ｐ４が17cm、Ｐ５が22cm、Ｐ６が21cm、Ｐ７が23cm、Ｐ８が32cm、Ｐ９が46cm、Ｐ10が４cm、Ｐ11が65cm、Ｐ12が27cm、Ｐ13が21cmである。



第140図　01号溝出土遺物（1/3）

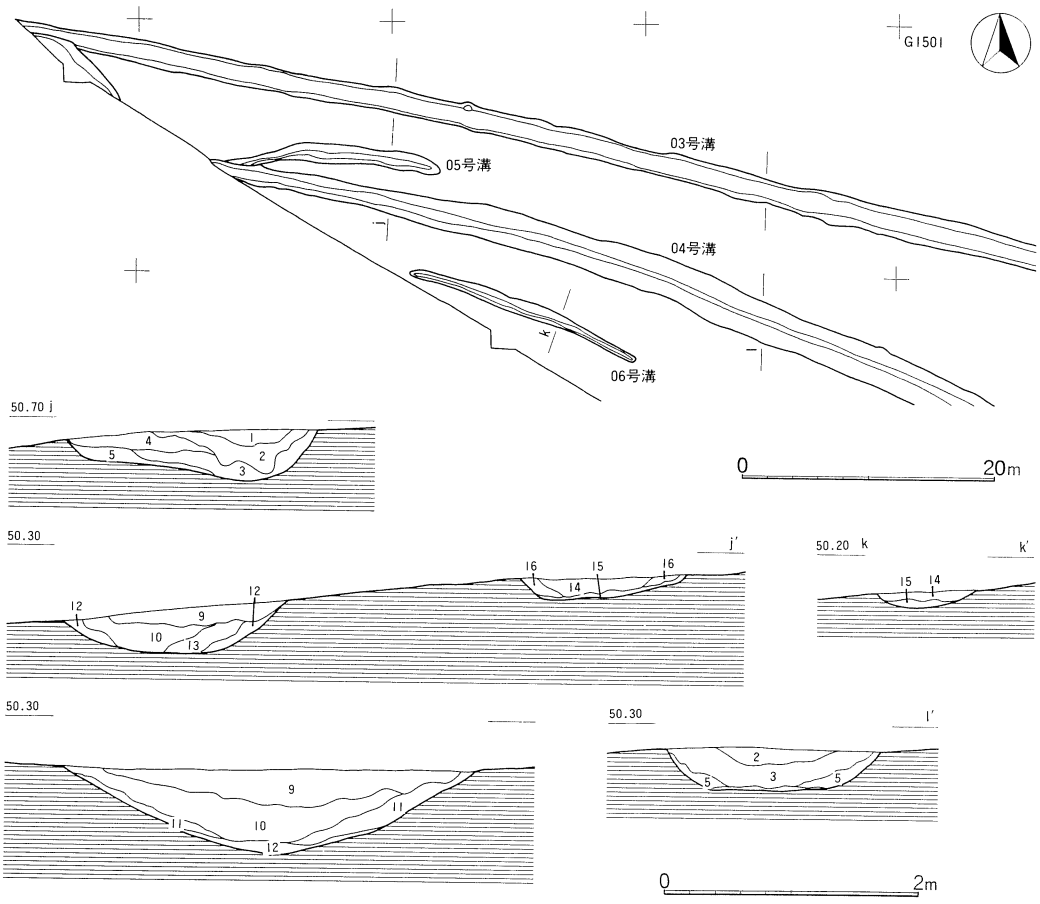
なお、01号溝、03号墳部分（第116図網部）に、土橋状の硬質部が検出された。ただし土層からは、埋めもどしの痕跡は明確には認められず、ある程度埋没した段階で、道路が横断したことも考えられる。平面的な範囲は全体としてとらえられなかったが、硬質部は下層部にわたる。

出土遺物　縄文土器、五領式土器片とともに、本遺構に関連すると考えられる土師器杯が出土している。いずれもロクロ土師器であり、時期的にほぼ限定される。出土位置は、2・4については第138図に表示してある。1・5・6は、C13—94グリッド内より、ほぼ一括出土した。3はL05—95グリッド内である。2は、底面より＋17cm、4は、底面＋36cm、1・5・6は、底面＋18cm、3は底面＋4cmより出土した。

01・02号溝は、出土遺物より、ほぼ平安時代の一時期に機能していたものと考えられる。その性格は、流路としての痕跡はなく、水源を含め、なんらかの水利・排水施設とは考えられない。調査区内からは、当該期の住居跡等も検出されておらず、集落、官衙などの区画施設としてもとらえられない。01・02号溝中央に、土塁状の施設があった可能性を含め、なんらかを遮断する機能が想定されるのであり、そうであるならば、その用途は限定されてくるが。

03号溝（第123・141・142・143図）

遺　構　03号溝は、ほぼ東西方向、直線的に走行し、東端部は、対象区中央の谷へいたる。方位はN—78°—W、調査区内全長で164.5mを測る。規模は、断面j—j′確認面において、幅1.98m確認面からの深さ40cm、底面の標高50.22m、断面l—l′で幅1.69m、深さ34cm、標高49.77m、断面m—m′で幅2.18m、深さ45cm、標高51.06m、断面n—n′で幅2.19m、深さ51cm、標高51.53m、断面o—o′で幅2.04m、深さ53cm、標高50.93mを測る。堆積土層は、1・3層が明黒褐色土層、2層が黒褐色土層、4～6層が暗黄褐色土層である。断面は箱形を呈し、底面はほぼ平坦で



第141図　03・04・05・06号溝（1/600、1/60）

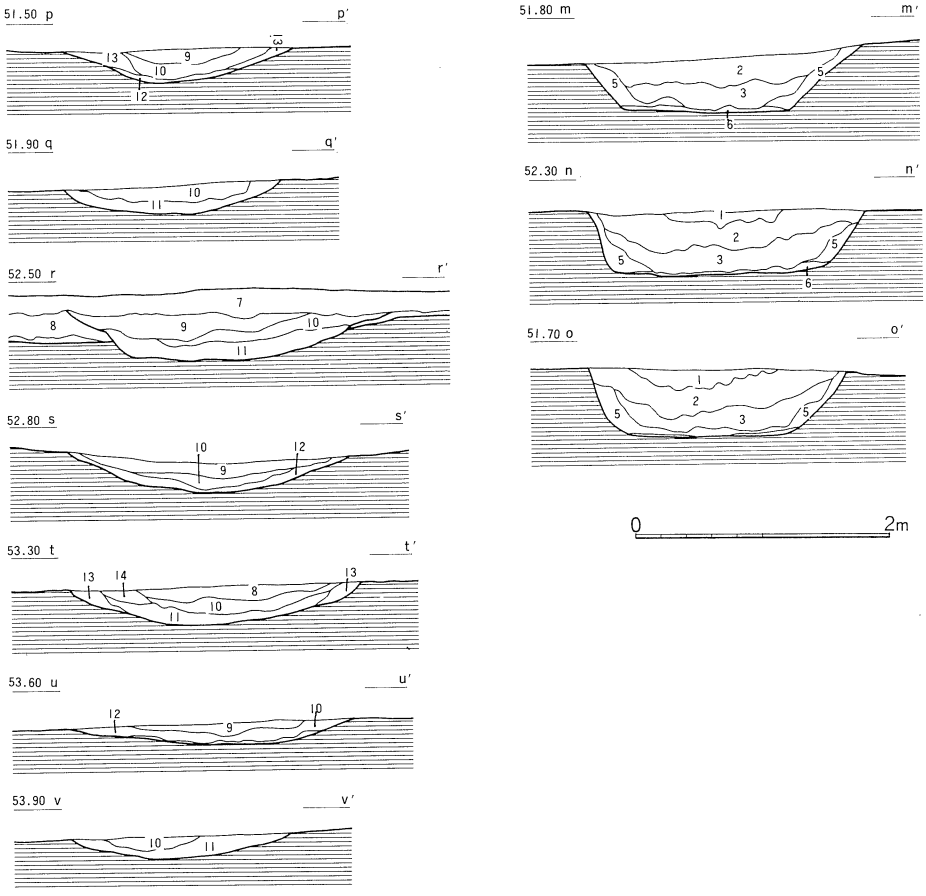
あった。6層は、きわめて硬質であり、道路跡と考えられる。

出土遺物　多量の五領式土器小片の他に、第143図－1が覆土から出土している。灰釉と考えられる。

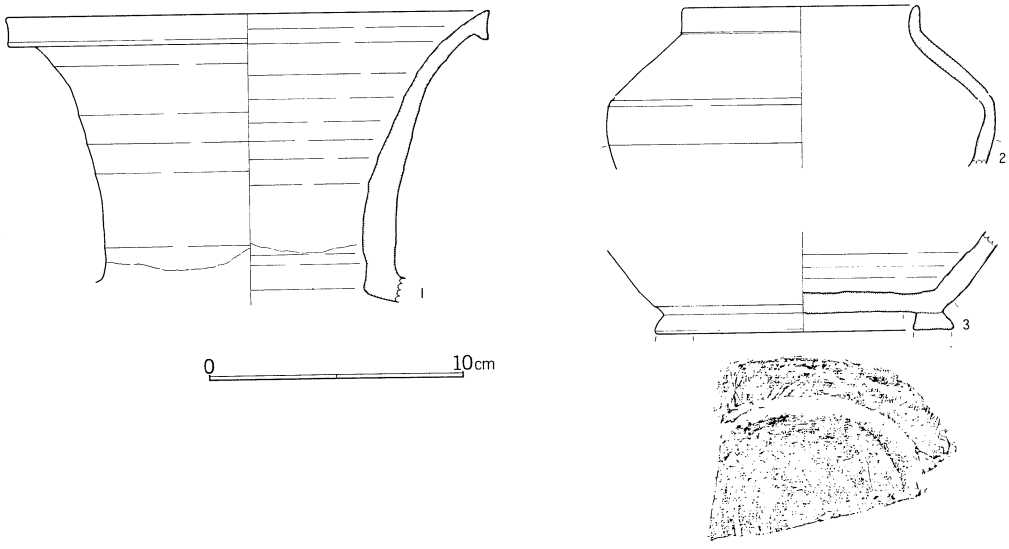
04号溝（第123・141・142・143図）

遺　構　ほぼ現道に平行し、北西から南東方向へ走行する。確認面における規模は、断面ｊ－ｊ′で幅1.76m、深さ37cm、底面の標高49.45m、断面ｌ－ｌ′で幅3.27m、深さ68cm、標高49.22m、断面ｐ－ｐ′で幅1.79m、深さ26cm、標高51.03m、断面ｑ－ｑ′で幅1.70m、深さ23cm、標高51.41m、断面ｒ－ｒ′で表土下幅2.56m、表土上よりの深さ56cm、標高51.86m、断面ｓ－ｓ′で2.21m、深さ52.27m、断面ｔ－ｔ′で幅2.28m、深さ30cm、標高52.75m、断面ｕ－ｕ′で幅2.24m、深さ16cm、標高53.16m、断面ｖ－ｖ′で幅1.72m、深さ18cm、標高53.50mを測る。溝内の土層は、9・11層が明黒褐色土層、10層が黒褐色土層、12・13層が暗黄褐色土層である。溝断面は、03号溝とは異なり皿状を呈す。

出土遺物　若干の縄文土器、土師器の他、第143図－2・3が覆土より出土している。



第142図　03・04号墳（1/60）



第143図　03・04号溝出土遺物（1/3）

05・06号溝（第141図）

遺　構　03・04号溝脇で検出された。05号溝は、確認・検出した範囲は、全長で17.1mにすぎない。断面ｊ－ｊ′で幅1.31m、深さ15cmである。04号溝と連続するが、その新旧はとらえられなかった。06号溝は、全長で19.2m、断面ｋ－ｋ′で幅78cm、深さ13cmである。土層は、14層が明黒褐色土層、15・16層か、ロームブロックを多量に混合する暗黄褐色土層である。

出土遺物　本遺構に伴うと考えられる遺物はない。

土塁状遺構（第106・108図）

遺　構　01号墳北側に、ほぼ東西方向につくられている。大部分は調査対象地外にあり、発掘調査は一部01号墳断面ａ－ａ′にあわせ、切断したのみである。現在確認できる範囲で、西側は、斜面部中段まで、全長47m程度である。東側は、赤道によりとぎれ、それ以東では確認できない。幅２m程度高さは60cm前後である。土層は、全体に根による撹乱をうけ、しまりがなく、表土との相違も明確ではない。ただし、18・19層は、ロームブロックを多量に混合する。20層は旧表土である。北側は、溝状になる可能性があり、22層は、ベタ状の黒褐色土層である。旧地主の言によるならば、馬土手とのことであるが、戦前、いつごろまで機能していたかは、さだかではない。

第4表　土器計測観察表

凡　例

1．土器番号は、挿図・図版番号と共通する。

2．土器の左右、上下とは、正面に向って見た場合を示す。左右とは左から右、上下とは上から下をさす。

3．土器法量A～H、計測位置は、下図に示した。

4．法量計測値のうち、（　）内数値は、推定値・現存値を示す。

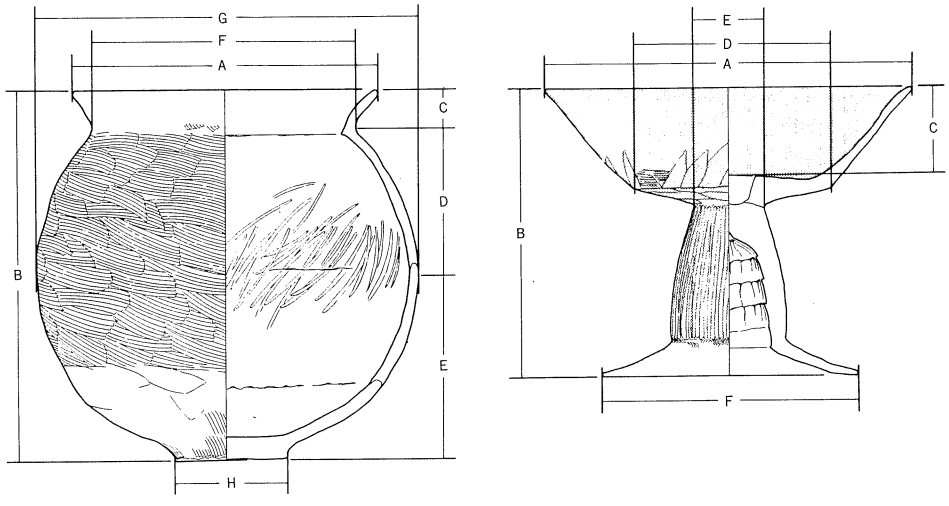
5．容量Aは、実際に砂粒を入れ、測定したしたものである。

6．容量Bは、土器内径を1㎝に輪切りにし、以下の数式により算出した。

$$容量B=\pi\{(\frac{半径r^1+r^2}{2})^2+(\frac{r^2+r^3}{2})^2+\cdots\cdots\}$$

7．容量計測値のうち、（　）内数値は、復原部が大きい場合に付した。

8．容量は、口唇部まで全体を対象とした。頸部を基準とした場合、頸部線が不明確なものもあり、全体を基準化する上で、口縁部分を含めた。



住居跡	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成 色調	A E	B F	C G	D H	容量A 容量B
02	45 1	壺	ヘラナデののち粗いミガキ。	横方向のヘラナデ（右左）。	覆土 床＋9～12	胴部上半½存	粗。長石・石英・酸化粒など	良　好 明褐色	9.0	(6.4) 8.5	1.2 11.1	1.2	4.2
03	48 1	甕	口縁部積み上げ痕、指頭圧痕。胴部巾狭のヘラナデ（下上）。	ヘラナデ(右左)。口縁部はミガキ状。	床面 床＋0～7	口縁部⅔、胴部上半⅓欠	密。小砂粒	良　好 暗褐色	(22.0) 12.2	(26.4) (18.0)	3.6 25.4	(10.6) 7.4	(8860) 8692
	48 2	甕	ヘラナデ(右左)。口縁部ヨコナデは不明確。	平滑、ヘラナデ。	床面 床＋0～6	胴部¼欠	密。砂粒少	良　好 赤褐色	18.5 10.9	20.6 15.4	3.4 20.8	6.3 6.9	4120 4001
	48 3	甕	ヘラナデ（左右）。	平滑、ヘラナデ。炭化物付着。	床面	口縁部¾欠	長石・石英・赤色酸化粒多	良　好 赤褐色	(18.2) 9.7	20.7 14.8	3.0 23.3	8.0 6.8	5070 5138
	48 4	甕	ハケ（9/cm、下上）。口縁部ヨコナデ、胴部下半ヘラナデ(右左)を加える。	口縁部ハケののちヨコナデ。胴部平滑、ヘラナデ。	床面 床＋0～6	½	長石多	良　好 茶褐色	14.9	(17.3) 13.3	1.7 19.9	6.5	(2959)
	48 5	甕	ハケ（9/cm、下上）。口縁部ヨコナデ、胴部下半、ヘラナデ(下上)を加える。	口縁部ハケののちヨコナデ。胴部ヘラナデ（右左）。	床面 床＋0～5	口縁部¼、胴部½欠	粗。長石多	良　好 赤褐色	16.3	(16.2) 13.8	1.9 20.5	7.1	
	48 6	甕	頸部から上下へのハケ(11/cm)。胴部粗いミガキ、口縁部ヨコナデを加える。	ハケ、ミガキののちヨコナデ。胴部ヘラナデののち一部ミガキ。	覆土 床＋13	口縁部⅙存	長石多	良　好 灰褐色	(17.4)	(6.1) (15.2)	(2.2)		
	48 7	壺	ヘラナデののち、粗いミガキ。底部木葉痕、粗いミガキ。	ヘラナデ（右左）。	覆土 床＋6	底部½	赤色酸化粒多	良　好 茶褐色		(2.5)		7.1	
	48 8	甑	ヘラナデ（右左）ののち、胴部ミガキ。底部焼成前穿孔。	ヘラナデ（右左）。	甕3上	完存	粗。小砂粒多	良　好 赤褐色	20.7 9.0	16.6 17.0	4.6 18.9	3.0 6.4	3100 3220
	49 9	壺	ヘラナデののちミガキ。口縁部はヨコナデ。ハケは観察できない。	ヘラナデ。口縁部はヨコナデののちミガキ。	貯蔵穴内	口縁部一部欠	小砂粒多	良　好 暗茶褐色	14.5 10.4	25.3 10.3	5.4 23.1	9.5 7.4	5300 5532
	49 10	壺	ヘラナデ（右左）ののち一部ミガキ。底部木葉痕。	ヘラナデ（右左）。	床面 床＋0～5	胴部下半½存	小砂粒多	良　好 茶褐色	12.0	(16.4)	(28.1)	7.8	
	49 11	壺	複合部ナデ。複合部下端に押捺。布目が観察できる。赤彩。	ナデ。赤彩。	覆土	口縁部¼存。	小砂粒多	良　好 茶褐色	(17.6)	(2.9)			
	49 12	坩	ヘラナデののちミガキ。	ヘラナデののち口縁部ミガキ。	貯蔵穴内	口縁部½欠	長石多	良　好 茶褐色	(7.0) 4.2	10.5 6.3	2.4 9.9	3.9 3.8	460 467

03	49 13	坩	ヘラナデののちミガキ。赤彩。	ヘラナデののち、口縁部ミガキ。赤彩。	床面 床＋0～4	口縁部⅔存	粗。砂粒多。 長石・石英他	良　好 暗褐色	(12.4)	7.9 7.7	4.8	3.1 3.0	400 389
	49 14	坩	ヘラナデ、ヨコナデののち、一部ミガキ。	ヘラナデ（右左）。	覆土	体部½欠	小砂粒多	やや不良 赤褐色	12.4	7.6 7.6	4.3	3.3 3.9	(360) 344
	49 15	坩	ヘラ、指によるナデ。	ヘラナデ（右左）。	貯蔵穴	体部⅓欠	密	良　好 赤褐色	11.6	5.7 7.1	3.3	2.4 3.3	(240) 242
	49 16	椀	ハケ（10/cm、下上）ののち、口唇部ヨコナデ。	ヘラナデののちヨコナデ。	床面 床＋0～8	体部上半⅓欠	密	良　好 淡茶褐色	9.3	7.8		1.3	330 293
	49 17	器　台	丁寧なミガキ。赤彩。脚部3孔。	器受部ミガキ。脚部ハケ（7/cm、右左）。	甕8内	器受部一部欠	密	良　好 明茶褐色	7.1 3.1	9.4 11.0	2.0		
	49 18	器　台	ナデののちミガキ。脚部3孔。	器受部ミガキ。脚部ヘラナデ。	貯蔵穴内	ほぼ完存	小砂粒多	良　好 暗褐色	6.4 3.2	6.9 8.8	1.8		
	49 19	器　台	ハケ（12/cm、上下）。	脚部ハケ（右左）。	貯蔵穴内	器受部欠	小砂粒多	良　好 淡茶褐色	2.7	(6.5) 9.0			
	49 20	支　脚	指ナデ（下上）。	指ナデ（右左）。	覆土 床＋6	脚部下半¼存	粗。大小砂粒多	やや不良 赤褐色		(6.0) (14.0)			
	49 21	ミ　ニ	ナデ。	ナデ。	覆土	底部¾存	密	良　好 茶褐色		(1.5)		3.5	
04	51 1	甕	ヘラナデ(右左)。ただし胴部上半はケズリ状。	胴部下半ヘラケズリ(左右)。上半部は平滑なヘラナデ。	床面 床＋0～6	胴部⅓存	粗。赤色酸化粒多	やや不良 赤褐色		(16.9) (15.5)	(21.1)		
	51 2	甕	ハケ（12/cm、右左）。胴部下半は2次調整。	ヘラナデ。上半部一部にミガキ。	覆土	胴部½存	小砂粒多	やや不良 明褐色		(8.3)	10.3		
	51 3	甕	ハケ（10/cm、下上）ののち、ヨコナデ。	ハケ(右左)。ヨコナデは明確ではない。	覆土	口縁部⅙存	小砂粒多	良　好 暗茶褐色	(13.6)	(2.9) (10.6)	2.6		
	51 4	壺	ミガキ。ハケは観察できない。	ハケののちヘラナデ（右左）。	床面 床＋0～4	胴部下半½存	大小砂粒	やや不良 赤褐色	7.5	(12.1)	15.6	3.8	
	51 5	甕	ハケ（8/cm、下上）ののち一部ミガキ。	ヘラナデ（下上）。	覆土 床＋5	底部のみ	大小砂粒	良　好 茶褐色		(5.0)		6.1	

住居跡	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成 色調	A E	B F	C G	D H	容量A 容量B
04	516		ヘラナデ（右左）。	ヘラナデ。	床面、貯蔵穴	底部½存	小砂粒	良好 赤褐色		(2.1)		6.9	
	517		ヘラナデ。	ヘラケズリ（左右）。	覆土 床＋9	底部のみ	粗。赤色酸化粒多	やや不良 茶褐色		(3.1)		5.5	
	518		ハケ（10/cm、下上）ののち粗いミガキ。	平滑、ヘラナデ。	覆土 床＋8	底部のみ	小砂粒多	やや不良 暗茶褐色		(3.3)		4.5	
	519	器台	ミガキ、ヨコナデ。赤彩。	ミガキ、ヨコナデ。赤彩。	覆土	器受部⅓存	小砂粒多	やや不良 淡茶褐色	(7.8)	(1.2)			
05	531	甕	口縁部積み上げ痕、指頭圧痕。胴部ハケ(9/cm、右左)。胴部下半はヘラナデを加える。	ヘラナデ（右左）。	床面 床＋0～12	口縁部½欠	密	良好 淡茶褐色	18.4 8.9	18.9 14.7	3.4 20.7	6.6 5.5	3720 4077
	532	甕	口縁部積み上げ痕。部分的な指頭圧痕。胴部ヘラナデ（右左）。	平滑、ヘラナデ。	覆土 床＋6～9	体部¼存	密。長石多	やや不良 暗茶褐色	(11.0)	(10.9) (9.4)	2.5 (12.7)	4.1	
	533	甕	ハケ（6/cm）ののち粗いミガキ。	ヘラナデ（右左）。	覆土 床＋12～14	胴部下半¼存	小砂粒多	良好 茶褐色		(9.2)		5.8	
06	551	壺	全体に器面状態不良。上半部でミガキ、下半部でヘラケズリが一部観察できる。	ヘラナデ。下半部はケズリ状。	床面	胴部⅓存	粗。長石・石英・角閃石	やや不良 赤褐色	9.0	(12.8)	(20.4)	7.7	
	552	甑	全体に器面状態不良。上半部ミガキ、底部周辺ヘラケズリ(左右)。焼成穿孔。	平滑、ヘラナデ。	床面 床＋0～2	胴部下半⅓存	密	良好 淡褐色	8.8	(13.2)	(14.9)	5.5	
	553	甕	粘土紐積み上げ痕。指頭圧痕。頸部指ナデ。	横方向のヘラナデののちヨコナデ。	床面 床＋0～4	口縁部¼存	密	良好 赤褐色	(21.2)	(5.5) (17.4)	4.1		
	554	甕	粘土紐積み上げ痕。指頭圧痕。頸部指ナデ。	横方向のヘラナデののちヨコナデ。	床面	口縁部⅛存	密	良好 茶褐色	(17.5)	(4.6) (15.2)	2.6		
	555	壺	ハケののち胴部下半ヘラナデ(右左)。	ヘラナデ。	床面 床＋0～5	底部完存。胴部下半⅓存	小砂粒多	良好 暗茶褐色		(5.7)		4.6	
	556	椀	ヘラケズリ（左右）ののち体部上半ミガキ。	ヘラケズリ(右左)。一部にミガキを加える。	覆土	底部完存。体部上半⅕存	大小砂粒多	良好 赤褐色	(10.7)	4.9		4.4	245

06	557	椀	ナデ。体部下端、底部ミガキ。	ナデ。	床面 床＋0～4	底部完存。体部¼存	密	良　好 淡茶褐色	(11.0)	(4.7)		3.6	188
	558	椀	ヘラケズリののち粗いミガキ。	ナデののち一部ミガキ。	床面 床＋0～3	底部完存。体部¼存	長石など小砂粒多	良　好 明赤褐色		(4.4)		4.4	
	559		ヘラナデののち粗いミガキ。	ヘラナデ（左右）。	床面 床＋0～6	底部⅕存	粗。赤色酸化粒多	良　好 淡茶褐色		(2.2)		5.9	
08	581	坩	ハケ（9/cm）ののちミガキ。口唇部ヨコナデ。	口縁部ハケ（右左）ののちヘラナデ（右左）。胴部ヘラナデ（右左）。	床面	完存	密	良　好 暗茶褐色	9.9 4.9	14.4 5.6	4.5 11.9	5.0 4.0	800 715
	582	坩	ミガキ。	ヘラナデ。	覆土 床＋14	底部のみ	密	良　好 明褐色		(2.0)		3.9	
	583	椀	ハケ（9/cm、下上）ののち胴部ミガキ。口縁部ヨコナデ。	口縁部ハケ（右左）ののちヨコナデ。胴部ミガキ。	床面	体部上半¾欠	粗。砂粒多	良　好 淡茶褐色	(15.0)	7.4 (13.6)	1.8	5.6 2.1	(680) 606
	584	椀	ハケ（9/cm）ののちヘラケズリ（下上）。さらにヘラナデ（右左）。	口縁部ハケ(右左)。胴部ヘラナデ(右左)。	床面	完存	大小砂粒多	良　好 淡茶褐色	12.6 5.3	8.3 11.4	1.3 12.2	1.7 3.3	580 499
	585	椀	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。	覆土 床＋18	完存	密。赤色酸化粒	良　好 淡茶褐色	9.8	8.9		2.6	170 177
09	611	甕	斜方向（右左）ののち、胴部下半に2次的な縦方向（下左）のハケ（10/cm）。	ハケ（右左）。	床面 床＋0～3	胴部下半⅘存	密	良　好 赤褐色	14.0	(17.8)	26.4	6.7	
	612	壺	ヘラナデののちミガキ。ハケは観察できない。	ヘラナデ（下上、右左）。	床面 床＋0～3	胴部下半ほぼ完存。	大小砂粒多	やや不良 茶褐色	10.5	(17.9)	24.0	7.9	
	613	坩	ヘラナデ（左右）ののち粗いミガキ。	ヘラナデ（右左）。	床面	胴部完存	長石・石英多	良　好 暗茶褐色	5.7	(11.1) 5.8	13.0	5.2 4.2	
	614	坩	ヘラナデ（右左）。	ヘラナデ（左右）。	貯蔵穴内	胴部½存	小砂粒多	良　好 茶褐色		(7.1)		9.6	
	615	坩	ヘラナデののちミガキ。	ヘラナデ（右左）。	床面	底部のみ	粗。長石・石英・雲母多	良　好 暗褐色		(3.3)		4.3	
	616		ヘラナデ。	ヘラナデ。	覆土	底部のみ	粗。大小砂粒多	良　好 暗茶褐色		(1.6)		4.4	

住居跡	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成 色調	A E	B F	C G	D H	容量A 容量B
09	617	椀	ヘラナデののち粗いミガキ。	ヘラナデののち粗いミガキ。	貯蔵穴	完存	石英多	良好 暗茶褐色	14.2	6.2		 4.5	440 432
	618	椀	ハケののちミガキ。	ヘラケズリ（右左）。	床面	体部¾欠	小砂粒多	良好 淡茶褐色	(10.8)	3.4		 3.0	 127
	619	椀	ヨコナデ。口縁部片口状。	ヨコナデ。	貯蔵穴	体部⅓欠	密	良好 暗褐色	10.0	3.4		 2.5	 110
	6110	高杯	ヘラナデののちミガキ。赤彩。	ヘラナデののちミガキ。赤彩。	床面	杯部⅛存	小砂粒多	良好 暗茶褐色	(20.2)	(4.4)			
	6111	器台	ヘラナデののち、口唇部・頸部ヨコナデ。胴部3孔。	器受部ヨコナデ。脚部ハケ（11/cm）ののちヘラナデ。	床面	完存	小砂粒多	良好 暗褐色	7.2 2.5	7.7 11.0	1.7		
	6112	器台	ミガキ。口唇部ヨコナデ。脚部4孔。	器受部ミガキ。脚部ハケ(11/cm、右左）ののちナデ。	床面	完存	密	良好 赤褐色	7.2 2.8	7.1 11.0	1.5		
	6113	器台	ヘラナデののちミガキ。赤彩。	器受部ミガキ。脚部ナデ。赤彩。	貯蔵穴	完存	小砂粒多	良好 赤褐色	7.5 5.1	7.0 2.6	1.6 8.0		
10	641	甕	ハケ（6/cm、右左）ののち胴部ヘラナデ（下上）。口縁部ヨコナデ。	口縁部ハケ（右左）ののちヨコナデ。胴部ヘラナデ。一部ミガキを加える。	覆土 床＋4	口縁部¾欠	密	良好 茶褐色	(17.2) 14.6	26.5 15.1	1.9 25.0	10.0 6.3	7240 6777
	642	甕	胴部ハケ（13/cm、右左）ののち、胴部下半に2次ハケ（7/cm、右左）。口縁部ヘラナデ（右左）ののちヨコナデ。	ヘラナデ(左右)。胴部下半はケズリ状。口縁部はヨコナデを加える。	床面	口縁部一部欠	粗。大小砂粒多	良好 茶褐色	17.1 7.3	15.8 13.8	2.6 17.7	5.9 6.0	2350 2372
	643	甕	ハケ（15/cm、右左）。底部及び胴部下半にヘラナデ（下上）を加える。口唇部ヨコナデ。	口縁部ハケ（右左）ののちヨコナデ。胴部ヘラナデ（右左）。	覆土 床＋5	口縁部一部欠	赤色酸化粒多	良好 赤褐色	15.2 8.1	15.1 12.9	2.0 16.6	5.0 3.5	1830 1874
	644	甕	ハケ（7/cm、右左）。	胴部ヘラナデ(右左)。口縁部ハケのちヨコナデ。	貯蔵穴 床＋0～13	胴部上半¼存	長石・赤色酸化粒大小	良好 赤褐色		(7.6) (14.6)			
	645	甕	ハケ（12/cm、下上）。	口縁部ハケ。胴部ヘラナデ（右左）。	覆土 床＋11	胴部上半¼存	小砂粒多	良好 暗茶褐色		(7.4) (12.0)	 (17.7)	(6.0)	
	646		ハケののち横方向のヘラナデ。さらにミガキを加える。	ヘラナデ。	覆土 床＋7～11	胴部下半¼、底部存	小砂粒多	良好 淡茶褐色		(10.3)		 8.6	

10	647		ヘラナデ（右左）。	ヘラナデ（右左）。	貯蔵穴	底部のみ	小砂粒多	良　好 淡茶褐色		(3.0)		9.6		
	648		ヘラナデ。	ヘラナデ。	床面	底部⅓存	大小砂粒、雲母	良　好 茶 褐 色		(1.7)		5.7		
	649	壺	ハケののちミガキ。	口縁部ハケ（9/cm、右左）。	床面	胴部上半全周	赤色酸化粒多	良　好 淡茶褐色		(11.6) 7.8	16.5	6.5		
	6410	壺	ヘラケズリ（右左）ののち粗いミガキ。	ヘラナデ（右左）。	覆土 床＋6～17	胴部下半ほぼ完存	赤色酸化粒多	良　好 赤 褐 色	12.5	(18.6)	30.3	7.3		
	6511	壺	ハケ（9/cm）ののち胴部下半ミガキ。施文原体はハケ状（6条•11条）。赤彩。	ヘラナデ（右左）。	貯蔵穴	胴部下半ほぼ完存	密	良　好 赤 褐 色	11.5	(20.7)	26.0	7.2		
	6512	壺	ハケののちヘラナデ。胴部上半はミガキを加える。口縁部ヨコナデののちミガキ。	口縁部ハケののちヨコナデ。胴部ヘラナデののち粗いミガキ。	床面 床＋0～8	完存	大小砂粒多	良　好 茶 褐 色	10.2 6.0	12.7 9.6	2.0 12.9	4.7 4.9	950 870	
	6513	坩	ハケ（6/cm）ののちヘラナデ（下上）。口縁部ヨコナデ。	胴部ヘラナデ（右左）。口縁部ヨコナデ。	覆土 床＋8	完存	粗。大小砂粒多	良　好 赤 褐 色	9.7 5.7	11.5 7.7	2.1 10.8	3.7. 5.3	530 552	
	6514	坩	ヘラナデののち粗いミガキ。口縁部ヨコナデ。	ナデ。	床面	体部⅔欠	小砂粒多	不　良 赤 褐 色	(6.7)～(7.9) 3.5～4.5	11.0 (6.2)～(6.8)	1.6 (9.5)～(12.8)	5.0～6.0 4.5～(12.2)		
	6515		底部木葉痕。	ナデ。	床面	底部のみ	大小砂粒多	良　好 茶 褐 色		(1.7)		5.7		
	6516	坩	ミガキ。赤彩。	ミガキ。体部はナデ。赤彩。	床面	口縁部⅙欠	密	良　好 赤 褐 色	10.4 2.7	6.0 7.2	3.3	3.2	230 203	
	6517	坩	ヘラナデののちミガキ。赤彩。	ヘラナデ。口縁部はヨコナデ、ミガキ。赤彩不明確。	覆土 床＋12	口縁部⅙欠	密	良　好 茶 褐 色	(10.6)	(4.0) (6.7)	2.9			
	6518	坩	ヘラナデ（右左）、口唇部ヨコナデ。	ヘラナデ。口縁部はヨコナデを加える。	貯蔵穴	体部⅓欠	粗。大小砂粒多	やや不良 赤 褐 色	9.8	(5.0)			(130) (161)	
	6519	椀	ヘラナデ（右左）。口縁部はヨコナデ。	ヘラナデののちヨコナデ。	貯蔵穴	体部¾欠	赤色酸化粒多	やや不良 赤 褐 色	(10.2)	4.8		2.4	(180) (136)	
	6520	椀	ヨコナデ。底部ヘラケズリ（左右）。	ヘラナデののちヨコナデ。	床面、貯蔵穴	体部⅕欠	粗。小砂粒多	やや不良 淡茶褐色	11.1	4.1		丸底	200 174	

住居跡	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成 色調	A E	B F	C G	D H	容量A 容量B
10	65 21	椀	ヘラナデ（左右）。口唇部ヨコナデ。	ヘラナデ（左右）。口唇部ヨコナデ。	覆土 床＋3～8	体部1/6存	小砂粒多	良　好 暗茶褐色	(11.2)	(4.0)			
11	66 1	壺	ヘラナデ(下上)。頸部指ナデ。口縁部ヘラナデののちヨコナデ。焼成前に、胴部ゆがみ。	ヘラナデ(右左)。胴部下半ハケ（右左)。口縁部ヨコナデ。	床面	体部上半1/6欠	小砂粒多	良　好 赤褐色	12.1～9.3 5.9	10.5 11.3～8.2	2.7 12.3～9.7	1.9 4.0	690
	61 2	坩	ヘラナデののち、口唇部ヨコナデ。さらにミガキ。	ヘラナデののちヨコナデ。	床面	口縁部のみ	大小砂粒	良　好 赤褐色	15.6	(5.5) 9.5	(5.5)		
12	68 1	甕	口縁部粘土紐積み上げ痕、指頭圧痕。下半部はヘラナデ（右左）を加える。	ヘラナデ（右左）。	床面	口縁部1/2存	密	良　好 明褐色	(23.0)	(4.9) (17.7)			
	68 2	壺	頸部ハケ（8/cm、下上)。複合部ヨコナデ。	ハケ（右左）ののち口唇部ヨコナデ。	覆土	口縁部1/6存	大小砂粒多	良　好 茶褐色	(14.0)	(5.4) (10.4)			
	68 3	坩	器面状態不良。ミガキ。	器面状態不良。ミガキ。	覆土下層	口縁部1/3存	粗。砂粒多	良　好 赤褐色	(13.4)	(6.5) (7.6)	6.1		
	68 4	坩	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。	床面	口縁部1/4存	小砂粒多	良　好 茶褐色	(11.6)	(5.4) (10.4)			
	68 5	坩	ヘラナデののち粗いミガキ。	ヘラナデ。	床面	体部1/4存	密	良　好 淡茶褐色		(6.0) (7.6)	(12.2)		
	68 6	坩	ヘラナデののち一部ハケ。さらに粗いミガキ。	指ナデ。	覆土下層	胴部1/2存	粗。砂粒多	良　好 赤褐色		(7.2) 2.6	7.3	3.3	
	68 7		ヘラナデ（右左)。	ヘラナデ（右左)。	覆土 床＋12	底部のみ	小砂粒多	やや不良 淡茶褐色		(2.1)		2.9	
	68 8	高杯	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。	床面	杯部1/2存	長石多	良　好 赤褐色	19.4	(5.2)		7.3	
	68 9	高杯	器面状態不良。ミガキ。	器面状態不良。ミガキ。	P5内	杯部完存	密	良　好 明褐色	13.0	(5.4)	4.3	7.2	
	68 10	支脚	ヘラナデ（下上)。頸部指頭圧痕。	ヘラナデ（右左)。	床面	1/3存	粗。大小砂粒多	やや不良 茶褐色	(3.0) (7.0) (4.7)	(12.1)			

13	701	甕	ハケ（11/cm、下上）ののち胴部下半ヘラケズリ(右左)。胴部全体にゆがみが著しい。	口縁部ハケののちヨコナデ。胴部ヘラナデ。	床面 床＋0～6	体部⅔存	小砂粒多	良　好 茶 褐 色	(17.0) 11.5	22.3 (13.0)	2.7 24.5	8.3 6.7	(5500) 6063
	702	甕	ハケ（5/cm、下上）。	ヘラナデ。	床面 床＋0～4	胴部上半¼存	長石・赤色酸化粒	やや不良 灰 褐 色		(8.4) (11.9)	(17.1)	(5.5)	
	703	壺	ヘラナデののち粗いミガキ。	ハケののち粗いミガキ。	床面 床＋0～5	口縁部⅓存	小砂粒多	やや不良 茶 褐 色	(17.0)	(6.9) (11.0)	5.8		
	704	壺	ヘラナデののちミガキ。	ヘラナデ（右左）。	床面	頸部⅙存	小砂粒多	良　好 赤 褐 色		(5.0) (10.8)			
	705	坩	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。赤彩。	床面	口縁部⅓存	小砂粒多	やや不良 暗赤褐色	(11.9)	(5.1) (8.0)			
	706	坩	ヘラナデののちミガキ。赤彩。脚部をもつ。	ヘラナデののちミガキ。赤彩。	床面 床＋0～6	体部½存	大小砂粒多	良　好 赤 褐 色		(5.4) (8.0)			
	707	椀	口縁部指頭圧痕。胴部ヘラナデののちミガキ。	ヘラナデののちミガキ。	床面	体部上半¾存	長石・酸化粒・角閃石など	良　好 赤 褐 色	12.7	(5.4) 11.9	1.2		
	708	椀	ヘラナデ（左右）。	ヘラナデ（左右）。	床面	体部½存	粗。大小砂粒多	良　好 茶 褐 色	12.8	5.1		3.5	300 275
	709	甕	ハケ（下上）。	ヘラナデ。	床面	底部のみ	小砂粒多	良　好 暗赤褐色		(1.9)		(5.9)	
15	731	甕	ヘラナデ(下上)。胴部下半2次調整（右左）。口縁部指頭圧痕。	平滑、ヘラナデ。	床面 床＋0～6	ほぼ完存	粗。大小で砂粒多	良　好 茶 褐 色	11.7 6.8	14.9 10.8	1.6 14.8	6.5 5.5	1480 1481
	732	壺	複合部単節羽状縄文。棒状突起（単位不明）。棒状突起剝落部に凹線。文様帯以外赤彩。	ヘラナデ。赤彩。	床面	口縁部⅙存	粗。小砂粒多	やや不良 茶 褐 色	(20.0)	(4.6)			
	733	坩	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。	床面	口縁部⅓存	小砂粒多	良　好 淡茶褐色	(16.4)	(7.3) (11.8)	(7.1)		
	734	高　杯	ヘラナデののちミガキ。	ヘラナデののちミガキ。	床面 床＋0～4	杯部下半⅔存	長石多	良　好 淡茶褐色	3.1	(6.0)			
	735	椀	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。赤彩不明確。	ヘラナデ（右左）、ヨコナデ。赤彩。	覆土 床＋14	完存	小砂粒多	良　好 淡茶褐色	8.6	4.1		2.7	120 109

住居跡	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成 色調	A E	B F	C G	D H	容量A 容量B
15	736	椀	ヘラナデ（右左）、ヨコナデ。	ヘラナデ（右左）、ヨコナデ。	覆土 床＋10	完存	小砂粒多	良好 茶褐色	10.4	4.1		 2.2	180 171
	737		ヘラナデののち粗いミガキ。	ヘラナデ。	覆土 床＋5	底部のみ	長石多	良好 淡茶褐色		(2.4)		 5.5	
	738	器台	ハケ（9/cm、右左・下上）ののち口唇部ヨコナデ。赤彩。	ハケののち口唇部ヨコナデ。赤彩。	覆土	器受部1/3存	小砂粒多	良好 赤褐色	(8.4)	(2.5)			
	739	器台	ヘラナデののちミガキ。脚部3孔。	器受部ヘラナデののちミガキ。脚部ヘラナデ（右左）。	覆土	柱状部、脚部1/3存	小砂粒多	良好 赤褐色		(5.7) (8.6)		(2.4)	
	7310	ミニ	ナデ。	ナデ。	覆土下層	体部2/3存	密	良好 明褐色	(3.2)	(2.2)	0.9	0.9	
	7311	甕	ヘラナデ。棒状工具による押捺圧痕。	横方向のミガキ。	覆土 床＋16	胴部片	大小砂粒多	良好 茶褐色					
16	741	壺	ミガキ。	口縁部ミガキ。胴部ヘラナデ(左右)。	床面	口縁部のみ	小砂粒多	良好 暗赤褐色	17.2	(6.6) 9.6	5.2		
	742	壺	ハケ（7/cm)、ヘラナデののち粗いミガキ。	ヘラナデ（右左)。	床面	胴部下半のみ	大小砂粒多	良好 暗赤褐色	 10.0	(10.4)	 22.6	 6.5	
	743	坩	ミガキ。一部にハケが確認できる。口唇部に沈線。	口縁部ミガキ。胴部ヘラナデ。	床面	完存	密	良好 淡茶褐色	9.3 4.8	16.8 5.2	5.3 14.5	6.7 3.1	1220 1024
	744	坩	口縁部積み上げ痕。ヨコナデ。胴部ヘラナデ（下上）ののち粗いミガキ。	口縁部ハケ（6/cm、右左）ののちヨコナデ。胴部ナデ。	床面	口縁部一部欠	小砂粒多	良好 茶褐色	8.8 4.3	9.1 6.8	1.9 8.2	2.9 3.1	300 269
	745	坩	口縁部積み上げ痕。ヨコナデ。胴部ハケ（7/cm、下上)。	口縁部ハケ（右左)。胴部ナデ。	床面	完存	小砂粒多	良好 暗赤褐色	8.1 4.8	9.6 5.8	1.6 8.3	3.2 4.7	300 256
	746	坩	口縁部から胴部上半ヨコナデ。胴部下半ヘラナデ（下上)。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	床面	口縁部一部欠	小砂粒多	良好 淡茶褐色	7.4 4.6	7.7 6.3	1.5 7.4	1.6 4.0	180 203
	747	器台	ハケ（6/cm）ののち全体をナデ。脚部に3孔。	ハケののち、器受部ヨコナデを加える。	床面	器受部3/5欠	密	良好 茶褐色	(7.7) 2.9	8.1 11.8	2.1		

16	758	甕	ハケ（7/cm、右左）。口縁部ヨコナデ、胴部下半のヘラナデ（下上）を加える。	ヘラナデ（右左）。口縁部ヨコナデ。	貯蔵穴	ほぼ完存	長石・石英・酸化粒など大小	良　好 淡茶褐色	20.4 12.3	27.2 14.8	3.1 27.1	11.8 6.1	8440 8101
	759	甕	ハケ（7/cm、右左）。口縁部ヨコナデ、胴部下半ヘラナデ（右左）を加える。底部木葉痕。	ヘラナデののち、胴部中位ミガキ（上下）。	床面	完存	小砂粒多	良　好 暗茶褐色	16.6 10.1	20.3 14.3	2.2 20.8	8.0 6.1	4140 4241
	7510	甕	ヘラナデののち粗いミガキ。	ヘラナデ（右左）。口頸部にミガキを加える。	床面	完存	石英多	良　好 暗茶褐色	13.8 8.0	16.0 13.8	3.0 18.2	5.0 5.2	2390 2530
	7511	甕	口縁部ハケ（7/cm、下上）。胴部ヘラナデ。	口縁部ハケ（右左）。胴部ヘラナデののち粗いミガキ。	床面	完存	粗。大小砂粒多	良　好 赤 褐 色	11.5 5.8	11.4 10.0	1.9 12.2	3.7 4.1	810 766
	7512	甑	ヘラナデ（右左）。	ヘラナデ（右左）。	床面、貯蔵穴	口縁部1/6存	大小砂粒多	良　好 淡赤褐色	(21.2)	(3.3)			
	7513	支　脚	ハケ（7/cm、上下）。器受部ナデ。脚部下半ヘラナデ（右左）を加える。	ヘラナデ。	床面	完存	粗。長石・石英	良　好 赤 褐 色	2.3 6.4 5.3	11.8 15.0			
	7514	支　脚	頸部から上下にハケ（6/cm）。器受部ナデ。	ヘラナデ（左右）。	床面	完存	粗。長石・石英	良　好 淡赤褐色	2.7 6.9 5.3	12.6 17.3			
	7515	支　脚	頸部から上下にハケ（7/cm）。器受部ナデ。	ヘラナデ（左右）。	床面	脚部一部欠	粗。長石・石英	良　好 暗赤褐色	2.6 6.7 5.5	11.9 16.0			
18	771	甕	ハケナデ（下上、右左）ののち、胴部に粗いミガキ。	ヘラナデ（右左）ののち粗いミガキ。	床面	完存	小砂粒多	良　好 暗赤褐色	16.4 10.0	17.6 13.9	2.8 17.7	4.8 5.2	2520 2471
	772	坩	ハケののちミガキ。ヨコナデは不明確	ヘラナデ（右左）。	覆土上層	口縁部1/4存	密	良　好 茶 褐 色	(12.1)	(5.8) (7.3)	5.2		
	773	椀	ヘラナデ（右左）ののち体部下半ミガキ。	ヘラナデののち体部下半ミガキ。	覆土上層	口縁部1/6存	密	良　好 赤 褐 色	(16.9)	(6.5)			
	774	椀	ナデののち粗いミガキ。赤彩。	ナデののち粗いミガキ。赤彩。	覆土 床＋6	完存	大小長石多	良　好 暗赤褐色	9.7	4.4		2.5	190 174
	775	坩	ヘラミガキ。赤彩。	ヘラナデ。	覆土上層	底部のみ	小砂粒多	良　好 淡茶褐色		(1.1)		2.2	
	776	高　杯	ミガキ。赤彩。接合凹部にハケ。	柱状部指ナデ。裾部ハケ（11/cm）。	覆土下層	脚柱状部のみ	小砂粒多	良　好 明 褐 色	3.2	(8.8)			

住居跡	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成 色調	A E	B F	C G	D H	容量A 容量B
18	777	器台	ヘラナデののちミガキ。赤彩。	ミガキ。赤彩	覆土上層	器受部1/3存	大小砂粒多	良好 暗赤褐色	(7.7)	(2.2)			
	778	器台	ミガキ。脚部3孔。	ナデ。	覆土上層	脚部1/2存	大小砂粒多	良好 暗灰褐色	(3.0)	(3.7)			
	779	ミニ	ハケののち指ナデ。上半部に粗いミガキ。	ナデ。	覆土 床＋4	口縁部1/2欠	密	良好 淡茶褐色	(4.2) 4.0	6.3 3.2	1.3 5.3	2.0 2.3	65 58
19	791	甕	ハケののちミガキ状のヘラナデ（胴部上半左右、胴部下半右左）。	ハケ（10/cm、右左）ののちヘラナデ（右左）。	覆土 床＋9	胴部上半2/3欠、口縁部1/6存	小砂粒多	良好 暗灰褐色	(17.2) (13.0)	(27.5) (14.1)	4.1 (25.1)	(10.4) 7.6	 (6965)
	792		ヘラナデ（下上）。	ヘラナデ（右左）。	床面	底部のみ	小砂粒多	やや不良 暗赤褐色		(1.9)		5.4	
	793	壺	ミガキ。	口縁部ハケののちミガキ。胴部ヘラナデ（右左）。	床面	頸部、胴部上半全周	密	良好 暗茶褐色		(6.8) 8.0			
	794	坩	ハケ(10/cm、下上、頸部下のみ上下)。口唇部ヨコナデ。	ハケ(右左)。胴部下半ヘラナデ。口唇部ヨコナデ。	床面	完存	小砂粒多	良好 暗茶褐色	9.8 4.4	10.5 7.1	2.8 9.6	3.3 4.4	470 436
	795	坩	ミガキ。赤彩。	ヘラナデ（右左）。	貯蔵穴	体部1/3存	長石多	良好 暗茶褐色		(6.8)	(12.6)		
	796	器台	ミガキ。一か所に穿孔。	ヘラナデののちミガキ。	覆土	器受部1/3存	密	良好 明褐色	(8.0)	(2.6)			
20	801	甕	ヘラナデ(下上)。胴部中位2次調整ヘラナデ（上下）。	口縁部ヘラナデ(右左)。胴部ヘラナデ（下上）。	床面 床＋0～4	胴部上半一部欠	密	良好 茶褐色	17.8 13.6	25.6 14.0	3.5 22.6	9.0 6.2	5740 4941
	802	椀	ハケ（11/cm、下上）。口唇部ヨコナデ。	ヘラナデ（右左）。口唇部ヨコナデ。	覆土 床＋7	体部上半1/2存	密	良好 明褐色	7.2	(4.8)			
21	821	壺	ハケ（11/cm、右左）ののち、一部ミガキ。口唇部ヨコナデ。	ハケ（右左）。頸部ミガキ。	覆土	口縁部全周	小砂粒多	良好 明褐色	16.2	(6.5) 10.8	5.2		
	822	坩	器面状態不良。ミガキ。	口縁部ミガキ。胴部ヘラナデ。	床面	口縁部一部欠	小砂粒多	良好 明茶褐色	7.3 6.7	16.7 5.2	4.3 14.2	5.7 3.7	1230 1162

21	823	坩	ヘラナデ(右左)。口頸部から胴部上半ヨコナデ。	ナデ。胴部に粘土紐積み上げ痕、指頭圧痕。	貯蔵穴	口縁部欠	赤色酸化粒など大小砂粒	良　好 淡 褐 色	3.3	8.1 4.6	9.1	3.2 3.2	
	824	甕	ハケ（11/cm、下上)。胴部中位2次調整ハケ（上下)。口唇部ヨコナデ。	口唇部ハケ(5/cm)ののちヨコナデ。胴部ヘラナデ（右左)。	床面	口縁部一部欠	大小砂粒多	やや不良 茶 褐 色	10.8 7.6	12.5 9.3	2.0 11.9	2.9 4.8	720 678
	825	甕	ヘラナデ（右左)。底部木葉痕。	ヘラナデ（右左)。	床面	底部のみ	小砂粒多	良　好 淡茶褐色		(3.4)		5.2	
	826	坩	ヘラナデ（右左)。	ヘラナデ（右左)。	覆土下層	体部下半1/3存	小砂粒多	良　好 暗茶褐色		(4.2)		4.2	
	827	壺	ヘラナデののち、口縁部ヨコナデ。胴部粗いミガキ。	ヘラナデ（右左)。口縁部ヨコナデ。	覆土上層	口縁部1/2、胴部上半1/6存	密	良　好 明 褐 色	9.5 8.7	(8.2) (11.2)	2.0	4.0	
	828	椀	ミガキ。赤彩。	ミガキ。赤彩。	床面	体部1/3存	小砂粒多	良　好 淡茶褐色	(10.3)	(6.0) (9.4)	1.7		
	829	椀	ヘラミガキののち粗いミガキ。	ヘラナデののち粗いミガキ。	覆土 床＋10	体部2/3欠	粗。大小砂粒多	やや不良 赤 褐 色	(11.6)	6.1		3.8	359
	8210	椀	ヘラナデののちミガキ。	ヘラナデののちミガキ。	貯蔵穴	体部下半1/3、底部存	大小砂粒多	良　好 暗赤褐色		(5.8)		4.4	
	8211	高　杯	ヘラナデののちミガキ。口唇部はヨコナデ。赤彩。	ヘラナデののちミガキ。口唇部はヨコナデ。赤彩不明確。	床面	杯部1/3存	密	良　好 淡茶褐色	(18.3)	(7.3)			875
	8212	高　杯	ヘラナデののちミガキ。脚部4孔。赤彩。	ヘラナデ（左右)。	床面	脚部のみ	小砂粒多	良　好 赤 褐 色	4.3	(7.3) 12.9			
	8213	高　杯	ヘラナデののちミガキ。脚部3孔。	ヘラナデ（左右)。	覆土 床＋5	脚部のみ	長石多	良　好 明 褐 色	2.6	(6.3) 9.8			
	8214	高　杯	器面状態不良。透孔不明。	ヘラナデ。	床面	脚部1/3存	長石など大小砂粒多	やや不良 明灰褐色		(5.3)		(10.9)	
	8215	高　杯	ミガキ。赤彩。	ミガキ。赤彩。	覆土	杯部底面1/2存	密	良　好 赤 褐 色		(2.7)		8.1	
	8216	高　杯	杯部ハケ（12/cm)、ヨコナデ。脚部ミガキ。	杯部ヘラナデ、ヨコナデ。底部のみミガキ。脚部ヘラナデ、一部ハケ。	覆土上層	杯部上半、脚裾部1/3欠	小砂粒多						

住居跡	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成 色調	A E	B F	C G	D H	容量A 容量B
21	82 17	高杯	ミガキ。赤彩。	柱状部ヘラナデ。裾部ハケののちヨコナデ。	覆土上層	脚部下半⅔存	密	良好 明褐色		(3.3) 12.8			
	82 18	器台	ミガキ。赤彩。	器受部ミガキ。脚部ナデ。赤彩。	覆土	接合部のみ	小砂粒多	良好 茶褐色	 3.8	(2.3)			
22	84 1	壺	ハケののちミガキ。複合部下端にヘラによる刻目。赤彩。	口縁部ハケののちミガキ、赤彩。胴部下半ヘラナデ(右左)。胴部下半ハケ(6/cm、右左)ののち粗いミガキ。	覆土 床＋3～9	底部、胴部下半⅓欠	小砂粒多	良好 暗茶褐色	21.3 15.4	(38.0) 11.4	7.8 32.7	14.8	(15650) (15713)
	84 2	甕	ハケ（16/cm、上下）。口縁部ヨコナデ。胴部下半器面状態不良。	口縁部ハケののちヨコナデ。胴部ヘラケズリ（下上）。	床面 床＋0～9	胴部上半½存	密	良好 暗赤褐色	14.5	(14.4) 11.6	2.9 16.3	6.7	
	84 3	坩	ミガキ。赤彩。	口縁部ハケののちミガキ、赤彩。胴部ナデ。	覆土	胴部上半½存	小砂粒多	良好 明褐色		(7.9) 7.4	 12.0	3.7	
	84 4	高杯	ミガキ。赤彩。	杯部ミガキ、赤彩。脚部ヘラナデ、ヨコナデ。	床面	ほぼ完存	密	良好 暗茶褐色	13.4 3.3	15.1 11.4	4.9	7.8	400 359
23	85 1	高杯	ヘラナデののちミガキ。	ハケ（11/cm、右左）。	床面	脚部⅔存	小砂粒多	良好 茶褐色	 4.0	5.8 9.9			
	85 2		ヘラナデ（上下）。	ナデ、ハケ（右左）。	床面	脚部上半	小砂粒多	良好 暗褐色		(3.5)			
24	87 1	転用甑	ヘラナデ(右左)。口縁部～胴部上半ヨコナデを加える。底部焼成後穿孔。	ヘラナデ。口縁部はヨコナデを加える。	覆土 床＋15	口縁部、胴部一部欠	粗。大小砂粒多	良好 茶褐色	18.4 11.0	21.5 15.1	3.3 21.3	7.2 6.8	4460 4616
	87 2	甕	ヘラナデ、ヨコナデ。口唇部上方から押捺により口縁部波状。	ミガキ。	覆土下層	口縁部¼存	小砂粒	良好 淡茶褐色	(20.0)	(3.7)			
	87 3	甕	胴部上半ヘラナデののちヨコナデ。胴部下半ヘラナデ(左右)。縄文原体による圧痕。	ミガキ。	覆土上層	胴部中位⅙存	密	良好 淡茶褐色		(9.3)	 (20.9)		
	87 4	壺	ミガキ。赤彩。底部木葉痕、粗いミガキ。	器面剝落。	床面 床＋0～12	胴部下半のみ	赤色酸化粒多	やや不良 明褐色		(5.1)		 8.0	
	87 5	壺	ハケののちナデ、ミガキ。	ハケ（10/cm、下上）。	覆土下層	底部⅓存	密	良好 赤褐色		(2.7)		 (8.4)	

24	876	甕	ヘラナデ。	ヘラナデののちミガキ。	床面 床＋0～6	底部のみ	小砂粒多	良　好 赤褐色		(2.8)		6.8	
	877		ナデ。	ナデ。	覆土下層	底部のみ	密	良　好 明褐色		(2.8)		3.2	
	878	高　杯	器面状態不良。ミガキ。赤彩。	ミガキ。赤彩。	覆土 床＋11	杯部⅕存	粗。小砂粒多	やや不良 明褐色	12.4	(4.7)		6.0	246
	879	高　杯	器面状態不良。赤彩。小孔なし。	器面状態不良。杯部赤彩。	床面	脚部上半のみ	粗。長石多	やや不良 茶褐色	4.0	(4.9)			
	8710	高　杯	ハケ（7/cm、上下）。	ハケ、ヘラナデ。	覆土下層	脚部下半⅔存	小砂粒多	やや不良 明茶褐色		(4.0) 9.2			
	8711	高　杯	ミガキ。赤彩。	指ナデ（上下）。	覆土上層	脚柱状部のみ	小砂粒多	良　好 赤褐色	3.1	(7.8)			
	8712	ミニチュア	指ナデ、一部にヘラナデを加える。	指ナデ。	覆土 床＋11	脚部下半⅓存	小砂粒多	やや不良 赤褐色		(6.1)	(8.1)		
	8713	椀	器面状態不良。体部下半ヘラナデ。	器面状態不良。	覆土下層	底部完存。体部上半¼存	密	良　好 明灰褐色	(9.3)	(5.0)		3.2	190
	8714	椀	ミガキ。赤彩不明。	ミガキ。赤彩。	覆土下層	底部完存	密	良　好 明灰褐色		(3.2)		3.9	
25	891	甕	器面状態不良。ハケ（12/cm）ののちヘラナデ（右左）。	口縁部ヘラナデののちヨコナデ。胴部ヘラナデ。	床面	ほぼ完存	長石・石英・赤色酸化粒	やや不良 明褐色	17.3 11.4	23.4 14.3	2.8 22.0	9.2 7.2	5150 4993
	892	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケ（8/cm、右左）ののちヘラナデ。胴部下半ケズリ状。	口縁部ヨコナデ。胴部一部ハケののちヘラナデ。	床面	口縁部～胴部上半½欠	大小砂粒多。赤色酸化粒	良　好 暗褐色	14.2 9.3	19.9 12.2	2.2 20.3	8.4 4.8	3680 3819
	893	甕	斜方向のヘラナデ（右左）ののち、縦方向のヘラナデ(下上)。口縁部指頭おさえ。上下別利用か。	口縁部ハケ（6/cm、右左）、ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	床面	ほぼ完存	小砂粒多	良　好 茶褐色	14.2 10.4	19.9 12.1	2.4 16.5	7.1 5.2	2550 2568
	894	壺	複合部ヨコナデ。以下ヘラナデののちミガキ。	ヘラナデののちミガキ。	床面	口縁部⅙存	小砂粒、長石多	良　好 明褐色	(12.6)	(4.5)			
	895	坩	ハケ、ヘラナデののちミガキ。赤彩。	口縁部ハケののちミガキ。赤彩。胴部ヘラナデ（右左）。	床面	完存	密	良　好 赤褐色	11.8 4.6	11.9 7.8	4.2 11.0	3.1 3.2	670 676

住居跡	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成 色調	A E	B F	C G	D H	容量A 容量B
25	89 6	坩	ヘラナデ（下上）ののち、口唇部ヨコナデ。	ヘラナデののち口唇部ヨコナデ。	覆土 床＋6	口縁部1/3存	粗。小砂粒多	良好 赤褐色	(12.4)	(5.9)			
	89 7	坩	ヘラナデ（下上）ののち口唇部ヨコナデ。体部下半はケズリ状。口唇部にヘラによる刻目。	口縁部ハケ（5/cm、右左）。胴部ヘラナデ（右左）。	床面	胴部一部欠	小砂粒多	良好 赤褐色	8.4 4.5	8.9 7.1	2.5 7.9	1.9 2.2	240 258
	89 8	坩	平滑、ヘラナデ。赤彩。	ヘラナデ（右左）。	覆土 床＋6	胴部下半1/3存	小砂粒多	良好 明茶褐色		(2.8)		3.7	
	89 9	坩	ヘラナデののちミガキ。	ヘラナデののちミガキ。	床面 床＋0～6	体部3/4、口縁部1/4存	密	良好 赤褐色	(17.2)	9.4 14.0	3.2	6.2 9.4	 1080
	89 10	坩	ヘラナデ（右左）。口縁部ヨコナデ。体部下半はケズリ状。	ミガキ。	床面	口縁部一部欠	長石・赤色酸化粒多	良好 暗茶褐色	13.8	7.3 10.6	3.8	3.5 4.2	550 538
	89 11	坩	ヘラナデののち、体部上半までヨコナデを加える。	ヘラナデののち、体部上半までヨコナデを加える。	床面 床＋0～6	口縁部1/3欠	小砂粒多	良好 暗褐色	10.8 3.7	5.9 9.1	1.5 9.5	0.7 3.2	250 237
26	90 1	甕	口縁部ヘラナデののちヨコナデ。胴部ハケ（8/cm）ののちヘラナデ。	ヘラナデ。口縁部はヨコナデを加える。	床面 床＋0～5	体部1/3存	小砂粒、長石多	良好 明褐色	(17.4)	(21.4) (14.5)	3.6 (21.5)	8.1	 (4883)
	90 2	壺	口縁部ヨコナデ。胴部ハケ（10/cm、右左）ののちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ（右左）。	床面	口縁部1/5、胴部1/4欠	大小砂粒多	良好 茶褐色	(10.6) 5.6	10.4 9.9	1.9 11.9	2.9 4.1	670 666
	90 3	甕	ヘラナデ（右左）。	ヘラナデ（右左）。	床面	胴部下半1/3存	小砂粒多	やや不良 赤褐色		(8.8)	 (15.6)		
	90 4	高杯	ハケののちミガキ。4孔。	ハケ（13/cm、右左）。	覆土 床＋4	脚部1/6欠	小砂粒多	良好 茶褐色	 2.8	(5.6) 9.6			
	90 5		ヘラナデ。	ヘラケズリ。	床面 床＋0～4	底部1/2存	大小砂粒	良好 暗褐色		(1.2)		5.0	
27	91 1	甕	幅狭のヘラナデ（右左）。	ヘラナデののちミガキ。	床面	胴部1/3存	長石・石英・赤色酸化粒	良好 明褐色		(14.8) (16.0)	 (23.0)	6.3	
29	94 1	甕	ハケ（7/cm、下上）。口縁部ヨコナデ、底部周辺ヘラケズリを加える。	ハケ（7/cm•12/cm、右左）。一部ミガキを加える。	覆土 床＋4～28	胴部上半1/5欠	長石・石英・角閃石多	良好 明茶褐色	(18.2) 13.2	26.6 (16.4)	2.7 25.2	10.7 6.8	7570 7569

29	942	甕	ヘラナデののち部分的なハケ(11/cm、下上)。口縁部ヨコナデ。	ナデ。	覆土 床＋6	口縁部1/5存	密	良　好 茶褐色	(15.6)	(8.6) (13.2)	2.4		
	943	甕	ヘラナデ、ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	覆土 床＋29	口縁部1/5存	大小砂粒	良　好 暗褐色	(17.9)	(6.3) (15.6)	3.0		
	944	甕	ハケ（12/cm、下上)。口唇部には横方向のハケ。	ハケ（右左)。	覆土	口縁部1/6存	大小砂粒多	良　好 明褐色	(19.6)	(4.2)			
	945	甕	浅いハケ（11/cm、下上)。底部木葉痕。	器面状態不良。一部にハケ。	覆土 床＋5～8	底部2/3存	粗。大小砂粒多	やや不良 明灰褐色		(5.0)		7.4	
	946	甕	ハケ（8/cm、下上)。底部木葉痕。	ヘラナデ（右左)。	床面 床＋0～8	底部のみ	大小砂粒	良　好 暗茶褐色		(2.8)		(6.4)	
	947	壺	複合部ヨコナデ。以下横方向のヘラナデののち、縦方向のミガキ状のヘラナデ。	ヘラナデののち粗いミガキ。	覆土 床＋7～28	口縁部1/3存	小砂粒多	良　好 茶褐色	(14.6)	(6.1) (10.2)	5.3		
	948	壺	複合部ヨコナデののちミガキ。以下ハケののち粗いミガキ。	ハケ（13/cm）ののちヨコナデ。	覆土 床＋30	口縁部1/2存	大小砂粒多	良　好 暗褐色	(13.6)	(5.4) 9.6	3.9		
	949	壺	ナデ。棒状浮文3(2剝落)。単位不明。	ナデ。	床面	口縁部1/6存	粗。小砂粒多	良　好 暗茶褐色		(2.7)			
	9410	坩	ヘラナデ（右左、下上)。	ヘラナデ（右左)。	覆土 床＋7～9	口縁部2/3欠	大小砂粒多	良　好 暗褐色	2.3	(7.3) 8.6		3.4	(630) (526)
	9411	椀	ハケののちミガキ。	口縁部ハケののちミガキ。胴部ヘラナデののちミガキ。	床面 床＋0～6	体部1/4欠	密	やや不良 赤褐色	10.6 5.3	8.2 10.1	1.0 10.5	1.9 3.8	420 420
	9412	椀	ハケ(12/cm、右左)ののちヘラナデ（右左)。	ヘラナデ（右左)。	覆土 床＋8	口縁部欠	密	良　好 淡茶褐色	3.8	(5.8) 8.7	9.2	1.4 3.0	
	9413	椀	指ナデののちヘラケズリ（上下)。	ヘラナデ（右左)。	覆土 床＋17	体部上半1/4欠	大小砂粒多	良　好 赤褐色	6.4	4.9	7.0	4.8	100 99
	9414	高　杯	ヘラナデ（右左、上下)。3孔。	ヘラナデ（左右)。	覆土 床＋17	脚部のみ	密	良　好 暗褐色	3.2	(6.9) 12.1			
30	971	壺	ミガキ。ハケは観察できない。赤彩。	平滑。ヘラナデ（右左)。	覆土 床＋3～8	胴部下半1/2存	大小砂粒多	良　好 灰褐色	10.3	(14.2)	(24.3)	7.4	

住居跡	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成 色調	A E	B F	C G	D H	容量A 容量B
30	97 2	壺	ヘラナデののち複合部ヨコナデ、以下ミガキ。複合部下端押捺圧痕。	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。	覆土上層	口縁部1/6存	赤色酸化粒多	良　好 暗茶褐色	(16.2)	(3.5)			
	97 3	坩	平滑、ヘラナデ。赤彩。	ヘラナデ（左右）。赤彩は不明確。	覆土上層	口縁部1/2存	密	良　好 明褐色	13.2	6.3 (7.6)	5.3		
	97 4	坩	ヘラナデののち粗いミガキ。	ヘラナデ（右左）。	覆土 床＋12	口縁部1/4存	密	良　好 明茶褐色	(11.6)	(6.2) (10.8)	6.0		
	97 5	甕	ハケ（7/cm、右左）。口縁部ヨコナデを加える。	口縁部ハケののちヨコナデ、一部ミガキ。胴部ヘラケズリ（右左）。	覆土 床＋8～10	胴部上半1/3存	小砂粒多	良　好 赤褐色	(16.2)	(7.0) 14.5	2.5		
	97 6	甕	ハケ（7/cm、右左）。口唇部ヨコナデを加える。	ハケ（右左）ののちヨコナデ。	覆土 床＋6～15	口縁部3/4存	小砂粒多	良　好 茶褐色	19.4	(4.0) 16.8	3.4		
	97 7	壺	ヘラナデののちミガキ。	ヘラナデののちミガキ。	覆土上層	口縁部1/4存	密	良　好 淡茶褐色	(12.8)	(3.1)			
	97 8	甑	ヘラナデ（下上）。焼成前穿孔。	ヘラナデ。	覆土下層	底部1/2存	密	良　好 茶褐色		2.9		(5.7)	
	97 9	甕	ヘラナデ（下上）。底部木葉痕。	ヘラナデ。	床面	底部のみ	赤色酸化粒多	良　好 暗茶褐色		(2.6)		7.2	
	97 10	坩	ハケののちミガキ。赤彩。	ヘラナデ（右左）。	覆土 床＋6	胴部下半1/3存	密	良　好 茶褐色	4.9	(5.7)	(10.4)	3.4	
	97 11	坩	ナデ、赤彩。	ナデ。	覆土上層	底部のみ	小砂粒多	良　好 赤褐色		(1.6)		2.0	
	97 12	壺	単節羽状縄文。結節文による区画。文様帯下赤彩。	ヘラナデ。	覆土下層	胴部片	小砂粒多	良　好 暗赤褐色					
31	98 1	甕	ヘラナデ（右左）ののちヨコナデ。	ハケ、ヨコナデののちミガキ。	床面	口縁部1/8存	大小砂粒多	良　好 明褐色	(16.8)	(2.6)			
32	100 1	坩	ヘラナデ（下上）ののち胴部上半ミガキ。	ヘラナデ（左右）。	覆土 床＋9	口縁部、胴部一部欠	大小砂粒多	良　好 淡茶褐色		(10.7) 6.5	5.0 11.8	5.5 4.5	

32	1002	甕	ヘラナデ（左右）。	ヘラナデ（右左）。	覆土 床＋8	底部½存	小砂粒多	良　好 明褐色		(2.5)		6.6	
	1003	椀	ミガキ。	ミガキ。	覆土 床＋4	完存	大小砂粒多	良　好 明褐色	9.2～7.9	3.1			70 72
	1004	高　杯	ミガキ。脚部3孔。	杯部ミガキ。脚部ヘラナデ（左右）。	覆土 床＋17	杯部上半、脚部下端欠	密	良　好 明褐色	3.6	(9.7)		6.9	
	1005	支　脚	ヘラナデ(下上)。器受部はヨコナデを加える。	ヘラナデ。器受部右左、脚部上下。	床面	口唇部⅔欠	長石多、石英など	良　好 赤褐色	(9.9) 6.8	12.0 14.9	3.4		
	1006	支　脚	ヘラナデ(下上)。器受部はヨコナデを加える。	ヘラナデ。器受部右左、脚部左右。	床面	器受部⅙、脚端部⅔欠	長石多、石英など	良　好 赤褐色	10.3 6.6	12.4 (14.5)	3.4		
	1007	支　脚	ヘラナデ(下上)。器受部はヨコナデを加える。	ヘラナデ。器受部右左。脚部左右。	床面	器受部⅙、脚部⅙欠	長石多、石英など	良　好 赤褐色	9.1 6.1	12.3 14.4	3.5		
33	1011	甕	ハケ（12/cm、下上、頸部上下）。胴部下半ヘラナデ(下上)。口縁部ヨコナデ。	口縁部ハケののちヨコナデ。胴部ヘラナデ（右左）。	床面	胴部¼欠	大小長石多	良　好 茶褐色	19.8 11.6	22.6 16.3	2.0 22.9	9.0 5.3	5580 5710
	1012	ミニ	ナデののちミガキ。	ナデののちミガキ。	床面	口縁部一部欠	密	良　好 明褐色	5.9	3.5		1.7	40 37
34	1021	甕	平滑、ナデ。口唇部上方からの押捺、波状。胴部押捺圧痕。布目が観察できる。一部ヘラ沈線により段表現。	ヘラナデののち粗いミガキ。胴部下半は器面状態不良。	床面	底部欠	長石・赤色酸化粒	良　好 赤褐色	18.0	(20.7) 15.9	2.5 21.1	7.8	4200 4102
	1022	甕	ハケ（8/cm、下上）ののちヘラナデ（右左）。	ヘラナデ（右左）。	覆土上層	底部のみ	密	良　好 明褐色		(2.6)		6.6	
	1023	甕	器面状態不良。ヘラナデ。	器面状態不良。	床面	胴部下半存	赤色酸化粒多	やや不良 明褐色	9.4	(11.0)	(22.8)	8.2	
	1024	坩	器面状態不良。ハケ（12/cm）ののちナデ、ミガキ。	器面状態不良。	覆土上層	体部上半¼存	密	不　良 明褐色	11.8	(11.6) 7.2	5.0		
35	1031	壺	ハケ（下上）ののち粗いミガキ。口唇部ヨコナデ。	口縁部ハケののちヨコナデ、ミガキ。胴部ヘラナデ（左右）。	覆土上層	大部上半⅕存	小砂粒多	良　好 明褐色	(12.0)	12.5 8.9	3.4 17.5	7.4	
	1032	壺	ハケ（6/cm、右左）ののち粗いミガキ。口唇部ヨコナデ。頸部竹管押捺。	口縁部ハケののちヨコナデ、粗いミガキ。胴部ヘラナデ（右左）。	床面	完存	小砂粒多	良　好 茶褐色	10.2 4.4	11.8 6.6	3.2 11.5	4.2 5.3	570 520

住居跡	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成	A	B	C	D	容量A
								色調	E	F	G	H	容量B
35	103 3	甕	ヘラナデ（右左）。縄文（不明確）押捺圧痕。有段。	ヘラナデ（右左）。	床面 床＋0～5	胴部中位1/3	長石多	良好 暗灰褐色		(6.4)			

土壙	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成	A	B	C	D	容量A
								色調	E	F	G	H	容量B
40	104 1	甕	ハケ（10/cm、下上）ののち、幅狭のヘラナデ。口縁部ヨコナデを加える。	口縁部ヨコナデののちミガキ。胴部ヘラナデ（下上）ののち粗いミガキ。	覆土	胴部2/3欠	大小砂粒多	良好 赤褐色	(20.4) 15.2	26.2 (17.2)	2.9 (26.4)	8.1 6.4	 8338

古墳	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成	A	B	C	D	容量A
								色調	E	F	G	H	容量B
01	113 1	高杯	ハケ(12/cm)ののち、杯部ヘラナデ、ヨコナデ。脚柱状部ミガキ。裾部ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	杯部ヘラナデ、ヨコナデ、赤彩。脚柱状部ヘラによるおさえ。裾部ヘラナデ、ヨコナデ。	底面＋12～16	杯部1/6、脚裾部2/3欠	密	良好 明褐色	(20.0) 3.8	15.9 14.0	4.8	10.7	 895
	113 2	高杯	杯部平滑なナデ。脚部ミガキ。赤彩。	杯部平滑なナデ、赤彩。脚柱状部指ナデ。裾部ヘラナデ、ヨコナデ。	底面＋12～18	杯部1/4、脚裾部1/6欠	小砂粒多	良好 赤褐色	15.4 2.4	12.8 11.5	3.0	8.3	360 325
	113 3	高杯	杯部平滑なナデ。赤彩。	ヘラナデののち粗いミガキ。赤彩。	底面＋22	杯部1/4欠	小砂粒多	良好 赤褐色	20.2 4.0	6.2	4.6	10.8	790 769
	113 4	高杯	ヘラナデ（下上）ののちヨコナデ。	ハケ、ヘラナデののちヨコナデ。		杯部1/4存	大小砂粒多	良好 暗茶褐色	(18.8)	(5.7)		(10.8)	
	113 5	坩	ヘラナデ（右左）ののち口縁部ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデののち、口縁部ヨコナデ。赤彩。	底面＋34	口唇部5/6、胴部1/6欠	大小砂粒多	良好 明褐色	(11.2) 4.6	11.5 8.0	4.3 11.0	2.6 2.6	540 508
	113 6	坩	ヘラナデ（右左）ののち口縁部ヨコナデ、さらにミガキを加える。	口縁部ヘラナデ、ヨコナデののち粗いミガキ。胴部ヘラナデ（右左）。	底面＋9	口唇部一部欠	密	良好 明褐色	11.7 4.1	10.9 7.5	4.0 10.2	2.8 3.2	540 482
	113 7	坩	ヘラナデののち全体ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデののち口縁部ヨコナデ、赤彩。	底面＋10～17	口縁部5/6、胴部1/2欠	密	良好 赤褐色	 3.2	(9.8) 5.8	 9.5	3.4 2.1	

01	1138	坩	ヘラナデののち口縁部ミガキ。赤彩。	口縁部ハケののちヨコナデ。赤彩。胴部指ナデ。		体部1/4存	密	良 好 赤褐色	10.2	8.8 7.2	4.1 10.8	3.4		
	1139	高 杯	ヘラナデののちミガキ。赤彩。	ヘラナデ（右左）。	底面＋41	脚柱状部のみ	小砂粒多	良 好 赤褐色	3.7	(9.0)				
02	1151	甕	ハケ（7/cm）ののちヘラナデ状のミガキ。	口縁部ナデののちミガキ。胴部下半ハケ（右左）、胴部上半ヘラナデ。	底面＋5～19	口縁部、胴部1/4欠	小砂粒多	良 好 明褐色	13.0	(29.2) 12.4	26.0	12.7 9.1		
	1152	坩	ヘラナデ（右左）ののち口縁部ヨコナデ。赤彩。	口縁部ヘラナデののちヨコナデ。赤彩。胴部ヘラナデ（右左）。	底面＋9	口縁部2/3欠	密	良 好 赤褐色	(9.8) 3.9	9.9 6.9	3.5 10.0	2.5 3.3	450 373	
	1153	坩	ヘラナデ（左右）ののち口縁部ヨコナデ。赤彩。	口縁部ヘラナデ（左右）ののちヨコナデ。赤彩。胴部ヘラナデ（左右）。	底面＋4	口唇部一部欠	密	良 好 赤褐色	9.0 3.9	9.7 6.2	3.3 9.0	2.5 3.0	310 299	
	1154	坩	ヘラナデ（右左）ののち口縁部ヨコナデ。赤彩。	口縁部ヘラナデののちヨコナデ。赤彩。胴部ヘラナデ。	底面＋14	口縁部1/3欠	密	良 好 明褐色	10.6 4.0	12.2 7.2	3.9 11.8	4.3 3.0	710 670	
	1155	坩	ヘラナデ（左右）ののち口縁部ヨコナデ。	体部ヘラケズリ、口唇部はヨコナデを加える。	底面＋13～15	体部1/4存	密	良 好 赤褐色	10.2 5.2	8.2 9.7	2.0 9.2	1.0 0	371	
	1156	高 杯	ヘラナデ（左右）。	器面状態不良。	底面＋1～14	杯部下半のみ	大小砂粒多	良 好 明褐色	3.8	(4.0)		9.7		
04	1191	高 杯	ヘラナデ（右左）ののちヨコナデ。赤彩。	器面状態不良。赤彩。	底面＋18	杯部1/3欠	小砂粒多	良 好 赤褐色	17.4 3.4	(6.9)	4.5	8.8	(550) 475	
	1192	坩	ヘラナデ（右左）ののち胴部上半にかけてヨコナデ。赤彩。	口縁部ヨコナデ、赤彩。胴部ヘラナデ（右左）。	底面＋14	口縁部3/4欠	密	良 好 赤褐色	3.7	(9.1) 5.8	9.0	2.8 2.1		
	1193	坩	ヘラナデ、ヨコナデののちミガキ。	口縁部ヨコナデののちミガキ。胴部ヘラナデ(左右)、一部にミガキを加える。	底面＋18	口縁部2/3、胴部1/4存	密	良 好 淡茶褐色	8.9	(5.8) 7.5	2.4 (9.4)	3.0		

溝	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成 色調	A E	B F	C G	D H	容量A 容量B
01	1421	杯 （土師）	ロクロ調整。底部外周手持ちヘラケズリ(左右)。底部切り離し不明、全面手持ちヘラケズリ。	ロクロ調整。	底面＋18	体部5/6欠	赤色酸化粒多	良 好 明褐色	(13.2)	3.9		6.5	260

溝	挿図番号	器種	外面（器形）の特徴	内面の特徴	出土	現存量	胎土	焼成 色調	A E	B F	C G	D H	容量A 容量B
01	142 2	杯 （土師）	ロクロ調整。底部外周手持ちヘラケズリ(左右)。底部回転糸切り、周縁手持ちヘラケズリ。	ロクロ調整。	底面＋17	ほぼ完存	小砂粒多。長石・酸化粒など	良好 茶褐色	11.8	4.5		4.9	228
	142 3	杯 （土師）	ロクロ調整。底部外周手持ちヘラケズリ(左右)。底部切り離し不明、手持ちヘラケズリ。	ロクロ調整。	底面＋4	体部下半1/6	密	良好 明褐色		(2.3)	(6.4)		
	142 4	杯 （土師）	ロクロ調整。器面状態不良。底部静止糸切り。	ロクロ調整。	底面＋36	体部下半1/2	赤色酸化粒多	やや不良 明褐色		(2.4)		6.5	
	142 5	杯 （土師）	ロクロ調整。底部外周手持ちヘラケズリ(左右)。底部切り離し不明、手持ちヘラケズリ。	ロクロ調整。		底部のみ	小砂粒多。赤色酸化粒	良好 暗茶褐色		(1.5)		5.9	
	142 6	杯 （土師）	ロクロ調整。墨書「澤」か。	ロクロ調整。	底面＋18	体部片	密	良好 茶褐色					
03	143 1	長頸瓶 （灰釉）	ロクロ調整。肩部に灰釉、口縁部に自然釉が掛かる。	ロクロ調整。口縁部灰釉。	覆土	口縁部2/3存	密	良好 明灰褐色	(19.1)	(11.5) 11.4	10.3		
04	143 2	短頸壺 （須恵）	ロクロ調整。胴部回転ヘラケズリ。	ロクロ調整。	覆土	体部上半1/4存	密	良好 明灰褐色	(9.2)	(6.4) (9.4)	1.0 (15.3)	2.7	
	143 3	（須恵）	ロクロ調整。底部回転ヘラケズリ。	ロクロ調整。	覆土	底部1/4存	密	良好 暗灰褐色				(11.0) (11.8)	

(cm) (mℓ)

第5表　石器計測観察表(2)

挿図番号	遺構	出土位置	種別	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
58—6	08号住居跡	床面	敲石	砂岩	110	90	50	658	両端に敲石痕を有し、また下端には剝離痕を有す。
58—7	08号住居跡	床面	砥石	軽石	54	59	54	27.3	線条痕なし。手持砥。あるいは石杵。
58—8	08号住居跡	床面	砥石	砂岩	111	110	54	547	表面はくぼみ、両側面・上面は平坦。線条痕は明瞭ではない。
60—14	09号住居跡	床面	砥石	砂岩	121	64	41	278	表裏左右面使用。線条痕は明瞭ではない。
65—22	10号住居跡	覆土	砥石	ホルンフェルス	77	81	65	628	表面のみ。わずかにくぼむ。線条痕は明瞭ではない。
95—15	29号住居跡	覆土	砥石	砂岩	171	68	68	1205	なめらか。表裏左右面使用。剝離痕を有す。

(mm) (g)

第6表　鉄器計測観察表

挿図番号	遺　構	出土位置	種　別	長　さ	最大幅	最大厚	重　量	備　考
77—11	18号住居跡	覆土、床＋5	鎌	(95)	27	(4)	34.8	
79—16	19号住居跡	床面		(71.5)	11	(6.5)	8.4	刀子状の形態を示すが、刃部なし。
111—48	01号墳	1号主体	刀子(ミニ)	63、刀身44、茎19	12	(2)	5.7	完存。ミニチュア品。布(挿図網部)の付着が観察できる。布の種別は不明。
121—1	05号墳	主体部	剣形利器	538、剣身428、茎110	29	(6)	240	全体に鞘木の木質が付着。目釘穴は一孔のみ確認できる。
121—2	05号墳	主体部	鉄鏃	142、箭頭篦被106、茎36	(32)	(4)	(31.4) 11と共	両丸造長頸腸抉柳葉式。
121—3	05号墳	主体部	鉄鏃	179、箭頭篦被114、茎65	(9)	(4.5)	13.4	片丸造長頸鏃箭式、片方のみに逆刺をもつ。箭頭関部は両側一致しない可能性があるが不明瞭。
121—4	05号墳	主体部	鉄鏃	177.5、箭頭篦被118、茎59.5	11	(4)	13.0	片丸造長頸鏃箭式。
121—5	05号墳	主体部	鉄鏃	(149)、箭頭篦被(111)、茎(38)	9	(4)	9.1	長頸腸抉片刃箭式。
121—6	05号墳	主体部	鉄鏃	167、箭頭篦被115.5、茎51.5	10	(4)	13.6	長頸腸抉片刃箭式。
121—7	05号墳	主体部	鉄鏃	(126)、箭頭篦被(101)、茎(25)	9	(3)	7.6	長頸腸抉片刃箭式。
121—8	05号墳	主体部	鉄鏃	(150.5)、箭頭篦被107、茎(43.5)	9.5	(4)	11.3	長頸片関片刃箭式。腸抉？。
122—9	05号墳	主体部	鉄鏃	174、箭頭篦被110、茎64	8	(4)	15.1	長頸片関片刃箭式。
122—10	05号墳	主体部	鉄鏃	(151)、箭頭篦被(95.5)、茎55.5	(8)	(4)	12.6	長頸片関片刃箭式。
122—11	05号墳	主体部	鉄鏃	164、箭頭篦被104、茎60	9.5	(3.5)	(31.4) 2と共	長頸片関片刃箭式。箭頭形状やや不明確。
122—12	05号墳	主体部	鉄鏃	(117)、箭頭篦被104、茎(13)	8.5	(3.5)	8.4	長頸片関片刃箭式。
122—13	05号墳	主体部	鉄鏃	166、箭頭篦被112、茎54	8.5	(3.5)	11.0	長頸片関片刃箭式。箭頭関部形状やや不明確。

(㎜)　(g)

第7表　土製品計測観察表

挿図番号	遺　構	出土位置	種　別	長　さ	外　径	孔　径	重　量	焼　成	色　調	胎　土	備　考
44—29	03号住居跡	覆土	有孔土製品	25.1	33.4	3	13.5	良　好	暗　褐　色	小砂粒多	完存。表面ナデ調整。ミガキ？
55—10	06号住居跡	床下	土玉	36.7	32.0～36.3	6	36.7	良　好	明茶褐色	密	完存。表面ナデ調整。
77—10	18号住居跡	覆土上層		19.2	26.3	5	(7.1)	良　好	暗　褐　色	小砂粒多	一部欠。内外面指ナデ調整。
82—21	21号住居跡	覆土	土玉	27.8	29.3～31.1	5～8	25.5	良　好	暗　褐　色	小砂粒多	完存。表面ナデ調整。
87—15	24号住居跡	覆土	土玉	34.6	36.5～37.8	4～5	47.7	良　好	茶　褐　色	粗。長石多	完存。表面ナデ調整。
97—13	30号住居跡	床面	投弾	73.6	37.5～38.3	—	91.7	やや不良	淡茶褐色	粗。小砂粒多	完存。表面ナデ調整。
97—14	30号住居跡	覆土	投弾	(38.3)	(32.0)	—	(25.3)	やや不良	淡茶褐色	粗。小砂粒多	1/3存。表面ナデ調整。

(㎜)　(g)

第8表　玉類計測観察表

挿図番号	遺　構	出土位置	種　別	石　材	長さ・高さ	幅・外径	厚　さ	孔　径	重　量	備　考
45— 2	02号住居跡	周溝内	勾玉	滑石	29.9	19.4	9.1	3.4～4.0	(6.0)	両面穿孔。尾部一部欠
79— 7	19号住居跡	床面	勾玉	翡翠	42.1	26.8	15.6	5.5～8.3	30.3	片面穿孔。
79— 8	19号住居跡	床面	勾玉	瑪瑙	38.6	23.8	10.0	1.8～1.3	10.9	片面穿孔。
79— 9	19号住居跡	覆土、床＋7	管玉	蛇紋岩	40.7	10.2～10.7	—	4.5～5.1	8.3	両面穿孔。
79—10	19号住居跡	覆土、床＋5	管玉	蛇紋岩	35.0	6.6～7.0	—	2.2～2.8	3.1	両面穿孔。
79—11	19号住居跡	床面	管玉	蛇紋岩	26.0	6.6～7.0	—	2.4～2.8	2.0	両面穿孔。
79—12	19号住居跡	床面	管玉	滑石	20.7	5.7～5.9	—	2.0	1.3	両面穿孔。
79—13	19号住居跡	貯蔵穴	管玉	滑石	21.8	4.8～5.1	—	2.3～2.5	0.9	両面穿孔。フルイにより出土。
79—14	19号住居跡	貯蔵穴	小玉	蛇紋岩	1.0～2.0	6.1	—	2.7	0.0	フルイにより出土。
79—15	19号住居跡	床面	小玉	ガラス、淡青色	5.0～5.5	4.2～4.5	—	1.7	0.1	
80— 4	20号住居跡	覆土、焼土上	紡錘車形石製品	緑色凝灰岩	—	50.4	9.8	4.1～4.3	(20.4)	両面穿孔。表裏面に調整痕を残す。一部欠。
82—20	21号住居跡	覆土上層	勾玉	滑石	19.9	11.2	4.8	1.2	1.4	片面穿孔。頭部片面に刻線。尾部一部欠。
97—15	30号住居跡	覆土	小玉	ガラス、濃青色	4.6～5.1	5.0～5.5	—	2.3	0.2	
111— 1	01号墳	1号主体	勾玉	滑石	15.9	9.8	4.0	1.5	0.9	片面穿孔。
111— 2	01号墳	1号主体	小玉	ガラス、淡青色	1.5	2.8～3.0	—	1.6	0.0	
111— 3	01号墳	1号主体	小玉	ガラス、淡青色	3.7～4.1	4.5	—	1.4	0.1	

(mm)　　(g)　　(註) 01号墳滑石製小玉については省略する。

Ⅳ 考　　察

以下、下鈴野遺跡と、関連する問題点について、若干の検討を加える。

1　鴨居上ノ台式と五領式について

(1)　土器編年との対比

当該期の土器編年については、すでに提示している。[註1]下鈴野遺跡における比較的まとまった住居跡資料をこれに対比するならば、弥生時代終末、鴨居上ノ台式に比定されるものは、34号住居跡出土例、五領1式に比定されるものは、03・05・10・12・13・16・18・32号住居跡出土例、五領2式は、22・25号住居跡出土例である。このうち、とくに鴨居上ノ台式については、不確実なものが多く、本遺跡では、便宜的に、鴨居上ノ台式～五領1式期をⅠ期に、五領2式をⅡ期に区分しておきたい。なお、01・02・04号墳出土土器は、和泉式に比定されるものであり、また05号墳については、その鉄鏃から、棘箆被式出現前、ほぼ埼玉県行田市稲荷山古墳[註2]出土例と対比され、他古墳に後続する。この和泉式～鬼高1式期をⅢ期としておきたい。この時期区分は、後述する集落分析を目的としたものである。

(2)　久ヶ原式と鴨居上ノ台式

鴨居上ノ台式は、ほぼ東京湾沿岸地域を主体として、五領式に先行し、前野町式、また基本点において庄内式と併行する。近年千葉県内においても資料が増加しつつあり、市原市草刈遺跡22号住居址（市センター調査[註3]）、草刈遺跡A区10・71・75号跡（県センター調査[註4]）、市原市番後台遺跡014B・015・016A・049・073B・074A号住居跡[註5]、市原市祇園原貝塚H－4号住居跡[註6]、市原市大厩遺跡Y－1・4号址[註7]、市原市土宇遺跡第4・15・67号住居址[註8]、市原市女坂第1号方形墳墳丘下住居址[註9]、市原市南中台遺跡13・14号住居跡[註10]、市原市中台遺跡8号住居跡[註11]、千葉市南二重堀遺跡2・4・12A・20・33・49・51・58・69・83号住居址[註12]、千葉市大北遺跡005号住居跡[註13]、千葉市馬ノ口遺跡26号住居址[註14]、大多喜町横山遺跡第6号住居址[註15]、補ヶ浦町境遺跡第11・30号住居址[註16]、補ヶ浦町山王辺田遺跡[註17]、木更津市請西遺跡道上谷地区A－5号住居址[註18]、請西遺跡大山台地区第149号住居址、木更津市田川遺跡群第1・第2地点第16号住居址[註19]、木更津市南谷遺跡003号址[註20]、富津市岩坂大台遺跡各住居址[註21]、富津市東天王台遺跡住居址No.5[註22]、佐倉市大崎台遺跡[註23]、佐倉市上座矢橋遺跡[註24]、小見川町阿玉台北遺跡A地点021・042－A号址[註25]などの各出土土器がある。その設定は、これに、先行する、久ヶ原式・弥生町式の内容および編年関係の変更を含め、従来認識されていなかった、五領式前における南関東地方の地域的な分割の再整理を意図したものである。この場合、久ヶ原式と鴨居上ノ台式、弥生町式と前野町式が地域をわけて様式的に連続し、各々が併行関係に位置づけられる。また鴨居上ノ台式は、臼井南式内の複数系列[註26]のうち、久ヶ原式に対応するグループとも系列関係をもつ。

久ヶ原式と弥生町式については、現状においてなお混乱した状態にあり、また誤解もみられる。基本的な問題点は、南関東地方が、明確な地域性を示すのにもかかわらず、一括された編年枠の中で、各地域別個に検討が進められた点にある。研究史上、久ヶ原式、弥生町式の境界は曖昧であり、その包括する幅は広く、矛盾点はその枠内で処理されてきた。しかしながら、結果として、久ヶ原式と弥生町式、とくに弥生町式の内容は、各地域単位でまったく異なるものになってしまっている。従来の様式名を使用して再規定することにも、この混乱の一因があるとするならば、今後別の呼称を与えることも考えなければならない。

弥生時代後期（畿内第5様式・庄内式併行期）における南関東地方は、各地域において異なる器形、文様構成、表出技法の多様化を伴い、明確な地域性が顕在化する。久ヶ原式・鴨居上ノ台式内においても、地域的にさらに細別される。従来、久ヶ原式・弥生町式の様式変化は、甕形土器では、口頸部における粘土紐積み上げ痕の消去を基準的な型式要素とする。しかし、多段の粘土紐積み上げ痕をもつもの（形式A）、胴部中位に一段残すもの（形式B）は、胴部粘土紐積み上げ痕をすべて消去したもの（形式C）を含め、系列的に宮ノ台式から連続し、また地域的に量的な変化を示す。形式Aは、千倉町健田遺跡[註27]など、房総半島南部から三浦半島域に主体的であり、この地域的内容は、岩坂大台遺跡、神奈川県横須賀市鴨居上ノ台遺跡[註28]など、鴨居上ノ台式に連続する。この形式Aの型式変化は、粘土紐積み上げ痕の断面形・調整技法、器形変化に対応する粘土紐積み上げ痕の口縁部への限定化を指標とし、鴨居上ノ台式から一部は五領1式に継続する。またこの段階で、地域的に拡大し、南関東地域外においても散見することができる[註29]。下鈴野遺跡03号住居跡－1、05号住居跡－1・2などは、五領1式に対比されるものである。これに対して形式Bは、土宇遺跡、番後台遺跡、草刈遺跡A・B区[註30]など、現状では上総北半部地域に主体的である。その型式変化は、形式Aにみられるような器形変化に対応した段の明確な変化は認めにくい。ただし、下鈴野遺跡15号住居跡—11、24号住居跡—3、大厩遺跡Y—4号址—6などは、胴部押捺文を残し、段を消去する例である。下鈴野遺跡34号住居跡－1は、段にかわり、一部ヘラ描き沈線で区画する。また形式Cについては、鴨居上ノ台式期では、神奈川県横浜市山王山遺跡[註31]において主体的にみられ、これは、久ヶ原式期における、例えば神奈川県横浜市新羽大竹遺跡[註32]などに、その組成比率上の端緒をみることができる。甕形土器については、他に、脚台部の有無など、その個別的な地域要素が明確である。

壺形土器に関しても、各要素の地域的な頻度に明らかな変化がある[註33]。また、帯縄文区画等に伴い、全体の文様構成も異なり、なお未整理ではあるが、複数の系列が、その比重において、地域的に並立する可能性が強い。これは、笹森紀己子氏[註34]にみられるように、従来の編年関係を骨格とし、その矛盾点を、各要素の消長を曖昧化することによって説明できるものではない。帯縄文区画の沈線から結節文、帯縄文の2帯から1帯、山形文から鋸歯状文は、いずれも鴨居上ノ台式前の細別の基準とはならない。いずれにせよ、甕形土器にしても明確な地域性が認められる以上、

細別化以前に、地域的な枠を限定した視点が必要であろう。

鴨居上ノ台式の、壺形土器文様構成を若干補足するならば、2帯縄文に山形帯縄文をもつ例は、草刈遺跡A区71号跡にみられる。器形変化に伴い、加飾面が限定され、帯縄文が一帯化したものは、大北遺跡005号住居跡にある。山王山遺跡65号住居址例は、帯縄文下山形文を省略し、複合山形文のみをもつ。また、東天王台遺跡住居址№5例は、久ヶ原式、健田遺跡などにみられる、沈線文区画帯縄文間を、斜行帯縄文で連結するものである。これらは、久ヶ原式・鴨居上ノ台式の文様系列の多様性を示すものといえる。ただし、鴨居上ノ台式における基本的な特徴は、草刈遺跡22号住居址例（市センター）、南谷遺跡003号址例などにみられるように、久ヶ原式の充塡縄文に対して、縄文が沈線文の地文化することにある。また、横浜市横浜市道高速2号線遺跡第2号方形周溝墓(註35)例、山王山遺跡81号住居址例などは、一方向横回転の縄文を、一部磨消すことによって構成される。区画文として沈線と、充塡縄文の関係は、この段階で不明確化するのである。

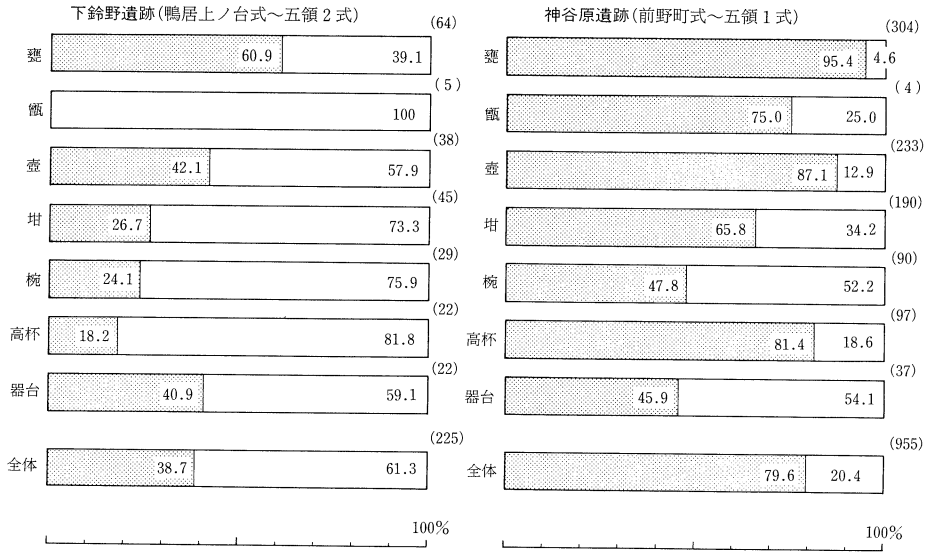
先験的に受けつがれた従来の編年観には、深い根があり、これを除去するためには、単に地域性を強調するのみでは充分な納得は得られないかもしれない。今後、明確な「組列」を提示する必要があろう。

(3) 鴨居上ノ台式と五領式の成立

五領式は、新潟県・愛知県をほぼ境界地域とし、西日本地方における布留式と対置される、大別的な枠として設定することができる。その成立は、地域間の広範かつ活発な交通を前提とする。五領式は、東海地方東部から南関東地方にいたる、菊川式～弥生町式・前野町式からの変化が連続的であるのに対して、とくに北関東からこれ以北の地域では、明確な様式変化を示す。久ヶ原式・鴨居上ノ台式地域についても、五領式への変化は、各器種いわば受動的である。その受容期における鴨居上ノ台式は、前述した久ヶ原式系列の地域性からは説明できない、遺跡単位ともいえる個性が認められる。市原市内においても、土宇遺跡では、当該期においてハケ整形台付甕形土器を主体とする。また、例えば佐倉市大崎台遺跡などにみられるタタキ、あるいは、番後台遺跡などの櫛描文等、他地域の要素の在地化が、非連続・散在的に認められる。交通の中でもとめられる諸要素の採用は、五領式前においては、不安定であり、現状では、ハケ整形等、個別要素をもって鴨居上ノ台式細別の基準とすることはできない。

この交通の内容・範囲は、特定の要因・地域に限定することはできない。また五領式の契機を例えば、菊川式～弥生町・前野町式域に固定することは、小形精製土器群にせよ困難であろう。しかしながら、五領式域外に祖型をもつ特定の器種を指標とし、なんらかの政治性や「侵略」を問題とする以前に、結果として成立する五領式域内の交通を再評価する必要があろう。

五領式内においても、地域性を認めることは可能である。下鈴野遺跡出土土器を問題とするならば、多摩川・大宮台地地域と対比した場合、甕形土器脚台部の有無、およびこれと関連する支脚形土器がまず指摘できる。また前述した甕形土器形式A、03号住居跡－1、10号住居跡－6に



第144図　ハケ使用頻度（網部確認個体）

みられる胴部下半の段などが、当該地域において五領１式に包括される。五領式前においては壺形土器口縁部、二重口縁・複合口縁は、比重を含め、明確に地域性が認められるものの、この段階では不明確である。ただし、整形技法について、例えば東京都八王子市神谷原遺跡(註36)では、ハケ整形が一次整形、最終調整を含め基本的な技法であり、確認できる範囲で80％に達する。これに対して、下鈴野遺跡では、約40％にすぎず、最終調整としてのミガキを除いた場合、ヘラ整形が一般的な技法と考えられる。下鈴野遺跡においても、甕形土器については、60％に達するが、成形・整形過程における使用状況は、台付甕形土器地域とは異なることも考えられる。例えば、胴部下半粘土紐積み上げ休止部に対する二次調整は、下鈴野遺跡ではヘラナデ・ヘラケズリが一般的である。しかしながら、これらの地域色は、いずれも後期における地域性を反映したものであり、甕形土器形式Ａなどは、壺形土器櫛描文を含め、すでに、五領式の基本的内容ではない。五領式については、この地域性を画一化した斉一性を看過することはできないのであり、地域的要素を問題とする前提として、まず大枠としての様式レベルの編年関係を基本点において安定化する必要がある。すくなくとも「五領式」を、限定された一地域で問題とすることによって、全体の対応関係を見失ってはならない。現状では、塩釜式にせよ、宮町式にせよ、その分割は機械的・便宜的なものであり、この段階は、単に編年対象地域を細別することによって、地域性の内容が明らかになるとは考えにくい。型式群としての様式レベルにおいては、基本的に一体である。石田川式におけるＳ字状口縁台付甕形土器にせよ、定性的には、各地域が共有する要素である。地域性の表現は、個別的であり、また地域Ａ・ＢとＢ・Ｃ間の地域性が、同一の形式・要素によって区分されるわけでもない。この段階の地域性は、様式レベルにおける編年関係とは別に、個別要素ごとの濃淡によって設定する必要があろう。

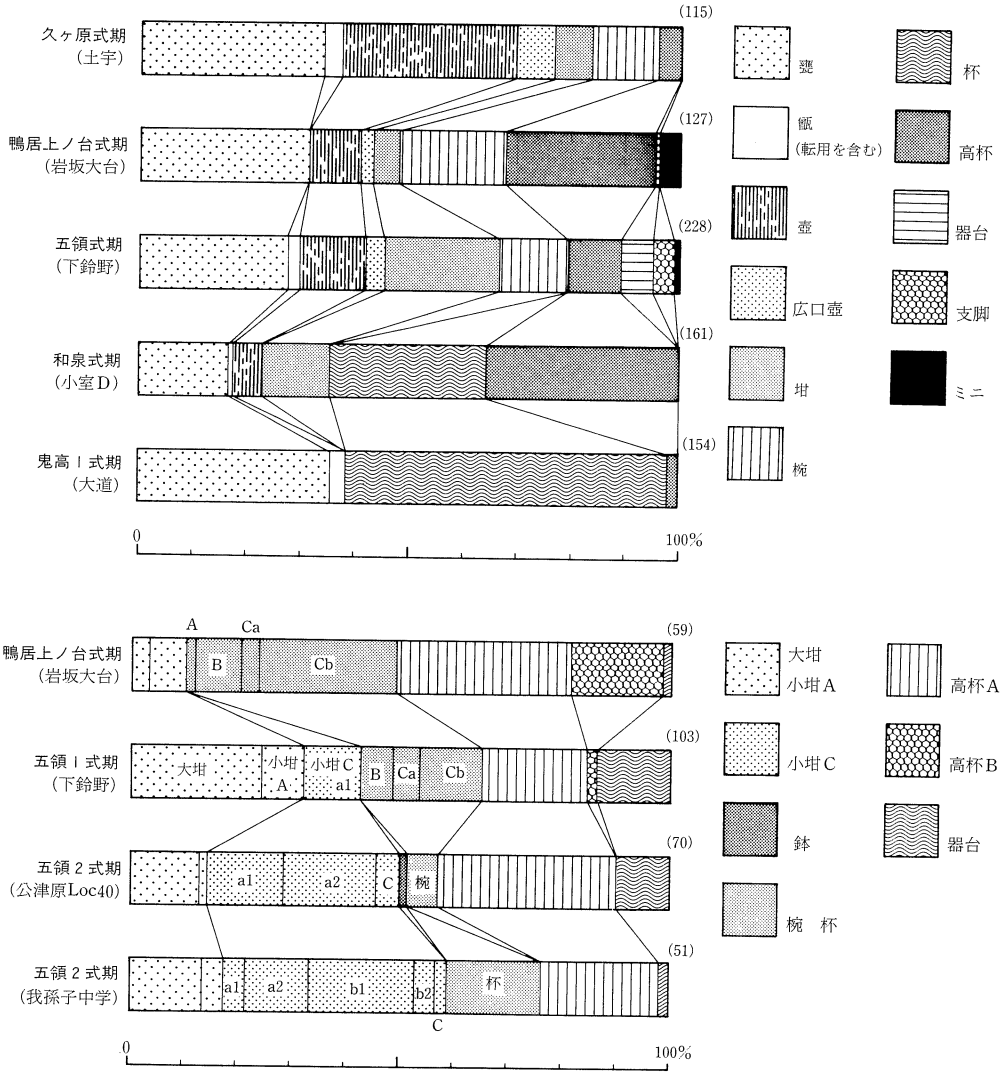
(4) 食卓用土器と土器編年

南関東地方では、鴨居上ノ台式・前野町式期において、器種構成が多様化する。これは、とくに「食卓用土器」[註37]を主体とするものであり、器種構成における明確な一画期をなす。食卓用土器は、久ヶ原式にも認められるが、器種も限定され、土宇遺跡では、坩形土器、椀形土器、高杯形器の全体に対する比率は、23.5%にすぎない。これに対して、鴨居上ノ台式では、器台形土器を含め、57.8%（岩坂大台遺跡）に達し、器種・形式構成も多様化する。また椀形土器については小形化し、共有器とも考えられる久ヶ原式椀形土器とは、機能的にも、系列的にも区分される。この段階に銘々器の端緒を認めることが可能である。これ以降、食卓用土器は、ほぼ全体の60%を前後し、系列的関係は別にしても、機能的な対応性が考慮される。古墳出現期、小形精製土器群など、学史的につねになんらかの「政治性」が与えられてきた。高杯形土器、器台形土器を含め、祭儀用としての意義を否定することはできないが、これらは、また、日常の容器として、孤立したものではない。

鴨居上ノ台式・五領式における食卓用土器は、基本的に、在地を母胎とした形式分化によって説明できるものではなく、その受容期にあたる当該期では、器種・形式構成は多様であり、全体として不安定であるともいえる。下鈴野遺跡でも、03・10・25号住居跡など、その組成は各々異なる。しかし、これらは全く無秩序に存在するものではなく、形式的関係、機能的関係、型式変化は、整理することが可能である。

鴨居上ノ台式については、欠山式との関係が明確であり、大坩Aはこれに対応する。また小坩Bについても、その系列性が想定されるが明確ではない。椀形土器については、久ヶ原式からの系譜を否定することはできないが、主体となる椀Bbは、口唇部の形状等、高杯Bからの形式分化としてとらえられる。高杯形土器と椀形土器は、久ヶ原式同様、系譜的な対応関係が認められ、また、この段階では、椀形土器は器台形土器とセット関係になる。この椀形土器と高杯形土器の関係は、西日本では認められないが、当該地域では五領1式に継続する。五領1式期における大坩B・小坩Cは、布留式に系譜をもつ。大坩Bは、大坩A・大坩Cと漸次同化し、五領2式において一体化する。小坩Cは、五領1式では形式的に限定されているが、五領2式において、容量別変化は規格化されていないものの、複数系列に分化する。またこの段階で、椀形土器と比重が逆転し、一般化する。椀形土器と五領2式における小坩C－a 2・c等の系列性は否定できないが、いずれにせよ、容量等機能的関係は明確であろう。[註38] これはさらに和泉式における杯形土器に転化する。なお小坩C－b 1・b 2については、小坩Aとの機能的対応が想定される。五領2式は、高杯形土器B・C、器台形土器も客体化し、機能的・形式的に集合・整理される。これは食卓用土器以外の各器種にも認められ、この段階に、器種構成は安定化したともいえる。

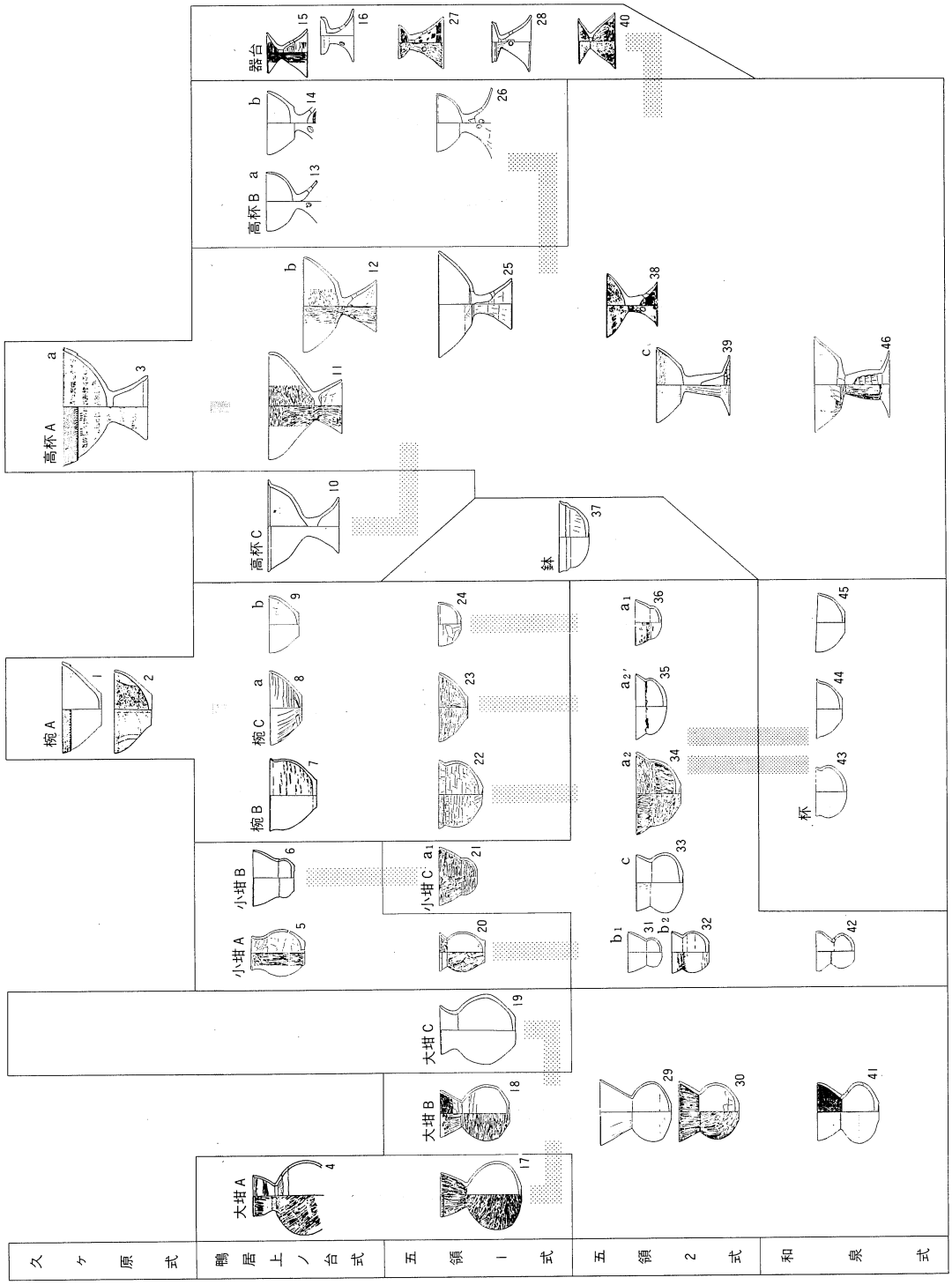
この食卓用土器は、その多様性のもつ「情報」から、編年的にも標式化することが可能である。ただし、これを形式組成・消長としてとらえた場合、竪穴住居跡の限られた一括資料を対象とし



第145図　器種・食卓用土器の組成変化

て、活用することはやや困難である。たしかにこの段階は、器種の交替がはげしく、一形式内に明確な型式変化を認められない場合も多い。しかし、形式の分化・集合、機能性に基づく異形式間の対応関係など、個々に「関係」を認め、またその「変化」を明らかにする必要があろう。

ここでは、前編年における、五領１・２式内古・新段階については問題としない。現在各期において細別化が進んでいるが、その有効性は細別化と反比例し、活用の幅をせばめている場合がみられる。とくに大枠を欠く細分は、漸移性のみが強調され、土器変化の画期が曖昧化されている。たしかに、資料も膨大にあり、一枚の編年表の中で、コピーを羅列することにより、1°の傾斜、１㎜の器高変化を表現することも可能ではある。ただし、特定の基準がない、とくに器形変化は、実際に問題とすることができない。土師器の編年研究は、現在年代論に傾斜している。そ



第146図　食卓用土器の変遷

の中でⅠ・Ⅱ期という「普通名詞」が一般化し、土器編年が個人化しつつある。基本点における様式内容の基準化・客観化を前提とし、細別については、定量化を含め、方法論上今一度整備する必要がある。

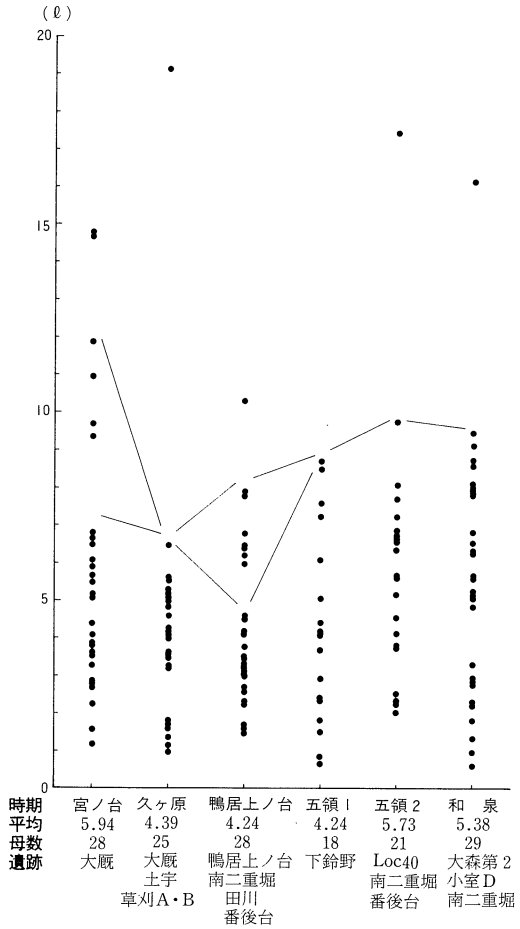
(5) 土器容量について

今回、計測可能な土器について、容量を示した。容量は、土器の本来もつ具体的な機能、また社会的には消費規模を反映する基礎的な情報としてとらえることができる。今後、分類上の基準を数量化していく上でも、不可欠なものと考えられる。ただし、厳密に一括性を基準とした場合、計測可能個体は量的に限られる。したがって容量別の組成、その平均値など、今後資料を蓄積する必要があろう。

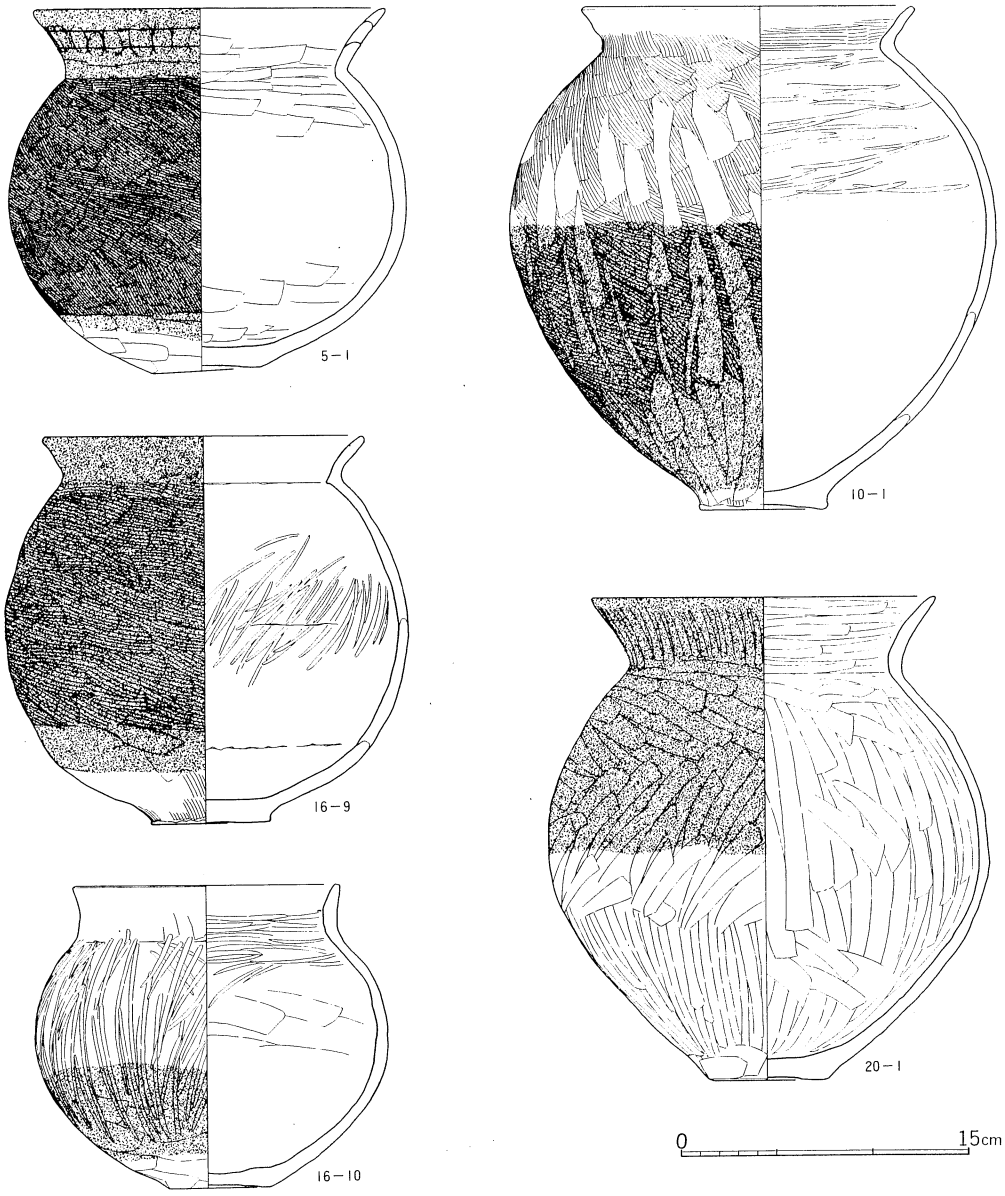
ここでは、甕形土器について、基本的な傾向のみを若干問題としたい。下鈴野遺跡では、実際に砂粒を入れ測定したもの、復原部が大きく、実測図より計算式により算出したものあわせ、五領1式18個体について第147図に示した。なお他時期・他遺跡については、各報告書より、実測図を1／2に拡大し算出した。ただし、計算式は、簡略化した、容量C＝π(半径$r_1^2+r_2^2+\cdots\cdots$)を用いた。

甕形土器のみを対象としても、その容量の幅は大きく、機能的な分化が想定される。下鈴野遺跡では、5ℓを境界とする分布が認められ、鴨居上ノ台式各遺跡例も同様である。ただし、久ヶ原式各遺跡例は、2.5ℓにおいて区分される。いずれにせよ、明確な規格性は認められず、容量については、別に、住居単位の消費規模をも反映する可能性が考えられる。下鈴野遺跡では、3号住居跡(床面積35.88㎡)では、8.69ℓ、4.12ℓ、5.07ℓ、平均5.96ℓ、16号住居跡(11.34㎡)では、8.44ℓ、4.14ℓ、2.39ℓ、8.1ℓ、平均5.77ℓ、25号住居跡（7.04㎡）では、5.15ℓ、3.68ℓ、2.55ℓ、平均3.79ℓを示す。いずれにせよ、現状のデータでは、明確な解答は与えられないが、土器をその遺構からとりだしてしまうことはできないように思われる。

時期別の容量については、明確な変化が認められ、久ヶ原～鴨居上ノ台式期を最小とする変化は、住居面積平均値とも対応し、消費規模を



第147図　土器容量の変化



第148図　甕形土器煤付着範囲

反映する。またこの容量変化は、土器器形変化を規定するのである。宮ノ台式以降、甕形土器は、器高を減じ、深鉢形から球形化を指向する。この容量・器形変化によって、炉における熱効率が悪化するが、これを補足するものが台付甕形土器であり、この地域では、支脚形土器・土製品である。支脚は、弥生時代後期において、西日本地方においても明確化するが、同一の契機が想定され、これは、庄内式・布留式における丸底化を説明する一要因でもある。脚台部、支脚の明確ではない、北関東地方などについては容量を検討・対比してみる必要がある。当該地域では、支脚形土器・土製品は、草刈遺跡Ｂ区116号址など、久ヶ原式期に出現し、五領２式には客体化する。

下鈴野遺跡における甕形土器煤付着を観察するならば、五領1式では、大形の10号住居跡－1を含め、5号住居跡－1、16号住居跡－9・10など、底部近くまで認められ、これは支脚の使用が想定されるのに対して、五領2式、20号住居跡－1は、胴部下半に煤の付着が明確ではなく、炉に直接置き、煮沸した可能性が考えられる。五領式は、器形変化の過渡期にあたり、五領2式以降、容量の増大に対応し、長胴化が認められるのである。

2　下鈴野ムラの変遷

(1)　住居跡の分類

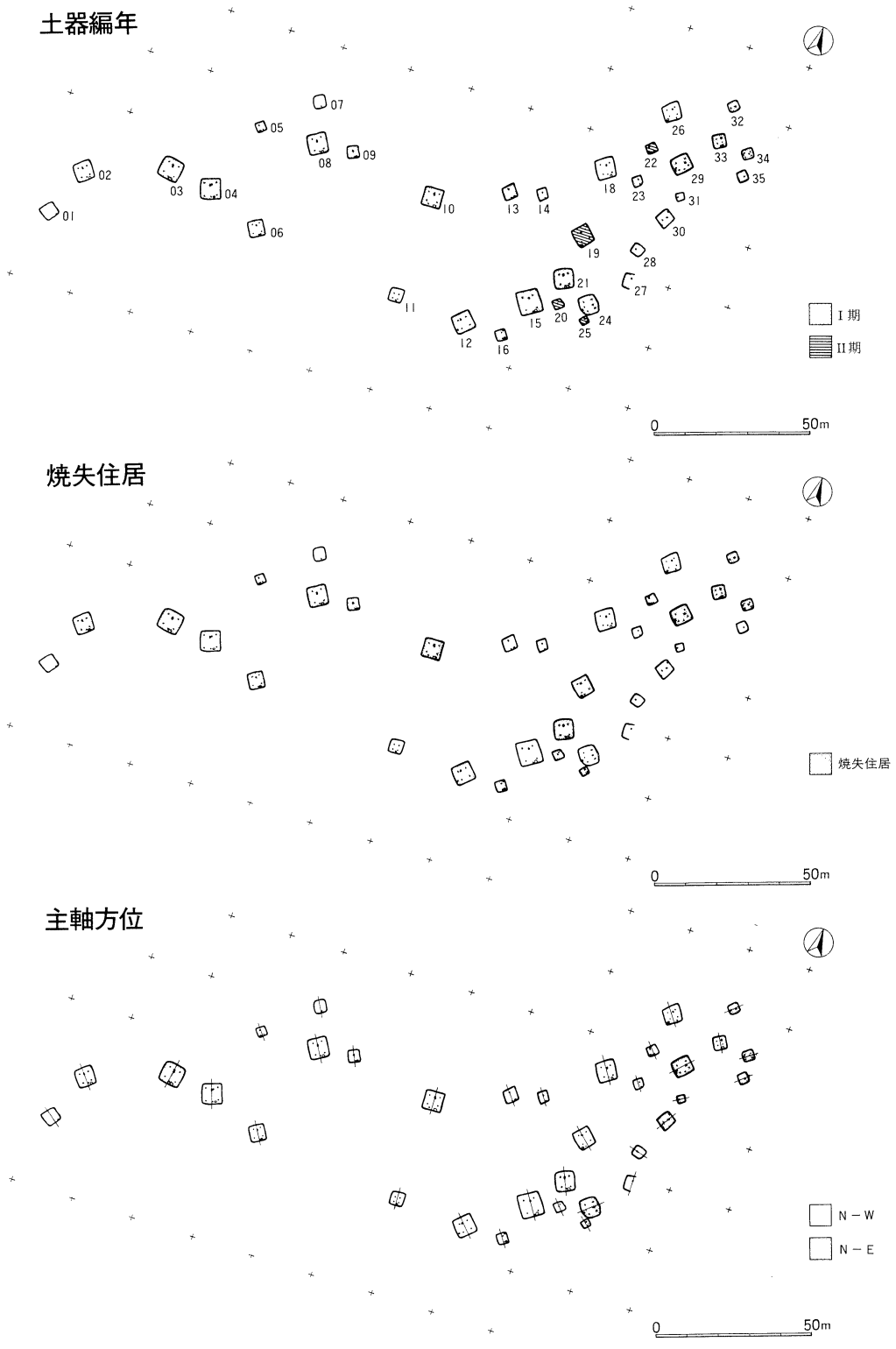
同時併存遺構の抽出作業は、集落分析の一つ前提作業であるが、現状では、なお方法論上整理されてはいない。しかし、近年遺物の出土状態や、住居跡間の土器の接合関係など、詳細な分析が発表されている。[註39] 集落跡から抽出し得る情報データは、なお豊富であると思われる。今回提示することのできる情報は、これらに対して貧弱なものではあるが、若干の検討を加えておきたい。

土器編年　集積された時間を解析する基軸は土器編年である。しかし、前述したように、現状の方法論では、細別はすればするだけより多くの情報を必要とし、また客観的な精度を得ることはできない。出土土器量に幅のある住居跡の多くに網をかけるには限度がある。ここでは、前述したように、Ⅰ期（鴨居上ノ台式～五領1式期）、Ⅱ期（五領2式期）に大別しておきたい。なお、Ⅰ期のうち、鴨居上ノ台式期に比定されるものは、34号住居跡など東側に限定される。

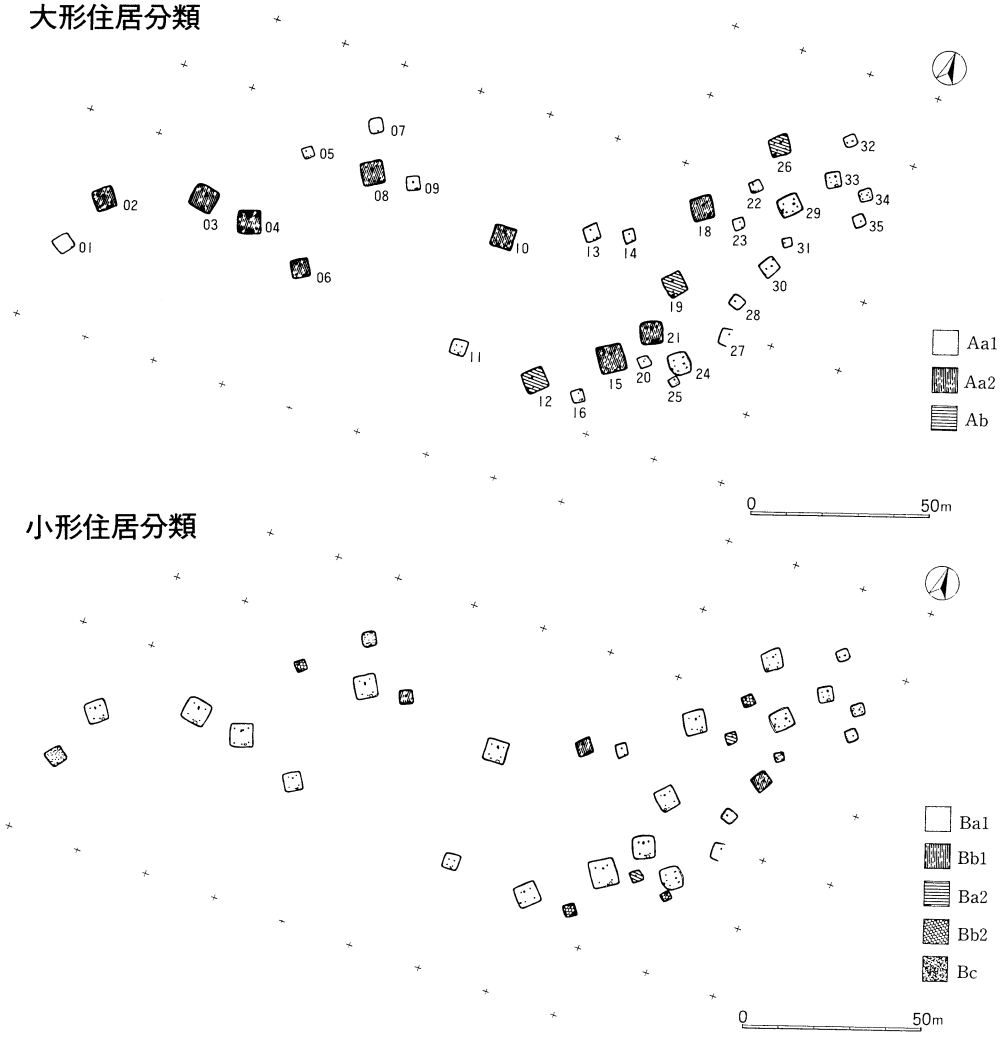
焼失住居　下鈴野遺跡では、ほぼ確実に焼失したと考えられる住居は18軒におよぶ。遺存状態が悪く、覆土の状態が明らかではないものもあり、大多数が焼失している可能性もある。かつて類焼を想定し、同時併存性を問題とした作業もみられたが、下鈴野遺跡を例としても、その実証は困難である。逆に、「常識」的であるにせよ、防火を条件とした復原例に妥当性が認められる。[註41] いずれにせよ、後述するように、火災の要因・実態自体に検討の余地がある。

主軸方位　住居の方向は、集落内において、無秩序に決定されるものではない。しかし、それが集団内の規制として認め得るかは、この段階では明確ではない。また実体として、それが同時性に基づくものであるか、あるいは同一集団による建て替えによるものか、個々において検証する必要がある。下鈴野遺跡において、ほぼ一定の主軸をとる住居群を指摘するならば、05・07・08・09号住居跡、10・11号住居跡．12・13・14・15・16・18・19・20・21・22・23・25・26・28・33号住居跡、24・27・29・30・31・32・34・35号住居跡である。これらは、その相互の距離から、同時性を認め得るものではない。しかし、これらは、地点的に集合し、同時性、建て替えを含め、一定範囲において、複数の住居群が、主軸方位を一表現し、有機的に結合することは明確であろう。第149図では、座標北に対して2分割したが、これは、分布がやや密な東側住居群が、明確に区分されることを示している。

規模・形態　竪穴住居跡は、その内部にいくつかの施設およびその痕跡を残している。これは、



第149図　竪穴住居跡の分類(1)



第150図　竪穴住居跡の分類(2)

柱穴・炉・貯蔵穴・出入口梯子穴・周溝・ベッド状遺構などがあるが、その有無、配置には変化がみられる。これはまた住居規模・住居平面形態を含め相互に関連し、時期差・集団差・機能差を表現するものと考えられる。住居規模については、ほぼ25m²前後に区分上の境界がみられ、大形住居跡には主柱穴が普遍的に認められる。これに対して小形住居跡は、未使用と考えられる33号住居跡を除き、11・34号住居跡より検出されただけである。ここでは、面積（確認面）25m²以上のものをA類、それ未満のものをB類とし、大別しておく。その比は、27号住居跡をB類に含めた場合、A：B＝14：20である。いわゆる貯蔵穴については、B類では、確実なものが20軒中9軒にすぎないのに対して、大形住居跡A類では、12号住居跡がやや不明確であるのを除き普通性をもつ。ただしA類では、その位置がやや異なり、ここでは竪穴一辺のやや中央より、隅からはなれるものをAa類、隅に位置するものをAb類とする。B類については、貯蔵穴がないもの

をBa類、あるものをBb類とする。なお、貯蔵穴とともに炉を欠く場合をBc類とする。Bc類は、住居としての機能は希薄である。他に、A類については、主軸長100に対して、95未満の長方形のものをA1類、95以上、ほぼ方形を呈するものをA2類とする。B類については、主軸線上に炉が位置するものをB1類、一方によるものをB2類とする。分類は、さらに細別した基準を与えることもできるが、それに対する「意味」を与えることは現状ではできない。

以上の基準により、以下の通り分類される。

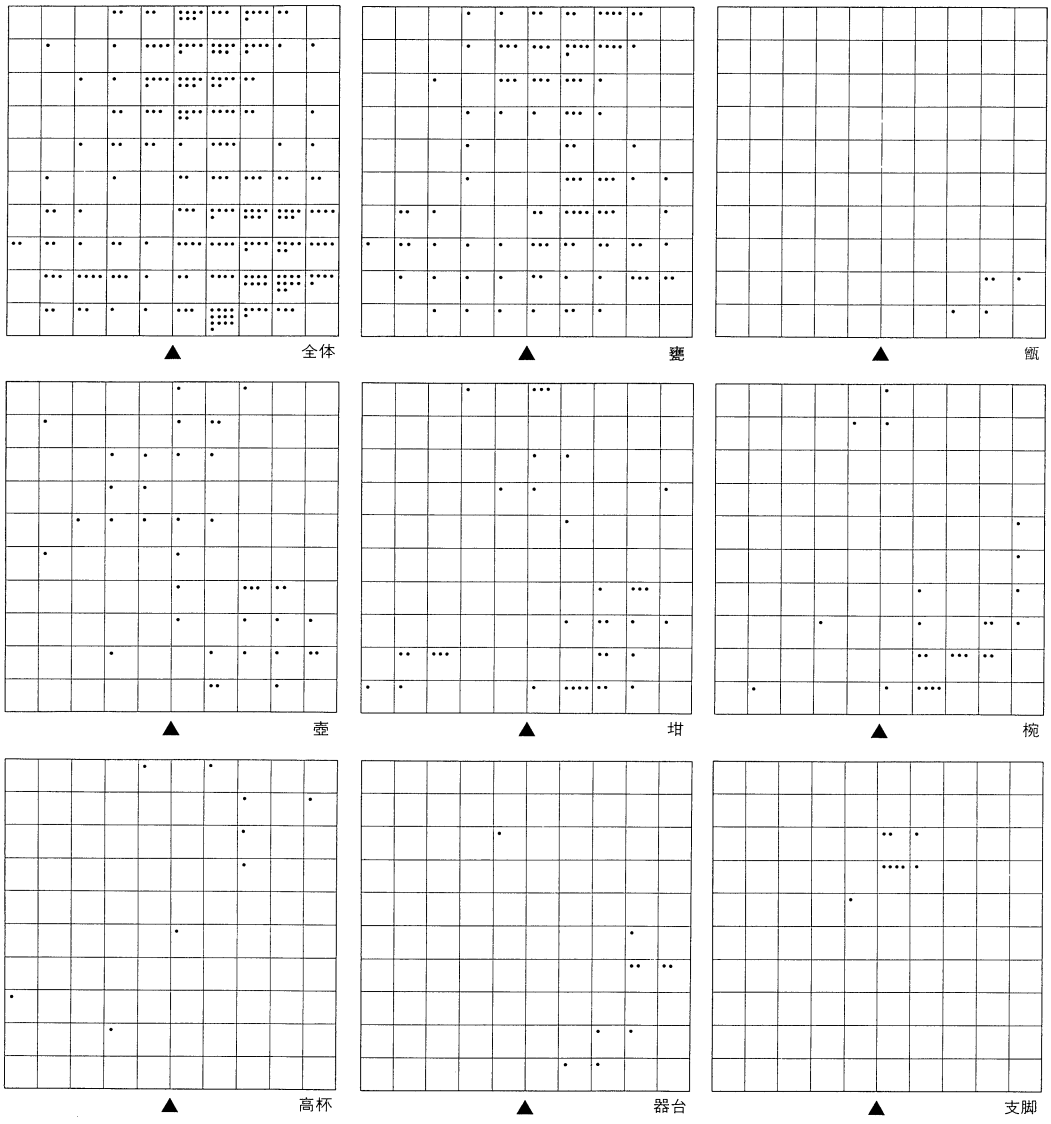
大形住居跡Aa1類　24・29号住居跡
Aa2類　02・03・04・06・08・10・15・18・21号住居跡
Ab類　12・19・26号住居跡
小形住居跡Ba1類　14・28・32・34・35号住居跡
Ba2類　20・23・33号住居跡
Bb1類　09・13号住居跡
Bb2類　05・16・22・25・33号住居跡
Bc類　01・07・31号住居跡

このうち、時期差を反映するものは、大形住居におけるA1類からA2類、長方形から正方形化である。これは平面形態の胴張り隅丸から方形化と関連し、上屋構造の変化によるものと考えられる。

住居内施設については、いわゆる貯蔵穴が、住居内隅部へ固定化されることが指摘できる。この段階は、住居内機能の分割化が明確化する時期にあたり、出入口部脇隅部は、貯蔵・物置空間として限定化される(註42)。出土土器の分布も、直接炊事に関係する炉周辺部、とくに炉奥側とともに、貯蔵穴周辺に集中する(註43)。竪穴住居の段階で、住居内諸機能の空間利用が、個々に分割・明確化するとは考えられないが、食卓用土器の多様化を含め、炊事・貯蔵等の空間利用が、限定化されたことは想定される。小形住居についても、炉が、主軸線に対して、貯蔵穴方向へよる傾向がみられる。第151図は、床面上出土土器の竪穴内の相対的位置を示したものである。ただし、各住居内施設の位置については考慮しておらず、基本的な傾向を示したにすぎない。

(2) ムラの変遷

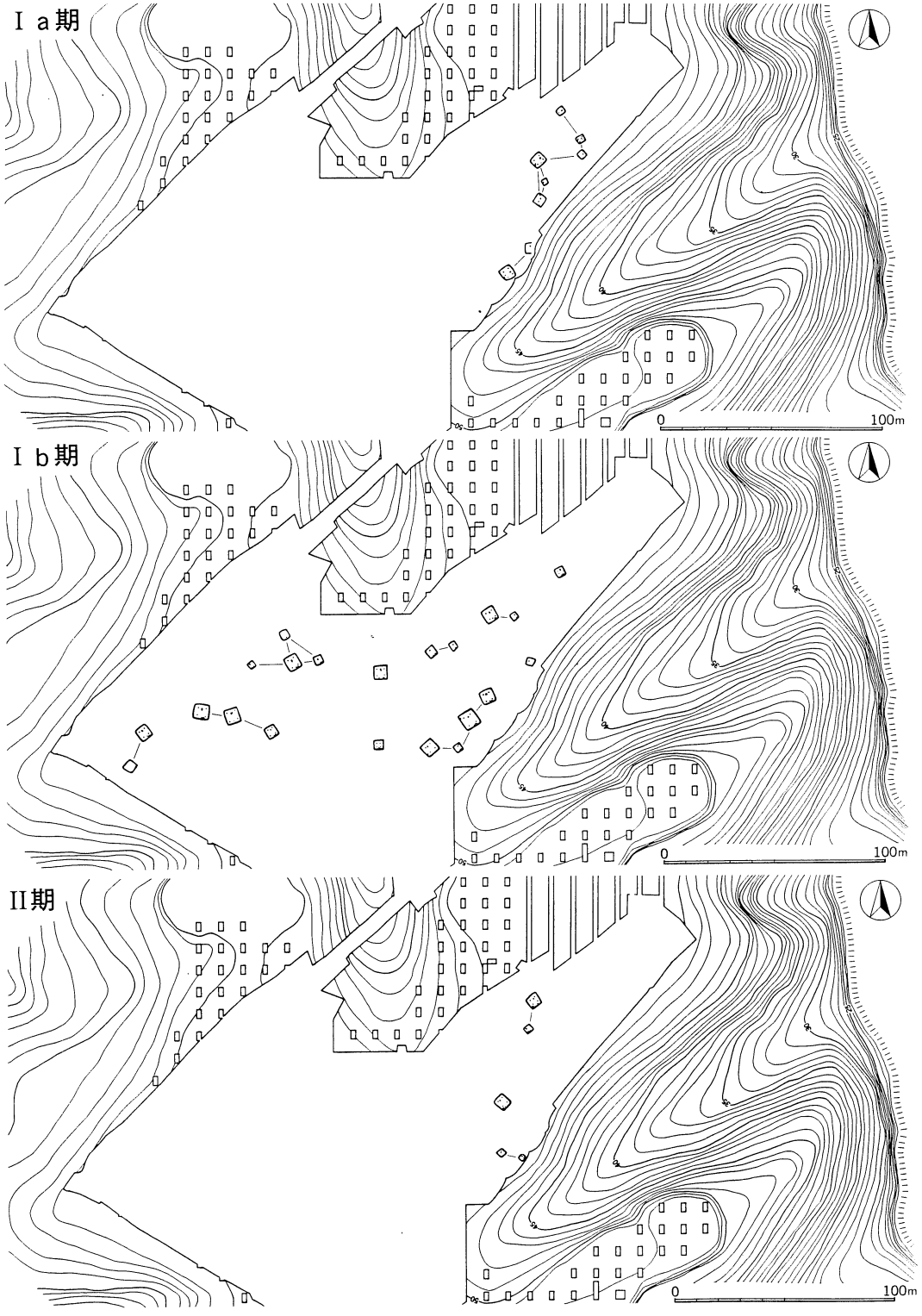
下鈴野遺跡の住居跡群は、土器編年上、I・II期に大別される。ただしI期は、編年的に時間幅が大きく、また、とくに東側住居群の分布が密であり、複数期を内含する。これに、住居形能主軸方位の同位性を対比した場合、24・27・29・30・31・32・34・35号住居跡を分離することができる。住居分類Aa1類は、この住居跡群に限定され、編年的には、ほぼ鴨居上ノ台式期に対応するものと考えられる。これをIa期とし、これを除くI期住居跡をIb期として、五領1式期に対比する。住居分類では、大形住居跡Aa2類がこの段階と対応する。西側住居跡群については、確実に鴨居上ノ台式・五領2式期に比定される住居跡はなく、また、住居形態・主軸方位



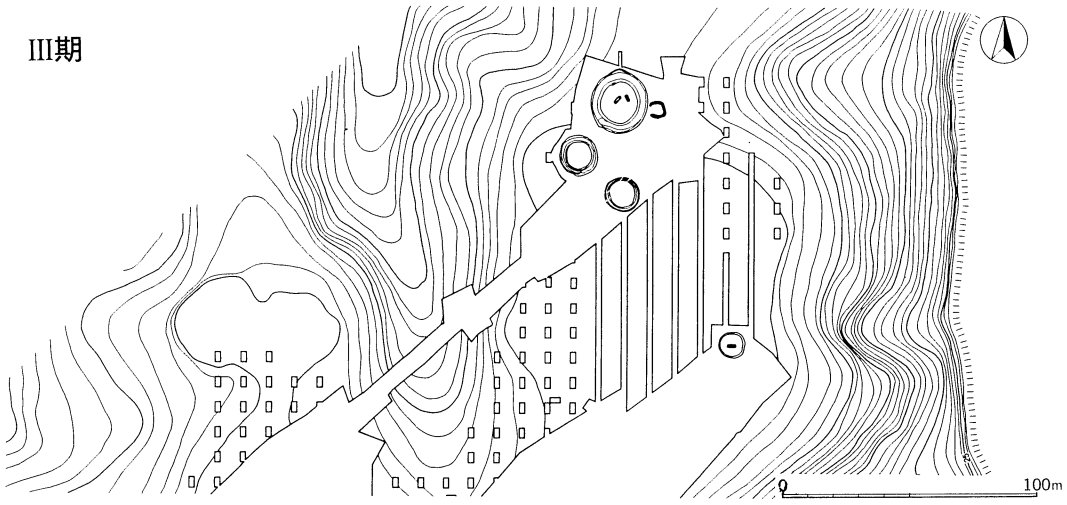
第151図　住居内土器出土位置（▲入口方向）

についても区分できないため、すべてＩｂ期に包括しておく。II期については、土器編年上、19・20・22・25号住居跡が比定されるが、同様にＡｂ類に比定される26号住居跡も、この段階に含める。ただし、Ａｂ類12号住居跡については、その形態が他と異なり、また位置関係からＩｂ期に比定しておきたい。

以上Ｉａ・Ｉｂ・II期に区分したが、なお時間幅をもつ可能性がある。第152図線でむすんだ住居間距離は、15m以下である。この距離は、あくまでも仮定であり、便宜的なものにすぎないが、これを防災上の理由とした場合、Ｉ期では最大４軒、最小３時期に区分されることになる。ただし、これは建て替えを考慮していない。II期については、その位置関係から01・02・03・04・06号住居跡（Ａ群）、05・07・08・09・10・13・14・18・23・33号住居跡（Ｂ群）、11・12・15・16・



第152図　下鈴野遺跡Ⅰa・Ⅰb・II期（1/300）



第153図　下鈴野遺跡III期（1/300）

21・28号住居跡（C群）の3群の小住居跡群に分割することができるが、A群は、最大3軒最小2時期、B群は最大6軒最小3時期、C群は最大4軒最小2時期に区分される。III期については、最大3軒最小2時期である。ただし、1時期2軒の家族単位の設定が可能であるならば、II期については、例えば主軸方位が対応する10・11号住居跡など、異なる小住居跡群区分もできる。住居群は、規模にしても一定の構成を示し、この段階において、1軒で集落を形成することは考えにくい。ただし、拡大家族に対比される集落単位としての小住居群は、一時期比較的少数であることも考えられる。しかしながら、これも、一つの仮定に基づく一つの解釈にすぎない。

(3)　火災住居について

一集落内における同時性は、同時期における建て替えを前提とし、一住居の構築から廃棄にいたる過程は、現状では問題とされてはいない。しかし、一住居単位の歴史、とくに実際に観察することのできる。廃棄から竪穴内が埋設するまでの過程を、他住居跡との関連の上で検討してみる必要がある。

下鈴野遺跡では、前述したように、34軒のうち、確実なものでも18軒が焼失している。焼失住居における、焼土・炭化物の形成、遺存、堆積については、さまざまな諸条件により左右され、個々の住居跡における状況を、単純に類型化することはできない。ただし、いくつかの点について、人為性を認め、整理することは可能である。焼土については、なお検証されてはいないものの、土葺きの可能性も含め、上屋材であることはほぼ妥当であろう。8号住居跡は、多量に炭化材を残すものの、焼土粒はほとんど認められず、これは上屋構造に関連する可能性が考えられる。ただ、ここでの問題は、その堆積状態であり、焼土・炭化物が、床面から間層をおく場合が多い点である。床面直上全体に焼土・炭化物をもつ住居跡は、08・09・22・25・29号住居跡にすぎないのに対して、竪穴中央部は別にしても、周縁部壁際に間層をおく住居跡は、02・03・05・10・

12・16・19・20・21号住居跡などである。また、貯蔵穴についても、その下部に焼土・炭化物が落ち込んでいた例は、09号住居跡だけであり、竪穴内床面直上に堆積が認められた住居跡を含め、03・05・06・08・16・22・29号住居跡では、上層部で確認できたにすぎない。また02・10号住居跡では、貯蔵穴内で焼土・炭化物は認められなかった。この貯蔵穴については、まだ実証されていないその機能と関連し、常時開口していたかという疑問もあるが、人為的な埋めもどしの痕跡は不明確であった。この焼土下間層については、粒状のロームを主体とし、壁体部の崩落によるものと考えられる。したがって、火災時には、すでに住居は放棄されていた可能性が考えられるのであり、火災が廃棄の要因ではなく、火災は、住居の廃棄に伴う人為的な行為ということになる。(註44) この間層に時間差を認めた場合、その焼失住居は、集落内への移動・建て替えによるものと考えられ、火災の要因としては、「常識的」な判断としては、居住区内の空間の確保が想定される。この場合、その時間差は、必要上屋材の徹去・解体等の過程が想定され、不要材の焼去ののち、例えば8号住居跡では、埋めもどしされた可能性がある。しかしながら、火災の要因として、居住区内の空間確保を前提とした場合、15・18号住居跡など、次時期と居住区が重複する住居跡が非焼失である点が疑問となる。別に、21・29・30号住居跡では、覆土中に多量の土器が廃棄され、これらは、長期にわたって、開口していたことになる。また、II期の住居跡が、不明確な26号住居跡をのぞき、いずれも焼失している点は、非焼失が、集落外移動と関連しないこととなる。

現状では、集落の変遷に即して、実証的に検討するには矛盾点が多い。また、例えば16号住居跡は、間層をもつにもかかわらず、遺物の出土状態からは失火・放火等の「事件」が想定されるなど、個々の現象を復原的に考察することができず、ここでの解釈も一つの仮定にすぎない。

現在、遺物の出土状態については、詳細な記録が図示される場合もあり、それに対する検討も加えられつつある。(註45) しかしなお情報としては不充分であるといえよう。集落論の前提作業として、一つの遺構のもつ「歴史」について、今後検討を加えていく必要がある。

註1 大村直　1982「前野町式・五領式の再評価」『神谷原III』八王子市教育委員会
大村直・菊池健一　1984「久ケ原式と弥生町式―南関東地方における弥生時代後期の諸様相（予報）―」『史館』第16号　史館同人

註2 小川良祐ほか　1980『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会

註3 高橋康男　1985『草刈遺跡』㈶市原市文化財センター

註4 三森俊彦・小久貫隆史ほか　1983『千原台ニュータウンII　草刈遺跡A区（第1次調査）鶴牧古墳群・人形塚』㈶千葉県文化財センター

註5 藤崎芳樹　1982『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』㈶千葉県文化財センター

註6 小川和博・鷹野光行　1983『祇園原貝塚III』上総国分寺台発掘調査概要XI　市原市教育委員会

註7 三森俊彦・阪田正一　1974『市原市大厩遺跡』千葉県都市部・㈶千葉県都市公社

註8　柿沼修平　1979『土宇』日本文化財研究所文化財調査報告6

註9　武田宗久・宍倉昭一郎ほか　1969『上総国女坂第1号方形墳』南総郷土文化研究会叢書第9巻

註10　比田井克仁　1987「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号　早稲田大学考古学会

註11　比田井克仁　1987　註10

註12　古内茂・伊藤智樹　1983『千葉東南部ニュータウン12—南二重堀遺跡一』㈶千葉県文化財センター

註13　小林清隆・萩原恭一　1986『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書II』㈶千葉県文化財センター

註14　古内茂・大野康男　1984『千葉東南部ニュータウン13—馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡一』㈶千葉県文化財センター

註15　矢吹俊男　1978『大多喜町横山遺跡発掘調査報告書』千葉県大多喜土木事務所

註16　小沢洋　1985『境遺跡』㈶君津郡市文化財センター

註17　伊東重敏　1977「上総・山王辺田019号住居址」『ひだみち』№5　常陸考古学研究所

註18　椙山林継　1977『請西』木更津市教育委員会

註19　千田利明　1980『田川遺跡群』田川遺跡群発掘調査会

註20　光江章　1986「南谷遺跡」『上総線鉄塔建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』㈶君津郡市文化財センター

註21　大原正義・川島利道　1983『富津市岩坂大台遺跡』㈶千葉県文化財センター

註22　山下亮介　1984『東天王台遺跡』墨田区教育委員会

註23　柿沼修平・千田利明　1985『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅰ』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会
柿沼修平・千田利明　1986『大崎台遺跡発掘調査報告II』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会

註24　財団法人印旛郡市文化財センター　1986『昭和60年度　財団法人印旛郡市文化財センター年報2』

註25　矢戸三男ほか　1975『阿玉台北遺跡』房総考古資料刊行会

註26　大沢孝　1983「下総地方における北関東系土器と称される後期弥生式土器について」『史館』第14号　史館同人

註27　玉口時雄　1977『健田遺跡一第2次調査報告書一』考古資料刊行会
玉口時雄　1978『健田遺跡一第3次調査報告書一』朝夷地区教育委員会

註28　岡本勇・中村勉ほか『鴨居上ノ台遺跡』横須賀市文化財調査報告書第8集

註29　ただし、粘土紐積み上げ痕装飾は、久ケ原式一系列だけではなく、とくに五領式段階では、その系譜関係が不明確な場合もある。

註30　古内茂・高田博ほか　1986『千原台ニュータウンIII　草刈遺跡（B区）』㈶千葉県文化財センター

註31　河野喜映・宍戸信吾　1985『山王山遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告8

註32　岡本孝之ほか　1980『新羽大竹遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告17　神奈川県教育委員会

註33　石坂俊郎　1984「南関東における後期弥生土器の諸相」『文学研究科紀要』別冊11（哲学・史学編）早稲田大学大学院文学研究科

註34 笹森紀己子　1984「久ケ原式から弥生町式へ一壺形土器の文様を中心に一」『土曜考古』第9号　土曜考古学研究会

註35 松本完ほか　1981『横浜市道2号線No.6遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』横浜市道2号線埋蔵文化財発掘調査団

註36 吉廻純・大村直　1981『神谷原Ⅰ』八王子市教育委員会

第144図は、同書を対象とした。なお第144図は、現状において確認できるものを示したものであり、ミガキが徹底されているもの等、表面的に観察できないものは含まない。

註37 佐原真　1979「土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ(2)』有斐閣

佐原真　1983「食器における共用器・銘々器・属人器」『文化財論議』同朋社

註38 都出比呂志　1984「畿内の社会・生活一籩豆手食の俗一」『季刊考古学』第6号　雄山閣

註39 第145図について、下鈴野遺跡については、全出土土器を対象としている。他遺跡については、その時期のみを抽出した。

註40 土井義夫・塩野崎直子　1984「遺物の出土状態」『宇津木台遺跡群Ⅳ』八王子市教育委員会

註41 藤田憲司　1984「単位集団の居住領域一集落研究の基礎作業として一」『考古学研究』第31巻第2号　考古学研究会

註42 渡辺修一　1985「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間」『研究連絡誌』第11号　(財)千葉県文化財センター

註43 長岡史起　1986「遺物の出土位置からみた竪穴住居の居住空間について」『神奈川考古』第22号　神奈川考古同人会　第151図は、同論文を参照とした。なお、第151図で、一個体が複数区に及ぶ場合は、個々にドットをおとした。

註44 当該期の焼失住居については、筆者を含め、背景として争乱は別として、火災の要因については再検討を要する。

註45 桐生直彦　1987「遺物出土状態の分折に関する覚書」『貝塚』38　物質文化研究会

第145・146・147図遺跡文献補足

椙山林継　1974『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』千葉県開発庁・(財)千葉県都市公社

白石浩・榊原弘二　1983『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター

白石竹雄・天野努　1981『公津原Ⅱ』千葉県教育委員会

岩崎卓也・岡村眞文　1985『我孫子中学校校庭遺跡』我孫子市埋蔵文化財報告第7集

金丸誠ほか　1984　『市原市雪解沢遺跡』(財)千葉県文化財センター

沼沢豊　1978『佐倉市飯合作遺跡』(財)千葉県文化財センター

岡崎文喜・松浦宥一郎　1972『外原』船橋市教育委員会

栗本佳弘　1973『京葉』日本道路公団・(財)千葉県都市公社

第146図遺跡名

下鈴野遺跡（17・18・20・21・22・23・24・27・30・34・46）

草刈遺跡（1・2・3・10・35・37・39）

鴨居上ノ台遺跡（4・6・7）

山王山遺跡（5・11・12・15）

祇園原貝塚（8）

岩坂大台遺跡（9・13）

番後台遺跡（14・16）

雪解沢遺跡（19・28）

阿玉台北遺跡（25）

飯合作遺跡（26）

公津原 Loc 40 遺跡（29・36・38・40）

我孫子中学校校庭遺跡（31）

公津原 Loc 9—II遺跡（32・33）

外原遺跡（41・42・43・44・45）

第9表　弥生時代～古墳時代 竪穴住居跡

住居跡	時期	分類	主軸×副軸 (m)	面積 (㎡)			主軸方位	焼失	柱穴	炉	貯蔵穴	ベッド	出土土器（床面）									備考
				確認面	床	内区							甕	甑	壺	坩	埦	高杯	器台	支脚	ミニ	
01	(Ⅰb)	Bc	4.63×4.73	21.64	21.15	−	N−52°−W	×	×	×	×	×										
02	(Ⅰb)	Aa2	6.29×6.01	37.93	35.38	8.92	N−44°−W	○	○	○	○	×										勾玉
03	Ⅰb	Aa2	7.06×7.03	47.72	45.73	13.84	N−8°−E	○	○	○	○	×	5	1	2	3	1		3			土製品
04	Ⅰb	Aa2	6.67×6.58	42.29	41.14	13.74	N−14°−W	△	建替△	2	○	×	1		1							
05	Ⅰb	Bb2	2.95×2.94	8.41	7.88	−	N−39°−W	○	×	○	○	×	1									
06	Ⅰb	Aa2	5.23×5.29	27.08	26.40	7.90	N−30°−W	○	○	○	○	×	2	1	2		2					土玉
07	(Ⅰb)	Bc	4.67×4.26	18.77	16.73	−	N−19°−W	×	×	×	×	×										
08	Ⅰb	Aa2	6.48×6.30	40.58	39.49	10.75	N−28°−W	○	建替△	○	○	×				1	2					砥石、敲石1
09	Ⅰb	Bb1	4.03×4.04	16.13	15.28	—	N−16°−W	○	×	○	○	×	1		1	3	3	1	3			砥石
10	Ⅰb	Aa2	6.18×6.13	37.83	35.88	9.66	N−3°−W	○	○	2	○	×	2		2	4	2					砥石
11	(Ⅰb)	Bb	4.22×4.25	17.49	15.83	3.12	N−1°−W	×	○		○		1	1								
12	Ⅰb	Ab	6.04×6.50	39.51	37.77	8.28	N−44°−W	○	○	○	△	×	1			2		2		1		
13	Ⅰb	Bb1	4.50×4.55	20.12	19.01	−	N−36°−W	×	×	○	○	×	3		2	2	2					
14	(Ⅰb)	B1	3.71×3.21	11.50	11.08	−	N−31°−W	×	×	○	△	×										
15	Ⅰb	Aa2	7.55×7.60	57.05	54.94	17.70	N−36°−W	×	建替	○	○	○	1		1	1		1				
16	Ⅰb	Bb2	3.63×3.76	13.02	11.34	−	N−39°−W	○	×	○	2	×	4	1	2	4			1	3		
18	(Ⅰb)	Aa2	6.31×6.34	38.74	36.41	7.79	N−26°−W	×	建替	○	○	○	1									鉄器(鎌)、土製品
19	Ⅱ	Ab	6.15×5.85	37.92	34.27	10.77	N−49°−W	○	○	2	○	×			1	2						勾玉、管玉5、小玉2、鉄器
20	Ⅱ	Ba2	3.12×3.24	9.83	8.79	−	N−47°−W	○	×	2	×	×	1									紡錘車形石製品、土製品(支脚)
21	Ⅰb	Aa2	5.96×5.75	33.54	31.43	9.40	N−17°−W	○	建替	3	2	×	2			2	2	3				勾玉、土玉、土製品
22	Ⅱ	Bb2	3.20×3.67	11.60	10.72	−	N−43°−W	○	×	○	○	×	1					1				
23	Ⅰb	Ba2	3.63×4.03	14.27	13.64	−	N−24°−W	×	×	○	×	×						1				
24	Ⅰa	Aa1	6.52×6.18	36.99	34.86	10.30	N−64°−E	×	建替	○	○	×	1		1			1				土玉
25	Ⅱ	Bb2	2.63×2.83	7.07	6.40	−	N−60°−W	○	×	○	△	×	3		1	5						

住居跡	時期	分類	主軸×副軸 (m)	面積 (㎡)			主軸方位	焼失	柱穴	炉	貯蔵穴	ベッド	出土土器（床面）									備考
				確認面	床	内区							甕	甑	壺	坩	埦	高杯	器台	支脚	ミニ	
26	(II)	Ａｂ	5.47×5.60	29.60	27.97	6.20	N－32°－W	△	○	○	○	×	2		1							
27	Ｉａ	Ｂｂ	4.69×－	－	－	－	N－3°－W	△	×	○		×	1									
28	(Ｉｂ)	Ｂａ１	3.80×3.59	13.06	11.95	—	N－71°－W	△	×	×	○	×										
29	Ｉａ	Ａａ１	6.48×5.85	35.63	34.47	10.41	N－42°－E	○	○	○	○	×	1		1		1					砥石
30	(Ｉａ)	Ｂｂ１	4.81×4.78	22.81	20.78	—	N－31°－E	×	×	2	2	×	1									投弾２、小玉
31	(Ｉａ)	Ｂｃ	3.03×2.88	8.48	7.84	—	N－61°－E	×	×	×	×	×	1									
32	Ｉａ	Ｂａ１	3.77×3.81	13.53	12.50	—	N－56°－E	○	×	○	×	×								3		
33	Ｉｂ	Ｂｂ２	4.57×4.56	20.10	18.74	(3.07)	N－26°－W	○	△	○	2	×	1								1	
34	Ｉａ	Ｂａ１	3.71×3.72	12.96	11.98	3.77	N－64°－E	○	○	○	×	×	2									
35	Ｉａ	Ｂａ１	3.50×3.72	12.11	11.15	—	N－46°－E	△	×	○	×	×	1		1							

V おわりに

現在、群馬県子持村黒井峯遺跡が注目をあびている。これに比較して、下鈴野ムラの姿はあまりにも貧弱である。遺跡の条件が異なるにせよ、竪穴住居跡のみを対象とするならば、かつてのトレンチ調査とかわるものではない。現在、調査方法は画一化、基準化され、竪穴住居跡は日々量産されている。しかし、同じように、その通りに調査を行っていては、同じ結果しかえられない。日常化した集落跡の調査、膨大な報告書の数に比較して、集落跡の分析はなんら前進していない。一軒の竪穴住居跡にせよ、その構造のすべてが明らかなわけではない。その内包する情報は、まだまだ豊富であると思われる。

この報告書も、残念ながら量産される報告書の中の一冊にすぎない。提起する話題にも情報にも乏しい。しかしながら可能な範囲内で活用の幅はひろげたつもりではある。とくに土器容量、住居面積等、数量化は今後不可欠なものと考える。なんらかのかたちで、「歴史」の中に刻みこまれれば幸いである。